

北小松遺跡

# 北小松遺跡

— 田尻西部地区ほ場整備事業に係る平成20年度発掘調査報告書 —

— 田尻西部地区ほ場整備事業に係る  
平成20年度発掘調査報告書 —

平成二十三年五月 宮城県教育委員会

平成23年5月

宮城県教育委員会

# 北小松遺跡

—田尻西部地区ほ場整備事業に係る平成20年度発掘調査報告書—

## 序 文

ゆとりと豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保護・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、その一方で道路建設や住宅造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも、土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には重要な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は平成20年度に、大崎市田尻西部地区におけるほ場整備事業に伴う水路と農道建設工事に先立って実施した北小松遺跡の発掘調査報告書です。

北小松遺跡は縄文時代と古代の遺跡として知られていますが、今回の調査により、遺跡の性格をより明確にする貴重な成果が得られました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後に、遺跡の保護に理解を示され、発掘調査に際して多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対して、厚く御礼申し上げる次第です。

平成23年5月

宮城県教育委員会

教育長 小林伸一

## 例　　言

1. 本書は、宮城県北部地方振興事務所と江合川沿岸土地改良区との協議に基づき実施した、ほ場整備事業（水路・農道建設工事）に伴う北小松遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。
3. 本書における上層・調査区・遺構・遺物などの記載方法は、原則として宮城県文化財調査報告書（以下、宮文報と略す）第223集と同様とした。
4. 第1図は国土交通省国土地理院発行の「荒谷」「高清水」（1/25,000）地形図を複製して利用した。
5. 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
6. 使用した遺構略号は、SE：井戸 SK：土坑 SX：集石である。
7. 土色の記載にあたっては『新版 標準土色帖 1994年度版』（小山・竹原1994）を使用した。
8. 遺構・遺物の図の縮尺は原則として以下の通りである。  
包含層・遺構：全体図・配置図1/200、包含層断面図1/100・1/200、遺構平面図・断面図1/60  
遺物：土器・礫石器（1/3）、土製品・石器・石製品・木製品・骨角牙製品（2/3）、瓦・石鉢（1/5）
9. 遺物観察表の寸法・重量は一部から復元したものには数値に（）を、遺物の製作過程が分かる場合は、その順序を→で示した。なお礫石器のスクリーントーンと矢印は磨面の範囲を示している。
10. 国版1の空中写真は「国土画像情報（昭和50年撮影カラー空中写真：CTO-75-27-C5c-6）  
国土交通省」を一部加工して転載した。
11. 遺物の写真撮影は（株）アートプロフィールに委託した。
12. 遺物写真の縮尺について、立面は任意、俯瞰は土器・礫石器：1/3、瓦：1/5、土製品・石器・石製品：2/3である。動物遺存体は哺乳類：1/2または1/3、鳥類：1/2、魚類：1/1とした。
13. 本書の作成は（職員）農村幸宏・西村力・久保井裕之・伊藤啓之・尾形祐之・千葉直樹・生田和宏・小野章太郎・青山隼人・初鹿野博之・（臨時職員）浅野明美・大沼美代子・加藤明日香・亀山昭子・木村奈保実・熊倉静子・佐藤せい子・鈴木ひとみ・瀧澤恵子・千葉栄子・中島敦子・長沼雅子・古川史佳・與名本京子で行い、調査を担当した各調査員の協議を経て、執筆は第V章第1節1（2）を伊藤、他の執筆と編集を生田が行った。
14. 発掘調査と本書の作成に際し、下記の方々からご指導とご協力を賜った。（五十音順、敬称略）  
相原淳一 市川健夫 皆野智則 日下和寿 白鳥良一 須藤 隆 藤沼邦彦 柳沢和明
15. 石器・石製品の石材鑑定の一部は、東北大学東北アジア研究センターの宮本毅氏に依頼した。
16. 自然科学分析について、土器付着物の放射性炭素年代測定（AMS測定）は（株）加速器分析研究所・（株）パレオ・ラボ、土器付着赤色顔料・漆の分析は（株）パレオ・ラボに委託し、その成果は平成19年度調査分とあわせ付章に収録した。また花粉・珪藻分析と樹種・種実同定は古代の森研究室に委託した。その成果は平成19～22年度調査分とあわせ、今後に報告する予定である。
17. 調査成果は、現地説明会・宮城県遺跡調査成果発表会・宮文報第216・223集などでその内容の一部を公表しているが、本書と内容が異なる場合は、本書がこれらに優先する。
18. 調査の記録や出土品は宮城県教育委員会が保管している。

## 調査要項

遺跡名：北小松遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号No.38005、遺跡略号UO）

所在地：宮城県大崎市田尻北小松ほか

調査原因：経営体育成基盤整備事業田尻西部地区

調査主体：宮城県教育委員会

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

　　農村幸宏 佐藤貴志 久保井裕之 山口 淳 伊藤啓之 尾形祐之 生田和宏

初鹿野博之

調査期間：平成20年5月9日～12月10日

調査面積：5,472m<sup>2</sup>（事前調査区：2,633m<sup>2</sup> 確認調査区：2,839m<sup>2</sup>）

調査協力：大崎市教育委員会・宮城県北部地方振興事務所・江合川沿岸土地改良区



現地説明会の様子（平成20年10月10日撮影）

# 目 次

序文

例言

調査要項

目次

第Ⅰ章 遺跡の環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と経過	1
第1節 調査の経緯と経過	1
第2節 調査方法	5
第Ⅲ章 地形と層序	5
第1節 調査対象区域内にある遺跡と地形の現況	5
第2節 層序	5
1 基本層序とその特徴	5
2 VI層の特徴	6
(1) 分布状況	6
(2) 堆積状況と含まれる遺物の分布	6
第3節 層の形成要因と地形の変遷	8
第Ⅳ章 発見した遺構と遺物	10
第1節 縄文時代の遺構と遺物	10
1 D区	10
D-41区	10
2 E区	12
E-1区	12
E-25区	15
E-32区	48
E-36・37区	54
E-64区	57
3 F区	63
F-8区	64
F-9区	67
F-10区	69
F-11区	74
4 その他の縄文時代の遺物	78
(1) その他の区のVI層出土遺物	78

(2) I～V層出土の縄文時代の遺物	78
第2節 弥生時代以降の遺構と遺物	82
1 E区	82
E-32区	82
E-91区	83
2 F区	85
F-7区	85
3 その他の弥生時代以降の遺物	86
第V章 総括	87
第1節 縄文時代	87
1 遺物	87
(1) 土器・土製品	87
1) 土器	87
A 前期初頭から前期前葉	87
B 中期末葉	89
C 晩期後葉から末葉	89
2) 土製品	96
(2) 石器・石製品	97
1) 石器	97
A 器種	97
B 石材	103
C 時期	108
2) 石製品	108
A 器種	108
B 石材	110
(3) 木製品	110
(4) 骨角牙製品	110
(5) 動植物遺存体	111
1) 動物遺存体	111
A 分析方法	111
B 同定結果	111
2) 植物遺存体	116
2 遺物包含層・遺構	116
(1) VI層出土の遺物の時期・その分布と出土量	116
(2) 遺構の時期とその分布	117
1) E-32区のVI層と土坑群	117

2) E-25区のSX31集石遺構	117
3 遺物包含層・遺構の形成要因	118
(1) 廃棄の場の位置	118
(2) 集落の立地と周辺の環境	118
第2節 弥生時代以降	121
1 遺物	121
2 基本層・遺構	121
3 遺物の分布と遺構の形成要因	121
第VI章 まとめ	122

#### 引用・参考文献

#### 附表 調査状況一覧

- 附章1 愛宕山・諏訪遺跡出土土器の漆分析（平成19年度調査分）  
 附章2 愛宕山・諏訪・宮沼遺跡出土赤色顔料の螢光X線分析（平成19年度調査分）  
 附章3 北小松遺跡出土赤色顔料の螢光X線分析（平成20年度調査分）  
 附章4 放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定）愛宕山・諏訪・宮沼遺跡（平成19年度調査分）  
 附章5 放射性炭素年代測定（平成19・20年度調査分）

#### 写真図版

#### 報告書抄録



## 図版目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図	調査区配置図	3
第3図	E-55区西壁柱状図	6
第4図	VI層と遺物の分布	7
第5図	D・E区VI層と遺物の分布	9
第6図	D-41区平面図・断面図	10
第7図	D-41区VIa層出土土器	10
第8図	D-41区VIa層出土石器・石製品	11
第9図	E-1区平面図・断面図	12
第10図	E-1区VId層出土土器・土製品	13
第11図	E-1区VId層出土石器	14
第12図	E-1区Vib層出土土器・石器	14
第13図	E-1区VIa・VI層出土土器・石器	15
第14図	E-25区平面図・断面図	17
第15図	E-25区VId層出土土器(1)	18
第16図	E-25区VId層出土土器(2)	19
第17図	E-25区VId層出土土器(3)・土製品	20
第18図	E-25区VId層出土石器(1)	21
第19図	E-25区VId層出土石器(2)	22
第20図	E-25区VId層出土石器(3)・石製品(1)	23
第21図	E-25区VId層出土石製品(2)・骨角器	24
第22図	E-25区Vlc層出土土器・石器・木製品	25
第23図	E-25区西部・拡張部付近Vlb層平面図	25
第24図	E-25区Vlb層出土一括廃棄土器(1)	26
第25図	E-25区Vlb層出土一括廃棄土器(2)	27
第26図	E-25区Vlb層出土一括廃棄土器(3)	28
第27図	E-25区Vlb層出土一括廃棄土器(4)	29
第28図	E-25区Vlb層出土土器(1)	30
第29図	E-25区Vlb層出土土器(2)	31
第30図	E-25区Vlb層出土土器(3)・土製品	32
第31図	E-25区Vlb層出土石器(1)	33
第32図	E-25区Vlb層出土石器(2)・石製品、 骨角器	34
第33図	E-25区VIa層出土土器(1)	35
第34図	E-25区VIa層出土土器(2)	36
第35図	E-25区VIa層出土土器(3)	37
第36図	E-25区VIa層出土土器(4)・土製品(1)	38
第37図	E-25区VIa層出土土製品(2)	39
第38図	E-25区VIa層出土石器(1)	42
第39図	E-25区VIa層出土石器(2)・石製品(1)	43
第40図	E-25区VIa層出土石製品(2)	44
第41図	E-25区VIa層出土骨角牙製品	45
第42図	E-25区西部SX31平面図・断面図	46
第43図	E-25区西部SX31出土土器	47
第44図	E-32区遺構配置図	48
第45図	E-32区断面図	48
第46図	E-32区VI層出土土器・土製品、石器	49
第47図	E-32区SK21~23・26平面図・断面図	50
第48図	E-32区SK21出土土器	50
第49図	E-32区SK27~29平面図・断面図	53
第50図	E-32区SK28出土土器	53
第51図	E-36・37区平面図・断面図	54
第52図	E-36・37区Vlb層出土土器・石器	55
第53図	E-36・37区VIa層出土土器・土製品、 石器・石製品	56
第54図	E-64区平面図・断面図	57
第55図	E-64区Vlc層出土土器・土製品、石器	58
第56図	E-64区Vlb層出土土器	59
第57図	E-64区Vlb層出土石器(1)	61
第58図	E-64区Vlb層出土石器(2)・a層出土石器	62
第59図	F区VI層と遺物の分布	63
第60図	F-8区北部平面図・断面図	64
第61図	F-8区Vlb層出土土器・石器	65
第62図	F-8区VIa層出土土器・石器	66
第63図	F-9区平面図・断面図	67
第64図	F-9区VI層出土土器・石器(1)	67
第65図	F-9区VI層出土石器(2)	68
第66図	F-10・11区平面図・断面図	69

第67図	F-10区VI <sub>d</sub> 層出土土器、石器	70	第100図	石製品の種類	109
第68図	F-10区VI <sub>c</sub> 層出土土器、石器	71	第101図	木製品、骨角器の種類	110
第69図	F-10区VI <sub>b</sub> 層出土土器、石器	72	第102図	E-32区の遺構と基本層の重複関係	117
第70図	F-10区VI <sub>a</sub> 層出土土器	73	第103図	A～G区VI層と遺物の分布	119
第71図	F-10区VI <sub>a</sub> 層出土石器	74			
第72図	F-11区VI <sub>d</sub> 層出土土器、石器	75			
第73図	F-11区VI <sub>c</sub> 層出土石器	75			
第74図	F-11区VI <sub>b</sub> 層出土土器	76	第1表	調査年度と調査区	4
第75図	F-11区VI <sub>b</sub> 層出土石器・石製品	76	第2表	石器・石製品の出土状況	98
第76図	F-11区VI <sub>a</sub> 層出土土器、石器	77	第3表	石材の種類と出土状況	104
第77図	その他の区のVI層出土土器、石器(1)	78	第4表	器種と石材	106
第78図	その他の区のVI層出土石器(2)・石製品	79	第5表	石礫の類型と出土状況	107
第79図	I～V層出土の縄文時代の土器・土 製品、石器(1)	80	第6表	魚類検出状況	112
第80図	I～V層出土の縄文時代の石器(2)・ 石製品、骨角器	81	第7表	爬虫類検出状況	112
第81図	E-32区SK1022～1024平面図・断面図	82	第8表	鳥類検出状況	112
第82図	E-32区SK1025平面図・断面図	83	第9表	哺乳類検出状況(ニホンジカ・イノシシ 以外)	112
第83図	E-91区遺構配置図、SK1036断面図	83	第10表	ニホンジカ検出状況	114
第84図	F-7区SE1032平面図・断面図	86	第11表	イノシシ検出状況	115
第85図	F-7区SE1032出土石製品	86	第12表	SX31の自然礫・石器と石材の種類	118
第86図	I～V層出土の弥生時代以降の土器、瓦	86	附表	調査状況一覧	125
第87図	復元土器の器高と口径(晚期後葉～末葉)	90			
第88図	深鉢の種類(晚期後葉～末葉)	91			
第89図	浅鉢の種類(晚期後葉～末葉)	92			
第90図	壺・注口・蓋の種類(晚期後葉～末葉)	92			
第91図	工字文・変形工字文の種類	95	図版1	北小松遺跡ほかの位置	163
第92図	土製品の種類(1)(晚期)	96	図版2	調査区域の遠景	164
第93図	土製品の種類(2)(その他 縄文時代)	96	図版3	D-40・41・50区	165
第94図	剥片石器の種類	100	図版4	E-1区	166
第95図	石斧の種類	102	図版5	E-25区VI <sub>d</sub> 層	167
第96図	礫石器の種類	102	図版6	E-25区SX31、VI <sub>d</sub> ・c・b層	168
第97図	剥片石器の石材(点数比)	107	図版7	E-25区VI <sub>b</sub> 層	169
第98図	石斧・礫石器の石材(点数比)	107	図版8	E-25区VI <sub>a</sub> 層	170
第99図	石礫の類型と寸法	107	図版9	E-32区	171
			図版10	E-36区	172
			図版11	E-64区	173

#### 表目次

第1表	調査年度と調査区	4
第2表	石器・石製品の出土状況	98
第3表	石材の種類と出土状況	104
第4表	器種と石材	106
第5表	石礫の類型と出土状況	107
第6表	魚類検出状況	112
第7表	爬虫類検出状況	112
第8表	鳥類検出状況	112
第9表	哺乳類検出状況(ニホンジカ・イノシシ 以外)	112
第10表	ニホンジカ検出状況	114
第11表	イノシシ検出状況	115
第12表	SX31の自然礫・石器と石材の種類	118
附表	調査状況一覧	125

#### 写真図版目次

図版1	北小松遺跡ほかの位置	163
図版2	調査区域の遠景	164
図版3	D-40・41・50区	165
図版4	E-1区	166
図版5	E-25区VI <sub>d</sub> 層	167
図版6	E-25区SX31、VI <sub>d</sub> ・c・b層	168
図版7	E-25区VI <sub>b</sub> 層	169
図版8	E-25区VI <sub>a</sub> 層	170
図版9	E-32区	171
図版10	E-36区	172
図版11	E-64区	173

- |      |   |     |      |   |     |
|------|---|-----|------|---|-----|
| 図版12 | E-37・54・84・91区  | 174 | 図版38 | E-25区 VIa層出土石器(2)・石製品   | 200 |
| 図版13 | F-8区  | 175 | 図版39 | E-25区 VIa層出土木製品・骨角牙製品、<br>E-25区西部SX31出土石器                       | 201 |
| 図版14 | F-10・11区  | 176 | 図版40 | E-32区 VI層出土土器・石器、SK21・<br>25・28出土土器・石器                          | 202 |
| 図版15 | F-1・3・5・7・9区  | 177 | 図版41 | E-36・37区 VIb層出土土器・石器、VIa層<br>出土土器・土製品(1)・石器・石製品                 | 203 |
| 図版16 | 北小松遺跡出土の縄文土器・石器・<br>石製品・骨角牙製品                         | 178 | 図版42 | E-36・37区 VIa層出土土製品(2)、E-64区<br>VIc層出土土器・土製品・石器、VIb層出土<br>土器(1)  | 204 |
| 図版17 | D-41区出土土器・石器・石製品、<br>E-1区VId層出土土器(1)                  | 179 | 図版43 | E-64区 VIb層出土土器(2)・石器(1)   | 205 |
| 図版18 | E-1区VId・b・a層出土土器(2)・<br>土製品                           | 180 | 図版44 | E-64区 VIb層出土石器(2)・VIa層出土石<br>器、F-8区 VIb層出土土器・石器、VIa層<br>出土土器・石器 | 206 |
| 図版19 | E-1区VId・b層出土土器、E-25区<br>VId層出土土器                      | 181 | 図版45 | F-9区 VI層出土土器・石器、F-10区<br>VId層出土土器・石器・石製品                        | 207 |
| 図版20 | E-25区VId層出土土器(2)・土製品(1)                               | 182 | 図版46 | F-10区 VI c 層出土土器・石器、VIb<br>層出土土器・石器                             | 208 |
| 図版21 | E-25区VId層出土土器(3)・土製品(2)、<br>石器・石製品(1)                 | 183 | 図版47 | F-10区 VIa層出土土器・石器、F-11区<br>VId層出土土器・石器                          | 209 |
| 図版22 | E-25区VId層出土石器・石製品(2)                                  | 184 | 図版48 | F-11区 VIc層出土土製品・石器、VIb層出土<br>土器・石器・石製品、VIa層出土土器・<br>土製品・石器      | 210 |
| 図版23 | E-25区VId層出土骨角器・素材、VIc層出土土器・<br>石器・木製品、VIb層出土一括廃棄土器(1) | 185 | 図版49 | その他の区のVI層出土土器・石器・<br>石製品、I～V層出土の縄文時代の<br>土器・土製品(1)              | 211 |
| 図版24 | E-25区VIb層出土一括廃棄土器(2)                                  | 186 | 図版50 | I～V層出土の縄文時代の土製品(2)・<br>石器・石製品・骨角器                               | 212 |
| 図版25 | E-25区VIb層出土一括廃棄土器(3)                                  | 187 | 図版51 | F-7区SE1032出土石製品、I～V層<br>出土の弥生時代以降の土器・瓦                          | 213 |
| 図版26 | E-25区VIb層出土一括廃棄土器(4)、<br>VIb層出土土器(1)                  | 188 | 図版52 | ニホンジカ・イノシシ  | 214 |
| 図版27 | E-25区VIb層出土土器(2)                                      | 189 | 図版53 | 哺乳類(ニホンジカ・イノシシ以外)、<br>鳥類・魚類                                     | 215 |
| 図版28 | E-25区VIb層出土土器(3)                                      | 190 |      |   |     |
| 図版29 | E-25区VIb層出土土器(4)・土製品、<br>石器・石製品(1)                    | 191 |      |   |     |
| 図版30 | E-25区VIb層出土石器・石製品(2)・<br>骨角器、VIa層出土土器(1)              | 192 |      |   |     |
| 図版31 | E-25区VIa層出土土器(2)                                      | 193 |      |   |     |
| 図版32 | E-25区VIa層出土土器(3)                                      | 194 |      |   |     |
| 図版33 | E-25区VIa層出土土器(4)                                      | 195 |      |   |     |
| 図版34 | E-25区VIa層出土土器(5)                                      | 196 |      |   |     |
| 図版35 | E-25区VIa層出土土器(6)・土製品(1)                               | 197 |      |   |     |
| 図版36 | E-25区VIa層出土土製品(2)                                     | 198 |      |   |     |
| 図版37 | E-25区VIa層出土土製品(3)・石器(1)                               | 199 |      |   |     |

## 第Ⅰ章 遺跡の環境

本報告における田尻西部地区のは場整備事業対象区域（以下、本対象区域と呼ぶ）は宮城県大崎市田尻北小松地区とその周辺に所在し、江合川と鳴瀬川の沖積作用で形成された東西約13km、南北約17kmの大崎平野の北寄りに位置する。大崎平野の四周は主に丘陵で、東は広瀬丘陵が南北に、南と北はそれぞれ三本木丘陵、清滝丘陵が西から東へ延びる。本対象区域はこの清滝丘陵から樹枝状に派生した低丘陵の縁辺とそれらに囲まれた沖積地にある。その標高は約16.0～36.0mで、現在は宅地や水田・畑地などとなっている。

大崎市田尻の縄文時代の遺跡として、縄文時代後期末葉から晩期前葉の貝塚である国史跡中沢貝塚や国指定重要文化財の遮光器土偶が出土した恵比須田遺跡が著名であるが、本対象区域の周辺にも縄文時代の遺跡が多く点在する（第1図）。そのうち国史跡宮沼遺跡では、縄文時代晩期末葉の大型土坑と遺物包含層や多くの遺物が発見されており、本対象区域にある北小松遺跡と同じ時期の本格的な発掘調査例として特筆される（宮城県教育委員会1980）。

この北小松遺跡は、低湿性の遺物包含層・貝層が広がる遺跡として注目されてきた。昭和28年に発見され、「宮城県史1」の遺跡地名表には縄文時代晚期の大洞BC～A'式土器の出土する遺跡として紹介された（伊東1957）。また昭和32年の開田工事では、「泥炭層」や「貝層」から縄文時代の抜歯人骨やシジミ・タニシなどの貝類、多数の縄文土器も発見されている（興野1959、須藤・高橋1986）。地元の方々からの聞き取りによると、その場所は遺跡西側の微高地の南にある水田付近にあたるという。その後は、平成8年に隣接する宮沼遺跡で町道拡幅工事に伴う発掘調査が田尻町教育委員会によって行われたが、縄文時代晚期の土器がわずかに出土したのみであった。

また、この調査では古墳時代の土坑と土師器壺が発見されたように、本対象区域は古代の遺物が散布していることでも知られていた。特に奈良・平安時代の遺物は、本対象区域東方の丘陵部に位置し、『続日本紀』記載の「新田柵」にも比定されている新田柵跡（城柵跡）の時期にあたるものとして、その関連が注目される。

なおこの新田柵跡は、平成2年から発掘調査が行われており、平成6年には「外郭」北門・築地（田尻町教育委員会1998）、御殿坂西地区で「外郭」西門・築地・掘立柱建物（田尻町教育委員会2000）、平成9年には御殿坂東地区で内部を東西に細分する材木塀（田尻町教育委員会2003）、平成16・17年には嚴治町地区で長舎型の掘立柱建物（大崎市教育委員会2007）などが検出され、その規模や構造が次第に明らかになってきている。

## 第Ⅱ章 調査の方法と経過

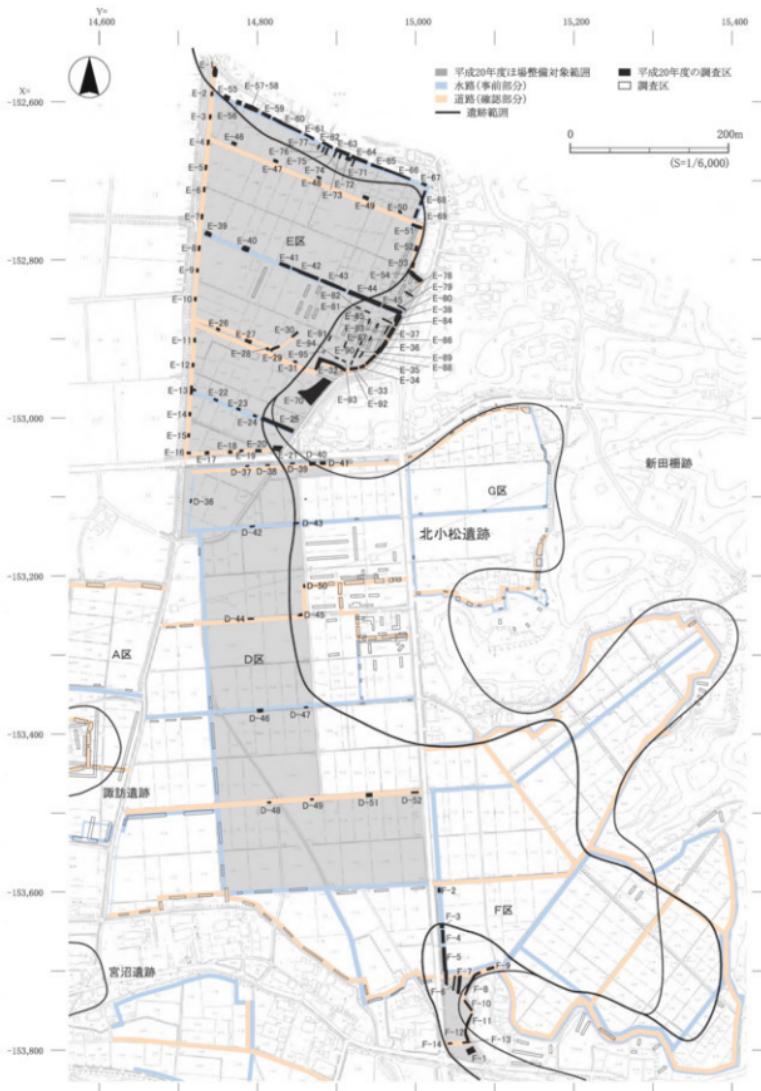
### 第1節 調査の経緯と経過

このように本対象区域は縄文時代晚期や古代の遺跡が点在する場所として注目されてきたが、本格的な発掘調査はあまり行われておらず、その実体はいまだ不明な点が多いのが現状であった。この状況の中、近年、北小松遺跡・新田柵跡とその周辺で田尻西部地区のは場整備事業が計画されることになった。そこで、その計画区域内での遺構・遺物の分布や密度、それらが検出される深さなどを把握



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代
1	北小松遺跡	丘陵、沖積平野	散布地 (周房跡)	圓文・古代	24	内山遺跡	段丘	集落、散布地	圓文・古代・中世
2	新田遺跡	丘陵	古墳・壁塗・集落	圓文・弥生・古墳・古代・中世	25	飯音沢遺跡	段丘	集落	圓文・古代・中世・近世
3	官宿遺跡	丘陵	散布地	圓文	26	御ノ原付地藏前遺跡	段丘	集落	圓文・古代・中世・近世
4	御前遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代	27	中ノ原遺跡	段丘	集落	圓文・古代・中世・近世
5	愛宕山遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代	28	東溝寺寺跡	段丘	寺社、散布地	圓文・古代・中世・近世
6	浙江山遺跡	丘陵	散布地	圓文	29	北五差遺跡	段丘	散布地	圓文・古代・中世・近世
7	国史跡 宮沢遺跡	丘陵	官衙	圓文晚・弥生・奈良・平安	30	北原A遺跡	段丘	散布地	圓文・古代・中世・近世
8	七色川周辺遺跡	丘陵裏	散布地	圓文晚	31	鶴沢遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代
9	長者若D遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文	32	源野井付遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代
10	上原C遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文	33	西ノ原遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代
11	嵐山遺跡	丘陵	散布地	圓文	34	大街堂遺跡	丘陵斜面	集落	圓文・奈良・平安
12	長者若A遺跡	丘陵	散布地	圓文晚・奈良	35	国史跡 木戸屋遺跡	丘陵	聚落	奈良
13	長者若B遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文	36	東谷崎遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文・古代
14	長瀬遺跡	丘陵	散布地	圓文	37	計利山C遺跡	自然避難場	散布地	圓文・古墳前・古墳
15	化女岩遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文	38	丹民小学校西遺跡	自然避難場	散布地	圓文
16	馬籠遺跡	沖積平野	散布地	圓文・古代	39	浮子山遺跡	沖積平野	散布地	圓文
17	十八石沢遺跡	丘陵裏	散布地	圓文晚・古代	40	豊盛遺跡	丘陵	散布地	圓文前
18	梅安遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文・古代	41	生澤町遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文
19	萩田遺跡	丘陵	集落	圓文晚・弥生・古代～近世	42	五輪遺跡	段丘	散布地	圓文・古墳
20	草島遺跡	丘陵斜面	散布地	圓文晚・古代	43	一本松遺跡	丘陵	散布地	圓文・古代
21	須賀遺跡	丘陵尾根	散布地	圓文晚・古代	44	大寺遺跡	段丘	散布地	圓文・多生・奈良前・中・古代・中世
22	大深跡	丘陵	散布地	圓文前・中	45	夷町遺跡	丘陵	散布地	圓文・古墳
23	木沢田遺跡	段丘	集落・崖	圓文・古代・中世					番号を付しているものは、圓文時代の遺跡と国史跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡



第2図 調査区配置図

するため、平成16年度に宮城県教育委員会、平成16・17年度に田尻町教育委員会によって確認調査が実施された。本報告に関わるその結果を要約すると、北小松遺跡の西にある微高地の北・南・西の調査区では、水成堆積層の下で地表下約0.2~2mにあたる位置から、縄文時代晚期から弥生時代前期の遺物を多く含む層が検出され、その微高地上には集落が営まれていたと考えられること（宮城県教育委員会2005）、源訪遺跡の南にある水田内と東にある微高地上の調査区では、遺構や遺物包含層は検出されず、古代の遺物をわずかに発見したのみであったことである。

この調査結果を受け、工事による遺跡に与える影響を最小限に抑えるための協議を重ね、その設計を検討した後に、後述するような調査の方針や方法を踏まえ、平成19年度から発掘調査が実施されることになった（第1表）。

平成19年度はA~C区とD区の一部を調査した（宮城県教育委員会2008・2010）。その要点を述べると、①層はI~X層に大別でき、I層：表土層、II層：10世紀前葉以降のスクモ層、III層：10世紀前葉の灰白色火山灰層（To-a）、IV層：弥生時代前期から10世紀前葉のスクモ層、V層：弥生時代前期の水成堆積層、VI層：縄文時代晚期の遺物包含層、VII~X層：地山層となること、②低丘陵や微高地などの現地形の出入りは縄文時代晚期の地形の出入りをおおよそ反映したものであり、低丘陵や微高地にはクリの純林が形成され、その周辺で現在の沖積地の下にあたる場所には湿地や沼沢地、湖沼が広がっていたということが考えられること、③縄文時代晚期の遺構とVI層は、低丘陵とそれから派生する微高地の裾部と斜面にあたる場所に多くみられ、そのうちVI層は沼地へ向かって潜っていくようにして広がっていること、④遺物は縄文時代晚期後葉から末葉のものが主体であり、すぐ上の低丘陵や微高地にある集落から流入してきたとみられるものがほとんどであるが、捨て場に近接していたものもあること、⑤集落は低丘陵や微高地の端突付近に多くみられること、⑥縄文時代早期末から前期、後期中葉・後葉、晚期前葉・中葉までの集落は小規模で点在するのみであったが、晚期後葉から末葉になると短期間で、規模と数が増加し、その分布も広範囲になるなど最盛期を迎え、大洪水後の弥生時代前期以降になると再び小規模な集落が点在することなどが挙げられる。

平成20年度はD区西部・E区・F区南部を調査し、その成果を本書にまとめた。調査区域は、ほ場整備事業が実施される範囲（約182,800m<sup>2</sup>）のうち水路予定地（5,970m<sup>2</sup>：事前対象）・田面造成予定地（3,078m<sup>2</sup>：事前対象）と農道予定地（20,900m<sup>2</sup>：確認対象）である（第2図）。調査は5月9日から開始し、10月11日に現地説明会（E-25区：参加88名）を開催し、10月16日に花粉分析・珪藻分析用の試料採集を行った。また来年度調査区域の一部について、9月25日からD区、11月5日からF区の調査に着手し、あわせて平成20年度の田面高を調整するための調査も12月1日からE区で行い、12月10

調査年度	調査区	調査面積	調査主体	報告書
平成16年（2004年）	D区（1~19T） AIK（1~13~17T）、BIK（14~15T）、CIK（16~18~20T）、FIK（52~73T）、HIK（21~51T）	5,745m <sup>2</sup>	田尻町教育委員会	未報告
平成17年（2005年）	EIK（29~89T）、F区（1~23T）、GIK（24~28T）	1,655m <sup>2</sup>	田尻町教育委員会	未報告
平成19年（2007年）	A~1~34IK、B~1~29IK、C~1~33IK、 D~1~35IK	7,961m <sup>2</sup>	宮城県教育委員会	宮城県教育委員会2007（宮文報第216集） 宮城県教育委員会2010（宮文報第223集）
平成20年（2008年）	D~36~52区、E~1~95区、F~1~14区	5,472m <sup>2</sup>	宮城県教育委員会	本報告（宮文報第226集）
平成21年（2009年）	D~53~80IK、G~1~31IK	2,075m <sup>2</sup>	宮城県教育委員会	未報告
平成22年（2010年）	F~15~89IK	6,340m <sup>2</sup>	宮城県教育委員会	未報告

第1表 調査年度と調査区

日にはすべての調査を終了した。最終的な調査区の総数は126箇所で、各調査区は長さ3~48m、幅1.7~5.8m、調査深度0.1~3.1m、全ての調査面積は5,472m<sup>2</sup>（事前調査：2,633m<sup>2</sup>、確認調査：2,839m<sup>2</sup>）となつた。

## 第2節 調査方法

平成16・17・19年度の調査では、弥生時代以降の遺構と遺物はわずかで、縄文時代の遺物包含層（VI層）や遺構・遺物がほとんどであったことから、事前調査・確認調査とともに縄文時代の遺物包含層（VI層）の分布・堆積状況・遺物の含まれ方、遺構・遺物の分布や堆積状況、それらの時期などを把握することを調査の方針とした。そして調査の安全が確保されうる限りにおいて、事前調査区では遺物包含層や遺構を精査の後に完掘し、確認調査区では必要に応じて一部掘り下げて精査することとした。

調査方法は平成19年度調査と同様である。まず、重機で表土を除去し、弥生時代以降の遺構検出面と考えられたスクモ層（IV層）や水成堆積層（V層）の上面で遺構・遺物の有無を確認し、必要に応じてその精査や記録を行う。次に、重機による部分的な掘り下げやボーリング調査によって、その下層にある遺物包含層（VI層）の深度をできる限り把握し、段掘りなどによって調査の安全を確保した後、遺構や遺物包含層（VI層）を検出し、その精査や記録とともに土壤サンプルの採取もあわせて行った。

なお、調査区や遺構・遺物包含層（VI層）などの平面図作成には電子平板を使用し、その断面図は1/20で作成した。また写真撮影には、6×7モノクロフィルム・カラーリバーサルフィルム、デジタルカメラを使用した。

## 第Ⅲ章 地形と層序

### 第1節 調査対象区域内にある遺跡と地形の現況

地形の現況は、愛宕山・諏訪・宮沼遺跡がある西の低丘陵と北小松遺跡がある北と東の低丘陵で開まれた標高13.3~19.2mのはば平坦な水田地帯となっており、概ね丘陵裾部~沖積地によって構成される。沖積地へ延びる低丘陵や微高地の一部は、過去の開田や近年の水田整備によって大きく削平されている。なお、この遺跡の範囲は後述する本書の調査成果を反映したものとなっている。

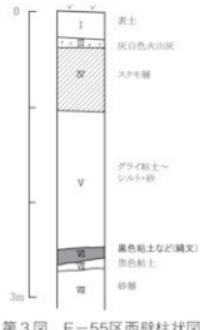
D区は本対象区域の中央部で北小松遺跡西部の微高地・諏訪遺跡と宮沼遺跡のある小丘陵との間にある沖積地、E区は本対象区域の北部で北小松遺跡北西部の小丘陵の裾部とその西の沖積地、F区は本対象区域の南東部で北小松遺跡西部の小丘陵の裾部とその西の沖積地でそれぞれ構成される。

### 第2節 層序

#### 1 基本層序とその特徴

丘陵裾部と沖積地では層序に違いがあるが、今年度も過去の調査と同様に、堆積土の状況が良好な沖積地では、表土から地山岩盤まで10層に大別できた（第3図）。ほとんどの遺物はVI層から出土した。VII~X層はいわゆる地山層で遺物は出土していない。

- I層：表土層。厚さ0.3~0.4m。
- II層：スクモ層。厚さ0.1~0.5m。主にE区北部から中央部、F区南部の沖積地に分布。
- III層：灰白色火山灰層（十和田a火山灰（To-a））。最も厚い地点で厚さ0.1m。主にE区北部から中央部、F区南部の沖積地に分布。
- IV層：スクモ層。最も厚い地点で厚さ0.8m。主にE区北部から中央部、F区南部の沖積地に分布。縄文・弥生・古代の遺物がわずかに含まれる。
- V層：黄褐色粘土・シルト～砂層。厚さは0.1~3m以上。調査区域のはば全域に分布。洪水由来の水成堆積土か。縄文・弥生時代の遺物がわずかに含まれる。
- VI層：黒色粘土層～砂層。厚さ0.1~0.9mで、地表下約0.1~2.5mの標高約10.0~18.4mで検出。主にE区、F区南部の丘陵裾部から沖積地に分布。縄文時代の遺物が含まれる遺物包含層である。最大でa~eの5層に細分されるが、ほとんどが厚さ0.1~0.2mの非常に薄い自然堆積土であるため、その特徴を抽出し、各調査区間の細分層の対応を把握することがほとんどできなかった。よって特記がない限り、各調査区の各細分層は各々異なる層とみなしている。
- VII層：黒色粘土～砂層（無遺物層）。
- VIII層：暗褐色砂層。
- IX層：黄褐色粘土～シルト層。
- X層：凝灰岩層（基盤層）。



第3図 E-55区西壁柱状図

## 2 VI層の特徴

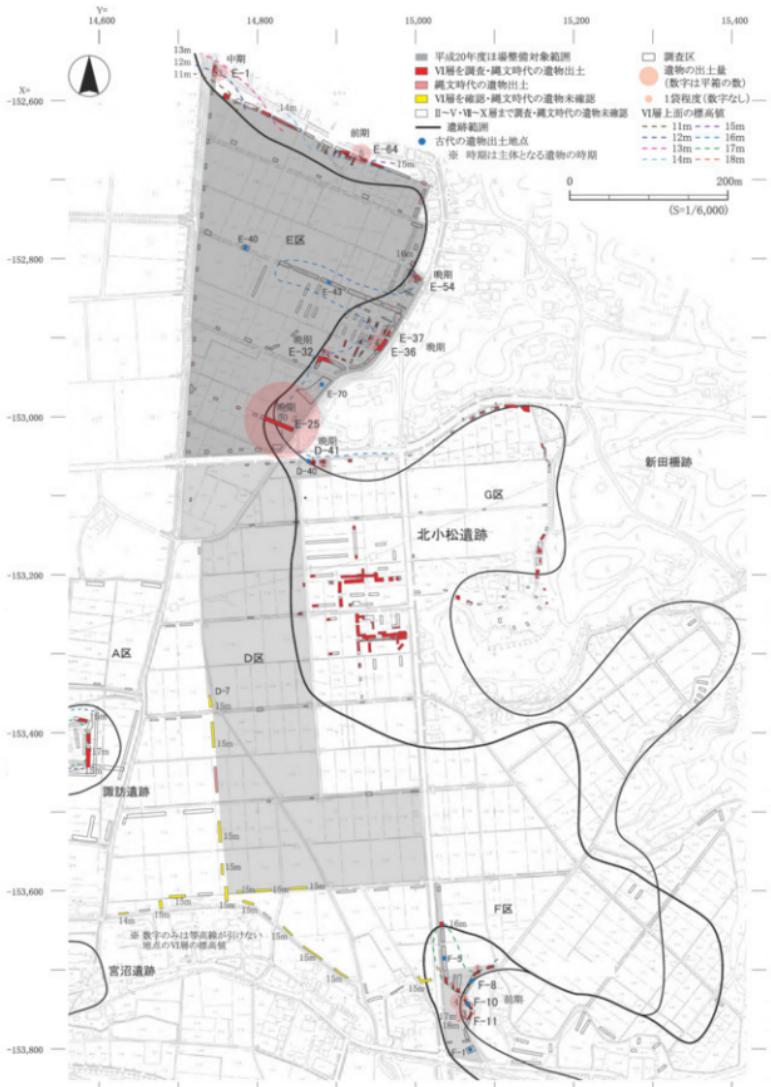
### (1) 分布状況

地表下約0.1~2.5mの標高約10.0~18.4mで検出した層である（第4図）。その傾斜について、VI層上面の標高値の等高線をみると、おむね11~18mの各等高線は現在の北小松遺跡西部の低丘陵に沿って配されている。この値は丘陵から沖積地へと離れるにつれて小さくなっている。特にD・F区の沖積地ではD区中央部のD-7区付近で最小値となる。さらに周辺の標高値もすべて15mとなっているので、この15mが底面の値を示すとみられる。したがってIV・V層の検出で留めたD・F区のVI層上面の標高も15mほどとみられる。ただしE区北部の丘陵裾部では11~14mの等高線が配されるので、底面はD・F区よりも深くなる。底面には多少の起伏があったと考えられる。

### (2) 堆積状況と含まれる遺物の分布

VI層は丘陵から沖積地へ緩やかに傾斜する地山に沿って0.1~0.9mの厚さがあり、その上面と下面はほぼ同じような傾斜で堆積している。この堆積土には土砂や遺物が含まれており、その多少でさらに層は細分される。各細分層の厚さは0.1~0.3mである。

VI層に含まれる遺物は細分層の各層の上面に張り付くような状態で、丘陵に近い緩斜面の範囲に比較的多く分布するという傾向がみられる。ただし、そのほとんどが小破片で、全体を復元できる個体



第4図 VI層と遺物の分布

やその破片が密集した場所などはほとんどなかった。したがって、そのほとんどは、廃棄された原位置を保ったものではなく、おそらく付近の丘陵や微高地などから廃棄されたものが土砂などとともに流されてきたものと考えられる。ただし、遺物の磨耗は少ないとから、それほど遠くから流れてきたものではないとみられる。

### 第3節 層の形成要因と地形の変遷

前述したようにVI層の上面と下面はほぼ同じ傾斜となっているので、VI層上面の起伏は下面の起伏をほぼ反映したものと考えてよい。第4図をみると、VI層上面の標高値の各等高線は現在の4つの低丘陵の地形にはほぼ沿っている。つまり縄文時代と現在の地形の出入りはおむね同じであったと考えられ、VI層を検出した現在の低丘陵の斜面や裾部は、縄文時代にも低丘陵の斜面や裾部であったといえる。ただし、E区南東部の16mの等高線やF区南東部の17・18mの等高線の一部は、丘陵裾部から西へ大きく張り出しているので、縄文時代には東の低丘陵がこの付近まで張り出していたことを反映しているとみられる。張り出した部分の低丘陵は後世の開田などにより、削平されたのであろう。なお、丘陵の周囲は、主に湿地や沼沢地などの湿った環境であったとみられ、その後、河川などによつて運ばれた土砂が厚く堆積し（V層）、再び沼地となったと考えられている（Ⅱ～Ⅳ層）（古代の森研究会2008a・2009a）。



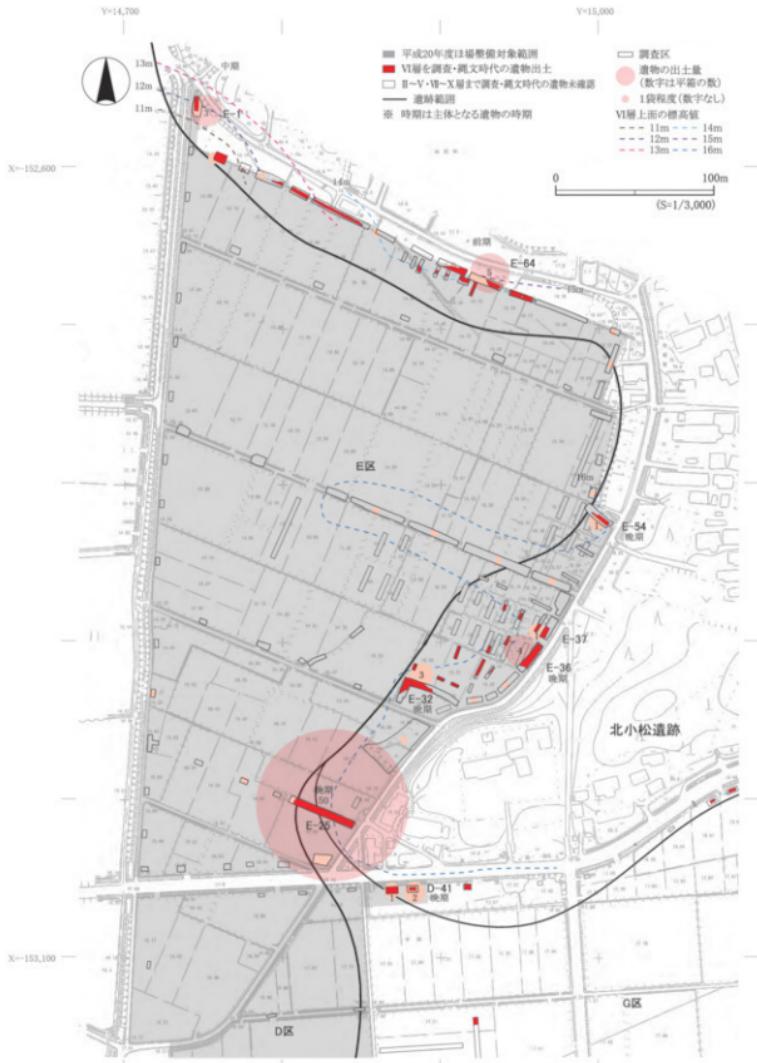
E-25区調査風景



遺構の実測



分析土壤の採取



第5図 D・E区VI層と遺物の分布

## 第Ⅳ章 発見した遺構と遺物

今年度は126箇所を調査し、位置と平面図は第2・4・5・59図、発見した遺構と遺物の概要などは附表にまとめた。以下では、そのうち、遺構を検出した調査区、遺物包含層（VI層）を検出し、かつ遺物が比較的多かった調査区について、縄文時代と弥生時代以降とに大別し、D・E・F区の順に、遺構や遺物包含層の平面図・断面図、細分層の注記などの詳細を記述する。

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### 1 D区

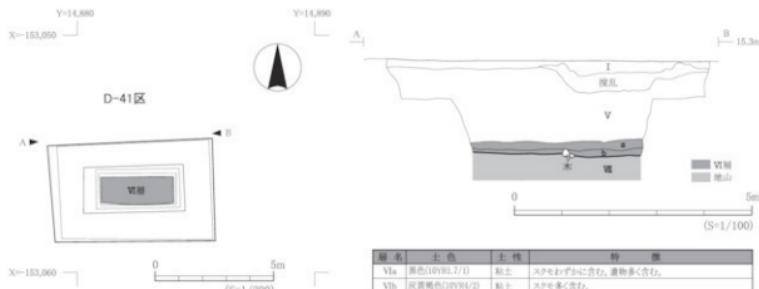
VI層をD-40・41・45・50区の4箇所で確認した。遺構は検出していない。遺物量が比較的多かったD-41区について述べる。

##### D-41区

【VI層】（平面図・断面図：第6図、遺物：第7・8図、写真：遺構3・遺物17）

〔層〕 a・bの2層に細分できる。遺物はa層が多くb層はわずかである。

〔遺物〕 縄文土器は深鉢・浅鉢・壺、土製品は円盤、石器は磨製石斧・石皿・磨石、石製品は石棒、剥片、



第6図 D-41区平面図・断面図

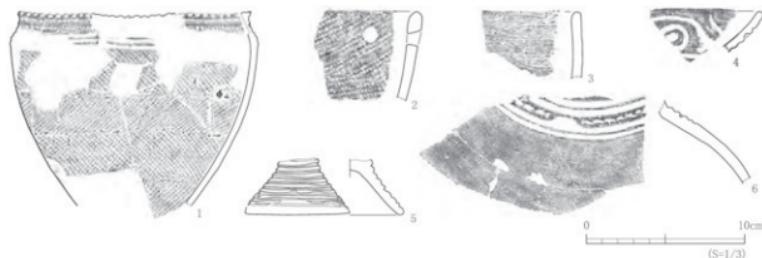


図	区	遺構/層	記載	分類	寸法
1	D-41	Vla層	深鉢	口径148cm、平縁(削み)、連続鈎突文、平行沈綱文、IR・LR羽状鈎突文(井結構)、海綿骨針多く含む	R2 17-2
2	D-41	Vla層	深鉢	平縁、IR・LR羽状鈎突文(井結構)	R7 17-4
3	D-41	Vla層	深鉢	平縁、平行沈綱文(条状)	R4 17-3
4	D-41	Vla層	深鉢	平縁、三叉文	R6 17-5
5	D-41	Vla層(台付)	台径67cm、工字文(隕縫表現)、4単位2段	R3 17-1	
6	D-41	Vla層	壺	平行沈綱文、工字文(隕縫表現)→連続斜刻文	R5 17-6

第7図 D-41区Vla層出土土器

動物遺存体はニホンジカの距骨・イノシシの上顎骨・脛骨・距骨・中手／中足骨とがある。

a層の土器の浅鉢には三叉文（第7図4）・工字文（第7図5）、壺には工字文（第7図6）、石製品には石棒（第8図3）などがみられる。

〔年代〕出土土器は縄文時代晩期と考えられる。

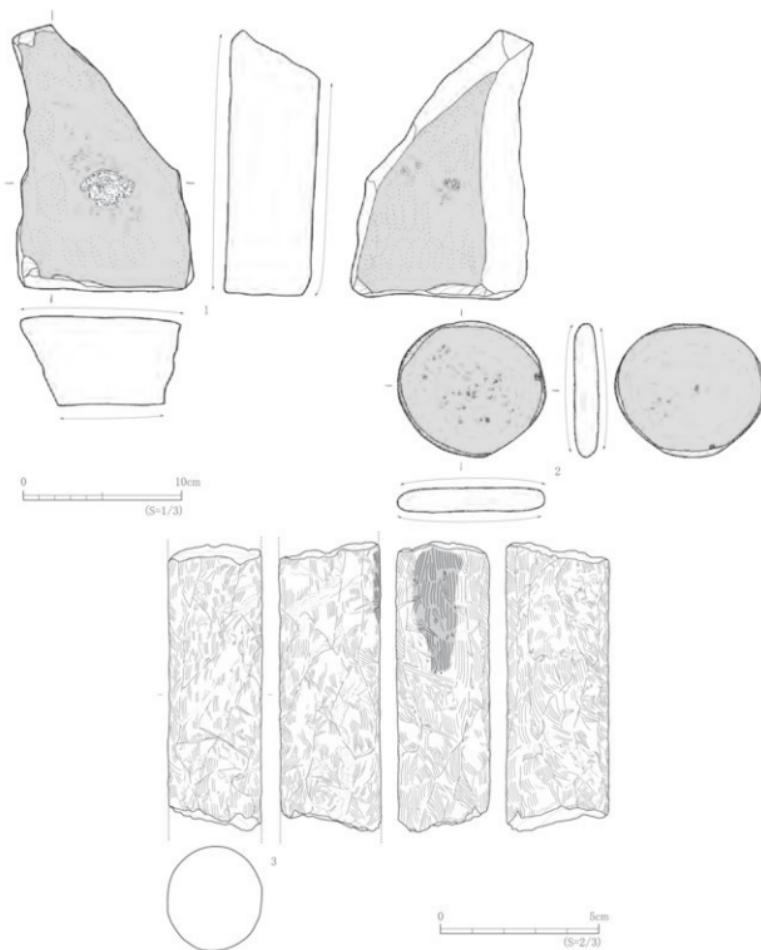


図	区	遺構・層	器・様	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	残存	特徴	登録	写真
1	D-41	Vla層	石棒	168.1	101.0	54.8	1500.0	砂岩	破片		石17	17-8
2	D-41	Vla層	磨石	84.0	93.0	14.0	140.1	砂岩	完形		石4	17-7
3	D-41	Vla層	石棒	91.3	33.0	30.1	161.2	安山岩	破片	赤色断面、熱熱痕	石5	17-9

第8図 D-41区Vla層出土土石器・石製品

## 2 E区

VI層をE-1・25・32・36・37・54~60・63~65・71~76・83~90・93~95区の32箇所で確認した。遺構はE-25区の集石遺構1基(SX31)、E-32区の土坑9基(SK21~29)を検出した。以下、遺構を検出した調査区、遺物量が比較的多かった調査区のE-1・25・32・36・37・64区について述べる。

### E-1区

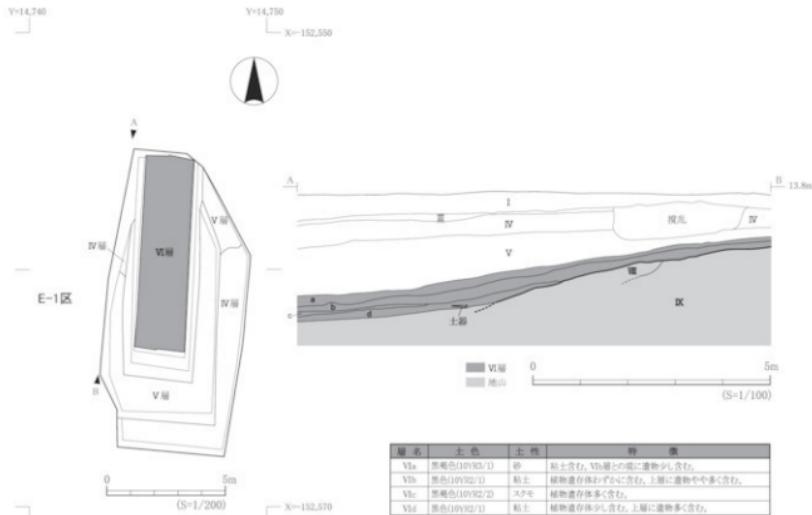
【VI層】(平面図・断面図: 第9図・遺物: 第10~13図・写真: 遺構4・遺物17~19)

〔層〕a~dの4層に細分できる。d層の上部で廃棄の原位置を留めるとみられる土器を2個体分検出した。c層は無遺物層である。

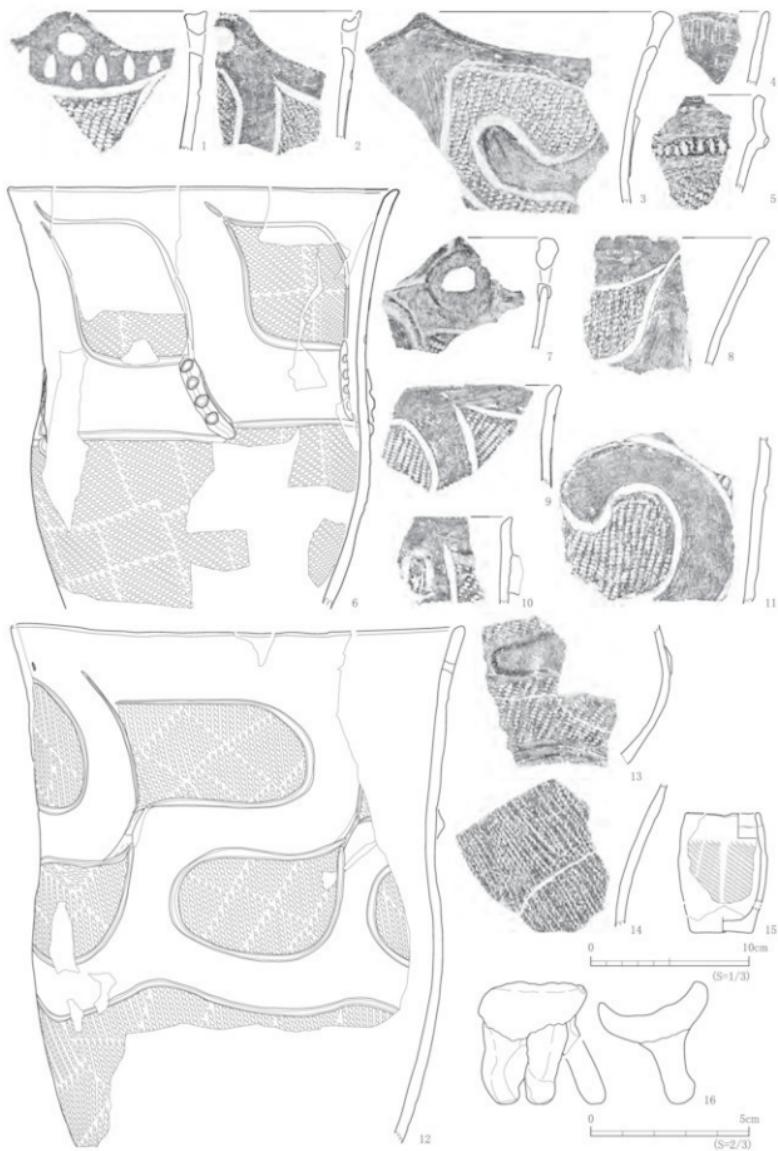
〔遺物〕a・b・d層の縄文土器は深鉢・浅鉢、土製品は三足のミニチュア・円盤、石器は石鏃・石錐・楔形石器・不定形石器・石皿・磨石・剥片がある。

d層の土器の深鉢には区画文(第10図1~3・6~13)、土製品には三足のミニチュア(第10図16)、石器には石鏃(第11図1・2)、石錐(第11図3)、b層の土器の深鉢には帯状文のある深鉢(第12図1)、石器には楔形石器(第12図2)、a層の石器には石錐(第13図12)がみられる。

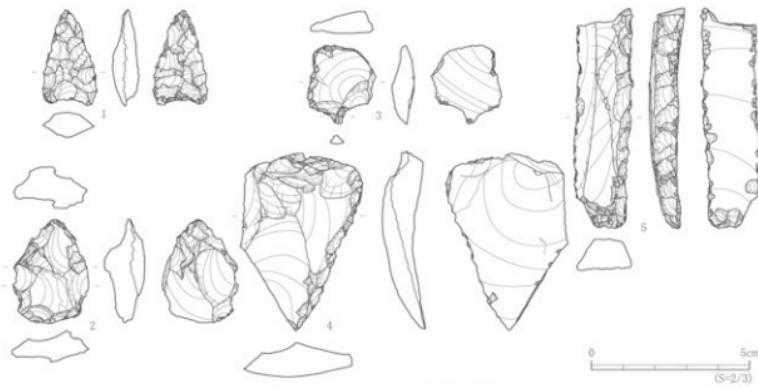
〔年代〕出土土器は、d層は縄文時代中期末葉、b層は後期後葉、a層は後期後葉と考えられる。



第9図 E-1区平面図・断面図



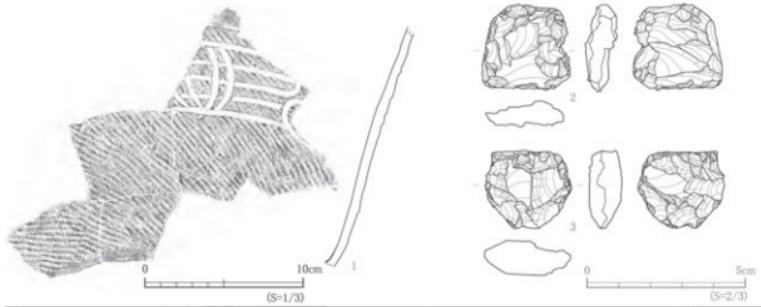
第10図 E-1区V1d層出土土器・土製品



第11図 E-1区Vid層出土土石器

層	区	遺構	器種	特徴	登録	写真
10-1	E-1	Vid層	遺跡	環狀把手、圓筒形火炎、圓筒文（深縫）、沈面→LR縫文（光坑）→沈面	R10	18-3
10-2	E-1	Vid層	遺跡	環狀把手、圓筒文（深縫）、LR縫文（0段多条、光坑）	R15	18-4
10-3	E-1	Vid層	遺跡	大底狀小孔、圓筒文（深縫）、沈面→LR縫面縫文（光坑）→沈面	R25	18-11
10-4	E-1	Vid層	遺跡	平底、体部・握部・側位の縫文	R17	18-5
10-5	E-1	Vid層	遺跡	平底、縫文文→地縫面縫文、LR縫文	R28	18-6
10-6	E-1	Vid層	遺跡	口徑17mm、平底、平行刃の火炎、沈面→LR縫文（光坑）→沈面	R11	17-10
10-7	E-1	Vid層	遺跡	環狀把手、圓筒文、圓筒文火炎、LR縫面縫文（光坑）→角凹円多孔	R27	18-9
10-8	E-1	Vid層	遺跡	平底小、圓筒文（光坑）、粗直縫面縫文（光坑）；角凹円多孔	R18	18-13
10-9	E-1	Vid層	遺跡	平底小、圓筒文（深縫）、粗直縫面縫文（光坑）	R16	18-15
10-10	E-1	Vid層	遺跡	平底小、圓筒文（光坑）、粗直縫面縫文（光坑）；体部に把手、圓筒多孔	R19	18-7
10-11	E-1	Vid層	遺跡	S字縫面縫文（深縫）、沈面→LR縫文（光坑）→沈面	R14	18-12
10-12	E-1	Vid層	遺跡	口徑：29.2mm、平底、S字縫面縫文（深縫）、沈面→LR縫文（光坑）→沈面。補修孔1箇所	R12	17-11
10-13	E-1	Vid層	遺跡	薄圓文、圓筒文小、沈面→LR縫文（光坑）→沈面	R20	18-14
10-14	E-1	Vid層	遺跡	圓筒文	R24	18-15
10-15	E-1	Vid層	遺跡	1.二重アーチ口徑：46mm、高さ：75mm、底径36mm、平底、無頭LR縫文	R22	18-1
10-16	E-1	Vid層	遺跡	1.二重アーチ口徑：47mm、高さ：75mm、底径36mm、平底	R12	18-2

層	区	遺構	器種	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石材	病害	特徴	登録	写真
11-1	E-1	Vid層	石器	300	170	80	33	片化基底岩	尖端	円弧	R44	19-1
11-2	E-1	Vid層	石器	330	260	80	71	片化基底岩	尖端	円弧	R47	19-2
11-3	E-1	Vid層	石器	250	220	60	31	片化基底岩	先端欠	つまみ有	R54	19-3
11-4	E-1	Vid層	不定形石器	560	360	110	203	片化基底岩	尖端	未製品	R45	19-5
11-5	E-1	Vid層	不定形石器	700	260	95	156	片化基底岩	一部欠	未製品	R46	19-6



第12図 E-1区Vib層出土土器、石器

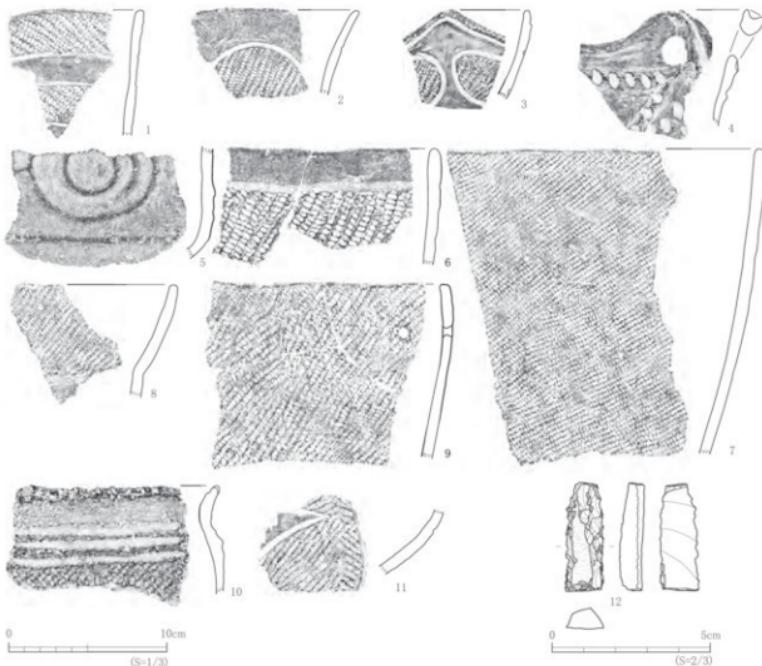


図	区	遺構	層	形	特徴	骨器	写真
1	E-1	VIA層	泥炭	泥炭	[凸面文・沈面]、LR調文(削り消し)	R29 R37	18-27 18-17
2	E-1	VIA層	泥炭	泥炭	[凸面文・沈面]→LR調文(光面)→泥炭	R39	18-22
3	E-1	VIA層	泥炭	大波状鋸かく	[凸面文・沈面]、口縁部LR調文(削り消し)・口沿部LR調文(削り消し)	R41	18-24
4	E-1	VIA層	泥炭	環状把手	泥面文→逆錐刺突文	R36	18-26
5	E-1	VIA層	泥炭	円文調査	LR調文か(削り消し)	R42	18-25
6	E-1	VIA層	泥炭	平縁	LR調文	R34	18-23
7	E-1	VIA層	泥炭	平縁	LR調文	R30	18-28
8	E-1	VIA層	泥炭	平縁	LR調文	R32	18-18
9	E-1	VIA層	泥炭	平縁	LR調文、穿修孔1箇所	R33	18-20
10	E-1	VIA層	泥炭	平縁(崩み)	平行沈面、LR調文	R31	18-19
11	E-1	VIA層	甌	二角状の凹面文	LR、RL調文(削り消し)		
12	E-1	VIA層	石器	石器	25.0   12.5   6.5   3.8   [日化斑水石]   先端欠   鋸狀	R25	19-8

第13図 E-1区VIA・VI層出土土器、石器

### E-25区

【VI層】(平面図・断面図: 第14・23図・遺物: 第15~22・24~41図、写真: 遺構5~8・遺物19~39)

【層】a~dの4層に細分できる。西部から拡張部のb層上部で廃棄の原位置を留めると考えられる土器を14個体分検出した。c層は遺物が非常に少ない。なお、西部から拡張部のb層上部で樹木の根株を2箇所検出した。

〔遺物〕 a～d層の縄文土器は深鉢・浅鉢・壺・注口土器・香炉・蓋、土製品は土偶・土版・耳飾・土玉・ドングリ形土製品・ミニチュア・円盤・石器は石鏡・石錐・石匙・石範・楔形石器・不定形石器・磨製石斧・環状石斧・石皿・磨石・凹石・砥石・敲石・石製品は石棒・石刀・岩版・勾玉の未製品・円盤・有孔石製品・石核・剥片・骨角牙製品には刺突具・根鉄・管状製品・棒状製品・簪・垂飾がある。

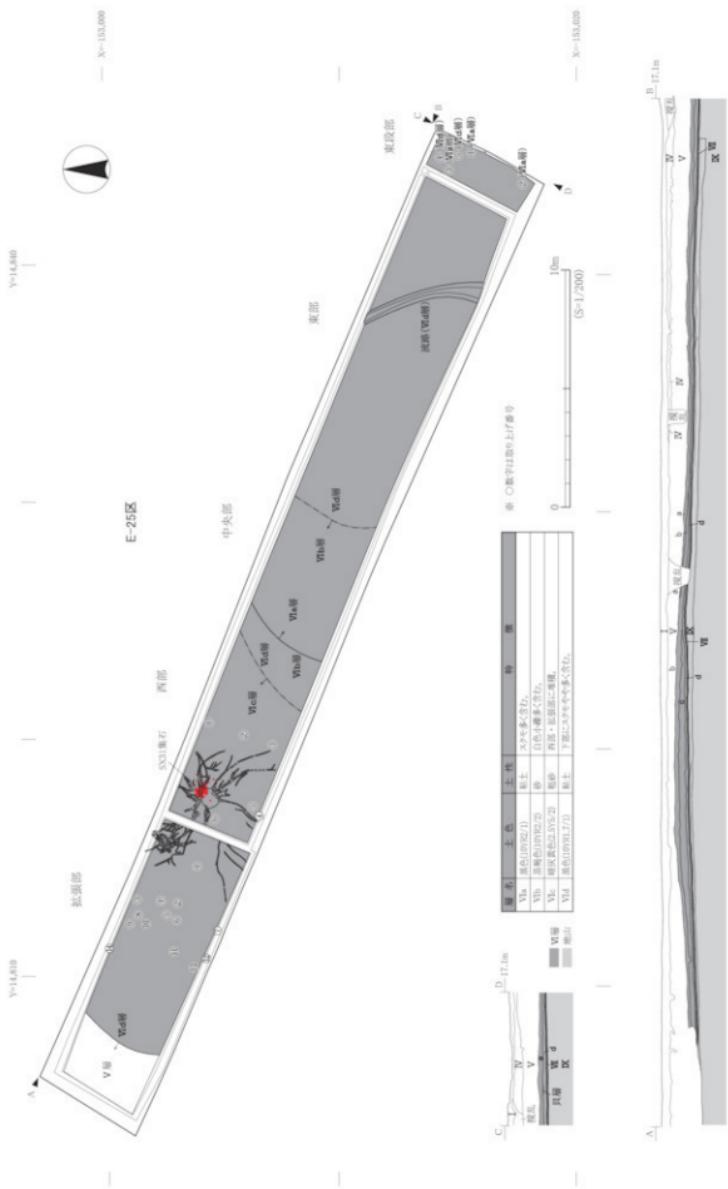
d層の土器の深鉢には羊齒状文（第15図1～5）、工字文（第15図7～12）、網代痕（第15図34）、浅鉢には雲形文（第16図1～11）、工字文（第16図12～15・18～21）、壺には三叉文（第16図24）、雲形文（第16図25）、工字文（第16図26・27）、注口土器には羊齒状文（第17図4）、香炉には羊齒状文（第17図6）、土製品には深鉢形のミニチュア（第17図10）、石器には石鏡（第18図1）、石錐（第18図2）、石範（第18図3）、磨製石斧（第18図5・6、第19図1）、磨石（第19図2～8）、凹石（第20図1～4）、石皿（第20図5）、石製品には有孔石製品（第21図2）、骨角器には垂飾（第21図3）、刺突具（第21図4）などがみられる。

c層の土器の深鉢には工字文（第22図4）浅鉢には工字文（第22図5～7）、石器には磨石（第22図9）、木製品には赤漆塗りの堅櫛（第22図10）などがみられる。

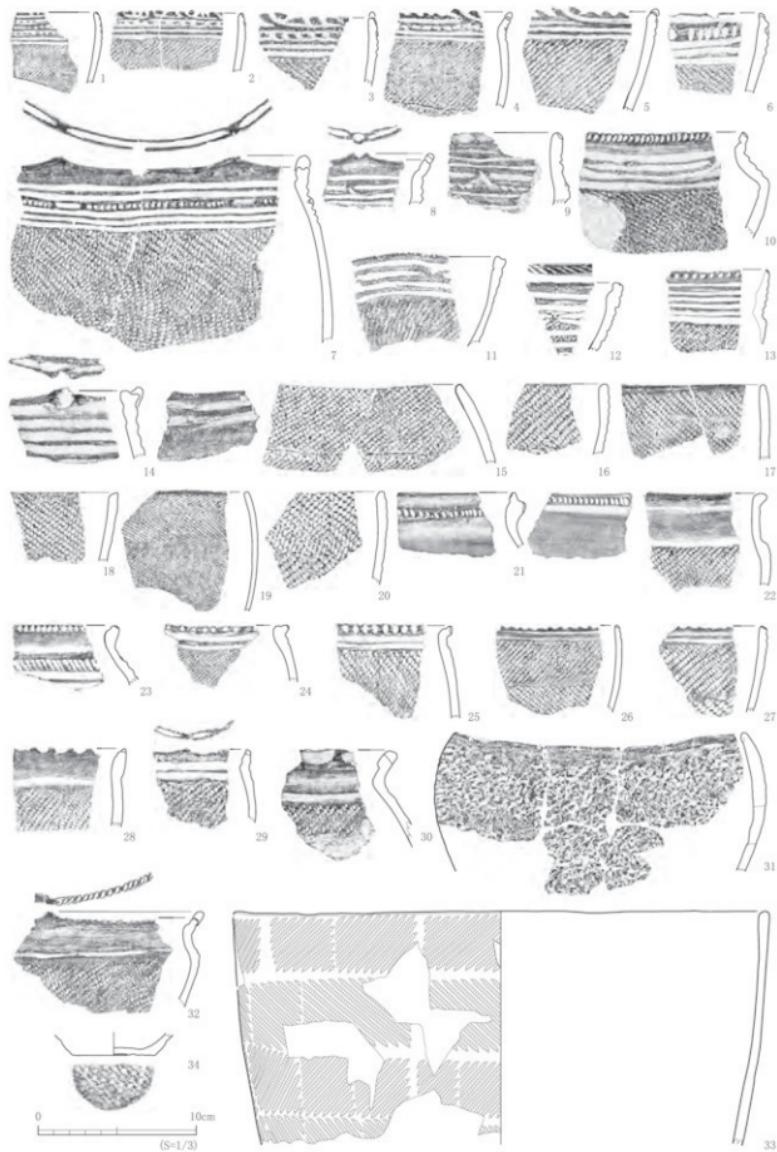
b層について、一括廃棄土器の深鉢と浅鉢には工字文（第27図4・5）がみられる。他の土器の深鉢には羊齒状文（第28図1・2）、工字文（第28図3～5、第29図2）、浅鉢には工字文（第29図4～14）などのほか、漆容器（第29図17）もみられ、壺には三叉文に瘤状突起が付くもの（第29図18）、三叉文（第29図19）、工字文（第29図20～22・24）、綾移状の沈線文（第29図23）、土製品には土偶の角（第30図3）、腕（第30図4）、石器には石鏡（第31図1）、環状石斧（第31図4）、磨石（第31図5・6、第32図1・2）、凹石（第32図3）、石製品には勾玉の未製品（第32図7）、岩版（第32図8）、骨角器には棒状製品（第32図9）などがみられる。

a層の土器の深鉢には羊齒状文（第33図1・2）、工字文（第33図3～10）、浅鉢には雲形文（第35図9・10）、工字文（第35図11～20・23～34、第36図2・14）、変形工字文（第35図21・22、第36図3）、壺には三叉文（第36図17）、雲形文（第36図18）、蓋には矢羽状の沈線文（第36図26）、土製品には円盤（第36図27～29）、土偶の角（第37図1・2）、腰（第37図3）、足（第37図4～8）、土版（第37図9・14）、土玉（第37図10・11）、耳飾（第37図12）、腕輪（第37図13）、四足のミニチュア（第37図15）、石器には石鏡（第38図1～7）、石錐（第38図8・9）、石範（第38図10）、楔形石器（第38図11・12）、磨製石斧（第38図17・18）、石皿（第39図1）、磨石（第39図2・3）、石製品には石刀（第39図6・7）、骨角牙製品には刺突具（第41図1）、根鉄（第41図3）、棒状製品（第41図4～6）、簪（第41図7）、管状製品（第41図8）、垂飾（第41図9～12）などがみられる。

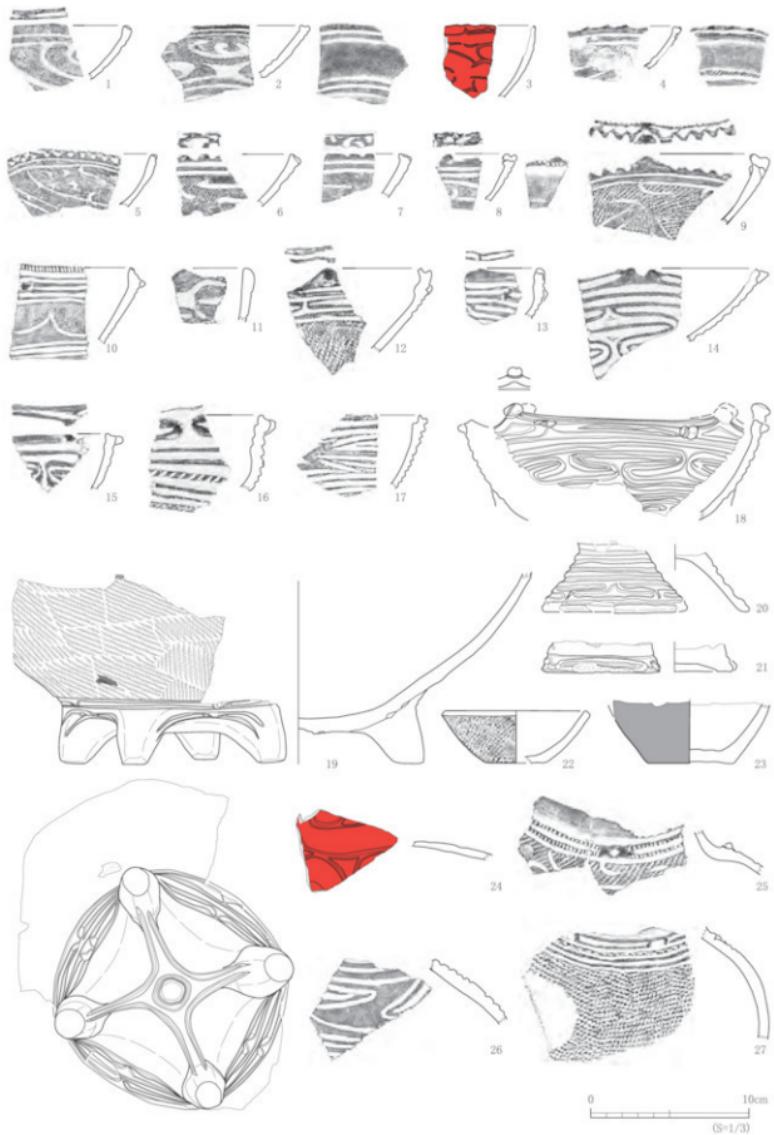
〔年代〕 出土土器は縄文時代後期末葉から晩期末葉と考えられる。



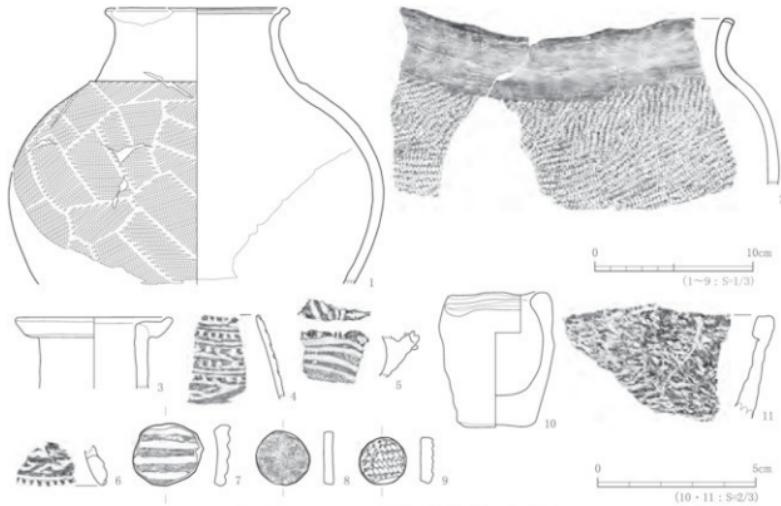
第14図 E-25区平面図・断面図



第15図 E-25区 Vi d層出土土器 (1)



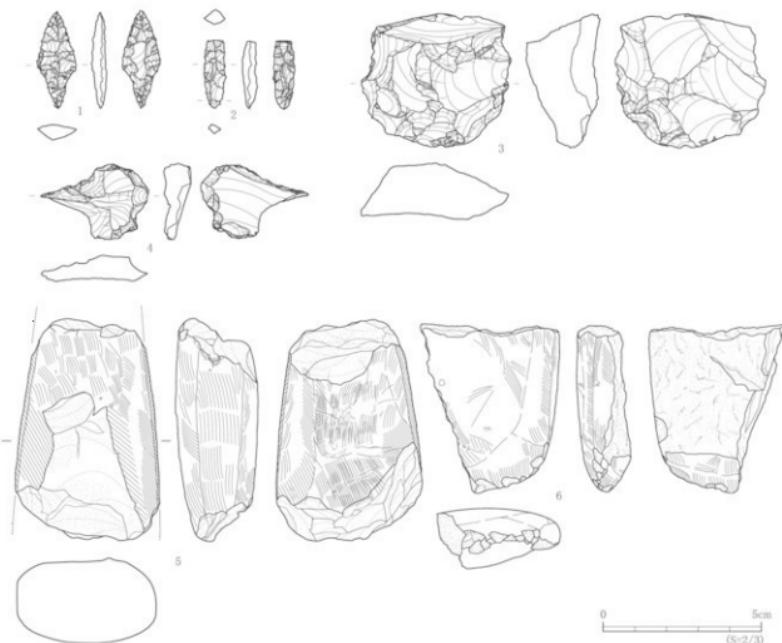
第16図 E-25区 VI d層出土土器 (2)



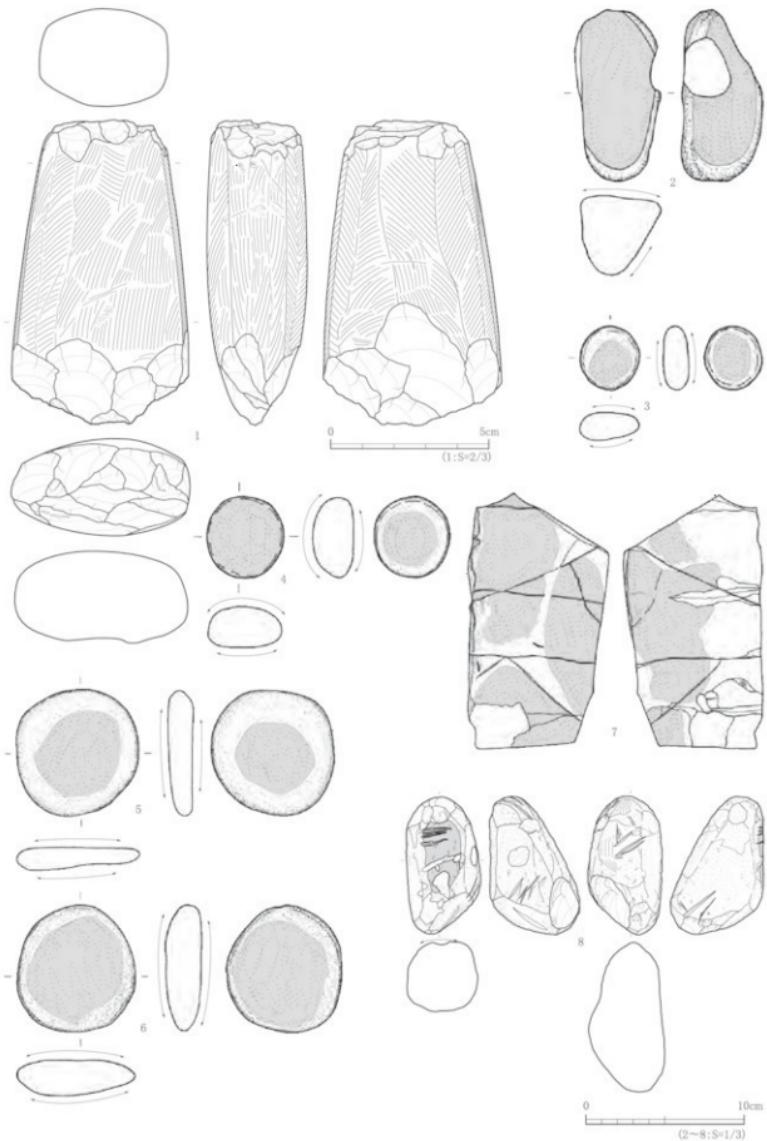
第17図 E-25区Vld層出土土器(3)・土製品

図	区	層	地質	形	記	量	写真
15-1	E-25中央	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、手形柱、平行沈面文、LR網文		R69	20-5
15-2	E-25東	Vld・d+0層	泥炭	平縁(刷み)、手形柱、平行沈面文、LR網文		R99	20-6
15-3	E-25西	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、空杯。手形柱文、LR網文		R52	20-7
15-4	E-25東段	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、空杯。手形柱文、平行沈面文、LR網文		R108	20-8
15-5	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、空杯。手形柱文、平行沈面文、LR網文		R89	20-9
15-6	E-25中央	Vld層	泥炭	平縁(抉り)、通縫刺文文、LR網文		R75	20-12
15-7	E-25東段	Vld層	泥炭	山形空起、丁字文(隠蔽去)→通縫刺文文、平行沈面文、LR網文		R112	20-10
15-8	E-25東	Vld層	泥炭	山形空起(抉り)、丁字文(隠蔽去)		R92	20-13
15-9	E-25東	Vld層	泥炭	小底伏縫、丁字文(隠蔽去)、通縫刺文文、平行沈面文		R45	20-14
15-10	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、丁字文(隠蔽去)、無筋隔壁、縫口斜け痕		R43	20-11
15-11	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、丁字文(隠蔽去)、LR網文		R94	20-16
15-12	E-25東段	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、丁字文(隠蔽去)、LR網文(削り消し)		R113	20-15
15-13	E-25中央	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、平行沈面文、LR網文		R77	20-17
15-14	E-25中央	Vld層	泥炭小浅鉢	山形空起、内底曲面、平行沈面		R78	20-18
15-15	E-25中央	Vld層	泥炭	平縁、LR網文		R73	20-19
15-16	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、LR網文		R588	20-20
15-17	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、LR網文		R585	20-21
15-18	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、LR網文		R586	20-22
15-19	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、LR・RL羽状網文(非結束)、海綿付多く含む		R46	20-23
15-20	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、RL・LR羽状網文(非結束)		R587	20-24
15-21	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、内面、通縫刺文文、外面、隠蔽文→通縫刺文文、海綿付多く含む		R87	20-25
15-22	E-25中央	Vld層	泥炭	平縁、LR網文		R98	20-26
15-23	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、通縫刺文文、平行沈面文		R64	20-29
15-24	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、平行沈面文、LR網文		R62	20-31
15-25	E-25東段	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、平行沈面文、RL網文		R105	20-27
15-26	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、平行沈面文、LR・RL羽状網文(非結束)		R109	20-28
15-27	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(刷み)、平行沈面文、LR・RL羽状網文(非結束)		R39	20-30
15-28	E-25東	Vld層	泥炭	小底凹陷、LR網文		R60	20-32
15-29	E-25中央	Vld層	泥炭	小底凹陷、平行沈面文、LR網文		R76	20-33
15-30	E-25中央	Vld層	泥炭	小底凹陷、平行沈面文、LR網文		R74	20-34
15-31	E-25東段	Vld・d+0層	泥炭	口径(35.3cm)、平縁、LR網文		R21	21-1
15-32	E-25東	Vld層	泥炭	山形空起(刷り)、平行沈面文、LR網文		R103	21-2
15-33	E-25	Vld層	泥炭	口径(34.4cm)、平縁、LR・RL羽状網文(非結束)、角凹石多く含む		R47	19-9
15-34	E-25	Vld層	泥炭	刷代瓶(2本身1本身1本高)		R63	21-4
16-1	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、芸形文、LR網文(削り消し)		R44	21-5
16-2	E-25東	Vld層	泥炭	平縁、内面、平行沈面文、隠蔽文→削み、外面:芸形文、LR網文(削り消し)		R118	21-6
16-3	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(削み)、芸形文、外面:内面に黒漆多く付着		R107	21-9
16-4	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(削み)、内面:平行沈面文、隠蔽文、LR網文(削り消し)		R96	21-12
16-5	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(削み)、芸形文、不明網文(削り消し)		R91	21-10
16-6	E-25東	Vld層	泥炭	平縁(削み)、芸形文、LR網文(削り消し)		R50	21-13
16-7	E-25中央	Vld層	泥炭	平縁(削み)、芸形文、LR網文(削り消し)		R71	21-7

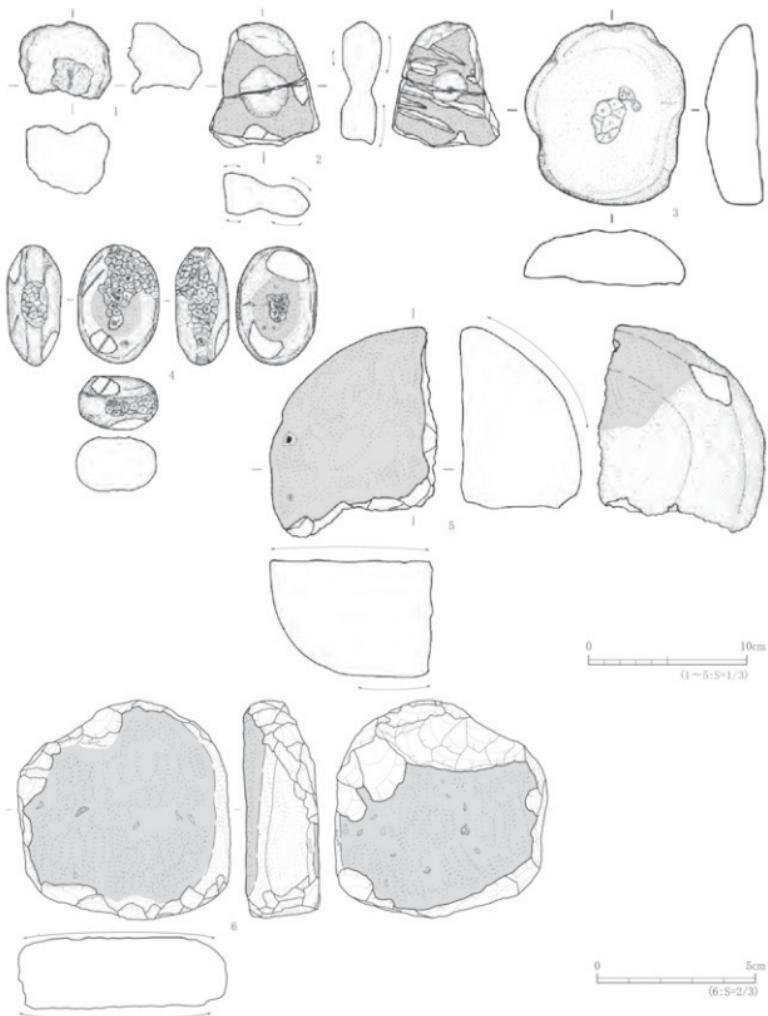
図	区	遺構番	器種	特徴	算出	写真
16-8	E-25東	VId層	石器	小底双刃、内面「削み」、背曲文、外側「剥離文」、LR圓文（削り消し）	R86	21-8
16-9	E-25東	VId層	石器	平縁、「削み」、直形支点、LR圓文（削り消し）	R89	21-14
16-10	E-25東	VId層	石器	平縁（「削み」）、直形支点、平行沈彫文、LR圓文（削り消し）	R88	21-11
16-11	E-25中央	VId層	石器	平縁（「削み」）、直形支点、不規則文（削り消し）	R87	21-15
16-12	E-25東	VId層	石器	山形剥離、「削み」、背曲文	R87	21-19
16-13	E-25東	VId層	石器	小底双刃、U字文2本（削離表現）、メガネ状文（削離表現）	R53	21-16
16-14	E-25中央	VId層	石器	山形剥離（削り）、U字文、背曲文	R72	21-18
16-15	E-25東	VId層	石器	平縁（「削み」）、直形支点、平行沈彫文	R93	21-20
16-16	E-25東	VId層	石器	平縁、内面「平行沈彫文」、外側「メガネ状文」（削離表現）、削離→削み、平行沈彫文	R58	21-21
16-17	E-25東	VId層	石器	平縁、S字彫文、内外面に炭化物多く付着	R116	21-22
16-18	E-25東	VId層	石器	U字（94.1cm）、山形剥離（大底起立+2側）、對の小底起立が4單位）、U字文6単位（削離表現）、削離12cm、直縁、U字文4单位+2段（削離表現）、メガネ状文（削離表現）	R117	19-10
16-19	E-25東	VId層	石器	U字（94.1cm）、山形剥離（大底起立+2側）、對の小底起立が4單位）、U字文6単位（削離表現）、削離12cm、直縁、U字文4单位+2段（削離表現）、メガネ状文（削離表現）、削離基部に内外面に炭化物多く付着	R114	19-11
16-20	E-25東	VId層	石器	U字（94.1cm）、直縁、U字文4单位+2段（削離表現）	R56	19-12
16-21	E-25東	VId層	石器	U字（94.1cm）、直縁、U字文4单位（削離表現）	R95	19-13
16-22	E-25東	VId層	石器	U字（94.1cm）、直縁13.3cm、底径13.6cm、平縁、LR圓文	R110	20-1
16-23	E-25中央	VId層	石器	U字（94.1cm）、直縁13.3cm、外側に黒墨多く付着	R84	20-2
16-24	E-25中央	VId層	石器	三文式、外側に小漆墨く付着	R68	21-23
16-25	E-25東	VId層	石器	直形文、突起・隕面・削み、LR圓文（削り消し）	R55	21-24
16-26	E-25東	VId層	石器	U字文（削離表現）、か、平行沈彫文	R54	21-25
16-27	E-25東	VId層	石器	U字文（削離表現）、削離→逆鉛軋文、平行沈彫文、LR圓文	R111	21-26
17-1	E-25東	VId・d+a+d層	石器	U字（92.2cm）、平縁、LR圓文	R85	20-3
17-2	E-25東	VId層	石器	大底剥離、LR圓文、内外面に黒墨多く付着	R115	21-27
17-3	E-25東	VId層	石器	U字（94.1cm）、平縁	R48	21-28
17-4	E-25中央	VId層	石器	口口上部 平縁（「削み」）、手取状文	R70	21-30
17-5	E-25東	VId層	石器	口口上部 LR圓文（削り消し）	R51	21-31
17-6	E-25東	VId層	石器	各中少 平縁（「削み」）、手取状文	R106	21-33
17-7	E-25東	VId層	石器	縦42cm、横42cm、厚さ0.6cm、平行沈彫文	R64	21-40
17-8	E-25東	VId層	石器	縦33cm、横33cm、厚さ0.6cm、平行沈彫文	R65	21-41
17-9	E-25中央	VId層	石器	縦30cm、横29cm、厚さ0.6cm、LR圓文	R79	21-42
17-10	E-25東	VId層	石器	「ニチュア」 U字（33cm）、厚さ4.4cm、底径24cm、平縁	R104	20-4
17-11	E-25西	VId層	石器	「ニチュア」 平縁、U字彫文	R66	21-35



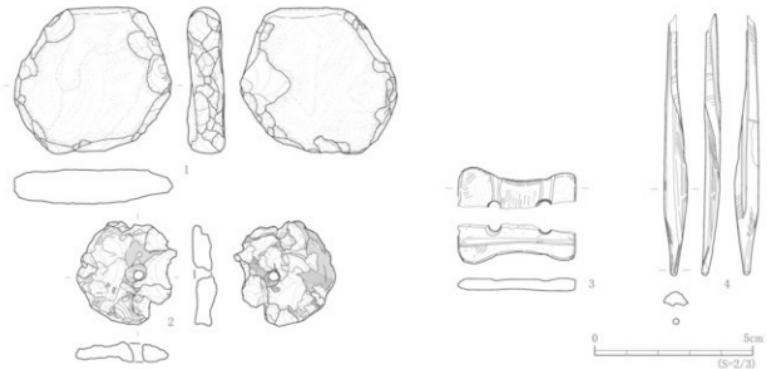
第18図 E-25VId層出土石器 (1)



第19図 E-25区 VId層出土石器 (2)



第20図 E-25区 VId層出土石器 (3)・石製品 (1)



第21図 E-25区Vld層出土石製品(2)、骨角器

図 記	種 類	形 態	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	残 存	特 徴	登 録	写 真
18-1	E-25中	Vld層	石頭	31.0	72.5	3.0	1.3	珪化麻風岩	完形	石479	21-3
18-2	E-25中	Vld層	石頭	21.5	7.0	3.0	0.7	珪化麻風岩	基部欠 損状、鉄石英の成分を含む	石820	21-4
18-3	E-25中	Vld層	石頭	42.5	47.5	22.0	43.6	珪化麻風岩	基部欠 損状	石495	21-46
18-4	E-25中	Vld層	不定形石器	24.0	34.5	9.0	4.3	珪化麻風岩	完形	石694	21-45
18-5	E-25中	Vld層	磨製石斧	69.0	45.6	21.8	143.4	緑色岩	基部・矛頭部 破損	石497	21-47
18-6	E-25中尖	Vld層	磨製石斧	32.7	42.2	15.5	51.2	緑色岩	破片	石583	21-48
19-1	E-25中段	Vld層	磨製石斧	96.2	55.6	32.0	279.6	玄武岩	基部欠 損状を再加工	石162	22-1
19-2	E-25中	Vld層	磨石	108.3	30.3	47.8	326.0	安山岩	一部欠 損	石303	22-7
19-3	E-25中	Vld層	磨石	40.5	35.2	16.0	23.0	珪質麻風岩	完形	石703	22-3
19-4	E-25中尖	Vld層	磨石	51.8	48.5	27.4	100.0	細理岩	完形	石589	22-4
19-5	E-25中段	Vld層	磨石	79.1	78.5	15.4	126.0	礫灰岩	完形	石160	22-5
19-6	E-25中	Vld層	磨石	80.0	72.5	23.0	210.2	礫灰岩	完形	石498	22-6
19-7	E-25中	Vld層	磨石	161.0	90.0	9.0	192.2	砂岩	破片	石710	22-8
19-8	E-25中	Vld層	磨石	95.4	54.0	47.9	273.2	安山岩	平行に走る縦筋	石477	22-14
20-1	E-25中段	Vld層	磨石	41.9	32.5	43.2	126.5	礫灰岩	破片	石169	22-9
20-2	E-25中尖	Vld層	磨石	77.8	53.9	26.7	170.0	砂岩	砾石を凹面に利用	石832	22-10
20-3	E-25中	Vld層	磨石	119.5	102.7	37.0	473.0	安山岩	一部欠 損	石722	22-12
20-4	E-25中段	Vld層	磨石	70.0	50.0	32.0	117.3	礫灰岩	完形	石163	22-11
20-5	E-25中	Vld層	石頭	110.9	104.9	75.7	1497.0	玄武岩/安山岩	破片	石502	22-2
20-6	E-25中	Vld層	円盤	67.0	70.0	22.4	187.6	玄武岩/安山岩	完形	石706	22-13
21-1	E-25中尖	Vld層	円盤	46.6	49.7	10.4	40.6	緑色岩	完形	石562	22-15
21-2	E-25中	Vld層	有孔石製品	33.0	30.6	7.0	1.8	鶴石	一部欠 損	石476	22-16
図 記	種 類	形 態	長 度	幅 度	厚 度	重 量	石 材	特 徴	登 録	写 真	
21-3	E-25中段	貝貝具	貝殻	幅3.7cm	厚3.04cm	重1.8g	貝殻	貝殻	貝821	23-1	
21-4	E-25中	貝貝具	貝殻	幅0.7cm	先端10.0cm	重1.0g	貝殻	貝殻	貝912	23-1	

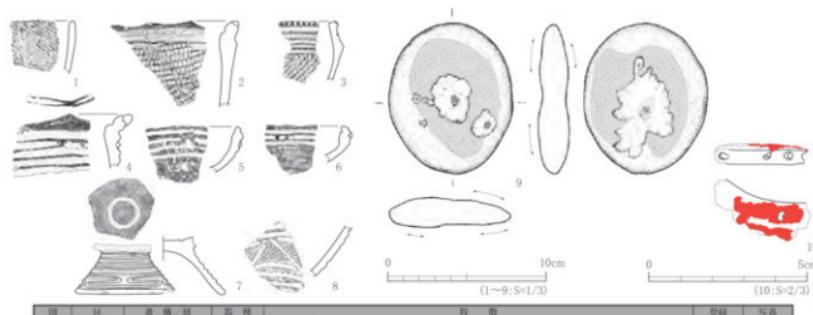
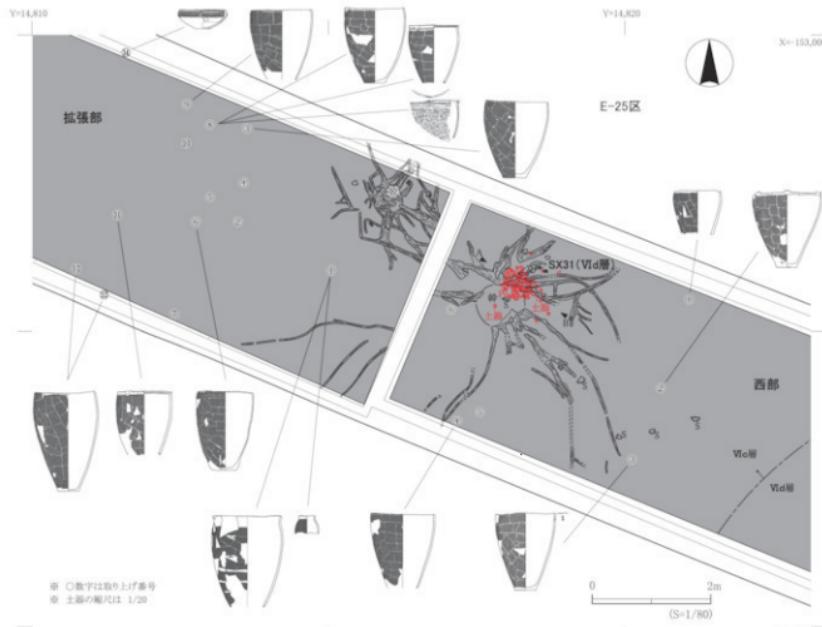


図 区 域	遺 構	器 種	記 述	特 徴	登 録 号	写 真
1	E-25北側	Vic層	漆器	平縁、上部圓文	R593	23-5
2	E-25北側	Vic層	漆器	小底供繩、上部圓文	R594	23-6
3	E-25北側	Vic層	漆器	平縁(刷毛)、平行沈綱文→筋み	R595	23-7
4	E-25北側	Vic層	漆器	山形文點、上字文(漆器表皮)	R596	23-8
5	E-25北側	Vic層	漆器	平縁、上字文(漆器表皮)	R597	23-9
6	E-25北側	Vic層	漆器	平縁、上字文(漆器表皮)	R598	23-10
7	E-25東	Vic層	漆器(台付)	台径7.0cm、上字文3単位2段(沈綱表皮)	R120	23-4
8	E-25東	Vic層	漆器	内板の山形文、平行沈綱文、上字文(漆器表皮)	R119	23-11
9	E-25北側	Vic層	漆器	91.7 72.1 356 164 漆灰質 完形 四石を磨石に利用	石856	23-12
10	E-25西	Vic層	漆器	上面のみ、漆油を透す六ヶ所箇所。外面に赤漆多色刷	木111	23-13

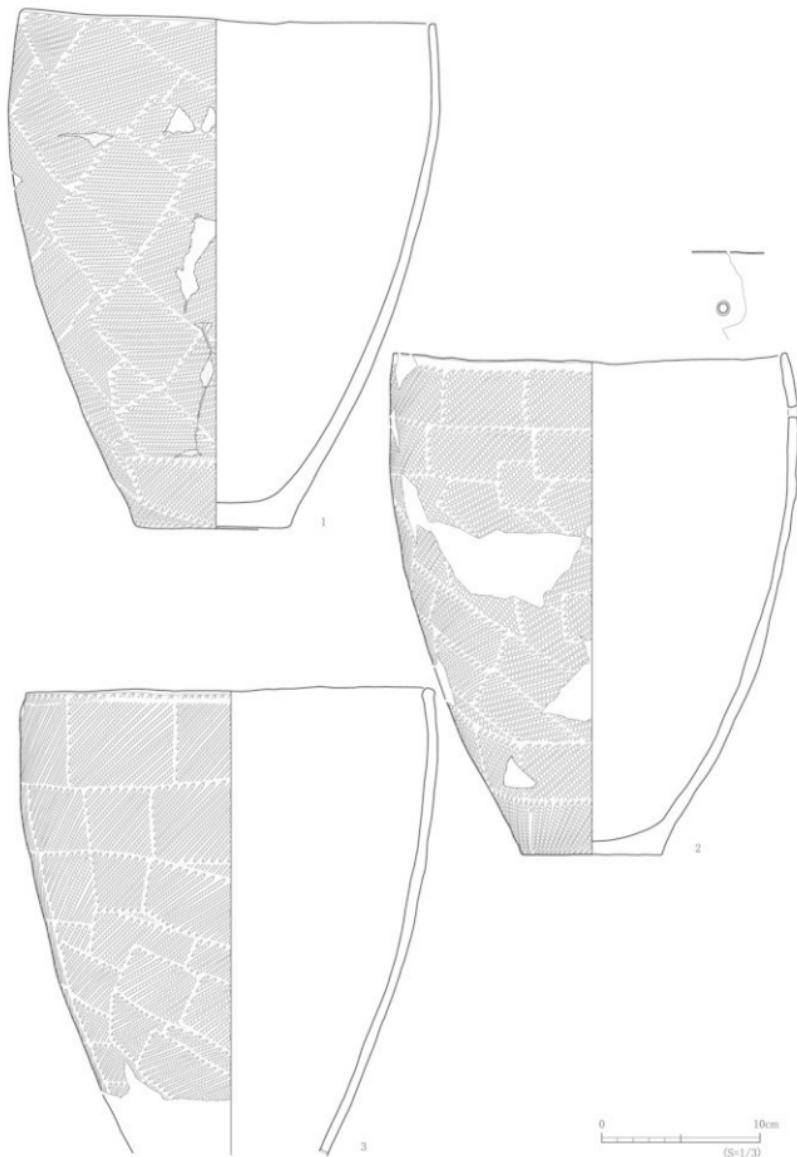
第22図 E-25区Vic層出土土器、石器、木製品



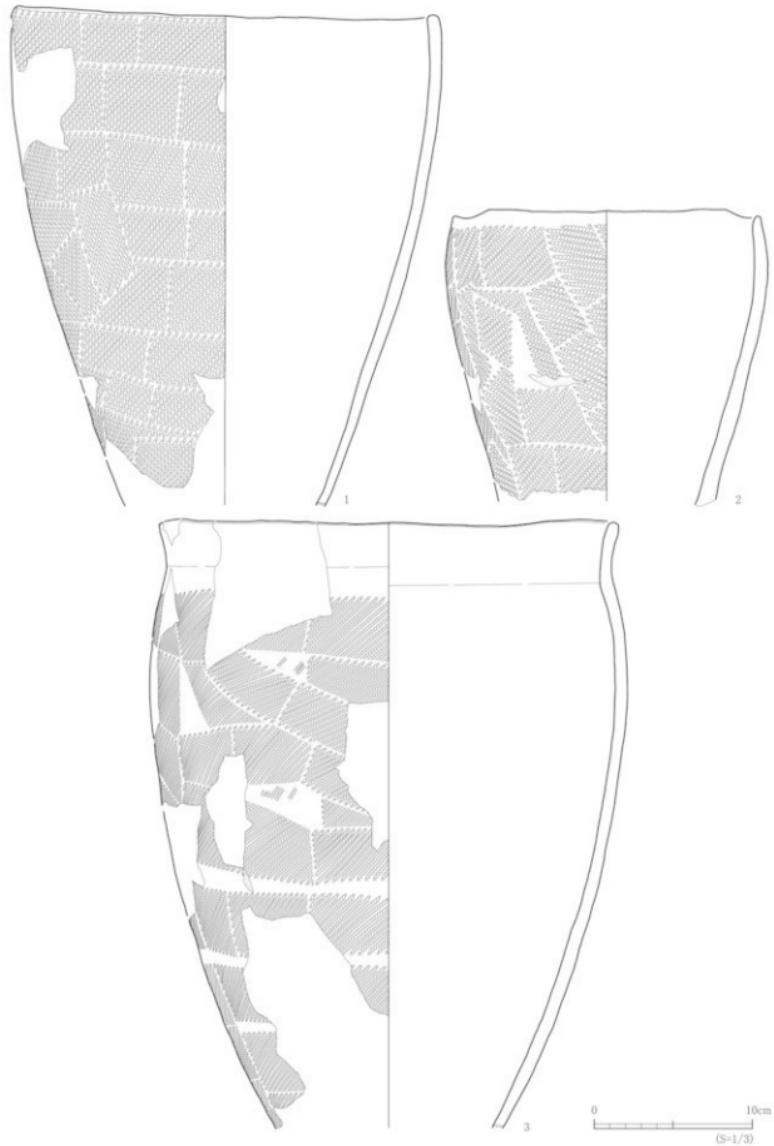
第23図 E-25区西部・拡張部付近Vic層平面図



第24図 E-25区Vib層出土一括窯窯土器 (1)



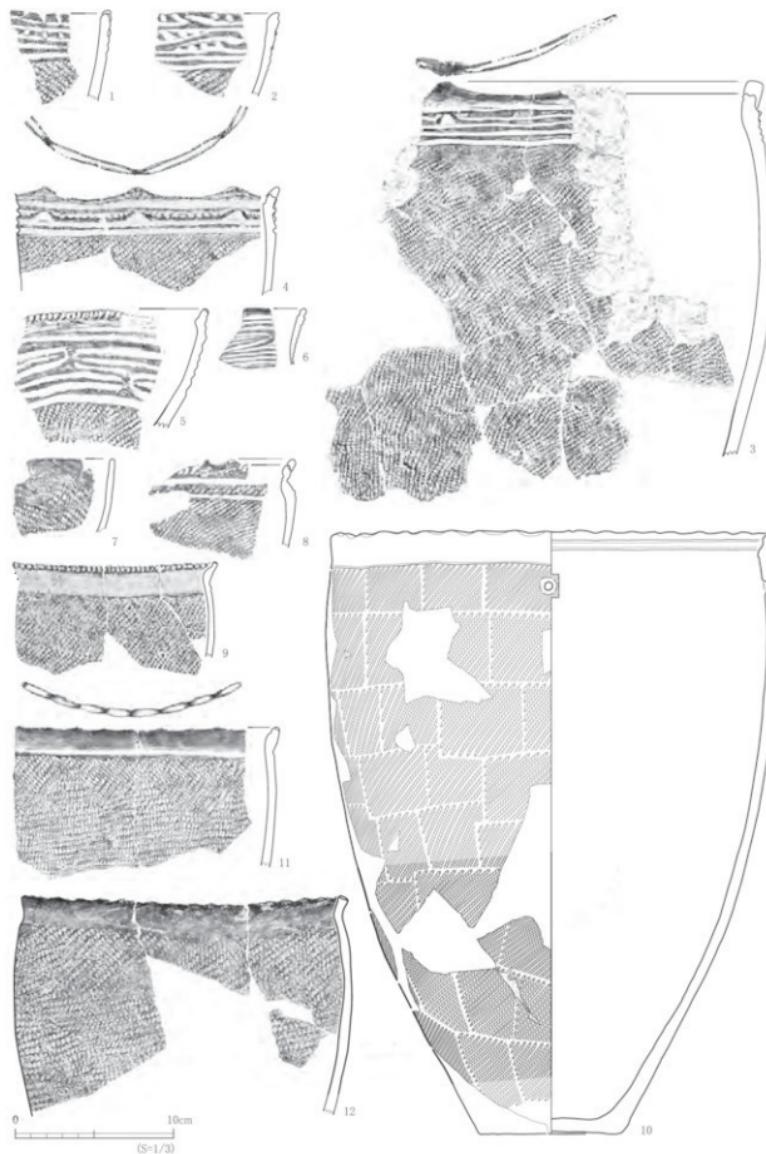
第25図 E-25区 VIb層出土一括窯業土器 (2)



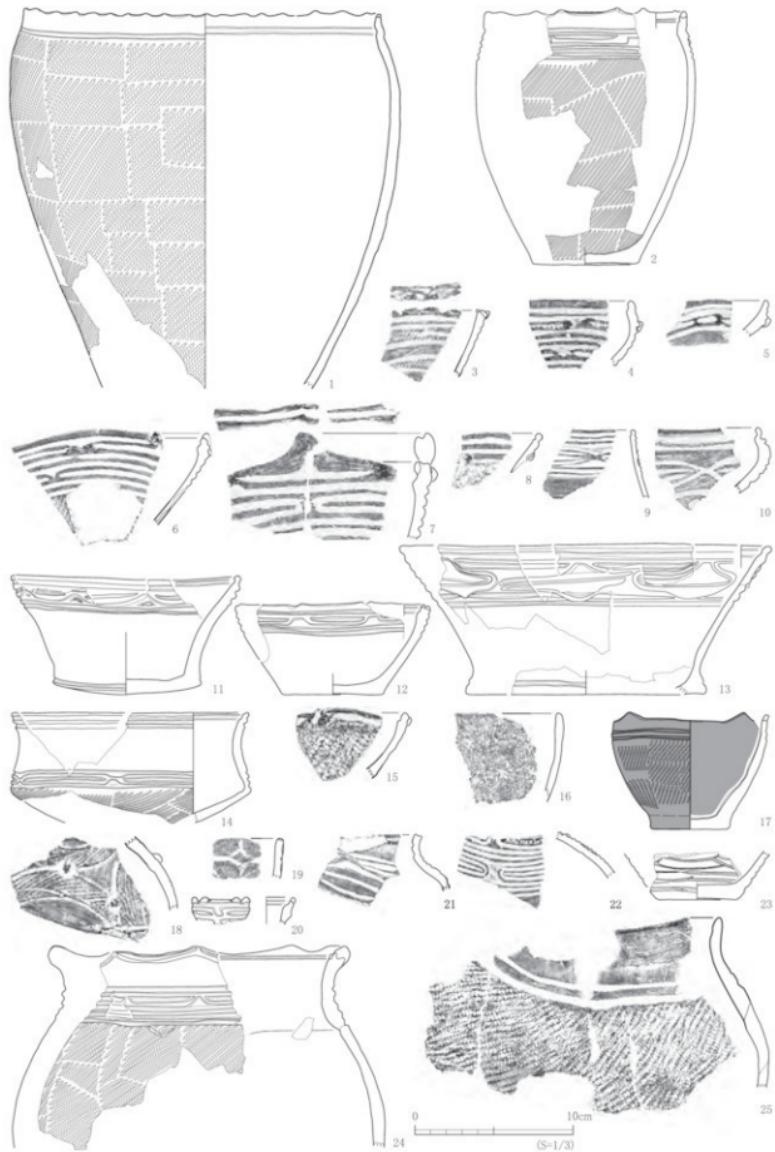
第26図 E-25区 Vib層出土一括庶乗土器 (3)



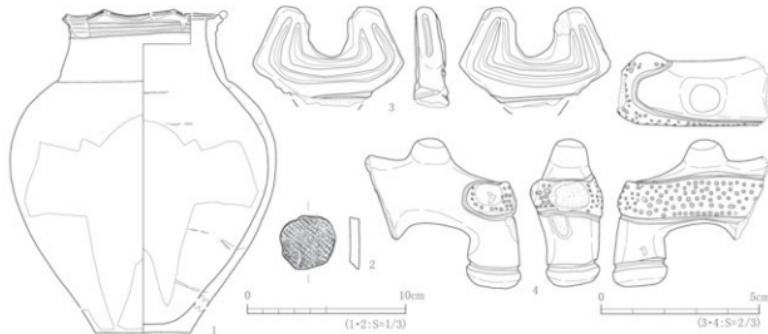
第27図 E-25区 Vib層出土一括庶乗土器 (4)



第28図 E-25区 Vib層出土土器 (1)

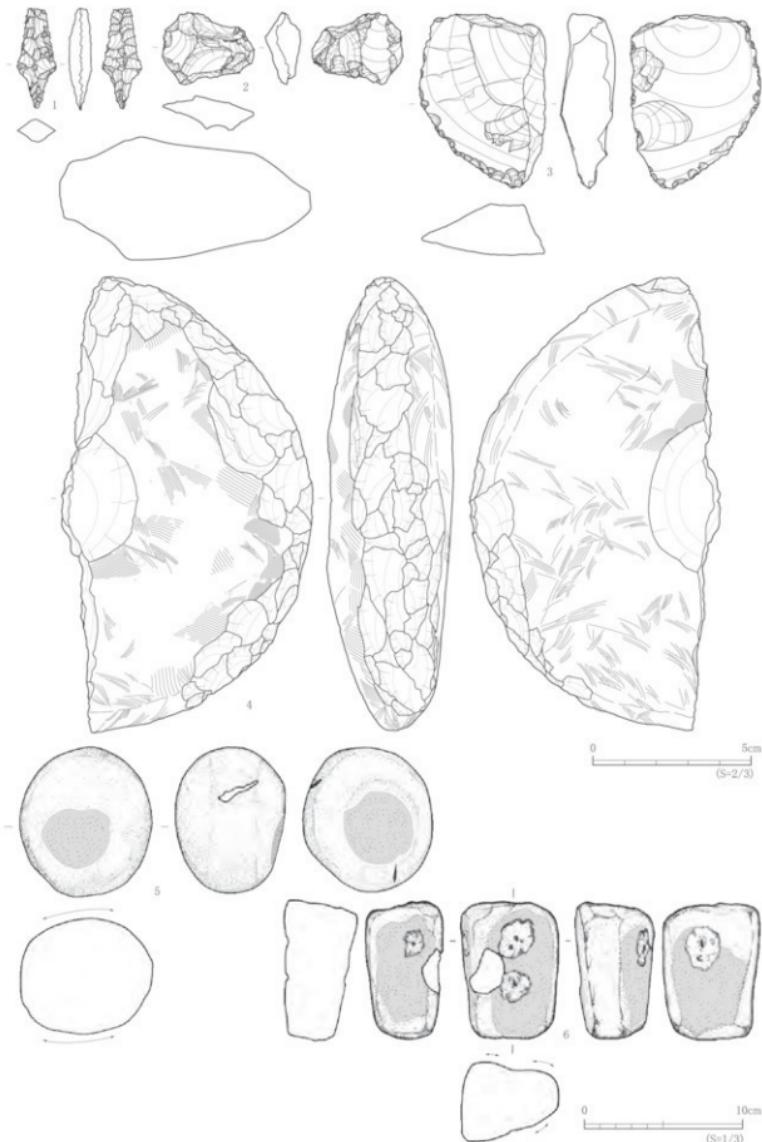


第29図 E-25区Vlb層出土土器 (2)

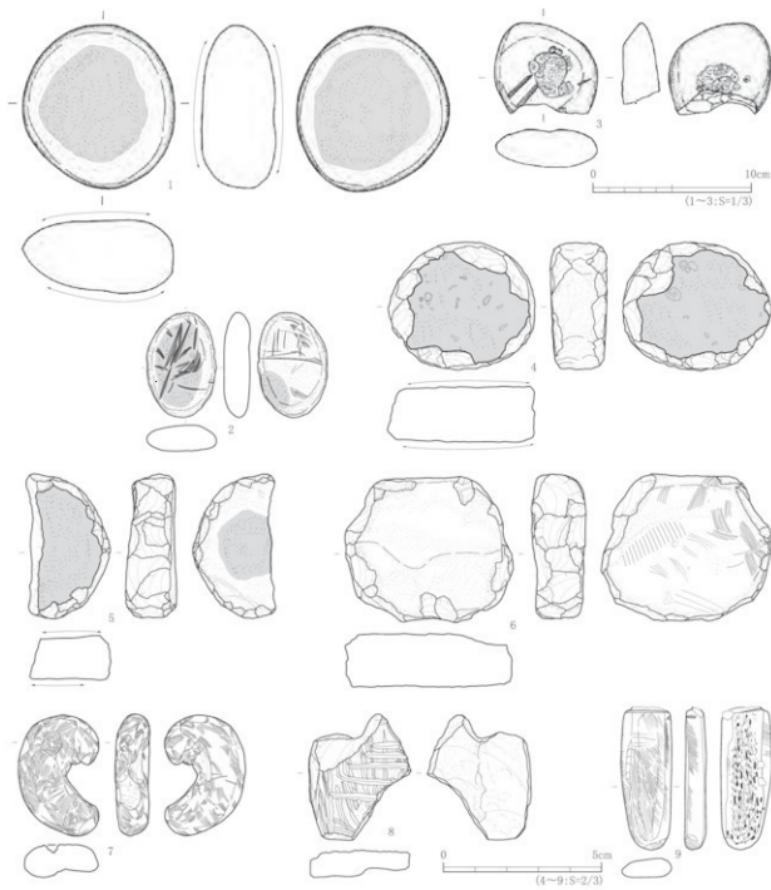


第30図 E-25区Vb層出土土器(3)・土製品

図	区	遺物類別	形種	特徴	文献	写真	
24-1	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径25.0cm、底高3.5cm、底径8.8cm。平縁、LIR縁文、施跡孔2箇所（うち1箇所は非貫通）	R146	23-14
24-2	E-25西	Vb層	3-33	深鉢	口径(24.9cm)、底高(3.0cm)、底径(8.0cm)。平縁、LIR縁文	R139	24-1
24-3	E-25西	Vc+Vb層	3	深鉢	口径(24.9cm)、底高(3.0cm)、底径(8.0cm)。平縁、LIR縁文	R134	23-15
25-1	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径26.0cm、底高2.0cm、底径9.6cm。平縁、LIR縁文、外面上に炭化物多く付着	R133	24-2
25-2	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径24.0cm、底高1.7cm、底径8.8cm。平縁、LIR縁文、施跡孔1箇所	R135	24-3
25-3	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径25.0cm、平縁、LIR縁文	R138	24-4
26-1	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径(26.8cm)、平縁、LIR縁文	R147	25-1
26-2	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径(19.5cm)、平縁、LIR縁文	R145	26-2
26-3	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径26.0cm、平縁、LIR縁文	R132	25-2
27-1	E-25西	Vb+a層	3	深鉢	口径(21.1cm)、底高(3.0cm)、底径(8.0cm)。LIR縁文	R136	25-3
27-2	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径22.0cm、小底状縁、LIR縁文、LIR縁文	R137	25-4
27-3	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径26.0cm、底高2.0cm、底径9.5cm。山形突起6箇所。LIR縁文、器の歪み者らしい	R165	26-1
27-4	E-25西	Vb層	3-3	深鉢	山形突起、LIR縁文（隕面表現）	R141	26-3
27-5	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径19.5cm、底高3.0cm、底径8.0cm。山形突起7箇所、「文字7」2段目（隕面表現）。外面上に赤褐色少々付着	R140	26-4
27-6	E-25西	Vb層	3	會	LIR縁文、平縁、LIR+R付縁縦文	R131	26-5
28-1	E-25西	Vb層	3	深鉢	平縁、「崩み」、平行沈縁文、平行沈縁文、LIR縁文	R123	26-6
28-2	E-25西	Vb層	3	深鉢	平縁、平底狀縁、平行沈縁文、LIR縁文	R175	26-7
28-3	E-25西	Vb層	3	深鉢	山形突起、LIR縁文、平行沈縁文、LIR縁文。外面上に炭化物多く付着。外面上に燒熱による器壁の渦巻があり	R168	29-2
28-4	E-25西	Vb層	3	深鉢	山形突起8箇所、「文字8」2段目（隕面表現）。平行沈縁文、沈縁	R149	26-6
28-5	E-25西	Vb	d盤	深鉢	平縁、「崩み」、「文字文字」（隕面表現）、LIR縁文	R163	28-8
28-6	E-25西	Vb	d盤	深鉢	平縁、二角形状の沈縁文、平行沈縁文	R153	28-12
28-7	E-25西	Vb	d盤	深鉢	平縁、LIR縁文	R166	28-9
28-8	E-25西	Vb	d盤	深鉢	平縁、「空起」、平行沈縁文、LIR縁文	R154	28-10
28-9	E-25西	Vb	d盤	深鉢	平縁、「崩み」、LIR縁文、内面上に炭化物多く付着	R156	28-14
28-10	E-25西	Vb	d盤	深鉢	口径(27.0cm)、底高(3.0cm)、底径8.0cm。小底状縁、LIR縁文、施跡孔1箇所。海綿骨片多く含む	R143	27-1
28-11	E-25西	Vb	d盤	深鉢	小底状縁、LIR縁文、平行沈縁文	R155	29-1
28-12	E-25西	Vb	d盤	深鉢	口径(26.0cm)、底高(3.0cm)、底径8.0cm。外面上に炭化物多く付着	R161	26-7
29-1	E-25中央	Vb層	3	深鉢	口径(22.5cm)、小底状縁、LIR縁文、外面上に炭化物多く付着	R167	27-2
29-2	E-25中央	Vb+a層	3	深鉢	口径(21.0cm)、底高(3.0cm)、三脚有り（抉り）8単位。LIR縁文、平行沈縁文（隕面表現）	R157	27-1
29-3	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、「崩み」、LIR縁文、LIR縁文、削り落し	R174	26-13
29-4	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、「空起」、LIR縁文、平行沈縁文	R172	28-11
29-5	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、LIR縁文（隕面表現）	R121	29-9
29-6	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、「空起」、LIR縁文2段、隕面表現、平行沈縁文、LIR縁文	R171	29-5
29-7	E-25中央	Vb層	3	深鉢	山形突起、LIR縁文（隕面表現）、平行沈縁文	R170	29-9
29-8	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、LIR縁文、LIR縁文、外面上に炭化物多く付着	R127	29-10
29-9	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、LIR縁文（隕面表現）、平行沈縁文	R178	29-12
29-10	E-25中央	Vb	d盤	深鉢	平縁、LIR縁文（隕面表現）、沈縁文	R162	29-11
29-11	E-25中央	Vb	d盤	深鉢	口径(14.0cm)、底高(2.0cm)、底径9.0cm。平縁、LIR縁文2単位（隕面表現）、沈縁文	R130	27-4
29-12	E-25中央	Vb	d盤	深鉢	口径(12.0cm)、底高(7.0cm)、底径(6.0cm)、山形突起2箇所（抉り）8単位、LIR縁文2単位（隕面表現）	R129	27-5
29-13	E-25中央	Vb	d盤	深鉢	口径(12.0cm)、底高(9.0cm)、底径(15.0cm)。平縁、LIR縁文4単位（隕面表現）	R128	27-6
29-14	E-25中央	Vb	d盤	深鉢	口径(15.0cm)、平縁、LIR縁文1単位（隕面表現）、平行沈縁文、LIR縁文	R126	27-7
29-15	E-25中央	Vb層	3	深鉢	平縁、「空起」、平行沈縁文、LIR縁文	R173	29-6
29-16	E-25中央	Vb層	3	深鉢	山形突起2箇所、LIR縁文、外縁「タスリ」、底部多く含む	R177	29-8
29-17	E-25中央	Vb層	3	深鉢	山形突起2箇所、LIR縁文、外縁「タスリ」、底部多く含む	R142	28-1
29-18	E-25中央	Vb層	3	深鉢	人り縁2-3次文、施跡突起、LIR縁文（削り落し）、海綿骨片、焼肉多く含む	R180	29-15
29-19	E-25中央	Vb層	3	深鉢	重印口部型	R124	29-17
29-20	E-25中央	Vb	d盤	深鉢	口径(15.0cm)、三脚有り（抉り）4単位、LIR縁文	R164	28-4
29-21	E-25中央	Vb	3	深鉢	平縁、LIR縁文（隕面表現）	R150	29-20
29-22	E-25中央	Vb	3	深鉢	LIR縁文（隕面表現）→通焼軋突。平行沈縁文	R176	29-16
29-23	E-25中央	Vb層	3	深鉢	底径10.0cm、底高5.0cmの沈縁文	R122	28-5
29-24	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径(18.0cm)、山形突起10箇所、LIR縁文10単位（隕面表現）、平行沈縁文、LIR縁文	R158	28-2
29-25	E-25西	Vb層	3	深鉢	平縁、平行沈縁文、LIR縁文	R169	29-14
30-1	E-25西	Vb層	3	深鉢	口径(10.2cm)、底高(20.3cm)、底径(6.1cm)、山形突起2箇所、平行沈縁文	R144	28-3
30-2	E-25西	Vb層	3	深鉢	縦3.3cm、横3.5cm、厚さ0.6cm、LIR縁文	R160	29-25
30-3	E-25西	Vb層	3	深鉢	上側（舟）最大幅6.0cm、其表面に円字状の沈縁文、側面：沈縁、底部との間に沈縫。中実	R181	29-23
30-4	E-25中央	Vb層	3	深鉢	底径10.0cm、底高5.0cmの沈縁文	R182	29-24

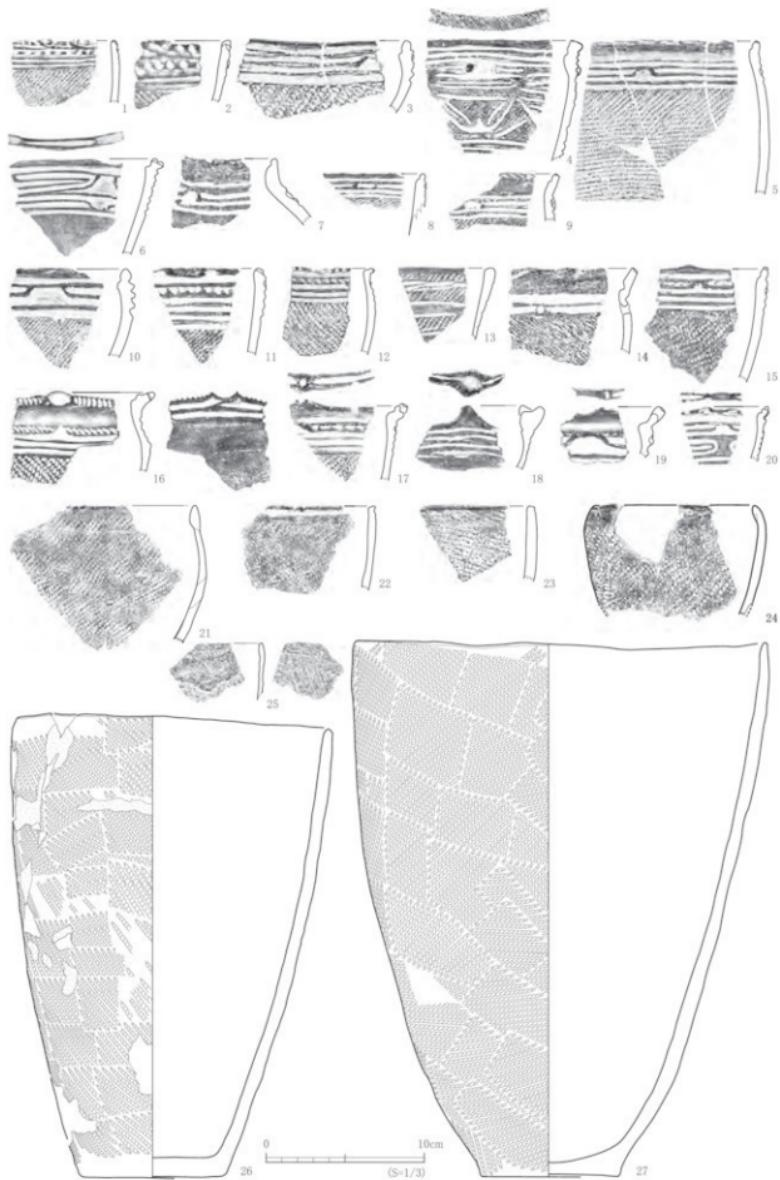


第31図 E-25区 Vib層出土石器 (1)

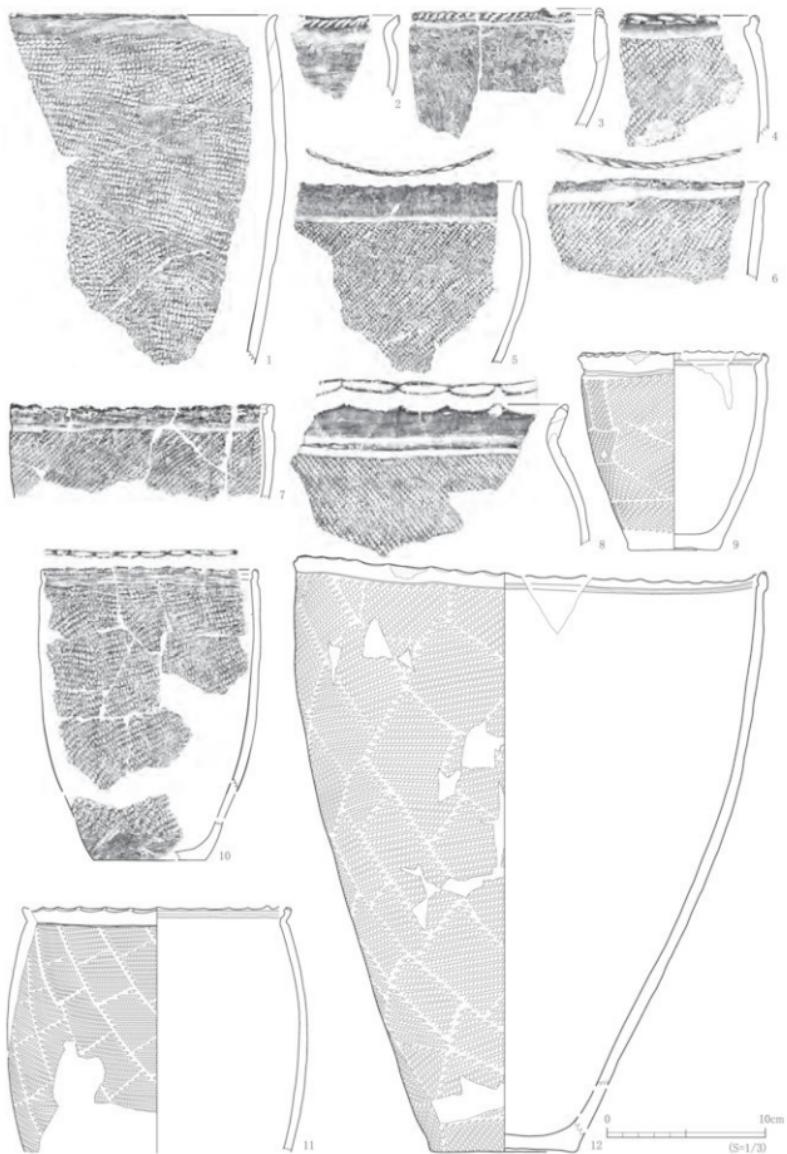


第32図 E-25区Vb層出土土器(2)・石製品、骨角器

図	区	遺構・層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	現存	特徴	登録	写真
31-1	E-25西	Vb層	石器	32.0	12.0	7.0	19	珪化凍灰岩	光面欠	凸溝有無、アスファルト	E1907	29-26
31-2	E-25北東	Vb層	不定形石器	23.0	29.0	11.0	49	磨滅石	光面		E1732	29-27
31-3	E-25北東	Vb層	不定形石器	55.0	80.0	17.0	37.0	磨滅石	光面		E1555	29-28
31-4	E-25西	Vb層	磨滅石片	144.4	27.8	37.2	500.0	安山岩	破片	本質品、表面過化	E1659	30-1
31-5	E-25北東	Vb層	磨滅石片	95.2	88.4	69.0	660.0	磨滅石	光面	磨滅石の破片を含む	E1790	30-3
31-6	E-25北東	Vb層	磨滅石	97.8	61.0	50.3	451.0	花崗岩	光面		E1791	30-4
32-1	E-25北東	Vb層	磨滅石	106.6	97.4	45.5	738.0	玄武岩	光面		E1789	30-2
32-2	E-25北	Vb層	磨滅石	67.0	43.4	16.5	652	磨滅石	光面	十字に交差する繊維	E1674	29-32
32-3	E-25北	Vb層	磨滅石	60.0	66.5	24.0	105.4	磨滅石	光面		E1600	30-5
32-4	E-25北東	Vb層	磨滅石	40.3	46.6	16.3	61.4	磨滅石	光面		E1731	29-30
32-5	E-25北	Vb層	磨滅石	46.2	26.2	15.0	26.3	磨滅石	光面	微量の黑色付着物	E196	30-7
32-6	E-25北東	Vb層	磨滅石	46.0	54.5	12.0	67.9	珪化凍灰岩	光面		E1553	29-31
32-7	E-25北	Vb層	磨滅石	39.2	25.7	11.0	80	珪質凍灰岩	光面	本質品、表面過化	E1606	29-29
32-8	E-25北東	Vb層	磨滅石	40.1	32.7	2.3	6.5	磨滅石質砂岩	光面	少子状文	E1732	30-6
32-9	E-25中央	Vb層	移状製品	1.6cm	0.6cm	0.6cm	0.6g	未判明	未判明		骨角11	30-8



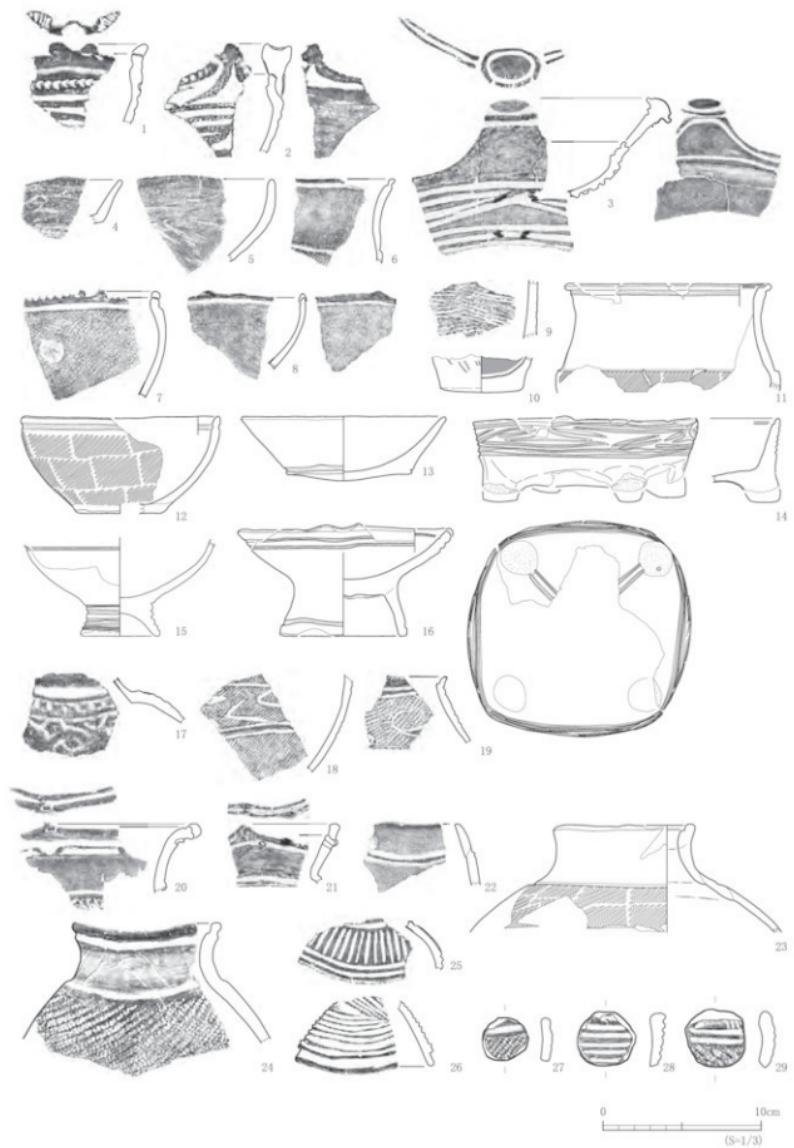
第33図 E-25区V层出土土器 (1)



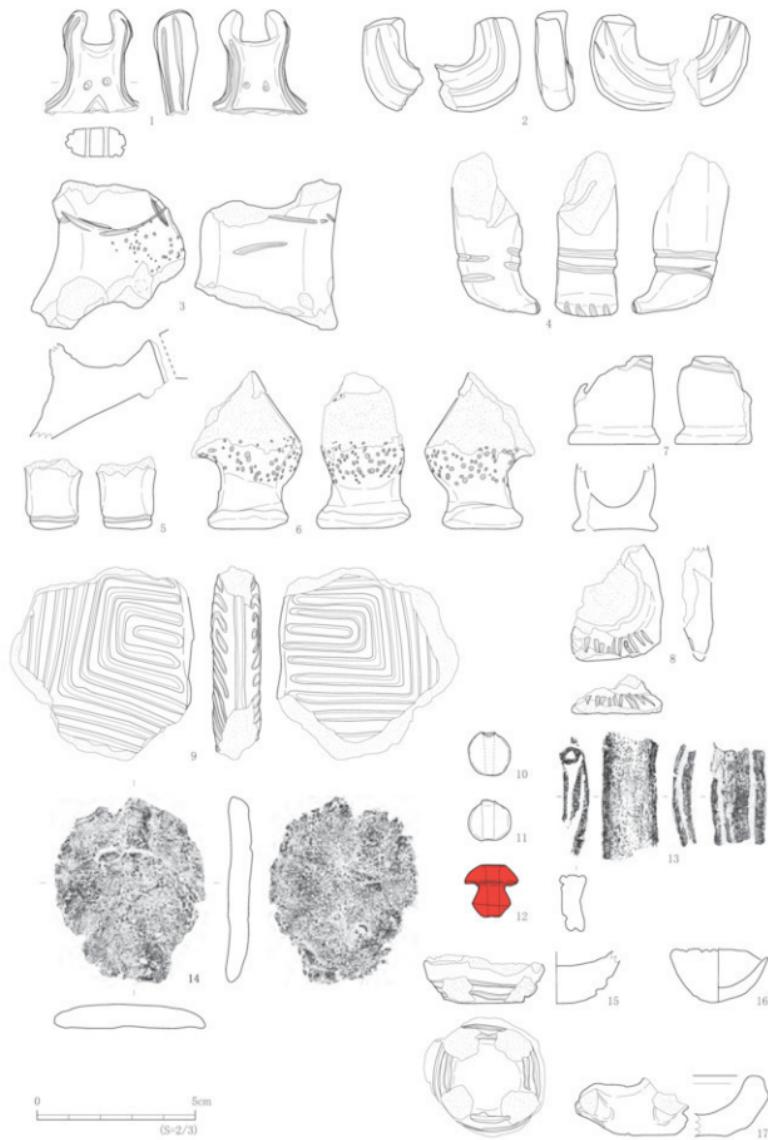
第34図 E-25区V1a層出土土器 (2)



第35図 E-25区V1a層出土土器 (3)



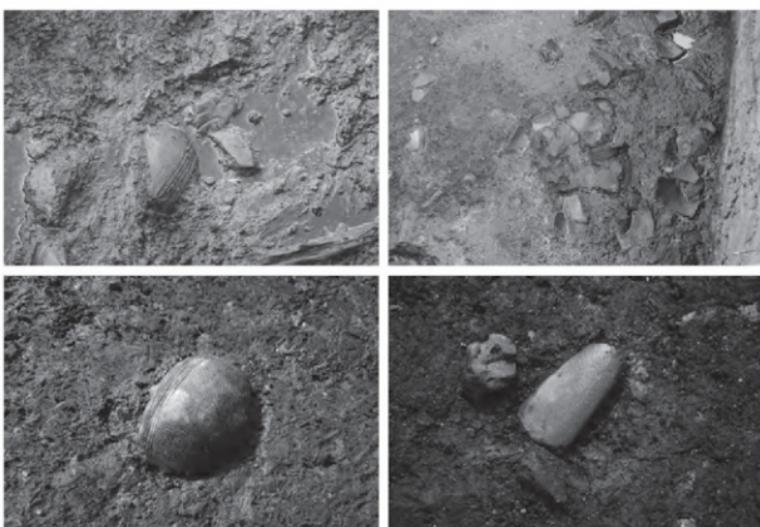
第36図 E-25区 Via層出土土器 (4)・土製品 (1)

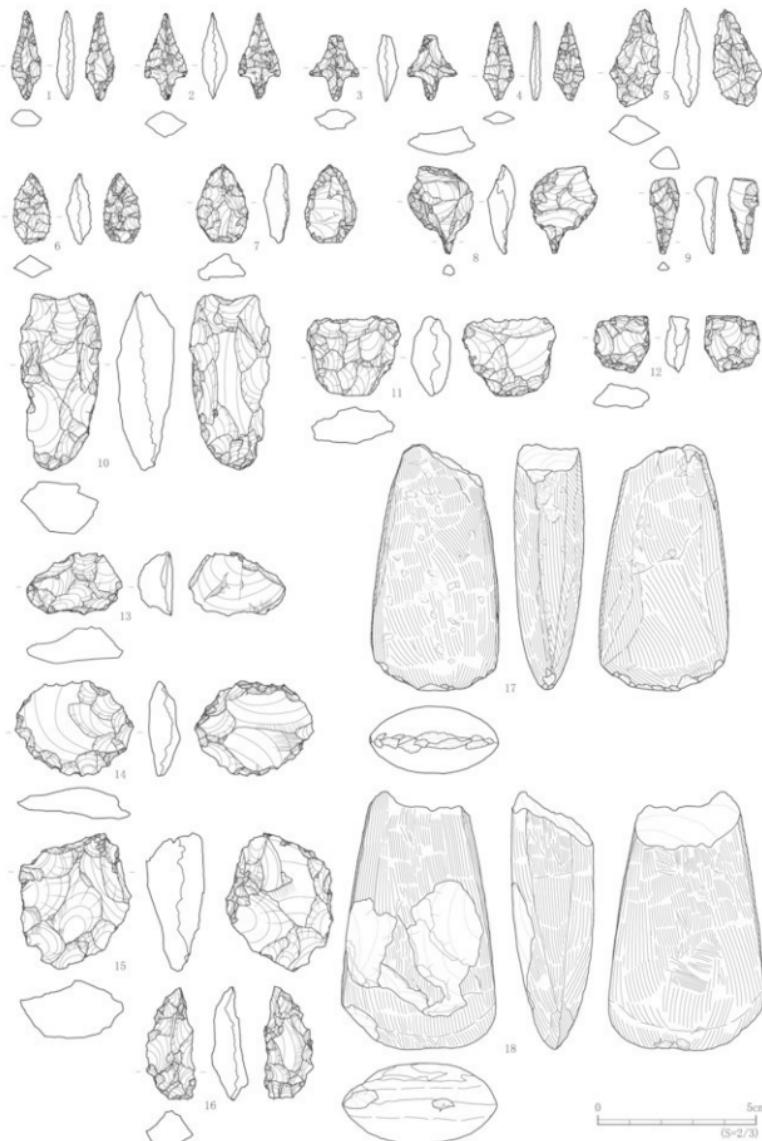


第37図 E-25区V1a層出土土製品（2）

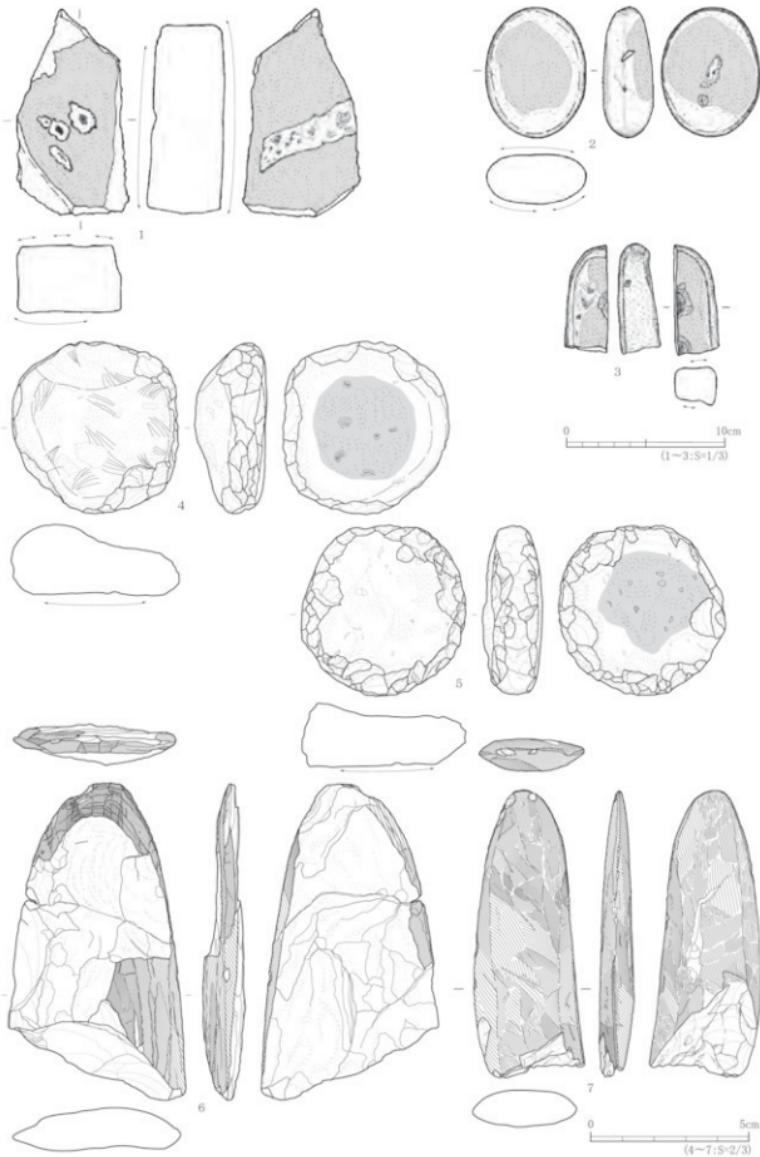
固	区	置	構	形	特	記	算
33-1	E-25-46	Vla+d	済語	平綴(崩み)、平綴(沈め)、平行沈綴文、LR綴文	R271	34-1	
33-2	E-25-46	Vla+d	済語	平綴(崩み)、平綴(沈め)、平行沈綴文、LR綴文	R280	34-2	
33-3	E-25-46	Vla+d	済語	平綴(崩み)、上文字「隠義表現」、角形沈綴、斜行沈綴、LR綴文(崩り消し)、外側に化物多く付着	R191	34-3	
33-4	E-25-46	Vla+d	済語	平綴(崩み)、上文字「隠義表現」、角形沈綴、斜行沈綴、LR綴文(崩り消し)、外側に化物多く付着	R228	34-5	
33-5	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上文字「隠義表現」、LR綴文、内外側に化物多く付着	R214	34-6	
33-6	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(抜り)、工字文2段(隠義表現)	R296	34-4	
33-7	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(工字文)、隠義表現	R252	34-7	
33-8	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(工字文「隠義表現」)、LR綴文	R231	34-8	
33-9	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(崩み)、工字文「隠義表現」、LR綴文(崩り消し)	R216	34-9	
33-10	E-25-46段	Vla+d型	済語	平綴(工字文「隠義表現」)、LR綴文	R328	34-11	
33-11	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(工字文→隠義表現)、LR綴文	R229	34-12	
33-12	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(崩み)、平行沈綴文、連續刺突文、LR綴文	R222	34-13	
33-13	E-25-46	Vla+b+d型	済語	平綴(平行沈綴文、LR綴文(崩り消し))、光字	R188	34-10	
33-14	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、平行沈綴文、直角鉤文、補助孔1箇所	R215	34-14	
33-15	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起、平行沈綴文、連續刺突文、LR綴文、内外側に化物多く付着	R241	34-15	
33-16	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩み)、工字文「隠義表現」、連續刺突文、平行沈綴文、LR綴文	R300	34-16	
33-17	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩り)、工字文「隠義表現」、連續刺突文、平行沈綴文、LR綴文	R244	34-20	
33-18	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起、平行沈綴文	R284	34-21	
33-19	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩み)、工字文「隠義表現」	R242	34-22	
33-20	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩み)、工字文「隠義表現」	R219	34-23	
33-21	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、LR綴文	R236	34-38	
33-22	E-25-46段	Vla+d型	済語	平綴、平行沈綴文、LR綴文	R327	34-24	
33-23	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、RL+付加余白文	R193	34-25	
33-24	E-25-46	Vla+d型	済語	口洋(104cm)、平綴、LR綴文	R225	31-3	
33-25	E-25-46段	Vla+d型	済語	平綴、内側に「單なケタリ」、直角上部か	R330	34-29	
33-26	E-25-46	Vla+d+a型	済語	口洋(268cm)、高さ88cm、底径11cm、平綴、RL綴文	R285	31-4	
33-27	E-25-46段	Vla+d+a型	済語	口洋(261cm)、高さ83cm、底径86cm、LR綴文	R332	31-5	
34-1	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、RL綴文	R258	34-33	
34-2	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(崩み)	R198	34-28	
34-3	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(史松)、崩み、沈綴文、内外側に化物多く付着	R292	34-31	
34-4	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上縦鉤文、内外側に化物多く付着	R194	34-30	
34-5	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上縦鉤文(直角段多条: 3本折り)	R299	34-32	
34-6	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上縦鉤文	R325	34-36	
34-7	E-25-46	Vla+d+a型	済語	口洋166cm、小底供給、沈綴文	R306	32-1	
34-8	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、平行沈綴文、RL綴文	R265	34-34	
34-9	E-25-46	Vla+d型	済語	口洋119cm、高さ125cm、底径52cm、LR綴文、沈綻文	R309	30-10	
34-10	E-25-46	Vla+b+d型	済語	口洋(154.6cm)、高さ(118.6cm)、底径(72.0cm)、小底供給、RL綴文	R184	30-9	
34-11	E-25-46	Vla+d型	済語	口洋(17.0cm)、小底供給、沈綻文、LR綴文	R257	31-2	
34-12	E-25-46段	Vla+d型	済語	口洋(29.8cm)、高さ37.5cm、底径20cm、LR綴文	R331	31-1	
35-1	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、沈綻文、LR綴文	R256	34-37	
35-2	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上縦鉤文	R272	34-40	
35-3	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上縦鉤文	R279	34-36	
35-4	E-25-46	Vla+d+a型	済語	小底供給、上縦鉤文、補助孔1箇所	R280	34-41	
35-5	E-25-46	Vla+d型	済語	小底供給、上縦鉤文、内外側に化物多く付着	R263	34-39	
35-6	E-25-46段	Vla+d型	済語	山形突起	R326	34-43	
35-7	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起、LR綴文	R310	34-42	
35-8	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(崩み)、LR綴文、内側: 平行沈綻文	R232	34-45	
35-9	E-25-46	Vla+b+d型	済語	平綴、芸形文、LR綴文(崩り消し)、内側に直連多く付着	R186	34-44	
35-10	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴(崩み)、芸形文、LR綴文(崩り消し)	R291	34-49	
35-11	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴か、工字文2段(隠義表現)、LR綴文	R246	34-46	
35-12	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、工字文2段(隠義表現)、底径52cm、LR綴文	R199	34-48	
35-13	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、工字文2段(隠義表現)、LR綴文	R190	35-1	
35-14	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、工字文(沈綻文)、平行沈綻文、LR綴文	R264	35-2	
35-15	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、工字文(沈綻文)、外側に化物多く付着	R267	34-50	
35-16	E-25-46段	Vla+d型	済語	平綴、工字文(沈綻文)、LR綴文	R324	35-4	
35-17	E-25-46	Vla+d型	済語	平綴、工字文(沈綻文)	R189	35-5	
35-18	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、工字文(沈綻文)、斜行沈綻	R317	35-6	
35-19	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、工字文(沈綻文)、平行沈綻文	R213	35-8	
35-20	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、工字文(沈綻文)、海綿合計多く含む	R243	35-9	
35-21	E-25-46	Vla+d型	済語	変形工字文(沈綻文)、海綿合計多く含む	R203	35-10	
35-22	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、変形工字文(沈綻文)	R250	35-12	
35-23	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪(崩み)、工字文(沈綻文)、平行沈綻文	R312	35-7	
35-24	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩み)、工字文(沈綻文)、平行沈綻文	R244	35-11	
35-25	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(工字文)、工字文(沈綻文)、平行沈綻文、LR綴文	R259	35-13	
35-26	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(工字文)、沈綻文	R253	35-17	
35-27	E-25-46段	Vla+d型	済語	山形突起(工字文)、沈綻文	R323	35-23	
35-28	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(工字文)、沈綻文	R314	35-21	
35-29	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(工字文)、沈綻文	R297	35-20	
35-30	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(工字文)「隠義表現」→隠刺突文、LR綴文	R315	35-22	
35-31	E-25-46	Vla+d型	済語	口洋(13.0cm)、山形突起(大空船4.1)、小空船4.1、工字文8単位(隠義表現)→隠刺突文、LR綴文	R305	32-2	
35-32	E-25-46	Vla+d型	済語	口洋(12.0cm)、高さ4.6cm、底径5.6cm、山形突起3.1、工字文3単位(隠義表現)、斜行沈綻文3単位	R247	32-3	
35-33	E-25-46	Vla+d型	済語	口洋(10.4cm)、高さ4.3cm、底径4.6cm、平綪、工字文4単位(隠義表現)	R304	32-4	
35-34	E-25-46段	Vla+d型	済語	口洋(22.0cm)、山形突起(掛り)7単位、工字文7単位(隠義表現)、LR綴文	R329	32-5	
36-1	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩み)、工字文、LR綴文(崩り消し)	R113	35-18	
36-2	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起(崩み)、工字文、LR綴文(崩り消し)	R311	35-19	
36-3	E-25-46	Vla+d型	済語	山形突起、重ね工字文2段(隠義表現)	R335	35-33	
36-4	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、沈綻文	R248	35-26	
36-5	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、海綿合計多く含む	R318	35-25	
36-6	E-25-46	Vla+d型	済語	平綪、平行沈綻文、LR綴文	R268	35-28	

図	区	遺構番	形種	特徴	登録	写真
36-7	E-25東	Vla-4b	丸瓶	平底。(2個)1枚の先端・瓶底。沈漏。LR鋼文。	R278	35-24
36-8	E-25東	Vla+d型	丸瓶	山形吹起小、沈漏。	R280	35-27
36-9	E-25中央	Vla-4b	深鉢小瓶	鍍金底の沈漏文、内面に炭化物多く付着。	R265	35-29
36-10	E-25東	Vla-4b	深鉢小瓶	底径2.2cm、XL瓶文か、内面に黒斑多く付着。	R298	35-7
36-11	E-25東	Vla-4b	丸瓶	口徑 (110.0mm) 平底。沈漏。LR鋼文。	R303	35-6
36-12	E-25東	Vla-4b	丸瓶	口徑12.6cm、器高約2cm、底径 (6.8cm) 平底。沈漏。LR鋼文。	R255	35-1
36-13	E-25東	Vla-4b	丸瓶	口徑 (110.0mm) 器高約3.0cm、底径 (7.8cm) 平底。沈漏。	R239	35-3
36-14	E-25東	Vla-4b	丸瓶・肩付	口徑約2.5cm、底径 (4.8cm)、沈漏の三足 (10.0cm) 平底。土文字4字 (説漏表現)、斜行沈漏文4字 (1)、(2) 字底行沈漏文。	R301	35-4
36-15	E-25東	Vla-4b	丸瓶・台付	口徑約3.0cm、平行沈漏文。	R302	35-2
36-16	E-25東	Vla-4b	丸瓶・台付	口徑 (136.0mm)、器高約3.0cm、底径8.0cm、山形吹起 (抉り) 4單位。平行沈漏文。	R320	35-5
36-17	E-25東	Vla-4b	瓶	土文字。	R294	35-35
36-18	E-25東	Vla-4b	瓶	云形文、LR鋼文 (擦り消し)。	R269	35-36
36-19	E-25東	Vla-4b	口11管小器	平底。(刷み)、瓦等文、平行沈漏文、LR鋼文 (擦り消し)。	R302	35-37
36-20	E-25東	Vla-4b	瓶	山形吹起、土文字2單位以上。(説漏表現)、沈漏、連續刻文、海鷗骨多く含む。	R277	35-39
36-21	E-25東	Vla-4b	瓶	山形吹起、平行沈漏文、空孔2箇所、蓋付きか。	R192	35-40
36-22	E-25中央	Vla-4b	瓶	平底。沈漏文、蓋付きか。	R204	35-41
36-23	E-25東	Vla-4b	瓶	口徑 (9.2cm) 平底。沈漏。LR鋼文。	R260	35-1
36-24	E-25東	Vla-4b	瓶	口徑 (9.0cm) 平底。平行沈漏文、LR鋼文。	R308	35-6
36-25	E-25東	Vla-4b	瓶	縦・横の平行沈漏文。	R307	35-42
36-26	E-25東	Vla-4b	瓶	平底。先頭狀沈漏文、平行沈漏文。	R295	35-43
36-27	E-25東	Vla+d型	円盤	縦27cm、横29cm、厚さ20cm、LR鋼文。	R224	37-8
36-28	E-25東	Vla-4b	円盤	縦34cm、横37cm、厚さ5.0cm-6.0cm、連續刻文、平行沈漏文。	R195	37-9
36-29	E-25中央	Vla-4b	円盤	縦25cm、横36cm、厚さ5.0cm、別。平行沈漏文、LR鋼文 (段落多条か)。	R212	37-10
37-1	E-25東	Vla+d型	土瓶 (角)	厚さ5.5-13cm、沈漏。2割1片の穿孔。中実。	R233	36-8
37-2	E-25東	Vla-4b	土瓶 (角)	厚さ3.1cm、沈漏。中実。	R286	36-9
37-3	E-25東	Vla-4b	土瓶 (腹)	厚さ2.1cm、平行沈漏文、中空。	R266	36-1
37-4	E-25東	Vla-4b	土瓶 (足)	厚さ2.1cm、平行沈漏。沈漏による器の表裏 (説漏表現)。中実。	R288	36-7
37-5	E-25東	Vla-4b	土瓶 (足)	縦17cm、厚さ1.7cm、沈漏。中実。	R251	36-2
37-6	E-25東	Vla-4b	土瓶 (足)	厚さ26cm、刺繡文、中実。	R322	35-50
37-7	E-25東	Vla-4b	土瓶 (足)	厚さ25cm、沈漏。中空。	R273	36-3
37-8	E-25中央	Vla-4b	土瓶 (足)	沈漏による器の表裏 (説漏表現)。	R209	36-10
37-9	E-25東	Vla-4b	土瓶	厚さ15cm、裏内彫文 (説漏表現)。	R280	37-1
37-10	E-25東	Vla-4b	土瓶	口 (1.4cm)、直通孔 (0.2cm)。	R274	37-5
37-11	E-25東	Vla-4b	土瓶	口 (1.4cm)、直通孔 (0.2-0.3cm)。	R275	37-6
37-12	E-25東	Vla-4b	河内瓶	縦16cm、横1.7cm、直通孔 (0.3-0.5cm)、外側赤多く付着。	R287	37-4
37-13	E-25東	Vla+d型	輪輪小耳瓶	外径 (6.8cm)、内径 (3.6cm)、幅1.7cm、厚さ0.8cm、三足文。	R226	37-3
37-14	E-25中央	Vla-4b	土瓶・足形小	縦59cm、横17cm、厚さ0.7cm。	R210	37-2
37-15	E-25東	Vla+d型	土瓶・7脚	直径22cm、平行沈漏文、四脚。	R217	36-6
37-16	E-25東	Vla-4b	二二チャツ	口 (18.1cm)、器高17cm、平底。突状底。	R276	36-4
37-17	E-25中央	Vla-4b	二二チャツ	器高19cm、平底か。	R211	36-5





第38図 E-25区V1a層出土石器 (1)



第39図 E-25区 Via層出土石器 (2)・石製品 (1)



第40図 E-25図Ⅳa層出土石製品(2)

固	区	遺物類	形	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石	材	残存	特	留	写真
28-1	E-25東	Via層	石頭	300	90	60	11	片化巖火石	完形	凸乳有茎、加熱焼成、良石英の成分を含む	石184	37-13	
28-2	E-25東	Via層	石頭	180	90	80	16	片化巖火石	完形	凸乳有茎、アスファルト	石185	37-14	
28-3	E-25東	Via層	石頭	215	160	70	10	石墨	失端欠	凸乳有茎	石205	37-16	
28-4	E-25東	Via層	石頭	250	100	50	66	片化巖火石	完形	凸乳有茎、未製品	石421	37-17	
28-5	E-25東	Via層	石頭	300	160	80	27	綠色巖火石	失端欠	凸乳有茎	石183	37-12	
28-6	E-25東	Via層	石頭	220	120	80	15	黑曜石	完形	円錐	石182	37-11	
28-7	E-25東	Via層	石頭	250	170	80	27	片化巖火石	完形	円錐、未製品か	石186	37-15	
28-8	E-25東	Via層	石頭	280	210	90	37	片化巖火石	完形	つまみ有	石193	37-18	
28-9	E-25中央	Via層	石頭	240	90	75	11	片化巖火石	つまみ部欠	破状	石511	37-19	
28-10	E-25東	Via層	石頭	560	260	180	246	紫云母岩	完形		石200	37-20	
28-11	E-25中央	Via層	柳叶石器	255	300	120	91	片化巖火石	完形		石545	37-22	
28-12	E-25東	Via層	柳叶石器	185	175	70	26	片化巖火石	完形	被熱	石209	37-21	
28-13	E-25東	Via層	不定形石器	260	300	110	53	黑曜石	完形		石191	37-25	
28-14	E-25	Via層	不定形石器	300	275	100	93	片化巖火石	完形		石679	37-26	
28-15	E-25東	Via層	不定形石器	440	260	185	210	片化巖火石	完形		石143	37-23	
28-16	E-25東	Via層	不定形石器	355	155	100	47	片化巖火石	完形		石199	37-24	
28-17	E-25東	Via層	葉割石斧	81.8	88	27.0	186.4	赤色巖石	基部欠		石173	37-28	
28-18	E-25東	Via層	葉割石斧	76.5	81.8	25.9	104.5	玄武岩	基部欠	微量の赤褐色付赤物	石142	37-27	
29-1	E-25東	Via層	石頭	132.9	67.0	67.0	6310	安山岩	破片	微量の赤褐色付赤物	石432	38-2	
29-2	E-25東	Via層	石頭	84.0	61.0	32.5	264.0	玄武岩	破片	赤色巖石	石604	38-1	
29-3	E-25東段	Via層	石頭	68.3	27.3	25.0	607	礫灰岩	破片	岩石を磨石に利用	石150	37-29	
29-4	E-25東	Via層	石頭	56.3	32.2	23.4	852	礫灰岩	完形		石178	38-5	
29-5	E-25東	Via層	石頭	320	54.0	17.5	721	礫灰岩	完形		石296	38-6	
29-6	E-25東	Via層	石頭	191.5	56.0	12.0	651	頁岩	破片		石175	38-3	
29-7	E-25東	Via層	石頭	91.5	33.0	9.5	417	泥灰岩	破片		石176	38-4	
30-1	E-25東	Via層	不明石製品	76.3	62.0	21.0	154.8	礫灰岩	部欠	磨石の軸用、手元に整板、石頭の未製品か	石179	38-7	
30-2	E-25中央	Via層	不明石製品	131.4	76.8	29.5	368.8	綠色巖火石	完形	土塊に自然剥離する、石斧の未製品か	石528	38-8	

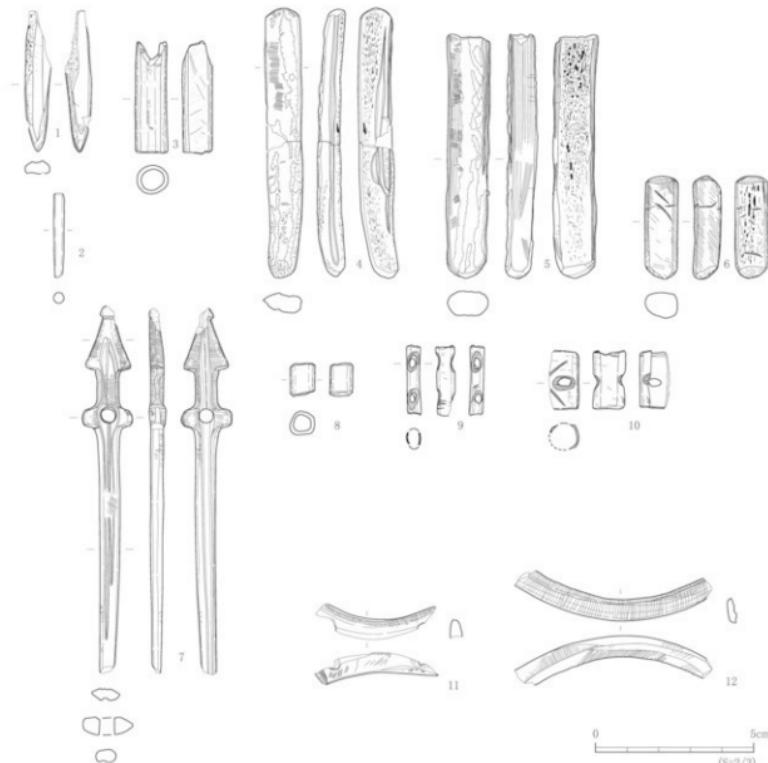


図	区	遺構・層	形種	特徴	分類	写真	
1	E-25	東段	Vla層	前突片 前突片小斜面	横0.8cm、厚さ0.4cm。素材はニホンジカ中手か中尾骨	骨角16 骨角7	39-5 39-4
2	E-25	東段	Vla層	前突片	横0.3cm。素材は鳥類か	骨角14	39-3
3	E-25	東段	Vla層	棒状	横3.4cm、厚1.0cm。素材は鳥類の股骨か	骨角9	39-9
4	E-25	東段	Vla層	棒状製品	横8.7cm、横1.2cm、厚5.0cm。素材はニホンジカ角。表面研削。側面削薄	骨角13	39-10
5	E-25	東段	Vla層	棒状製品	横1.4cm、厚1.0cm。素材はニホンジカ角。表面研削	骨角17	39-11
6	E-25	東段	Vla層	棒状製品	横3.2cm、横1.1cm、厚5.0cm。素材はニホンジカ角。全面加工な結果	骨角20	39-8
7	E-25	東段	Vla層	棒	横0.6-1.6cm、厚3.0cm。素材はニホンジカ手か中尾骨。中央に穿孔1箇所。上部の研削が不明確	骨角10 骨角18	39-7 39-13
8	E-25	東段	Vla層	管状製品	横0.9cm、厚0.8cm。素材は鳥類	骨角4	39-12
9	E-25	東段	Vla層	參齒	横2.2cm、厚0.4-0.6cm。穿孔4箇所。參齒か	骨角19	39-14
10	E-25	東段	Vla層	參齒	横1.8cm、厚1.0cm。穿孔2箇所	骨角5	39-15
11	E-25	東段	Vla層	參齒	厚0.9cm。穿孔2箇所。素材はイノシシの牙		
12	E-25	東段	Vla層	參齒	外径10.1cm、内径6.6cm、厚3.0cm。素材はイノシシの牙。表面研削		

第41図 E-25区 Via層出土骨角牙製品

【SX31】(平面図・断面図：第42図・遺物：第43図、写真：遺構6・遺物39)

〔位置・検出面〕調査区西部のVI<sub>d</sub>層上面で検出した。

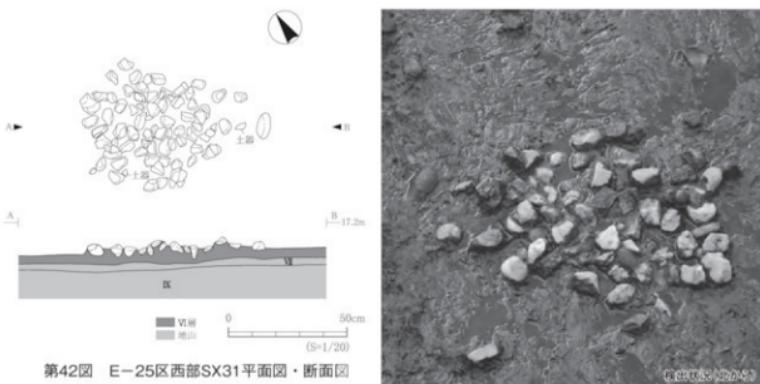
〔平面形〕掘り込みは確認できない。集石の平面分布は橢円形である。

〔規模〕長軸約0.9m、短軸約0.6m、深さ0.1m。

〔集石の状況〕VI<sub>d</sub>層上面から上部にかけて分布する。上面が比較的平らな5~10cmの円・角礫が上下にあまり重なり合わないようにして密に並んでいた。

〔遺物〕石器は磨石（第43図1~12）・石核（第43図13）がある。

〔年代〕VI層の出土土器から縄文時代晩期と考えられる。



第42図 E-25区西部SX31平面図・断面図

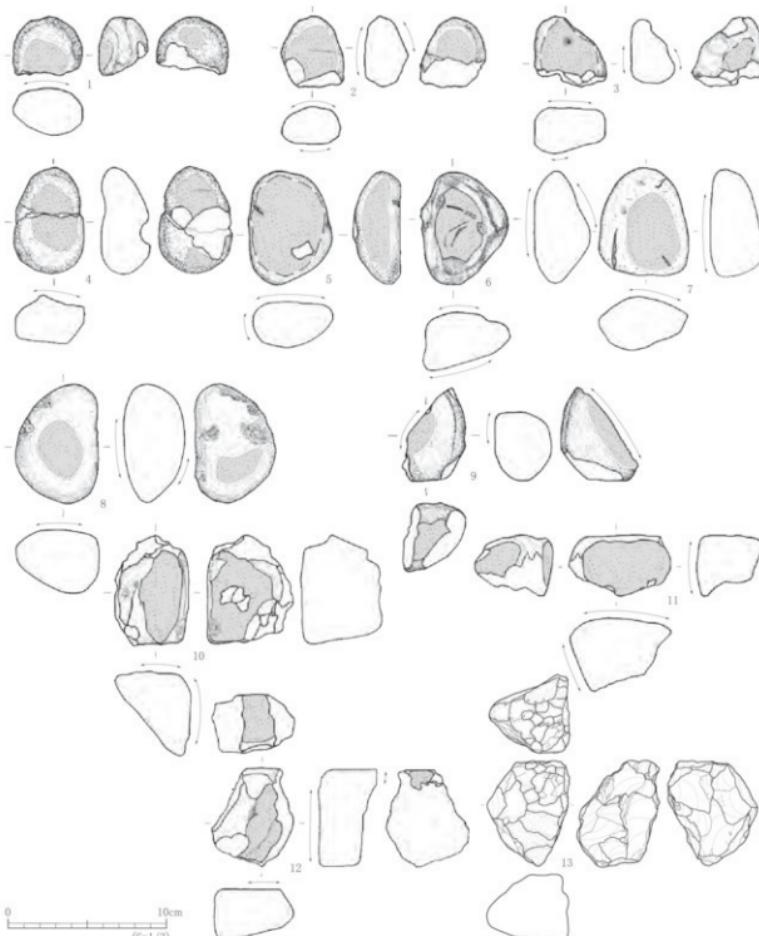


图	区	层	质	形	长(cm)	宽(cm)	厚(cm)	重(g)	石 材	残 状	特 征	单数	写真
1	E-25%	SX31	砾石	椭圆	38.5	86.4	31.0	623	安山岩	砾石	2と複合	61503	30-21
2	E-25%	SX31	砾石	椭圆	46.3	260	26.0	509	安山岩	砾石	1と複合	61506	39-21
3	E-25%	SX31	砾石	椭圆	46.6	148	26.0	538	砾状岩	砾石		61510	39-24
4	E-25%	SX31	砾石	椭圆	69.9	466	30.5	1132	安山岩	砾石	1と2の複合块	61503+606	39-21
5	E-25%	SX31	砾石	椭圆	72.3	569	30.0	1367	砾状岩	砾石		61501	39-19
6	E-25%	SX31	砾石	椭圆	79.4	390	35.0	1634	砾状岩	砾石		61515	39-28
7	E-25%	SX31	砾石	椭圆	69.9	390	34.0	1684	砾状岩	砾石		61502	39-20
8	E-25%	SX31	砾石	椭圆	71.0	325	36.0	1924	安山岩	砾石		61512	39-26
9	E-25%	SX31	砾石	椭圆	65.6	284	29.0	1067	砾状岩	砾石		61511	39-25
10	E-25%	SX31	砾石	椭圆	71.3	610	35.0	2249	安山岩	砾石		61513	39-27
11	E-25%	SX31	砾石	椭圆	44.3	670	36.0	1256	安山岩	砾石		61508	39-22
12	E-25%	SX31	砾石	椭圆	62.4	538	33.0	1418	安山岩	砾石		61509	39-23
13	E-25%	SX31	石核	椭圆	74.4	49.4	30.0	1989	玄武岩	砾石		61514	39-29

第43図 E-25区西部SX31出土石器

## E-32区

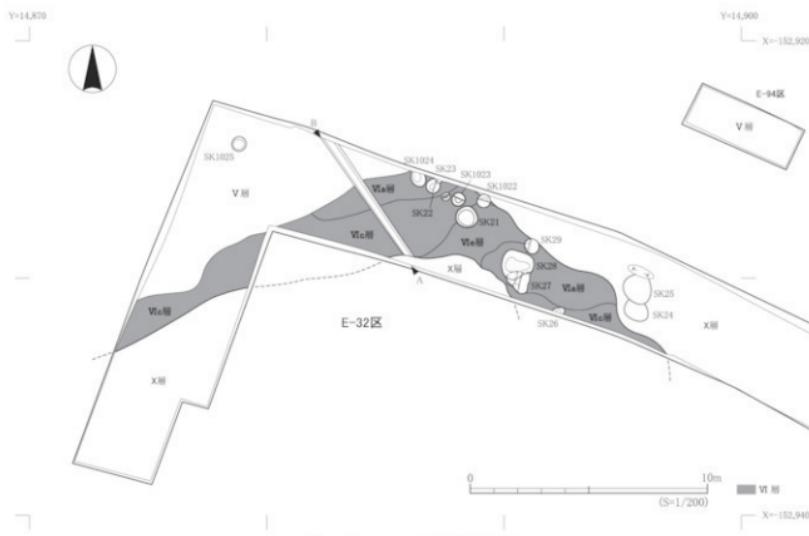
【VI層】(平面図・断面図: 第44・45図・遺物: 第46図、写真: 遺構9・遺物40)

〔層〕a~eの5層に細分できる。

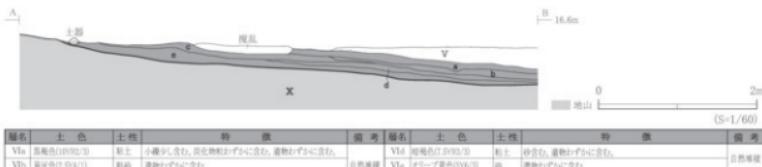
〔遺物〕a~e層の縄文土器は深鉢・浅鉢・壺、土製品はミニチュア、石器は石鏃・楔形石器・磨石、石製品は石棒・剥片がある。

e層の土器の深鉢には沈線文(第46図1)、d層の土器の深鉢には平行沈線文(第46図2)、c層には人面付土器または土偶の顔か腰(第46図4)、a層の土器の壺には赤彩(第46図6)、石器には石鏃(第46図7)、楔形石器(第46図8)などがみられる。

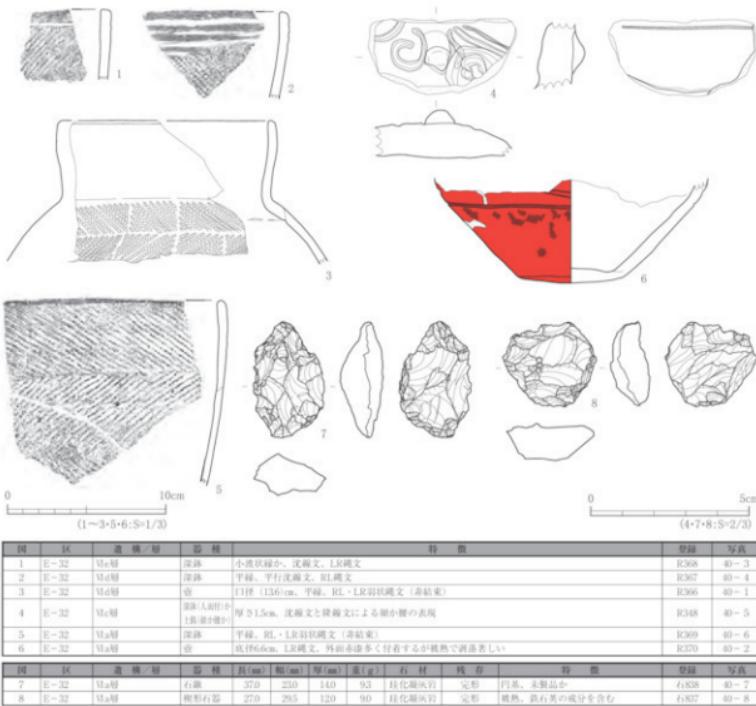
〔年代〕出土土器は縄文時代晩期と考えられる。



第44図 E-32区遺構配置図



第45図 E-32区断面図



第46図 E-32区VI層出土土器・土製品、石器

【SK21】(平面図・断面図:第47図・遺物:第48図・写真:第49図・遺物:40)

〔位置・検出面〕中央部のVIIc層上面で検出した。

〔平面・断面形〕平面形は円形で、断面形は皿状である。

〔規模〕径約0.9m、深さ約0.2m。

〔堆積土の特徴〕2層に細分できるが、ともに遺物や小礫を含む黒色粘土が人為堆積する。

〔遺物〕土器は深鉢がある。深鉢には羊歯状文(第48図1~3)がみられる。

〔年代〕出土土器は繩文時代晚期前葉と考えられる。

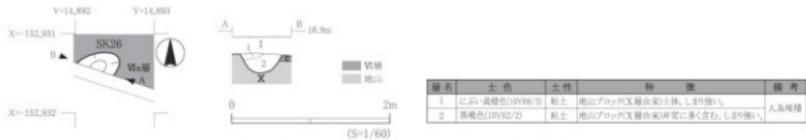
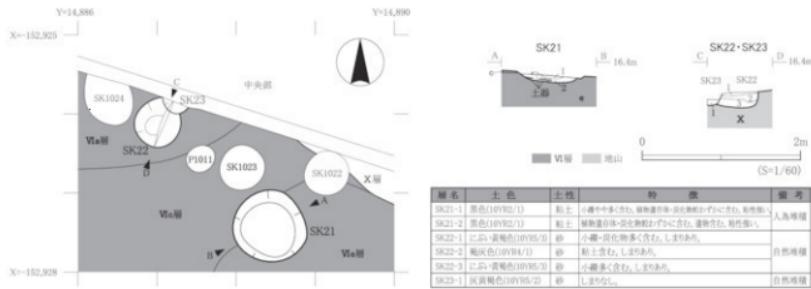
【SK22】(平面図・断面図:第47図・写真:第49図)

〔位置・検出面〕中央部北壁際のX層上面で検出した。

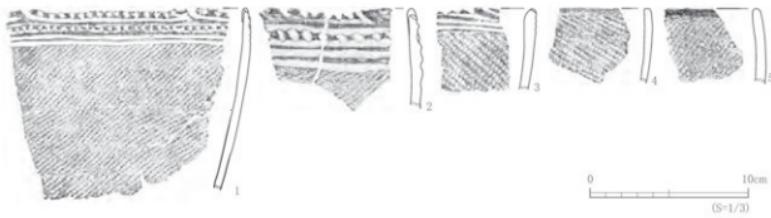
〔重複関係〕SK23と北部で重複し、これより古い。

〔平面・断面形〕平面形は円形で、断面形はU字状となる。

〔規模〕直径約0.6m、深さ0.2m。



第47図 E-32区SK21～23・26平面図・断面図



回	区	遺構	基	特徴	符	登録	写真
1	E-32	SK21	堆積	深鉢 「始み」、平面沈没状態、平行沈没文、L8H4文		R331	40-10
2	E-32	SK21	堆積	深鉢 「始み」、平面沈没文、平行沈没文、L8H4文		R332	40-11
3	E-32	SK21	堆積	深鉢 「始み」、平面沈没文、平行沈没文、L8H4文、角閃石多く含む		R331	40-12
4	E-32	SK21	堆積	深鉢 L8H4文		R349	40-13
5	E-32	SK21	堆積	深鉢 L8H4文		R320	40-14

第48図 E-32区SK21出土土器

〔堆積土の特徴〕 3層に細分できる。すべてにぶい黄褐色または褐灰色砂が自然堆積する。ただし1層は炭化物を多く含むので、人為堆積の可能性もある。

〔遺物〕 なし

〔年代〕 V1e層に覆われるので、縄文時代晚期以前と考えられる。

〔SK23〕 (平面図・断面図：第47図、写真：遺構9)

〔位置・検出面〕 中央部北壁際のX層上面で検出した。

〔重複関係〕 SK22と南部で重複し、これより新しい。

〔平面・断面形〕 平面・断面形ともに不明である。

〔規模〕東西0.4m以上、深さ0.2m以上で、調査区の北へ広がる。

〔堆積土の特徴〕灰黄褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし。

〔年代〕Vle層に覆われるので、縄文時代晚期以前と考えられる。

【SK24】（平面図：第44図、写真：遺構9）

〔位置・検出面〕中央部のX層上面で検出した。

〔重複関係〕SK25と北部で重複し、これより古い。

〔平面・断面形〕平面形は楕円形で、断面形は不明である。

〔規模〕東西約1.1m、南北約0.8m以上。

〔堆積土の特徴〕黒色粘土が自然堆積する。西側にあるVla層の堆積土に類似する。

〔遺物〕なし。

〔年代〕堆積土の特徴から縄文時代晚期と考えられる。

【SK25】（平面図：第44図、写真：遺構9・遺物40）

〔位置・検出面〕中央部のX層上面で検出した。

〔重複関係〕SK24と南部で重複し、これより新しい。

〔平面・断面形〕平面形は円形で、断面形は不明である。

〔規模〕径約1.3m。

〔堆積土の特徴〕黒色粘土が自然堆積する。西側にあるVla層の堆積土に類似する。

〔遺物〕土器は深鉢・浅鉢・壺、石器は磨石がある。

〔年代〕堆積土の特徴から縄文時代晚期と考えられる。

【SK26】（平面図・断面図：第47図、写真：遺構9）

〔位置・検出面〕中央部南壁際のVlc層上面で検出した。

〔平面・断面形〕平面形は楕円形、断面形は逆台形状になるとみられる。

〔規模〕径0.5m以上、深さ0.3m以上で、調査区の南へ広がる。

〔堆積土の特徴〕2層に細分できるが、ともに地山ブロックを非常に多く含む粘土が人為堆積する。

〔遺物〕なし。

〔年代〕Vla層に覆われるので、縄文時代晚期と考えられる。

【SK27】（平面図・断面図：第49図、写真：遺構9）

〔位置・検出面〕中央部のVla層上面で検出した。

〔重複関係〕SK28と重複し、これより古い。

〔平面・断面形〕平面形は不整楕円形で、断面形は逆台形状となる。

〔規模〕東西約1m、南北約0.9mで、深さ約0.3m。

〔堆積土の特徴〕2層に細分できる。ともにしまりの強い地山ブロックを多く含むシルト・粘土が人為堆積する。

〔遺物〕なし。

〔年代〕 VIa層より新しく、SK28より古い。堆積土の特徴からも縄文時代晩期と考えられる。

【SK28】（平面図・断面図：第49図、写真：遺構9・遺物40）

〔位置・検出面〕 中央部のVIa層上面で検出した。

〔重複関係〕 SK27と重複しこれより新しい。

〔平面・断面形〕 平面形は不整円形で、断面形は逆台形状である。

〔規模〕 東西約1.4m、南北約1.3m、深さ約0.3m。

〔堆積土の特徴〕 3層に細分できるが、黒色シルトまたは黒褐色砂が人為堆積する。2層にはVIe層に由来する砂が一部みられる。

〔遺物〕 土器は深鉢・浅鉢・壺・注口土器、石器は不定形石器・石皿・磨石、剥片がある。土器の深鉢には羊歯状文がみられる（第49図2～4）。

〔年代〕 出土遺物は縄文時代晩期前葉と考えられる。

【SK29】（平面図・断面図：第49図、写真：遺構9）

〔位置・検出面〕 中央部のVIa層上面で検出した。

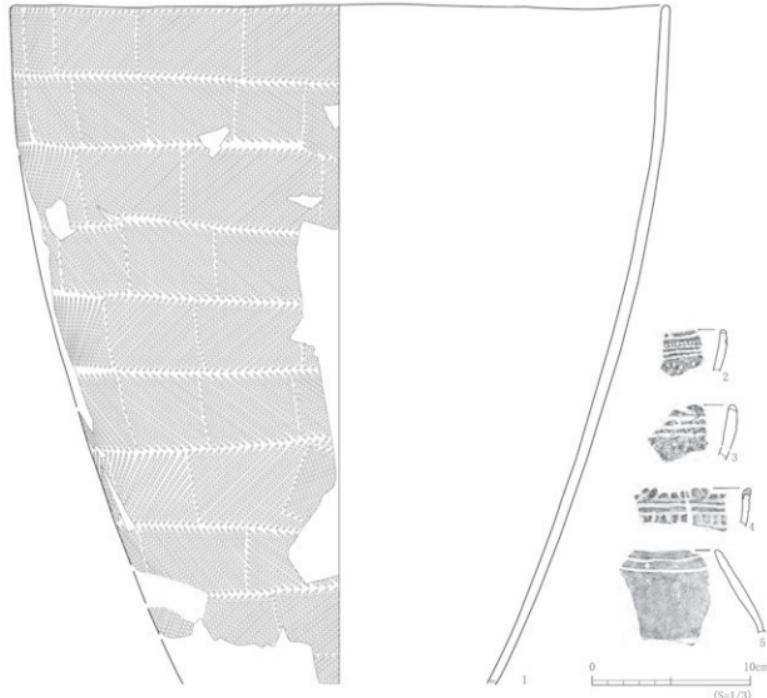
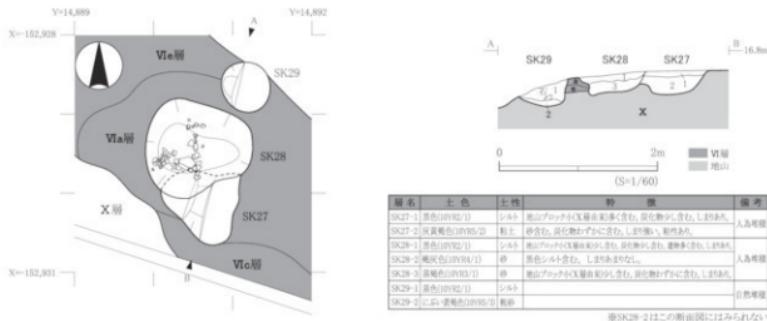
〔平面・断面形〕 平面形は円形で、断面形は逆台形状になるとみられる。

〔規模〕 径約0.6m、深さ約0.4m。

〔堆積土の特徴〕 2層に細分できるが、黒色シルトとにぶい黄褐色粗砂が自然堆積する。2層にはVIe層に由来する砂がみられる。

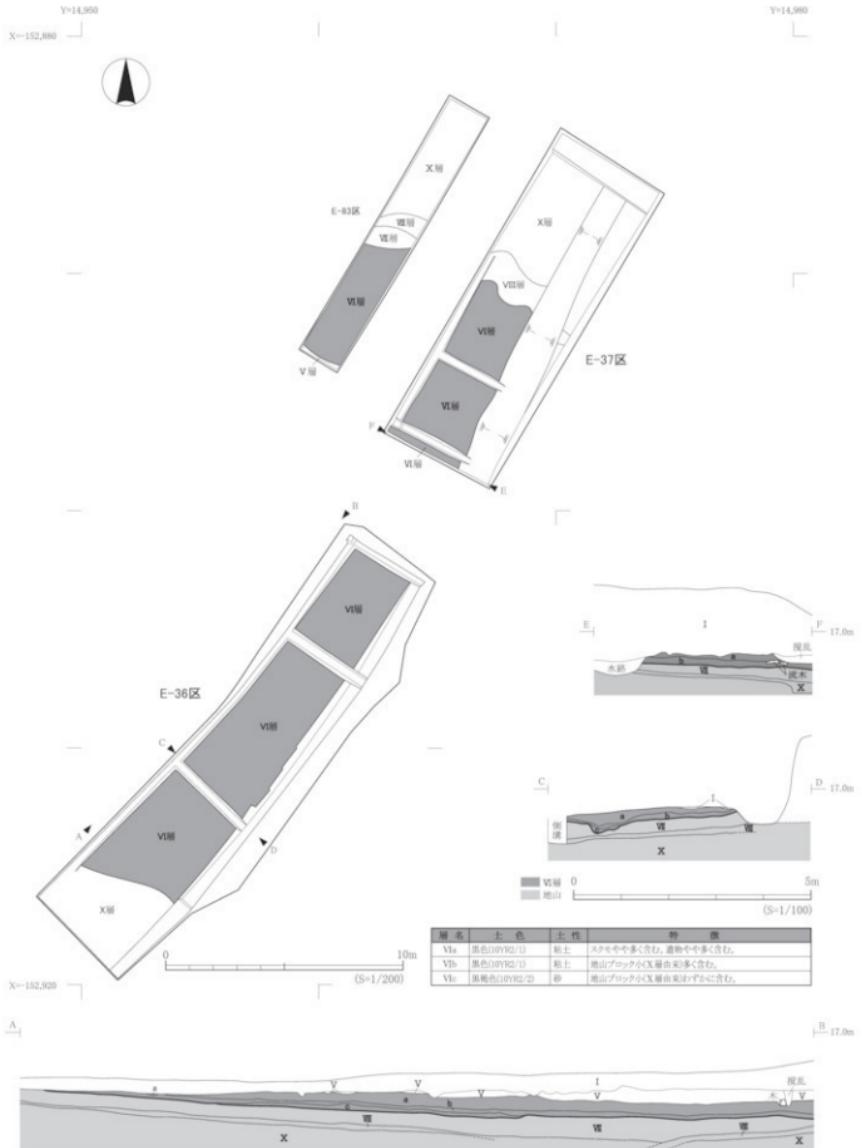
〔遺物〕 なし。

〔年代〕 堆積土の特徴から縄文時代晩期と考えられる。



固	区	遺構	切	記	名	形	写真
1	E-32	SK28	壁	厚1~1.5	泥瓦	U字 (41.6)cm, 平縁, LR・RL切目調文 (希粘束)	R357 40~9
2	E-32	SK28	堆積	I	泥瓦	平縁 (崩み), 千面伏文, LR調文	R306 40~15
3	E-32	SK28	堆積	I	泥瓦	平縁 (崩み), 千面伏文, LR調文	R355 40~16
4	E-32	SK28	堆積	I	泥瓦	平縁 (崩み), 千面伏文	R338 40~17
5	E-32	SK28	堆積	I	U字上器	平縁, 平行沈縫文	R339 40~18

第50図 E-32区SK28出土土器



第51図 E-36・37区平面図・断面図

E-36・37区

【VI層】(平面図・断面図: 第51図・遺物: 第52・53図、写真: 遺構10・12・遺物41・42)

〔層〕a~cの3層に細分できる。

〔遺物〕a~c層の縄文土器は深鉢・浅鉢・壺・注口土器、土製品は土偶・円盤、石器は石鏃・石匙・不定形石器・磨製石斧・磨石・磨石+敲石・石製品は円盤・石核・剥片がある。

b層の土器の深鉢には羊齒状文(第52図1~3)、浅鉢には雲形文(第52図6)、石器には石鏃(第52図9)、石匙(第52図10)、不定形石器(第52図11)がみられる。

a層の土器の深鉢には工字文(第53図1)、浅鉢には雲形文(第53図4・5)・工字文(第53図8)・変形工字文(第53図9~11)、四脚付で木製網物を芯にして底部を成形したと考えられるもの(第53図7)、注口土器には雲形文(第53図12)、壺には雲形文(第53図13)、土製品には円盤(第53図14)、土偶の脚(第53図15)、石器には不定形石器(第53図16)、石製品には円盤(第53図17)などがみられる。

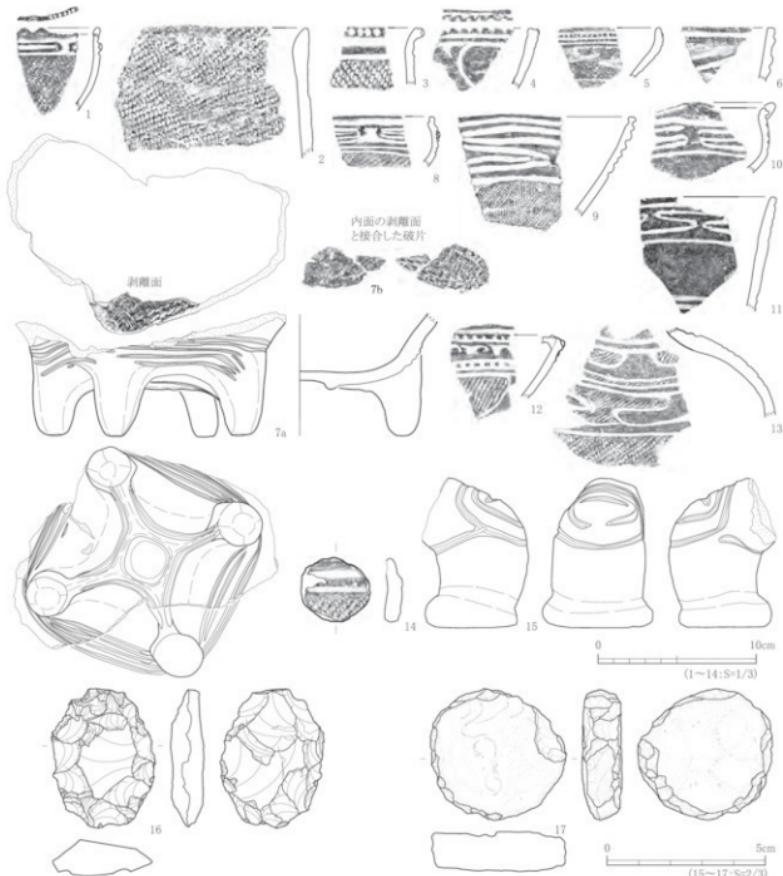
〔年代〕出土土器は縄文時代晩期前葉から末葉と考えられる。



図	区	遺構	層	特徴	登録	写真
1	E-36中央	Vlb層	深鉢	平縞(刷み)、手ぬ伏文	I374	41-1
2	E-36中央	Vlb層	深鉢	平縞(刷み・突起)、手ぬ伏文、LR網文	I375	41-2
3	E-36中央	Vlb層	深鉢	平縞(刷み・突起)、手ぬ伏文、IR網文	I376	41-3
4	E-36中央	Vlb層	深鉢	平縞(刷み)、沈縞、LR網文	I377	41-4
5	E-36中央	Vlb層	深鉢	小虎伏文、沈縞、LR網文	I378	41-5
6	E-36中央	Vlb層	浅鉢	平縞(刷み)、雲形文、LR網文(擦り消し)	I379	41-6
7	E-37	Vlb層	深鉢	手ぬ伏文	I380	41-7
8	E-37	Vlb層	山形変型(大脚と2個1対の小脚起)、土偶文(波浪表現)	I384	41-8	

図	区	遺構	層	特徴	登録	写真
9	E-36	Vlb層	石鏡	27.0 145 45 13 桂化麻吹石 穴形 円溝	I700	41-9
10	E-36中央	Vlb層	石鏡	46.5 285 150 16.2 桂化麻吹石 先端丸 縦撹、アスファルト付着	I705	41-10
11	E-37	Vlb層	不定形石器	32.0 25.0 40 28 石鏡 一部無端化	I707	41-11

第52図 E-36・37区Vlb層出土土器、石器



国	区	遺構・層	器種	特徴	登録	写真
1	E-36北	M1層	漆跡	山形文起(抉り・削み), 工字文(隠微表現), LR調文 平縁, LK調文	R389	41-13
2	E-36中央	M1層	漆跡	平縁(削み), 沈調, RL調文	R386	41-15
3	E-36中央	M1層	漆跡	平縁(削み), 沈調, RL調文	R388	41-14
4	E-36中央	M1層	漆跡	平縁(削み), 工字文, LR調文(削り消し)	R382	41-17
5	E-37	M1層	漆跡	平縁, 工字文, 平行沈調文, 連續調文, LR調文(削り消し)	R396	41-22
6	E-36中央	M1層	漆跡小量	平縁, 平行沈調, 斜行沈調	R383	41-16
7	E-36南	M1層	漆跡(鉢付)	鉢径35cm, 平行沈調文, 垂直沈調と円弧による「X」字調文(隠微表現), LR調文が、所蔵, 木製刷毛物を芯にして成形	R390	41-12
8	E-36中央	M1層	漆跡	平縁, 工字文(隠微表現), 平行沈調文, LR調文	R384	41-20
9	E-36	M1層	漆跡	平縁, 变形工字文(沈調表現), LR調文	R391	41-21
10	E-36中央	M1層	漆跡	山形文起, 变形工字文(沈調表現) 小	R385	41-19
11	E-37	M1層	漆跡	平縁, 变形工字文(沈調表現), 平行沈調文	R395	41-23
12	E-36中央	M1層	口丁上部	平縁(削み), 工字文, LR調文(削り消し), 海綿骨封多合む	R380	41-18
13	E-36中央	M1層	皿	云形文2段, LR調文(削り消し)	R381	41-24
14	E-36中央	M1層	刀盤	幅42cm, 長さ33cm, 厚さ10mm, 平行沈調文, LR調文	R387	41-25
15	E-36中央	M1層(鉢底面)	土器(鉢)	幅32cm, 厚さ28mm, 圆底, 沈調文, 中央	R392	42-1
国	区	遺構・層	器種	寸法	登録	写真
16	E-36	M1層	不定形石器	長さ445mm 厚さ230mm 高さ110mm 化粧刷毛岩 平行	R389	41-26
17	E-36中央	M1層	刀盤	直径620mm 厚さ430mm 高さ127mm 重さ309kg 海綿骨封	R390	41-27

第533図 E-36・37区VIA層出土土器・土製品・石器・石製品

## E-64区

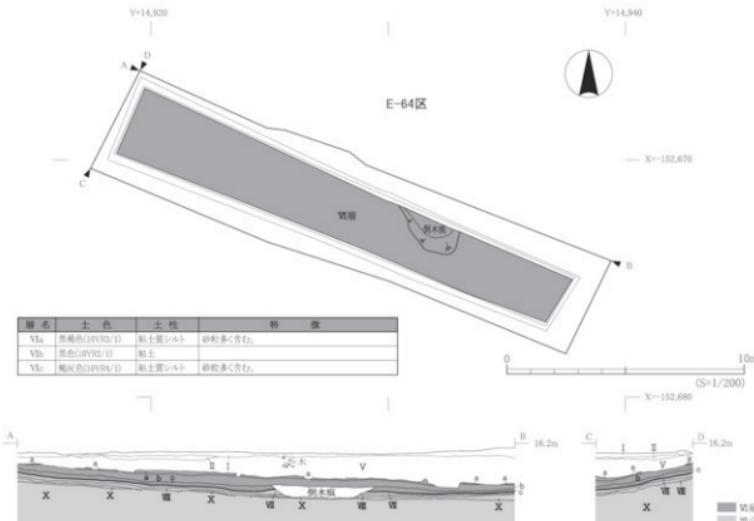
【VI層】(平面図・断面図：第54図・遺物：第55～58図、写真：遺構11・遺物42～44)

〔層〕a～cの3層に細分できる。a層の遺物はわずかである。

〔遺物〕a～c層の縄文土器は深鉢・鉢・土製品は円盤・石器は石錐・石錐・石匙・石範・楔形石器・不定形石器・磨製石斧・石皿・磨石・凹石・砥石・石核・剥片がある。土器のうち第55図1以外は胎土に纖維を含んでいる。

c層の土器の深鉢には貝殻文・縄文・撚糸文が施される。貝殻文には貝殻腹縁文（第55図1）、縄文には斜行縄文・条痕（第55図2）、斜行縄文（第55図3）、羽状縄文（第55図4～7）、斜行縄文→押圧縄文（第55図8）、撚糸文には縱走撚糸文（第55図9～11）、縱走撚糸文→原体押圧（第55図12）、不整撚糸文（第55図13）、網目状撚糸文（第55図14）が施される。土製品には円盤（第55図15）、石器には石錐（第55図16・17）、石匙（第55図18）がみられる。

b層の土器の深鉢には縄文・撚糸文・沈線文・刺突文・貼付文が施される。縄文には縱位縄文・条痕（第56図1）、斜行縄文（第56図2～8）、羽状縄文（第56図9・10）、ループ文（第56図11）、斜行縄文+貼付文（第56図12）、撚糸文には縱走撚糸文（第56図13・14）、不整撚糸文（第56図15～22）、葺瓦状撚糸文（第56図24～26）、網目状撚糸文（第56図27～29）、木目状撚糸文（第56図23・30～33）、木目状撚糸文+山形状沈線文（第56図34）、沈線文には格子状沈線文（第56図35）、波状沈線文（第56図36・37）、鉢には平行沈線文（第56図38）が施される。石器には石錐（第57図1）、石錐（第57図



第54図 E-64区平面図・断面図

2)、石匙（第57図3～6）、石箒（第57図7～9）、不定形石器（第57図10～12）、磨製石斧（第58図1）、凹石（第58図2・5）、磨石（第58図3）、砥石（第58図4）などがみられる。

a層の石器には石匙（第58図6）がみられる。

〔年代〕出土土器は縄文時代早期中葉（第55図1）、早期後葉（第55図2、第56図1）、前期初頭から前葉（第55図3～14、第56図2～38）と考えられる。

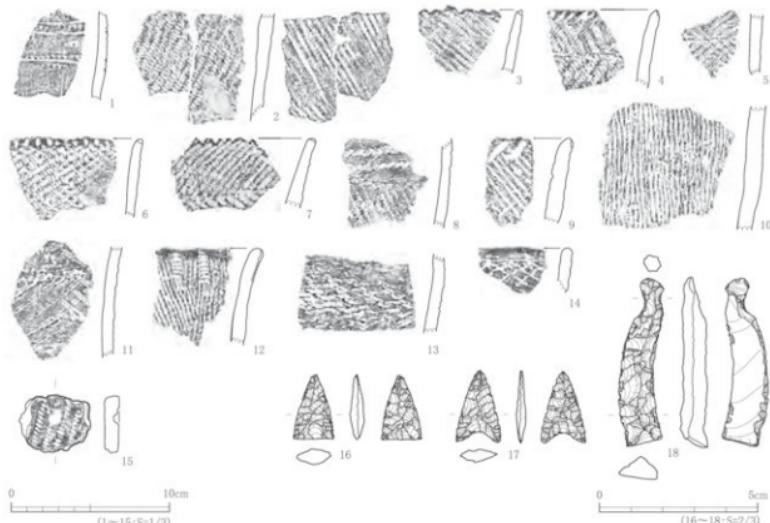
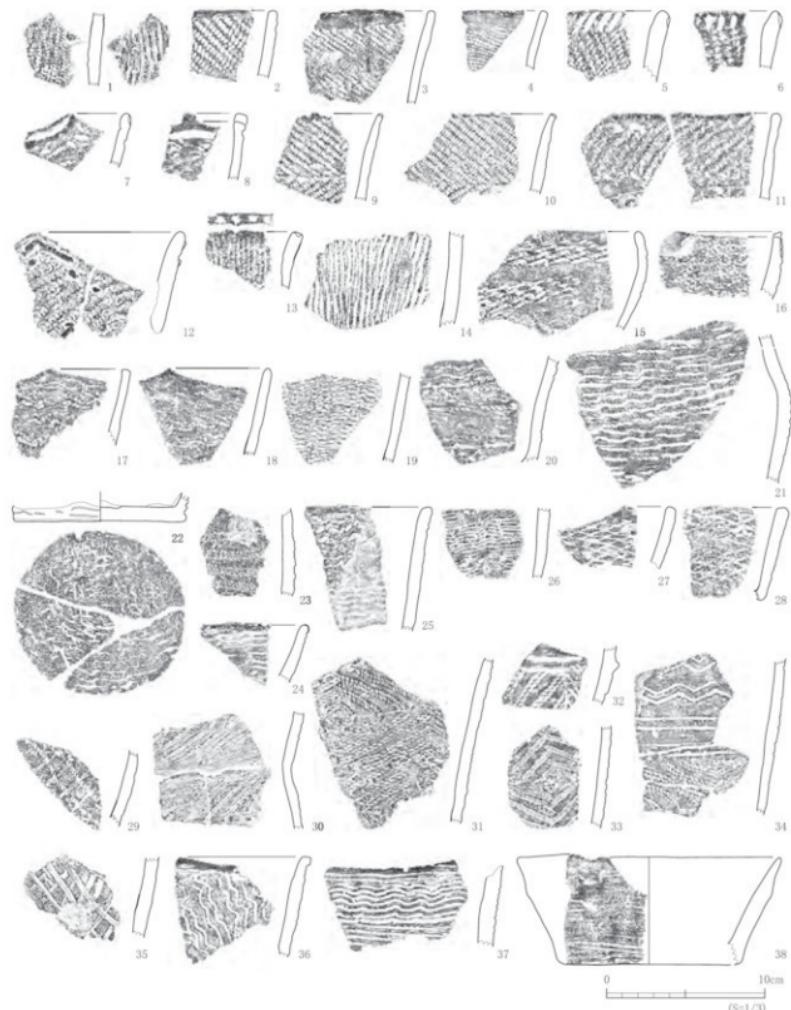


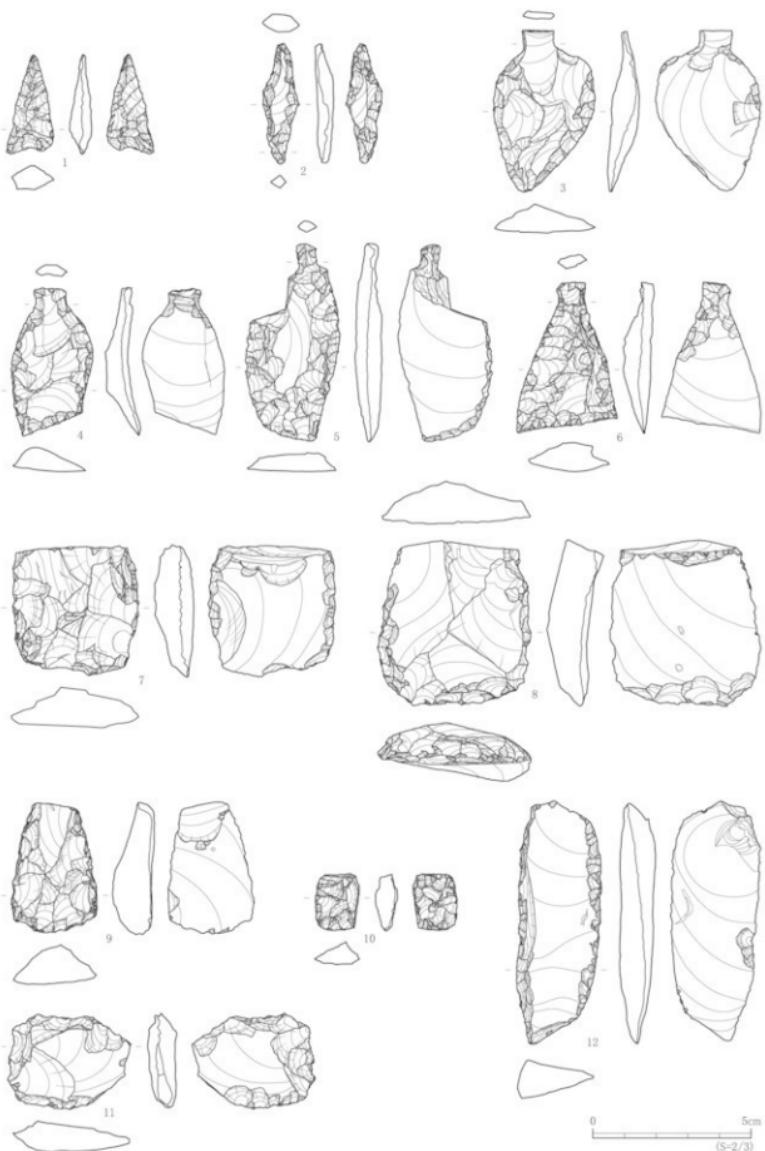
図	区	遺 墓	期	器 特	記	特	記	写真			
1	E-64西	Vlc型	遺跡	[内面]ケシリ。外面 [貝殻微文]×条痕文		R416	42-2				
2	E-64中央	Vlc型	遺跡	[内面]条痕文。外面 LR網文		R406	42-3				
3	E-64西	Vlc型	遺跡	平縞 [削み]。RL網文 (0段多条)。網縞多く含む		R412	42-4				
4	E-64中央	Vlc型	遺跡	平縞 [削み]。RL-LR羽状網文 (0段多条・非結束)		R404	42-5				
5	E-64西	Vlc型	遺跡	RL-LR要状の羽状網文 (0段多条・非結束)		R410	42-6				
6	E-64中央	Vlc型	遺跡	平縞 [削み]。LR-LR羽状網文 (非結束)。網縞多く含む		R405	42-7				
7	E-64中央	Vlc型	遺跡	平縞 [削み]。LR-LR羽状網文 (0段多条・非結束)。網縞多く含む		R584	42-8				
8	E-64西	Vlc型	遺跡	RL網文→RL羽状網文3段		R411	42-9				
9	E-64西	Vlc型	遺跡	平縞 [削み]。然木文→削み。網縞多く含む		R415	42-10				
10	E-64西	Vlc型	遺跡	[内面]削痕 (直角)。外面 [然木文]L.		R417	42-11				
11	E-64中央	Vlc型	遺跡	然木文L (2条1組)		R408	42-14				
12	E-64西	Vlc型	遺跡	平縞。然木文→然木文Lの原体を削り。網縞多く含む		R413	42-12				
13	E-64中央	Vlc型	遺跡	不整然木文R (大・小2条1組)		R409	42-13				
14	E-64西	Vlc型	遺跡	平縞。削目然木文L。海綿骨針多く含む		R414	42-15				
15	E-64中央	Vlc型	門型	幅3.6cm、横4.3cm、厚2.0cm。LR網文 (0段多条か)。非貫孔孔1箇所		R407	42-16				
図	区	遺 墓	期	器 特	記	材	特	記	写真		
16	E-64東	Vlc型	石器	200	130	50	0.9	珪化麻灰岩	完形、アスフルト	R1009	42-17
17	E-64中央	Vlc型	石器	230	145	40	0.6	珪化麻灰岩	完形	R1105	42-18
18	E-64	Vlc型	石器	540	140	80	4.0	珪化麻灰岩	完形 縫型	R1999	42-19

第55図 E-64区Vlc層出土土器・土製品・石器



第56図 E-64区 Vi b層出土土器

図	区	遺構	記録	特徴	登録	写真
56-1	E-64西	Vb層	漆跡	内面：漆痕文。外面：L面鏡文。織羅多く含む	R430	62-20
56-2	E-64中央	Vb層	漆跡	平縞。IR.織文。	R436	62-21
56-3	E-64東	Vb層	漆跡	平縞。IR.織文。織羅多く含む	R421	62-23
56-4	E-64中央	Vb層	漆跡	IR.織文。	R437	62-22
56-5	E-64西	Vb層	漆跡	平縞。別名：IR.織文（O段多条）→別名。織羅多く含む	R424	62-24
56-6	E-64中央	Vb層	漆跡	平縞。別名：IR.織文。	R442	62-25
56-7	E-64	Vb層	漆跡	大波状縞。詳細文→平行縞文	R455	62-26
56-8	E-64	Vb層	漆跡	大波状縞。漆扒工具による沈縞。L面鏡文少	R418	62-27
56-9	E-64中央	Vb層	漆跡	平縞。別名：IR. L面鏡状縞文（O段多条・青粘束）。織羅多く含む	R441	62-28
56-10	E-64	Vb層	漆跡	平縞。別名：IR. L面鏡状縞文（O段多条・青粘束）	R456	62-29
56-11	E-64東	Vb層	漆跡	大波状縞か。赤端ループ文（LR. O段多条）	R431	62-30
56-12	E-64東	Vb層	漆跡	大波状縞。L面鏡文→貼付文	R427	62-31
56-13	E-64中央	Vb層	漆跡	平縞（平行柄向文）、既承文。織羅多く含む	R440	62-32
56-14	E-64東	Vb層	漆跡	既承文。	R446	62-33
56-15	E-64東	Vb層	漆跡	不整然承文。	R422	62-34
56-16	E-64東	Vb層	漆跡	大波状縞、不整然承文L。	R447	62-35
56-17	E-64東	Vb層	漆跡	大波状縞、不整然承文R。織羅多く含む	R428	62-36
56-18	E-64東	Vb層	漆跡	大波状縞、不整然承文L。織羅多く含む	R449	62-37
56-19	E-64東	Vb層	漆跡	不整然承文L。	R425	62-38
56-20	E-64中央	Vb層	漆跡	不整然承文L。	R433	62-39
56-21	E-64西	Vb層	漆跡	不整然承文L。	R448	62-41
56-22	E-64東	Vb層	漆跡	既承IR.既承B。不整然承文L。	R436	63-1
56-23	E-64東	Vb層	漆跡	木目状然承文。（2条1組）	R492	63-6
56-24	E-64中央	Vb層	漆跡	平縞。貫丸状然承文。	R438	63-7
56-25	E-64東	Vb層	漆跡	平縞。貫丸状然承文L。織羅多く含む	R429	62-40
56-26	E-64東	Vb層	漆跡	貫丸状然承文L。	R420	63-8
56-27	E-64東	Vb層+撲土	漆跡	大波状縞。網目状然承文L	R445	63-9
56-28	E-64中央	Vb層	漆跡	平縞。網目状然承文L。	R439	63-10
56-29	E-64	Vb層	漆跡	網目状然承文L。	R454	62-43
56-30	E-64東	Vb層	漆跡	木目状然承文。（2条1組）	R419	62-44
56-31	E-64東	Vb層	漆跡	木目状然承文。（兼形狀：2条1組）	R423	63-2
56-32	E-64	Vb層	漆跡	詳細文→木目状然承文L。（2条1組）	R453	62-42
56-33	E-64中央	Vb層	漆跡	木目状然承文。（兼形狀：2条1組）	R435	63-11
56-34	E-64東	Vb層	漆跡	半斬竹管による山形状沈縞文・平行沈縞文。木目状然承文L。（2条1組）。織羅・海綿帶針多く含む	R430	63-3
56-35	E-64東	Vb層	漆跡	棒状工具による格子状沈縞文	R432	62-45
56-36	E-64中央	Vb層	漆跡	大波状縞か。半斬竹管による波状沈縞文。織羅多く含む	R434	62-46
56-37	E-64西	Vb層	漆跡	大波状縞か。藤衝突工具による波状沈縞文。平行沈縞文	R443	62-47
56-38	E-64	漆	口径(167)cm、器高(68cm、既承(116)cm、小底状縞か。半斬竹管による平行沈縞文。織羅多く含む	R452	63-4	



第57図 E-64区 Vib層出土石器 (1)

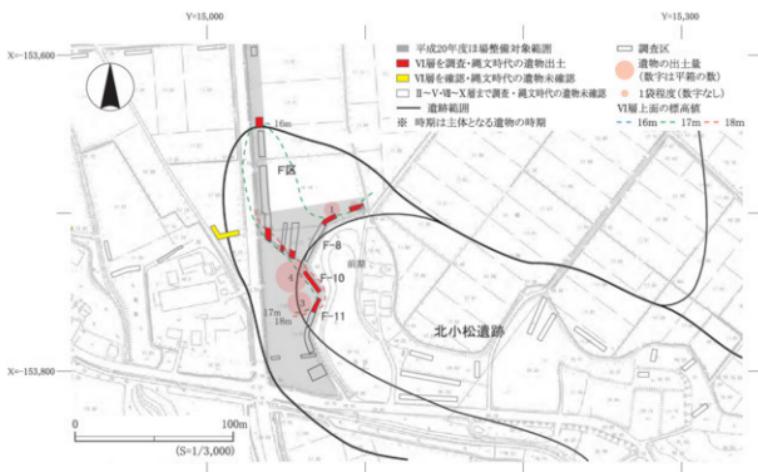


層	区	遺 墓	器 物	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石 材	性 質	特 徴	出 取	写 真
58-1	E-64Vb	Vib層	石器	320	150	70	22	片化麻风岩	漂砾、塊状	凸乳頭状	石3014	63-12
58-2	E-64Vb	Vib層	石器	380	120	50	19	片化麻风岩	塊状		石3015	63-13
58-3	E-64中央	Vib層	石器	505	325	90	11.6	片化麻风岩	完形	砸擊	石3007	63-15
58-4	E-64中央	Vib層	石器	470	270	80	7.6	片化麻风岩	完形	砸擊	石1131	63-14
58-5	E-64中央	Vib層	石器	625	300	90	11.3	片化麻风岩	一部欠	砸擊	石3008	63-16
58-6	E-64Vb	Vib層	石器	480	320	90	8.4	片化麻风岩	完形	砸擊	石3016	63-17
58-7	E-64	Vib層	石器	415	800	125	22.8	片化麻风岩	基部欠		石992	63-20
58-8	E-64	Vib層	石器	525	485	130	40.2	漂砾			石947	63-18
58-9	E-64	Vib層	石器	410	275	125	14.1	片化麻风岩	基部欠		石948	63-19
58-10	E-64	Vib層	不定形石器	180	145	70	1.8	片化麻风岩	破片		石951	63-23
58-11	E-64Vb	Vib層	不定形石器	310	205	95	11.2	漂砾			石1017	63-22
58-12	E-64Vb	Vib層	不定形石器	760	265	115	24.6	片化麻风岩	つまみ端欠	アスファルト、被熱	石1132	63-21
58-13	E-64	Vib層	磨擦石斧	640	620	490	231.3	閃緑岩	基盤部	赤色細刷	石992	63-1
58-2	E-64Vb	Vib層	石器	97.5	62.2	3.4	367.0	綠色麻风岩	完形	漂石を磨石に利用	石1006	63-25
58-3	E-64中央	Vib層	漂石	187.0	65.6	58.9	1163.0	漂石	完形		石1007	64-2
58-4	E-64Vb	Vib層	漂石	90.6	27.0	29.6	171.0	漂石	漂石を磨石に利用		石1145	63-24
58-5	E-64中央	Vib層	漂石	68.0	70.0	47.0	297.4	綠色麻风岩	破片	漂石を磨石に利用	石1005	63-26
58-6	E-64	Vib層	石器	60.0	21.5	11.5	11.1	片化麻风岩	完形	砸擊	石1007	64-3

第58図 E-64Vb層出土石器 (2)、a層出土石器

### 3 F区

VI層をF-3～11区の9箇所で確認した。遺構は検出されていない。以下、遺物量が比較的多かつたF-8～11区について述べる。



第59図 F区VI層と遺物の分布



F区（南から）

## F-8区

【VI層】(平面図・断面図：第60図・遺物：第61・62図、写真：遺構13・遺物44)

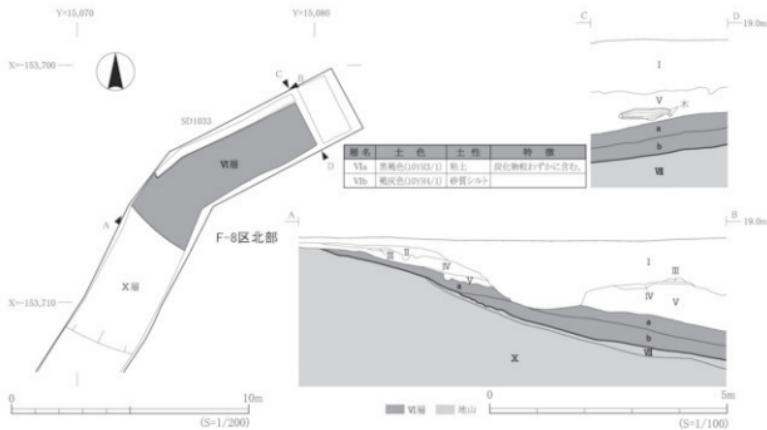
〔層〕a・bの2層に細分できる。

〔遺物〕a・b層の縄文土器は深鉢、浅鉢、石器は石鏃、石箆、楔形石器、不定形石器、磨製石斧、磨石、敲石、剥片がある。土器のうち第62図1・4・8以外は胎土に植物纖維を含んでいる。

b層の土器の深鉢には貝殻文・縄文・撚糸文・沈線文が施される。貝殻文には貝殻腹縁文(第61図1)、縄文には斜行縄文(第61図2～4)、羽状縄文(第61図5)、結節縄文(第61図9)、撚糸文には不整撚糸文(第61図6・7)・S字状連鎖沈文(第61図8)、沈線文には山形状沈線文(第61図10)・平行沈線文+刺突文(第61図11)・渦巻状隆線文(第61図12)が施される。石器には石鏃(第61図13)・磨製石斧(第61図14)・敲石(第61図15)・磨石(第61図16)などがみられる。

a層の土器の深鉢には貝殻文・縄文・撚糸文・隆蒂文が施される。貝殻文には貝殻腹縁文(第62図1)、縄文には羽状縄文(第62図2・3)・押圧縄文+菱形状の隆蒂文(第62図4)、撚糸文には不整撚糸文(第62図5)・S字状連鎖沈文(第62図6)、隆蒂文には鎖状の隆蒂文(第62図7)が施される。浅鉢には脚付(第62図8)がある。石器には石箆(第62図9)、磨製石斧(第62図10)、磨石(第62図11)などがみられる。

〔年代〕出土土器は縄文時代早期中葉(第61図1、第62図1)、前期前葉(第61図2～12、第62図2・3・5～7)、前期末葉(第62図4)、晩期(第62図8)と考えられる。



第60図 F-8区北部平面図・断面図

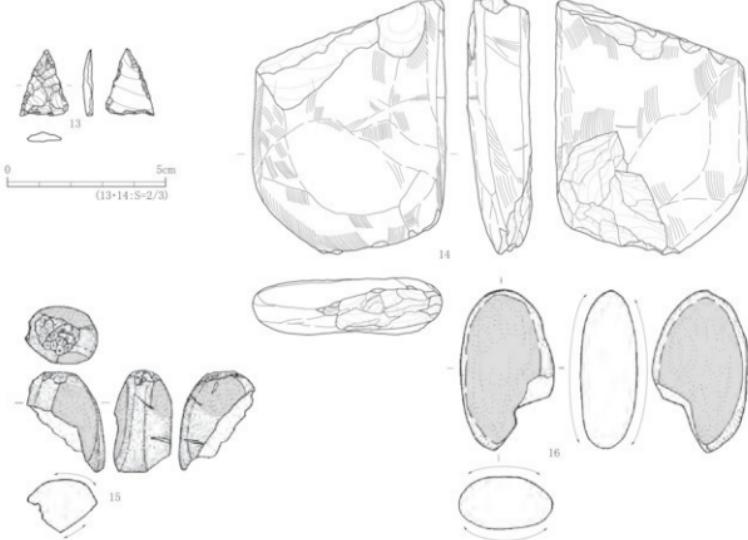
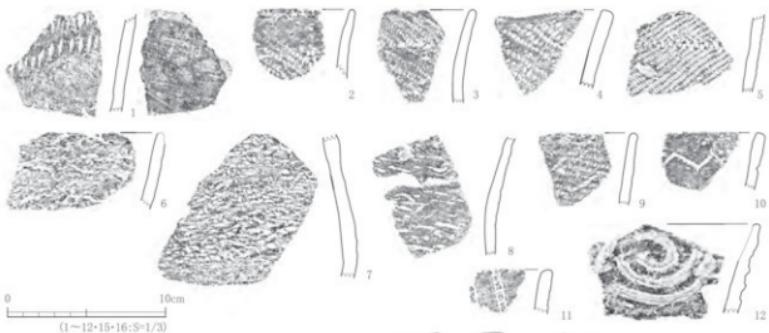


図 名	区	遺 構	形 状	特 徴	分 類	分 類	写 真
1	F-8	Vb層	滑石	内面：貝殻全周文、外面：貝殻模擬文 平縁、RL網文（1段多条）	R481	41-4	
2	F-8	Vb層	滑石	平縁、RL網文	R479	41-5	
3	F-8	Vb層	滑石	平縁、RL網文	R477	41-6	
4	F-8	Vb層	滑石	大波状縫合、RL網文	R485	41-7	
5	F-8	Vb層	滑石	RL・LR羽状網文（結束・0段多条）、網縫多く合む	R474	41-8	
6	F-8	Vb層	滑石	平縁、不整熱水文	R482	41-9	
7	F-8	Vb層	滑石	不整熱水文、網縫多く合む	R480	41-11	
8	F-8	Vb層	滑石	S字状連續波文か、網縫多く合む	R476	41-10	
9	F-8	Vb層	滑石	平縁、RL網擬網文	R483	41-12	
10	F-8	Vb層	滑石	平縁、ヘラ狀工具による山波状沈痕文	R473	41-13	
11	F-8	Vb層	滑石	平縁、半載竹管による平行波痕文・連続網文	R475	41-14	
12	F-8	Vb層	滑石	多載竹管による網文（斜面表現）	R478	41-15	
図 名	区	遺 構	形 状	特 徴	分 類	分 類	写 真
13	F-8	Vb層	石器	直縁、凹底、刃部有り 直縁、刃部無し	G1243	41-16	
14	F-8	Vb層	帶網石斧	76.5 g 82.5 g 149.7 g	G1265	41-19	
15	F-8	Vb層	研石	62.4 g 42.0 g 88.4 g	G1266	41-17	
16	F-8	Vb層	研石	103.0 g 66.0 g 32.0 g	G1268	41-18	

第61図 F-8区Vb層出土土器、石器

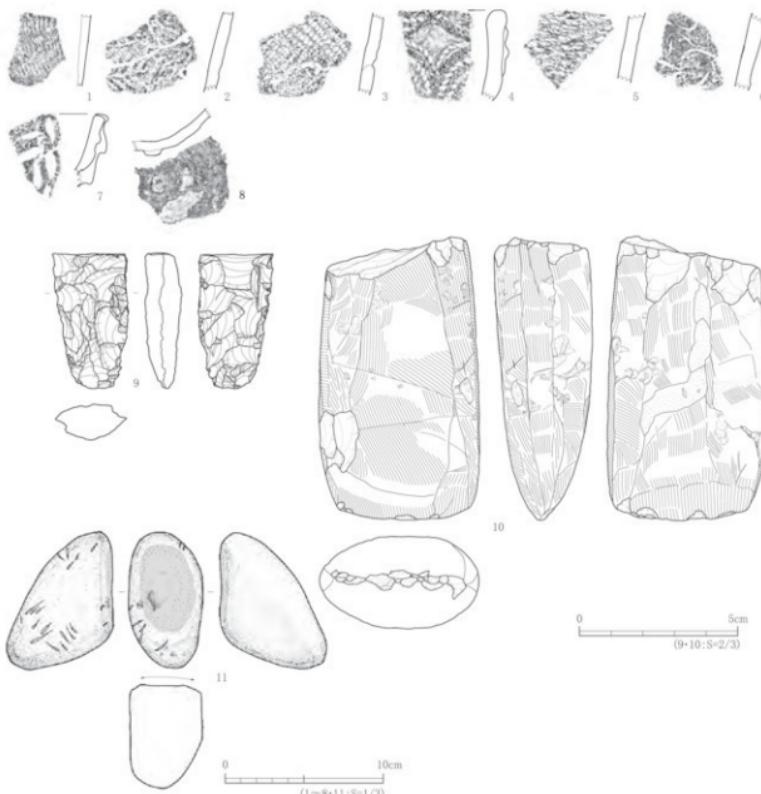


図	区	遺構・層	器種	記載	登録	写真
1	F-8	Vla層	漆跡	貝取痕線文	R493	44-20
2	F-8	Vla層	漆跡	RL-L足葉形状の剥脱線文（0段多巻か、非粘束）、海扇骨質多く含む	R491	44-21
3	F-8	Vla層	漆跡	RL-L足叶状網文（0段多巻）、繊維多く含む	R490	44-22
4	F-8	Vla層	漆跡	平線、更にその上に網文、L足叶状網文	R496	44-23
5	F-8	Vla層	漆跡	不規則網文	R499	44-24
6	F-8	Vla層	漆跡	S字状連續網文	R492	44-26
7	F-8	Vla層	漆跡	大底状線（底状の隠面）、剥離文	R498	44-25
8	F-8	Vla層	漆跡	（浅漠・脚付）	R487	44-27

図	区	遺構・層	器種	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(㎏)	石材	残在	特徴	登録	写真
9	F-8	Vla層	石器	43.0	21.0	12.6	1.126	具化細風岩	先端欠	G1128	44-28	
10	F-8	Vla層	磨製石斧	96.6	50.5	31.0	220.1	凝灰岩	基部欠	G1142	44-30	
11	F-8	Vla層	磨石	74.0	46.0	71.0	322.8	安山岩	完形	G1127	44-29	

第62図 F-8区Vla層出土土器、石器

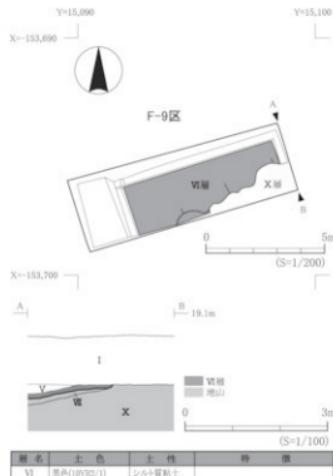
F-9区

【VI層】(平面図・断面図: 第63図・遺物: 第64・65図、写真: 遺構15・遺物45)

〔層〕1層である。

〔遺物〕縄文土器は胎土に植物繊維を含む深鉢、石器は不定形石器・磨製石斧・磨石+凹石・凹石・剥片がある。土器の深鉢には縄文・撫糸文・沈線文が施される。縄文には羽状縄文(第64図1)・付加条縄文(第64図2)・撫糸文には網目状撫糸文(第64図3)・沈線文には斜行沈線文(第64図4)・平行沈線文+連続刺突文(第64図5)・格子状沈線文(第64図6)が施される。石器には不定形石器(第64図7・8)・磨製石斧(第65図1)・凹石(第65図2)・磨石+凹石(第65図3)などがみられる。

〔年代〕出土土器は、縄文時代前期前葉と考えられる。



第63図 F-9区平面図・断面図

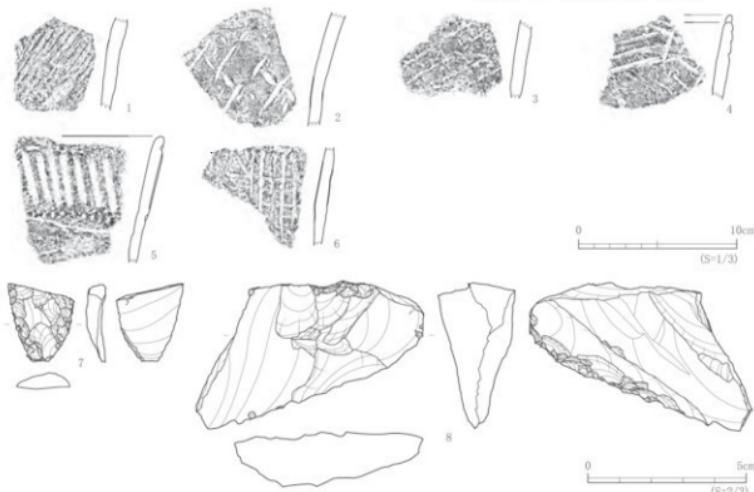


図	区	遺構	層	特徴						層段	写真	
				長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)	石材	残存			
1	F-9	遺構	Ⅵ層	11.1	1.8	0.3	150	白泥岩	口段多条・非粘土	網目多く含む	R69	6-1
2	F-9	遺構	Ⅵ層	11.0	1.8	0.3	150	白泥岩	付加条多条	付加条縄文か	R69	6-3
3	F-9	遺構	Ⅵ層	11.0	1.8	0.3	150	白泥岩	網目状撫糸文		R69	6-2
4	F-9	遺構	Ⅵ層	11.0	1.8	0.3	150	白泥岩	大波状縫隙	ハサ括工具による斜行沈線文	R69	6-4
5	F-9	遺構	Ⅵ層	11.0	1.8	0.3	150	白泥岩	大波状縫隙	ハサ括工具による平行沈線文	R69	6-5
6	F-9	遺構	Ⅵ層	11.0	1.8	0.3	150	白泥岩	ハサ括工具による斜行沈線文	連続刺突文	R69	6-6
7	F-9	遺構	Ⅵ層	不定形石器	25.0	21.0	6.0	26	珪化瑪瑙岩	口1.5cm×底2.5cm	石1220	6-8
8	F-9	遺構	Ⅵ層	不定形石器	46.0	72.0	24.0	526	綠色瑪瑙岩	完形	石1221	6-7

第64図 F-9区VI層出土土器・石器(1)

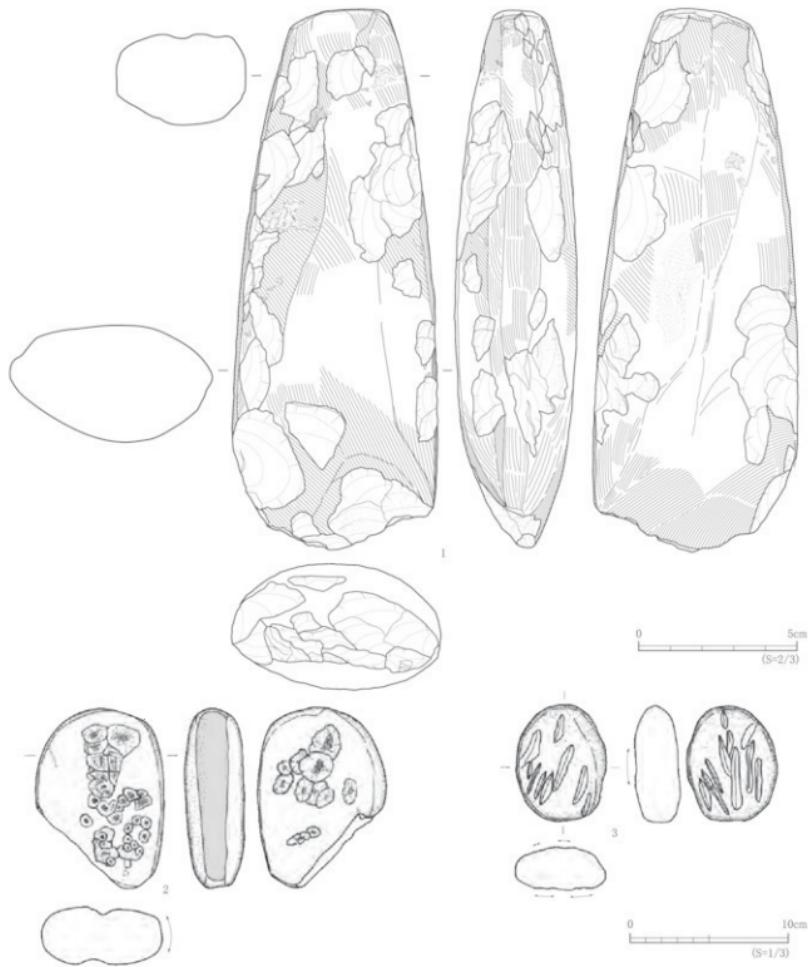
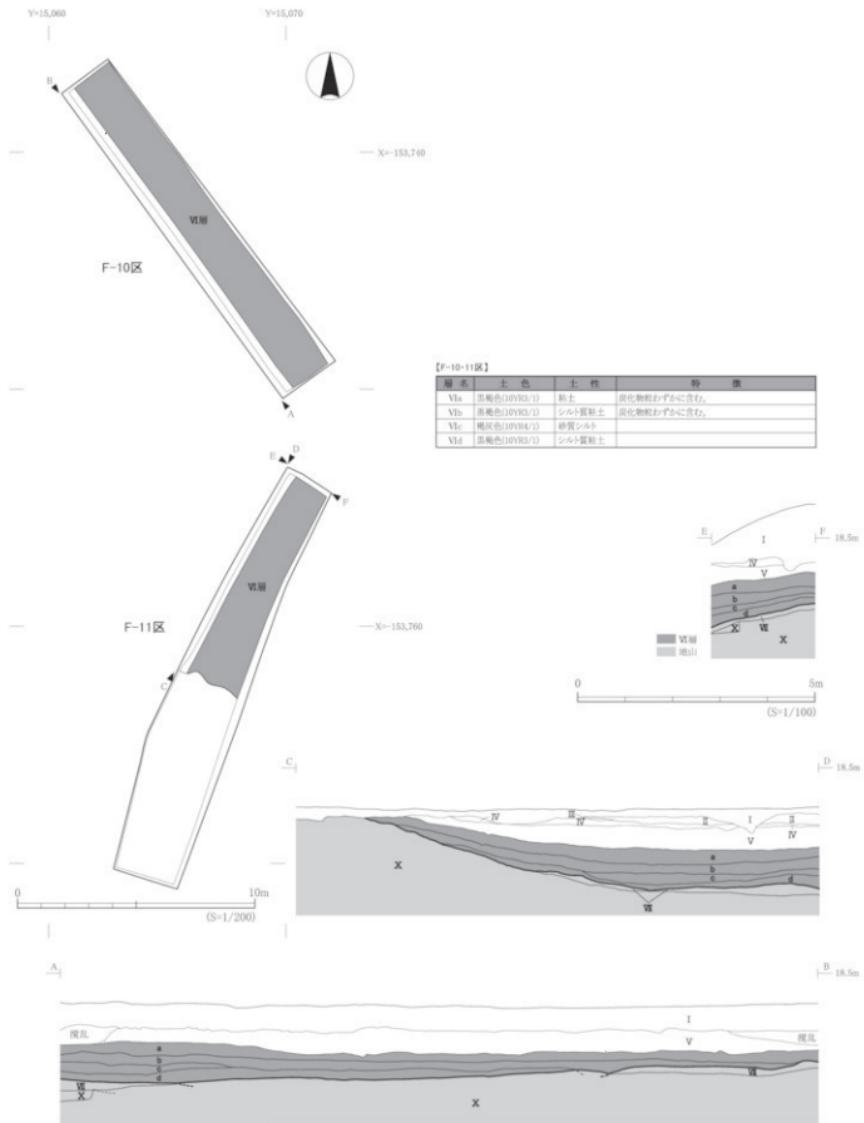


圖	長	寬	厚	長(cm)	寬(cm)	厚(cm)	重(g)	石	形	特	號	年
1	F-9	刮削	磨制石斧	1760	450	28.5	602.0	安山岩	刃部尖		61277	45-9
2	F-9	刮削	磨石+凹石	111.2	83.0	33.1	482.0	安山岩	椭圆	磨石及凹石已利用	61278	45-10
3	F-9	刮削	凸石	75.2	29.0	27.4	132.4	砾灰岩	尖形		61279	45-11

第65図 F-9区VI層出土石器 (2)



## F-10区

【VI層】(平面図・断面図: 第66図・遺物: 第67~71図、写真: 遺構14・遺物45~47)

〔層〕a~dの4層に細分できる。

〔遺物〕a~d層の縄文土器は深鉢・鉢・石器は石鏃・石槍・石匙・石範・楔形石器・不定形石器・磨製石斧・石皿・磨石・磨石+閃石・砥石がある。土器のうち、第67図1・2、第68図1、第70図1・13以外は胎土に植物纖維を含んでいる。

d層の土器の深鉢には貝殻文・繩文・沈線文が施される。貝殻文には貝殻腹縁文(第67図1・2)、繩文には羽状繩文(第67図3)・ループ文(第67図4)・撲糸文にはS字状連鎖沈文(第67図5)・沈線文には菱形状沈線文(第67図6)が施される。石器には石匙(第67図7)・砥石(第67図8)などがみられる。

c層の土器の深鉢には貝殻文・繩文・撲糸文・貼付文・刺突文が施される。貝殻文には貝殻腹縁押引文(第68図1)、繩文には斜行繩文(第68図2・3)・羽状繩文(第68図4・5・10)・ループ文(第68図6)・撲糸文にはS字状連鎖沈文(第68図7)、貼付文には貼付文→連続刺突(第68図8)・刺突文には円形刺突文(第68図9)が施される。鉢にはループ文+羽状繩文(第68図11)が施される。石器には石匙(第68図12)、石範(第68図13)、不定形石器(第68図14)などがみられる。



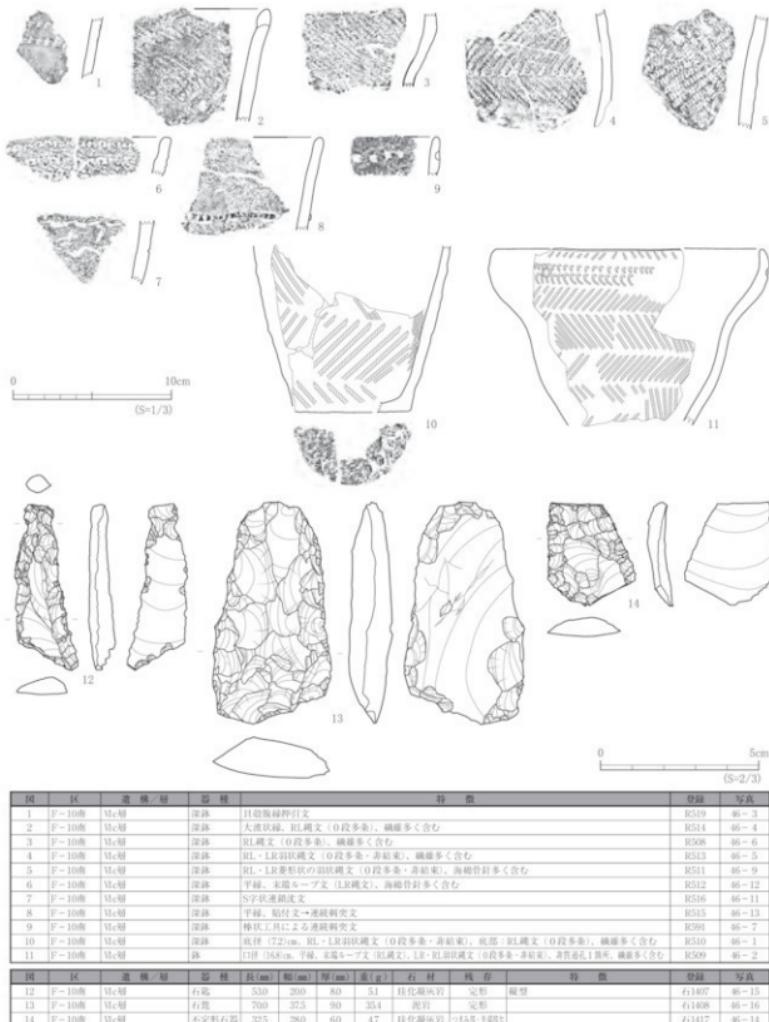
図	区	遺構/層	器種	特徴				登録	写真
1	F-10b	VId層	深鉢	平縁・貝殻腹縁文				R504	45-12
2	F-10b	VId層	深鉢	大底状縁か・外縁・口縁部・貝殻腹縁文				R507	45-13
3	F-10b	VId層	深鉢	大底状縁か・LR・RL羽状繩文(1段多め・非結束)				R502	45-14
4	F-10b	VId層	深鉢	平縁・側面ループ文(LR繩文)・繩維多く含む				R500	45-15
5	F-10b	VId層	深鉢	S字状連鎖沈文とかか				R506	45-17
6	F-10b	VId層	深鉢	平縁・手軽竹管による平行沈線文→菱形圧延沈文				R505	45-16

図	区	遺構/層	器種	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	残存	特徴	登録	写真
7	F-10b	VId層	石鏃	70.5	180	100	68	珪化凝灰岩	完形	鍛打	R1443	45-18
8	F-10b	VId層	研石	71.0	360	300	174.7	玄武岩	一部欠	赤色顔料	R1442	45-19

第67図 F-10区VId層出土土器、石器

b層の土器には縄文・撫糸文・沈線文が施される。縄文には羽状縄文（第69図1～3）、撫糸文には縱走撫糸文（第69図5）、沈線文には矢印状沈線文（第69図4）、石器には石槍（第69図6）、石斧（第69図7・8）、不定形石器（第69図9）がみられる。



第68図 F-10区Vic層出土土器、石器

a層の土器の深鉢には貝殻文・繩文・撫糸文・沈線文・刺突文・隆線文・貼付文が施される。貝殻文には貝殻腹縁文（第70図1）、繩文には斜行繩文（第70図2・7）、羽状繩文（第70図3・4・5）、結節繩文（第70図4・6）、撫糸文にはS字状沈文（第70図8）、網目状撫糸文（第70図9・10）、沈線文には平行沈線文（第70図11・12）、山形状沈線文（第70図13～15）、斜行繩文+沈線文（第70図16）、菱形状沈線文（第70図17）、矢羽状沈線文（第70図18）、「×」字状沈線文（第70図19）、沈線+連続刺突文（第70図20）、平行沈線文+連続刺突文+網目状撫糸文（第70図21）、刺突文には連続刺突文（第70図22）、列点文（第70図23）、隆線文には隆線文+連続刺突文（第70図24）、貼付文には鎖状の隆帶文（第70図25）、石器には石鎚（第71図1・2）、石斧（第71図3～6）、磨石（第71図7）がみられる。

〔年代〕出土土器は繩文時代早期中葉（第67図1・2、第68図1、第70図1）、前期前葉（第67図3～6、第68図2～11、第69図1～5、第70図2～25）と考えられる。

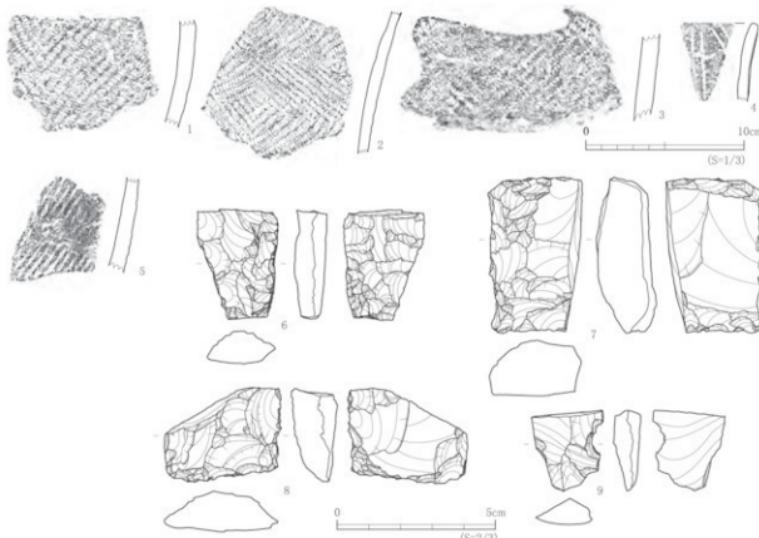


図	区	遺構・層	器種	特徴	登録	写真						
1	F-10南	Vib層	深鉢	IRL・LR菱形状の羽状繩文(1段多条・直筋束)、繩縦多く含む	R524	00-17						
2	F-10南	Vib層	深鉢	LR・RL菱形状の羽状繩文(1段多条・直筋束)、繩縦多く含む	R522	00-20						
3	F-10南	Vib層	深鉢	LR・RL菱形状の羽状繩文(1段多条・直筋束)、繩縦多く含む	R523	00-18						
4	F-10南	Vib層	深鉢	平継、手耕竹管による矢印状沈線文	R520	00-19						
5	F-10南	Vib層	深鉢	撫糸文	R525	00-21						
図	区	遺構・層	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	残存	特徴	登録	写真
6	F-10南	Vib層	石器	350	25.5	160	99	珪化瑪瑙岩	両端丸		R1300	00-24
7	F-10南	Vib層	石器	500	36.0	170	339	碧玉	丸		R1301	00-22
8	F-10南	Vib層	石器	300	25.0	140	151	碧玉	片		R1302	00-23
9	F-10南	Vib層	不规则石器	250	23.0	80	49	珪化瑪瑙岩	丸		R1303	00-25

第69図 F-10区Vib層出土土器、石器

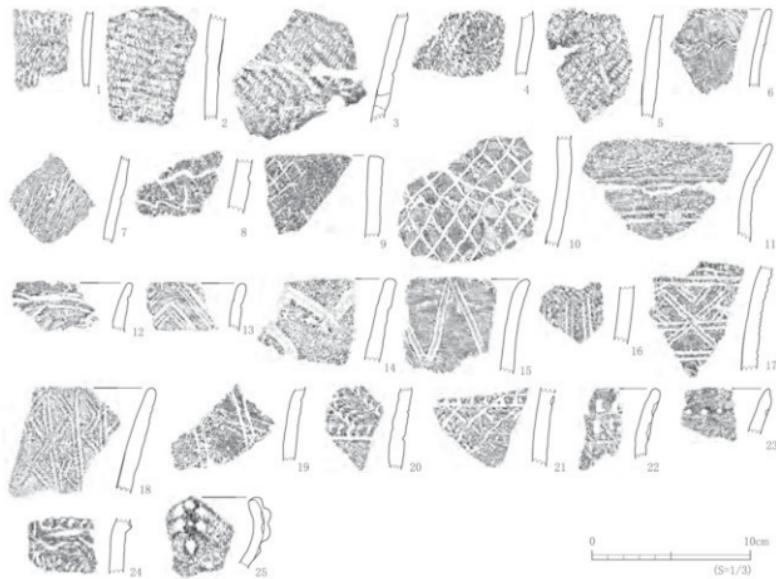
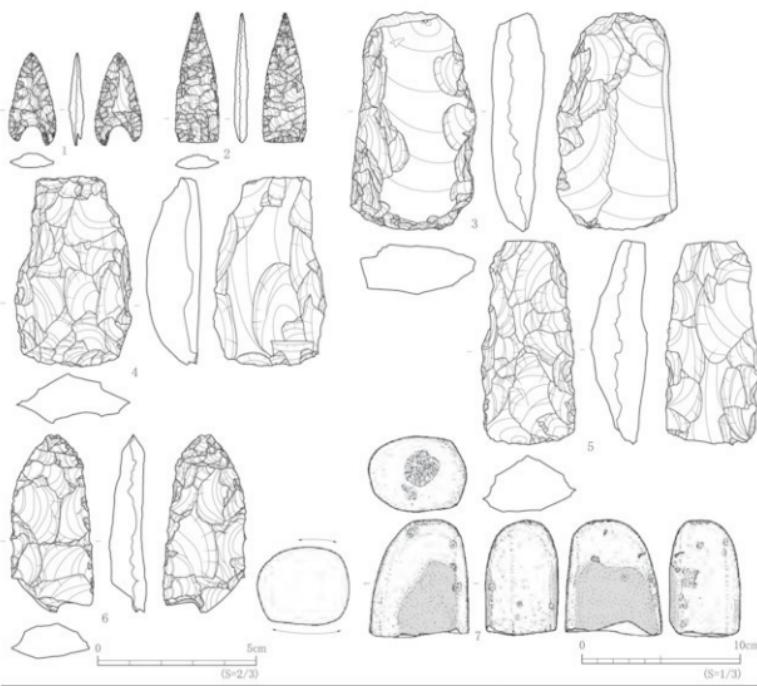


図 区	遺 構 層	器 種	特 徴	登 録	写 真
1	F-10地	Via層	滑抹	R550	47-1
2	F-10地	Via層	滑抹 RL純文(0段多条)、織維多く含む	R551	47-2
3	F-10地	Via層	滑抹 LR・RL羽状純文(0段多条・非結束)、織維多く含む、海苔骨許多く含む、網掛孔1箇所	R555	47-3
4	F-10地	Via層	滑抹 LR羽状純文か	R547	47-4
5	F-10地	Via層	滑抹 RL・LR羽状純文(0段多条・非結束)、織維多く含む	R548	47-5
6	F-10地	Via層	滑抹 平縞、LR羽状純文か(織維のみ)	R553	47-6
7	F-10地	Via層	滑抹 LL反然の純文	R536	47-7
8	F-10地	Via層	S字状連續純文	R546	47-8
9	F-10地	Via層	平縞、網目状自然系文	R590	47-9
10	F-10地	Via層	網目状自然系文、織維多く含む	R541	47-10
11	F-10地	Via層	平縞、手耕竹管による平行沈縞文	R532	47-11
12	F-10地	Via層	平縞、手耕竹管による沈縞文、織維多く含む	R533	47-12
13	F-10地	Via・b層	平縞、手耕竹管・稚化工具による山形状沈縞文	R552	47-13
14	F-10地	Via層	平縞、稚化工具による山形状沈縞文	R537	47-14
15	F-10地	Via層	平縞、手耕竹管による山形状沈縞文、織維多く含む	R539	47-15
16	F-10地	Via層	RL純文・手耕竹管による平行沈縞文	R544	47-16
17	F-10	Via・b層	手耕竹管による菱形状・△形状沈縞文	R530	47-17
18	F-10	Via層	手耕竹管による久保田沈縞文	R540	47-18
19	F-10	Via層	手耕竹管による沈縞文	R542	47-19
20	F-10	Via・b層	手耕竹管による沈縞文・連續純文突起	R531	47-20
21	F-10	Via層	外面：ヘラ狀工具による平行沈縞文+手耕竹管による連續純文突起→網目状自然系文か。内面：ミガキ	R535	47-21
22	F-10	Via層	手耕竹管による連續純文突起→筒状文	R543	47-22
23	F-10	Via・b層	平縞、円形竹管による連續純文突起	R529	47-23
24	F-10	Via層	筒帶+手耕竹管による連續純文突起+沈縞	R554	47-24
25	F-10地	Via層	大底双縫、底の沈縞+連續純文突起	R545	47-25

第70図 F-10区 Via層出土土器



第71図 F-10区 Via層出土石器

#### F-11区

【VI層】(平面図・断面図: 第66図・遺物: 第72~76図、写真: 遺構14・遺物47・48)

【層】a~dの4層に細分できる。c層の遺物はわずかである。

【遺物】a~d層の縄文土器は深鉢、石器は石錐、石槍、石匙、楔形石器、不定形石器、磨製石斧、石皿、磨石、石製品は石鎌、石刀がある。第72図1・2、第76図7・8以外は胎土に植物繊維を含んでいる。

d層の土器の深鉢には貝殻文、縄文が施される。貝殻文には貝殻腹縁文(第72図1・2)、縄文には斜行縄文(第72図3)、結筋縄文(第72図4)が施される。石器には石鎌(第72図5)がみられる。

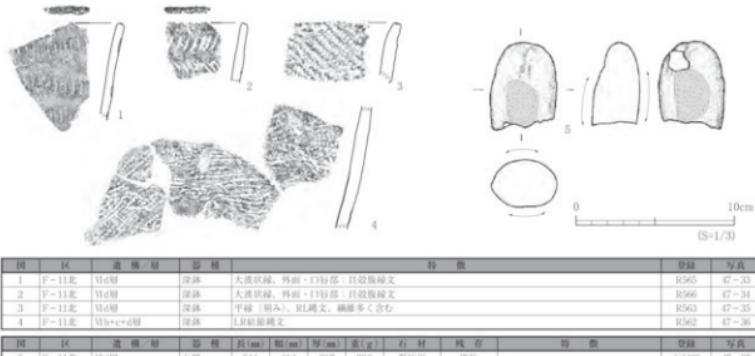
c層の石器には石錐(第73図1)、石槍(第73図2)、磨製石斧(第73図3)がみられる。

b層の土器の深鉢には縄文、沈線文、刺突文、貼付文が施される。縄文にはループ文(第74図1)・結節縄文(第74図2)・結節縄文+貼付文(第74図3)、沈線文には山形状線文(第74図4・5)・平

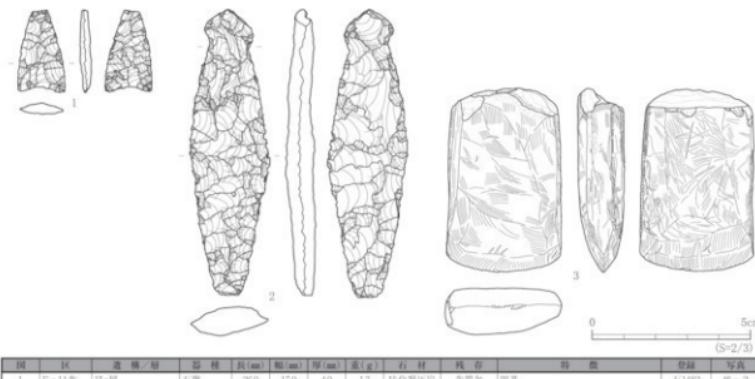
行沈線+連続刺突文（第74図6）が施される。石器には石匙（第75図1）、磨製石斧（第75図2）、石皿（第75図3）、石製品には石刀（第75図4）がみられる。

a層の土器の深鉢には繩文・沈線文・刺突文・貼付文が施される。繩文には斜行繩文（第76図7）・羽状繩文（第76図8）・結節繩文（第76図1）・付加条繩文（第76図2）・斜行繩文+山形状沈線文（第76図3）・沈線文には矢羽状沈線文（第76図4）・山形状沈線文+連続刺突文（第76図5）、貼付文には組紐回転文+隆帯+連続刺突文（第76図6）が施される。石器には石鏃（第76図9・10）、不定形石器（第76図11）がみられる。

〔年代〕出土土器は繩文時代早期中葉（第72図1・2）、前期前葉（第72図3・4、第74図1～6、第76図1～6）、晩期（第76図7・8）と考えられる。



第72図 F-11区Vic層出土土器、石器



第73図 F-11区Vic層出土石器

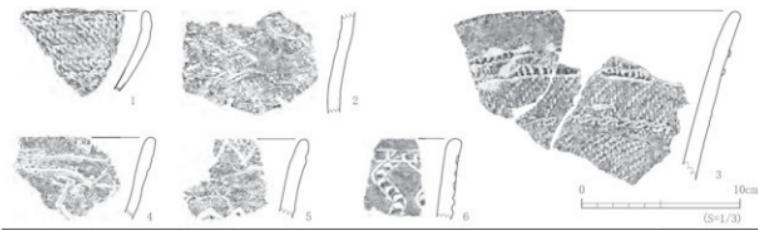


図 区 層 期 形 種	特 徴	層 段	写 真
1 F-11区 Vib層 深鉢	平縁、末端ターピ文(RL縦文)、繊維多く含む	R569	48-6
2 F-11区 Vib層 深鉢	深鉢	R568	48-8
3 F-11区 Vib層 深鉢	LR縦横縞文	R589	48-7
4 F-11区 Vib層 深鉢	LR縦文+LR始筋縫文か(縫維のみ)、降面→キザ	R570	48-9
5 F-11区 Vib層 深鉢	平縁、手耕竹管による沈縛文	R571	48-10
6 F-11区 Vib層 深鉢	平縁、ハラ筑工具による山形状沈縛、手耕竹管による漸縮斜突文か 平縁、多耕竹管による沈縛→漸縮斜突文	R572	48-5

第74図 F-11区 Vib層出土土器

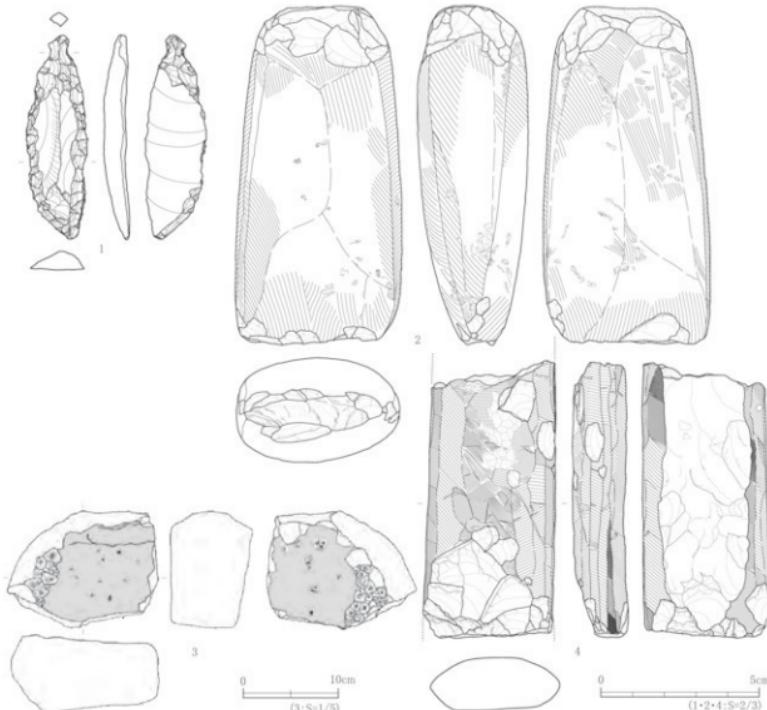


図 区 層 期 形 種	石 材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	石 材	残 存	特 徴	層 段	写 真
1 F-11区 Vib層 小刀	白雲石	64.0	25.0	2.0	830	貝化珊瑚岩	実物 破型	G1465	48-12	
2 F-11区 Vib層 帶鋸石斧	帶鋸石斧	108.3	53.0	2.0	3416	綠色燧石岩	刃部欠 損	G1472	48-14	
3 F-11区 Vib層 石刀	石刀	127.0	152.0	9.0	2430.0	燧石岩	繊石	G1474	48-11	
4 F-11 Vib層 石刀	石刀	39.2	40.0	16.0	880	燧石岩	繊石	G1453	48-13	

第75図 F-11区 Vib層出土石器・石製品

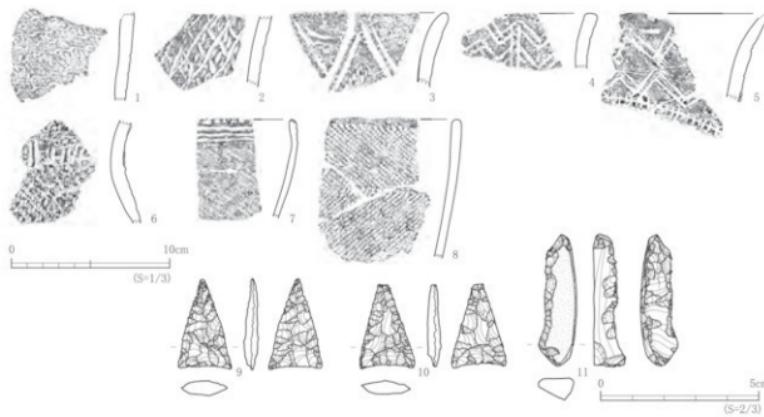


図	区	層	特徴	特徴	層	写真						
1	F-11北	Vla層	滑沫	RL船形磚文	R574	48-15						
2	F-11北	Vla層	滑沫	LH+RR付加条縞文か	R573	48-16						
3	F-11北	Vla層	滑沫	LH横文→手執竹管による山形状沈澱文	R577	48-17						
4	F-11中央	Vla層	滑沫	大波状縞か、手執竹管による矢羽羽状縞文	R576	48-18						
5	F-11中央	Vla層	滑沫	多載竹管による山形状沈澱文→沈澱→連続斜突文	R581	48-20						
6	F-11中央	Vla+b層	滑沫	前縫斜軸文「LLLL」→平行沈澱文、斜帶→手サリ	R580	48-19						
7	F-11北	Vla層	滑沫	平縞(崩み)、平行沈澱文、RL船形	R578	48-21						
8	F-11北	Vla層	滑沫	平縞、RL+LR平行沈澱文(非結構)	R582	48-22						
図	区	層	特徴	特徴	層	写真						
9	F-11中央	貝a層	石器	290	175	45	1.5	珪化瑪瑙石	尖形	平基	G1491	48-23
10	F-11中央	貝a層	石器	270	180	40	1.5	珪化瑪瑙石	先端欠	平基	G1492	48-24
11	F-11北	貝a層	不定形石器	420	110	100	4.1	珪化瑪瑙石	部欠		G1455	48-25

第76図 F-11区Vla層出土土器、石器

#### 4 その他の縄文時代の遺物

##### (1) その他の区のVI層出土遺物 (第77・78図、写真49)

VI層を検出したが、遺物がごくわずかであった調査区の特筆すべき遺物として、縄文土器の深鉢には連続刺突文 (第77図1)・羊歯状文 (第77図3)、浅鉢には沈線文 (第77図5・7)・工字文 (第77図6)、石器には石鎌 (第77図8)・楔形石器 (第77図9)・磨製石斧 (第78図1)・磨石 (第78図2)・敲石 (第78図3)、石製品には円盤 (第78図4)・石刀 (第78図5)・有孔石製品 (第78図6)などがみられる。

##### (2) I～V層出土の縄文時代の遺物 (第79・80図、写真49・50)

I～V層から出土した特筆すべき縄文時代の遺物として、縄文土器の深鉢には羊歯状文 (第79図2)、香炉か壺には三叉文 (第79図3)、壺には雲形文 (第79図5)、土製品には土偶 (第79図6・7)、ドングリ形土製品 (第79図8)、石器には石鎌 (第79図9)、石匙 (第79図10・11)、楔形石器 (第79図12)、不定形石器 (第79図13・14)、磨製石斧 (第79図15・第80図1)、磨石 (第80図2～4)、石製品には石匙状に加工したもの (第80図5)、骨角器は刺突具 (第80図7) がみられる。

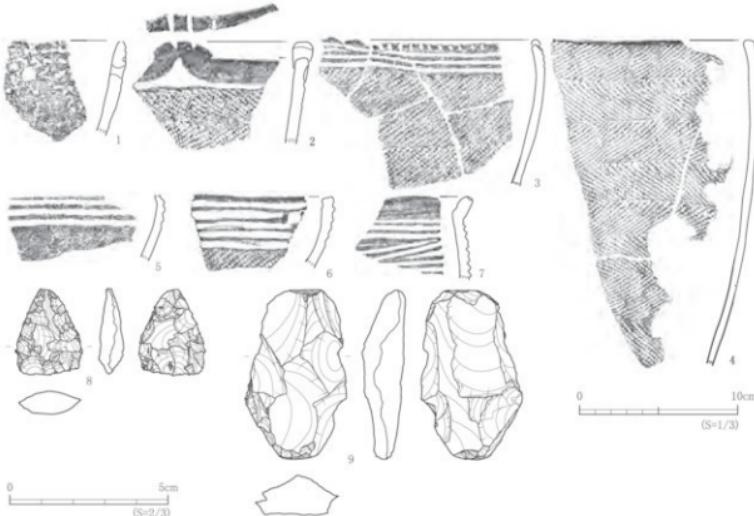


図	区	遺物	型	記	登録	写真
1	F-5 施	Ⅴ層	深鉢	平縁、連続刺突文、RL・縦文、施物化、施物化1箇所	R472	89-1
2	E-71	Ⅴ層	深鉢	山形変動(削人)、RL・LR斜状縫文(青筋)	R457	89-2
3	D-50	Ⅴ層	深鉢	平縁(突起・割み)、手鉈状文、平行沈線文、LR縫文	R8	89-3
4	E-34	Ⅴ層	深鉢	平縁、LR・RL・縦縫文(青筋)	R403	89-5
5	D-40	Ⅴ層	浅鉢	平行沈線文、LR縫文	R1	89-6
6	E-34	Ⅴ層	浅鉢	平縁、工字文(隣面直観)、LR縫文	R402	89-4
7	E-84	Ⅴ層	壺	小水平状か、二重底の浅鉢文(隣面直観)、外面に黒漆多く付着	R458	89-7

図	区	遺物	型	記	登録	写真
8	F-5 施	Ⅴ層	石鎌	270 215 80 36 「貝化施水石」先端欠 アスファルト	R1294	89-8
9	D-40	Ⅴ層	楔形石器	540 325 135 196 「貝化施水石」完形	R62	89-9

第77図 その他の区のVI層出土土器、石器 (1)

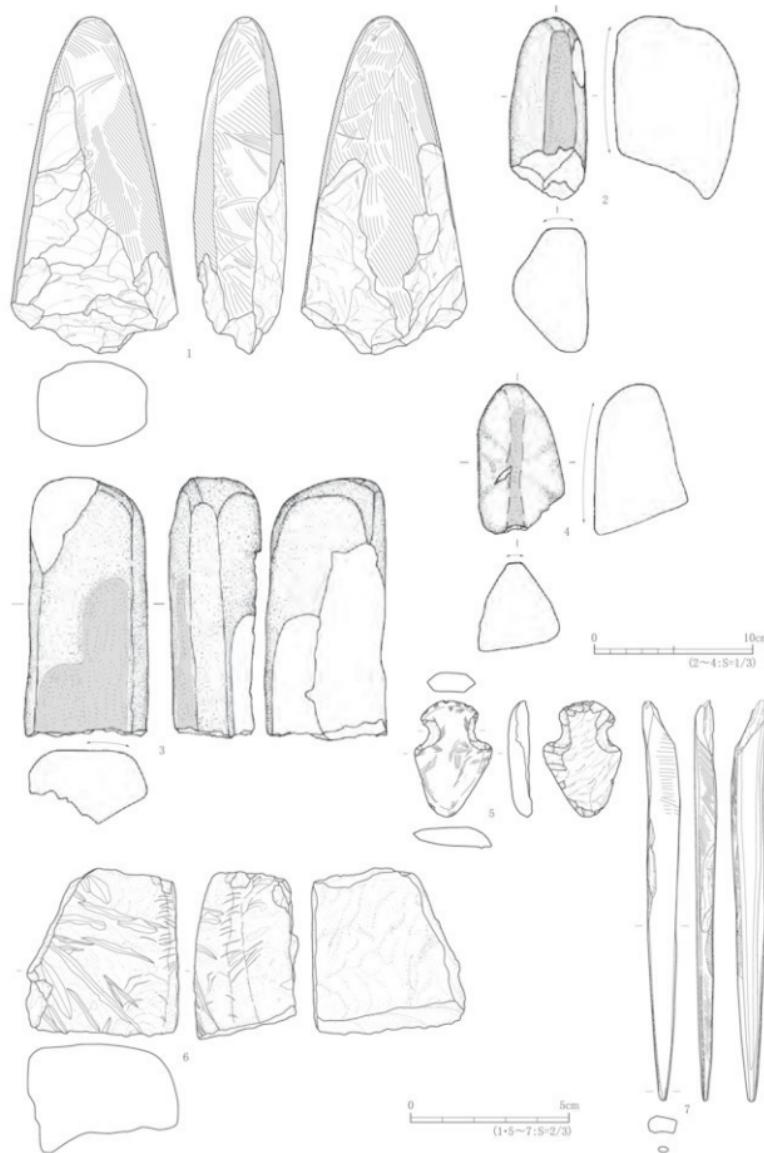


図	区	遺物種	器種	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	石材	残存	特徴	登録	写真
1	F-7	刃器	帶側石斧	32.3	49.2	19.4	64.1	帶刃石	基部欠		E11221	49-10
2	E-74	刃器	帶石	106.7	42.4	7.5	600.0	緑色麻風岩	破片		E11156	49-11
3	F-5 面	刃器	帶石	77.9	72.0	3.2	280.0	帶石	破片	帶石を銀石に利用	E11208	49-12
4	D-50	刃器	打撃	44.9	46.3	1.6	55.5	緑色石	完形		E124	49-14
5	F-5 面	刃器	石刀	105.5	34.0	3.7	71.0	緑色石	破片		E11209	49-15
6	F-7	刃器	有孔石斧頭	45.3	43.0	8.2	21.1	帶刃石	完形	貫通孔	E11216	49-13

第78図 その他の区のVI層出土石器(2)・石製品



第79図 I～V層出土の縄文時代の土器・土製品、石器（1）



第80図 I～V層出土の縄文時代の石器(2)・石製品、骨角器

図	区	遺構/層	記号	特徴	登録	写真
79-1	E-89	複数		手形、北側、V1c層	R466	69-17
79-2	E-91	V層		手形、引込み、手形状文、北側	R462	69-18
79-3	E-93	I層		香か少帝 手形（2個1列の表現）、列頭、二叉文、内側、玉ねぎ二叉文	R464	69-26
79-4	E-25B張	V1c層		洪沢・脛付：上字文（隕石表現）、洪沢上面に円文による「×」字状文（隕石表現）、四脚小	R333	69-24
79-5	E-25B張	複数		手形、北側、北側手形文字、上端幾	R346	69-25
79-6	E-93	I層		手形一列、手さき2cm、二叉文、筋付文によるへの表現、北側による剥離？3人れ？の表現、中天	R463	69-1
79-7	E-25B張	V1c層		手形（右）手さき2cm、洪沢文、LR横文（剥離れ？）、係部との接合部にアスファルト黒漆多く付着（接合痕か）	R342	69-31
79-8	E-25B張	V1c層		手形（左）手さき2cm、横2.1cm、横1.9cm、筋付2.1cm	R383	69-2

図	区	遺構/層	記号	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(㎏)	石材	疾患	特徴	登録	写真	
79-9	E-32	イカク	石器	320	195	7.0	33	具化葉状岩	先端欠	手足	R354	50-4	
79-10	E-34	V層	石器	530	180	7.0	65	具化葉状岩	先端欠	具化の進行が強い	R393	50-6	
79-11	E-34	V層	石器	440	220	7.0	53	具化葉状岩	つまみ足形	疑惑	R395	50-7	
79-12	E-95	I層	複形石器	260	345	14.0	138	具化葉状岩	完形	鈍石英の成分を含む	R1192	50-5	
79-13	E-79	複数		不定形石器	460	270	7.0	53	具化葉状岩	完形	熱熱	R1159	50-9
79-14	E-83	V層		不定形石器	590	290	9.5	14.1	具化葉状岩	完形		R1160	50-8
79-15	E-25B張	V層		骨解剖斧	680	520	15.0	52.0	砂岩	基部欠		R107	50-10
80-1	E-32	イカク	骨解剖斧	107.8	52.0	28.4	206.3	綠色磨吹岩	刃部欠		R363	50-11	
80-2	E-64	I層	骨石	110.0	80.0	52.0	590.0	花崗岩	繊片		R1012	50-12	
80-3	E-36	複数	骨石	164.6	75.8	53.8	1066.0	安山岩	一部欠		R1003	50-14	
80-4	E-64	I層	骨石	81.4	54.9	30.7	377.0	閃紋岩	繊片		R1013	50-13	
80-5	E-54	I層	不明石類物	35.7	27.8	6.3	6.5	綠色岩	完形	エリミの道を6花に施したものか、6花の4輪點	R306	50-15	
80-6	E-89	I層	不明石類物	520	47.5	32.8	1021.0	闇灰岩	繊片	繊維繩は砥石の研磨か	R1180	50-16	

図	区	遺構/層	記号	特徴	登録	写真
80-7	E-25B張	V層		鉄突具 幅0.9cm、厚さ0.6cm、表面はニホンシカ手甲小足骨	骨22	50-17

## 第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

IV層またはV層から掘り込まれていると考えられる遺構である。E区で土坑12基（SK1022～1025、1036～1043）、F区で井戸1基（SE1032）を検出した。

### 1 E区

E-32区

【SK1022】（平面図・断面図：第44・81図）

〔位置・検出面〕 中央部のV1c層上面で検出した。

〔平面・断面形〕 平面形は円形とみられ、断面形は逆台形状である。

〔規模〕 径約1m、深さ約0.3m。

〔堆積土の特徴〕 灰黄褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕 なし

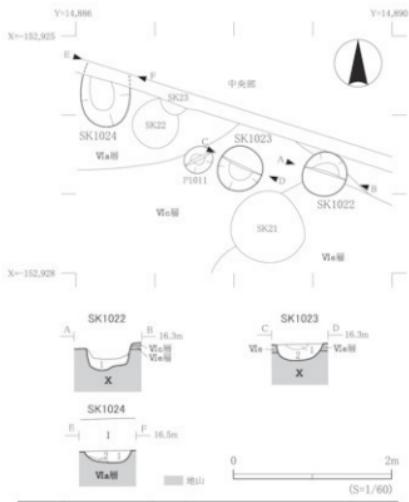
〔年代〕 堆積土の特徴から弥生時代以降とみられる。

【SK1023】（平面図・断面図：第44・81図）

〔位置・検出面〕 中央部のV1c層上面で検出した。

〔平面・断面形〕 平面形は円形で、断面形は逆台形状である。

〔規模〕 径約0.6m、深さ約0.2m。



第81図 E-32区SK1022～1024平面図・断面図

〔堆積土の特徴〕 2層に細分できる。灰黄褐色シルトとにぶい黄褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕 繩文土器の深鉢がある。

〔年代〕 堆積土の特徴から弥生時代以降とみられる。

【SK1024】(平面図・断面図: 第44・81図)

〔位置・検出面〕 中央部のVla層上面で検出した。

〔平面・断面形〕 平面形は楕円形とみられ、断面形は皿状である。

〔規模〕 東西約0.6m、南北0.6m以上、深さ約0.2m。

〔堆積土の特徴〕 2層に細分できる。黒褐色砂とにぶい黄褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕 繩文土器の深鉢がある。

〔年代〕 堆積土の特徴から弥生時代以降とみられる。

【SK1025】(平面図・断面図: 第44・82図)

〔位置・検出面〕 中央部のV層上面で検出した。

〔平面・断面形〕 平面形は円形で、断面形は逆台形状とみられる。

〔規模〕 径約0.6m、深さ約0.3m。

〔堆積土の特徴〕 黒褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕 繩文土器の深鉢がある。

〔年代〕 弥生時代以降とみられる。

E-91区 (平面図・断面図: 第83図、写真12)

確認調査区のため、SK1036を除いて掘り下げは行わなかった。

【SK1036】(平面図・断面図: 第83図、写真: 道構12)

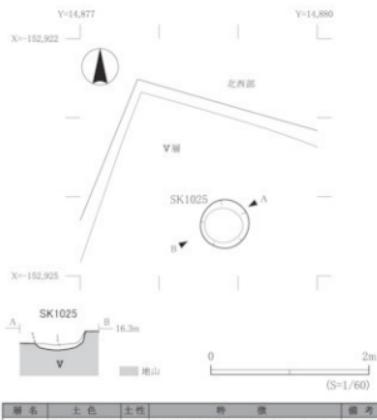
〔位置・検出面〕 北部のV層上面で検出した。

〔平面・断面形〕 平面形は楕円形で、断面形は皿状である。

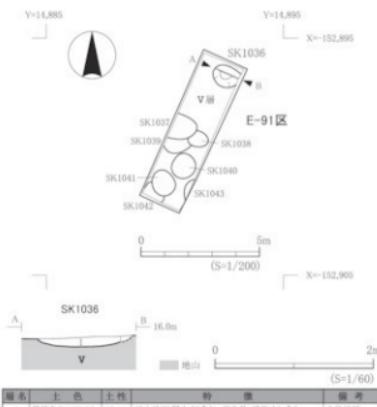
〔規模〕 東西約1.2m、南北約1m、深さ約0.2m。

〔堆積土の特徴〕 黒褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕 繩文土器の深鉢がある。



第82図 E-32区SK1025平面図・断面図



第83図 E-91区道構配置図、SK1036断面図

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1037】(平面図:第83図、写真:造構12)

〔位置・検出面〕中央部のV層上面で検出した。

〔重複関係〕SK1038・1039と東部・南部で重複し、これらより新しい。

〔平面形〕楕円形とみられる。

〔規模〕東西約1.1m以上、南北約1.1m。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1038】(平面図:第83図、写真:造構12)

〔位置・検出面〕中央部のV層上面で検出した。

〔重複関係〕SK1037・1039と西部で重複し、SK1037より古くSK1039より新しい。

〔平面形〕楕円形とみられる。

〔規模〕東西約1m以上、南北約0.7m。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1039】(平面図:第83図、写真:造構12)

〔位置・検出面〕中央部のV層上面で検出した。

〔重複関係〕SK1037・1038と北部・東部で重複し、これらより古い。

〔平面形〕円形か楕円形とみられる。

〔規模〕東西約1.2m以上、南北約0.7m以上。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1040】(平面図:第83図、写真:造構12)

〔位置・検出面〕中央部のV層上面で検出した。

〔平面形〕円形である。

〔規模〕径約1m。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1041】(平面図:第83図、写真:造構12)

〔位置・検出面〕南部のV層上面で検出した。

〔重複関係〕SK1042と南部で重複し、これより新しい。

〔平面形〕円形である。

〔規模〕径約1.1m。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1042】(平面図:第83図、写真:遺構12)

〔位置・検出面〕南部のV層上面で検出した。

〔重複関係〕SK1041と北部で重複し、これより古い。

〔平面形〕円形とみられる。

〔規模〕径約0.9m以上。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

【SK1043】(平面図:第83図、写真:遺構12)

〔位置・検出面〕南部のV層上面で検出した。

〔平面形〕不明である。

〔規模〕南北約0.9m以上、東西約0.3m以上。

〔堆積土の特徴〕褐色砂が自然堆積する。

〔遺物〕なし

〔年代〕弥生時代以降とみられる。

## 2 F区

### F-7区

【SE1032】(平面図・断面図:第84図、遺物:第85図、写真:遺構15・遺物51)

〔位置・検出面〕南部のV層上面で検出した。

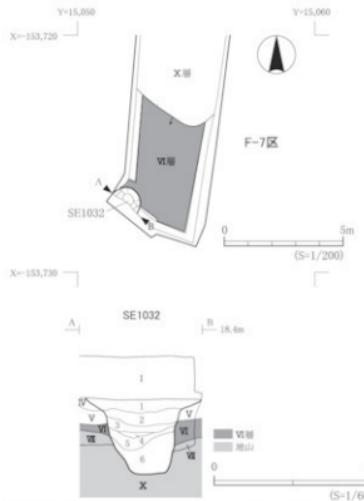
〔平面・断面形〕平面形は円形とみられる。断面形は逆台形状である。

〔規模・構造〕素掘りのもので、上部径約1.5m、下部径約0.4m、深さ約0.9m。

〔堆積土の特徴〕6層に細分できる。黒褐色粘土やシルト・灰黄褐色シルトなどが自然堆積する。

〔遺物〕石鉢(第85図1)がある。

〔年代〕中世以降と考えられる。



層名	土色	土性	特徴
1	こげ茶褐色の砂質土	シルト	粘性やせらぎ、しわ張り、小窓(V層かX層か未だまづ)
2	灰褐色(沙質土)	シルト	粘性やせらぎ、しわ張り、小窓(V層かX層か未だまづ)
3	灰褐色の砂質土	粘土シルト	柔軟な、しわ張り。
4	灰褐色の砂質土	シルト	柔軟な、しわ張り。
5	灰褐色の砂質土	粘土	柔軟な、しわ張り、小窓(V層かX層か未だまづ)
6	墨褐色の砂質土	粘土	柔軟な、しわ張り。

第84図 F-7区SE1032平面図・断面図



第85図 F-7区SE1032出土石製品

### 3 その他の弥生時代以降の遺物（遺物：第86図、写真：遺物51）

I～V層などから出土した特筆すべき弥生時代以降の遺物として、弥生時代の青木畠式の高坏（第86図1・2）・古代の平瓦（第86図3）がある。

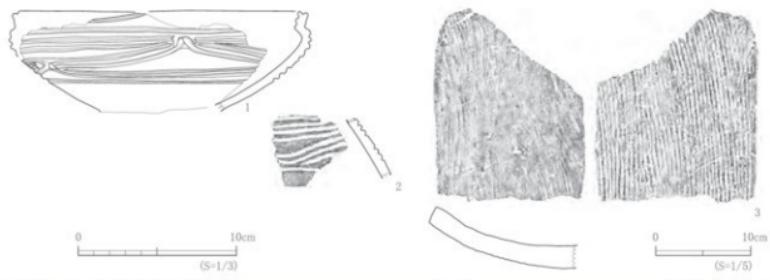


図	区	遺構	層	特徴	部屋	写真
1	I-25北段	I層	高坏	I1号 (186cm、山形突起)、先端下部3段目2段(丸窓表現)	R347	51-2
2	I-25東段	V層	高坏	平行波文、底板の波紋文か、外側に水道多く付着	R343	51-3
3	I-1	I層	平瓦	厚さ19-24mm、凹面・チリ消し、凸面・丸タキ。系切り痕、側面・ハラケズリ	R471	51-4

第86図 I～V層出土の弥生時代以降の土器、瓦

## 第V章 総括

遺物・遺物包含層（VI層）・遺構の順に検討し、その形成環境について総括する。前章で述べた年代観をもとに縄文時代と弥生時代以降に大別して記述する。

ただし、平成21・22年度調査とそれ以降も行われる隣接地区の調査でさらに資料が増加することが見込まれるため、一定の調査が終了した時点で、分類・群・期などの設定をまとめて行う方針である。したがってここでは、遺物の種類別に特徴を紹介するにとどめる。

### 第1節 縄文時代

#### 1 遺物

多い順から縄文土器・土製品、石器・石製品、動物遺存体、骨角牙製品、木製品となるが、骨角牙製品と木製品はわずかである。時期別にみると、縄文時代の前期初頭から前期前葉のものが整理用平箱で12箱（E64・F-8～11区VI層）、中期末葉のものが3箱（E-1区VId層）、晚期後葉から末葉のものが55箱（D-41・E-25・36・37区VI層）、このほか早期中葉・早期後葉・後期後葉・晚期前葉・晚期中葉のものがあわせて1箱ある。

以下では、VI層から出土した遺物を中心とする、A.前期初頭から前葉、B.中期末葉、C.晚期後葉から末葉の遺物の特徴について、代表例を示しながら記述する。ただし、これらの遺物は土砂などとともに流されてきたものが大半であるので、上記の各時期を前後する遺物が混在している可能性もある。

なお、石器・石製品について、伴出した土器から上記の時期のいずれかに属するとみられるが、遺物の特徴から時期を限定することが難しいので、一括して器種ごとに述べることとする。

##### （1）土器・土製品

###### 1) 土器

###### A 前期初頭から前期前葉

###### a 器種

深鉢・鉢がある。ただし、いずれも小破片で全体を復元できる個体ではなく、器形がある程度推定できるのは2点の鉢のみである（第56図38、第68図11）。

###### b 器形

2点の鉢の口径は17cm程度である。深鉢もしくは鉢の器形は底部から口縁部にかけて緩やかに外反する。他に体上部から口縁部にかけて内済したり、くびれて外反したりする例もある。口縁部の形状は平縁・波状・山形と大別できる。平縁には刻み、波状には大小があるなど多様である。底部は全て平底で、確実に丸底であるものは確認できなかった。なお、器面調整にはナデ、ミガキ、ケズリがみられるが、摩耗している小破片が多いため、その単位は明確でない。

###### c 文様・地文

施文範囲の詳細が不明なため、文様・地文のみを一括して述べる。ほとんどが小破片のため、一個体における施文の種類や組み合わせは明確にできなかった。

###### i 文様

沈線文、（連続）刺突文、隆線文、貼付文がある。沈線文、刺突文を施すものが比較的多く、貼付文、

隆線文は少ない。沈線文は山形状（第70図15）・菱形状（第70図17）を基調としたものが多い。貼付文は紐状（第56図12）や鎖状（第70図25）がみられる。貼付文の上にさらに刻みを施す例もみられる（第68図8）。隆線文（第56図32）は工具や指を用いて器面から直接作出手する。

施文具には竹管状工具、ヘラ状工具、棒状工具、櫛歯状工具がみられる。竹管状工具にはそれぞれ分割角度の違う円形竹管（第70図23）・半截竹管（第70図15）・多截竹管（第61図12）があるが、半截竹管がほとんどである。ヘラ状工具は先端が薄い板状になるもの（第64図4）、棒状工具は断面が丸状となる丸棒（第56図8）と角張る角棒状（第70図14）がみられる。櫛歯状工具は先端が複数に分かれたもので、多数の線が同時に施文される（第56図37）。

## ii 地文

### ① 繩文

撚紐の原体をそのまま回転させた縄文には斜行縄文・羽状縄文がある。原体の撚りは単節のLRとRLがほとんどで前者が多い。また条の幅に対して節が細くなる0段多条と推測できる例が非常に多くみられる。これら原体の回転方向は横位がほとんどである。施文幅と回転方向を一定にし、整然と施すことでのその条の集合が斜（第56図2）・羽状（第67図3）・菱形状（第69図2）に表現される。羽状と菱形状の羽状縄文には、原体が単独であるもの（非結束）と2本結束したもの（第61図5）があるが、前者がほとんどである。

また撚紐の原体の一部に変化を加えた縄文や、付加物のある縄文を回転させたものには、末端ループ文、側面ループ文、結節縄文、付加条縄文、組紐（第76図6）がある。原体の回転方向は横位がほとんどである。末端ループ文は単節のLRとRLで0段多条と推測できる例が多い。ループ部分だけを密接に施文する「重層」ループ文（第68図6）が側面ループ文（第67図4）とともにみられる。撚紐の結節には結節斜行縄文（第76図1）と結節部分のみ（第70図6）がみられる。ただし小破片では結節部分のみと絆条体による不整撚糸文・S字状連鎖沈文との明確な区別は難しいので、後者が含まれている可能性もある。付加条縄文には、付加条が格子目に現れ、その中に軸の縄の条が細切れで現れている例がみられる（第64図2）。なお、他には装飾としての押圧縄文（第55図8）がみられる。

### ② 撫糸文

短軸絡条体をそのまま回転させたものには、撫糸文（第55図10）、不整撫糸文（第56図21）、S字状連鎖沈文（第62図6）、木目状撫糸文（第56図31）、瓦状撫糸文（第56図26）、網目状撫糸文（第55図14）がみられる。ただし、小破片では不整撫糸文・S字状連鎖沈文と結節縄文の結節部のみとの明確な区別は難しいので、後者が含まれている可能性もある。原体の撚りは0段と1段がみられ、後者が多いようであるが、小破片では1段が撚り戻ったものと0段との明確な区別は難しい。原体の回転方向は継位と横位があり、後者がほとんどである。巻き方には条間を密接にする例と開ける例があり、前者が多い。後者には2条を1組（第56図31）、3条を1組（第56図23）にして巻く例もみられる。なお、他には装飾としての撫糸圧痕文（第55図12）がみられる。

## B 中期末葉

### a 器種

全体を復元できる個体はなく、器形がある程度推定できるのは2点の深鉢（第10図6・12）のみである。

### b 器形

深鉢2点の口径は25cm、29cmである。器形は体部中央付近が張り、口縁部にかけて緩やかに外反する。他に体上部から口縁部にかけて直立気味になる例や内湾気味になる例もみられる。口縁部の形状は平縁・波状に大別でき、環状把手が付く例もある。この環状把手の直下には連続刺突を施すものがある。底部は平底である。なお器面調整について、ナデ、ミガキ、ケズリがみられる。

### c 文様・地文

#### i 文様

縄文部を無文部や沈線・隆線で区画する「区画文」がある。区画文には方形（第10図6）、「S」字状（第10図12）がみられる。区画文は半截竹管による沈線で区画した後、区画内に縄文を充填し、さらに沈線を引き直したとみられるものが多い。無文部は丁寧に磨かれる。縄文の全面施文→沈線文→磨り消しという狭義の「磨消縄文」は認められないようである。各無文部との交点に鱗状の隆帯が付されるもの（第10図6）もみられる。

#### ii 地文

撚紐による縄文と絡条体による撚糸文があるが、後者はわずかである。撚紐による縄文は斜行縄文がある。原体の撚りは単節のLRとRLがほとんどで、後者がやや多い。複節（第10図8）はわずかである。また単節の0段多条と推測できる例（第10図2）がわずかにある。原体の回転方向は綴位か斜位がほとんどである。撚糸文には斜行撚糸文（第10図14）がみられる。

### d E-1区Vld層出土土器の特徴

E-1区Vld層出土土器は下位のIX層（地山）と上位のVlc層が無遺物層であること、廃棄の原位置をおおよそ留めているとみられることから、時期がある程度まとまっていると考えられる。

そこで以上で述べた諸特徴を東北地方南半域の縄文時代の土器編年の中で検討すると、「大木10式」（山内1937）の「後半期」（宮城県教育委員会1988、森2008など）に比定することができる。石巻市細谷B遺跡第II類（宮城県教育委員会2006）、石巻市山居遺跡第VII群（宮城県教育委員会2007、相原2009）、松島町西ノ浜貝塚Aトレンチ第4層（宮城県教育委員会1967・松島町教育委員会2008）におむね対応すると考えられる。

## C 晩期後葉から末葉

### a 器種

全体の器形を復元できる28点の器高と口径の比を分析した（第87図）。ただし、台や脚が付いた土器の器高はそれを除いたものである。このグラフによると、資料は平成19年度調査資料と同様に、器高/口径=1/1以上とそれ以下に大別できる。そこで本報告でも器高/口径=1/1以上を深鉢、それ以下

を浅鉢と区別するに留めておくが、深鉢は大型品と小型品にさらに細分できる可能性がある。他には壺・蓋・注口土器があるが、注口土器と蓋は全体を復元できる個体はない。また、器高・口径ともに5cm以下の土器は「ミニチュア」の土製品として区別した。なお、破片は器形や文様などの特徴から、以上で区分した器種をもとに推定した。

#### b 器形と文様・地文

##### 【深鉢】

口縁部の形状から大きく2つに分けられる。

##### I類 口縁部が内湾するもの（第88図1～5）

器形は平底の底部から平縁の口縁部まで緩やかに内湾する。

沈線や隆線による工字文や変形工字文などの文様が施される例は確認できなかった。縄文は斜行縄文がほとんどで羽状縄文はわずかである。原体は撫紐による縄文である。原体の撫りは単節のLRとRLがほとんどで前者が多い。無節・付加条はわずかである。回転方向は横と斜めがほとんどで、施文幅と回転方向と同じくして器面全体に施されるものが多い。

なお、第88図5は無文の深鉢で器壁が薄く、外面は輪積み痕や被熱痕、内面は粗いケズリ調整がみられる。東松島市里浜貝塚出土の製塙土器の特徴と共通する（東北歴史資料館1983）。

##### II類 口縁部が直立または外反するもの（第88図6～16）

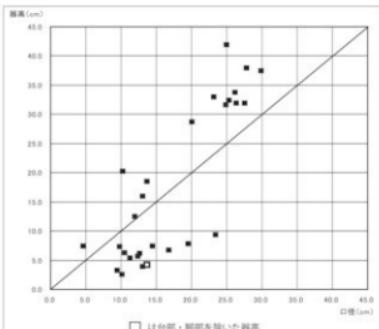
口径約12～14cmで器高が約13～19cmの小型品（第88図6～11）と、口径約20～30cmで器高約29～42cmの大型品（第88図12～16）とに細分できる可能性が高い。器形は底部から口縁部まで緩やかに外反する例（第88図12・16）と丸みをもつて上部で屈曲し、口縁部が直立・外反する例がある（第88図6～11・13～15）。底部は全て平底である。口縁部は平縁・波状縁・山形突起と大別できる。山形突起はわずかで、1単位=1山と1単位=2山がみられる。

文様には工字文、横と斜めの沈線文がみられる。棒状またはヘラ状工具で線を描いた後、文様帯にミガキを施す。沈線内をさらに連続刺突する例もある。小型品に比較的多くみられる。縄文は斜行縄文がほとんどで羽状縄文が少しみられる。原体の撫りは単節のLRとRLがほとんどで前者が多い。無節・複節はわずかである。回転方向は横と斜めがほとんどで、施文幅と回転方向と同じくするものが多い。

器形と文様・縄文の施文範囲について、(i) 器面全体が縄文、(ii) 口縁部が無文でそれより下部は縄文、(iii) 口縁部や体上部が文様帶でそれより下部は縄文、がみられる。器形と施文範囲の関係をみると、I類は(i)、II類は(i)(ii)となる例が多い。

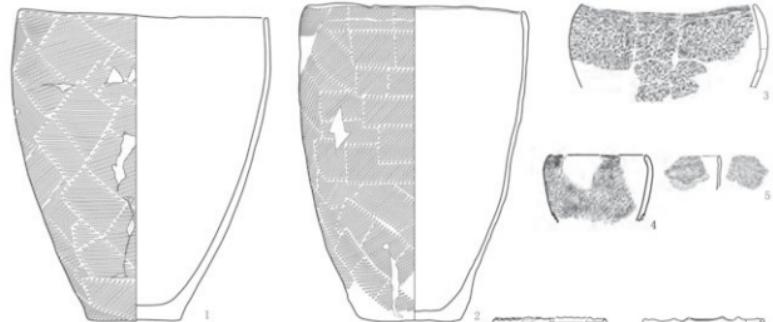
##### 【浅鉢】

口縁部の形状から大きく2つに分けられる。



第87図 復元土器の器高と口径（晩期後葉～末葉）

〔深鉢Ⅰ類〕



〔深鉢Ⅱ類〕



第88図 深鉢の種類（晩期後葉～末葉）

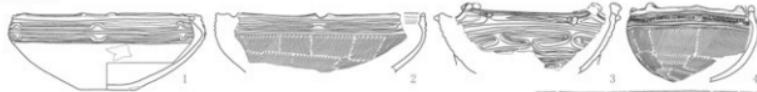
I類 口縁部が内湾または内に屈曲するもの（第89図1～4）

器形は底部から口縁部まで緩やかに内湾する例、体部と口縁部の文様帯との境で内に屈曲する例がある。底部は平底である。脚付（第89図3）もみられる。口縁部は平縁と山形突起に大別できる。山形突起は1単位=1山と1単位=2山とがみられる。一個体に1種類の例がほとんどで（第89図1～3）、2種類を組み合わせる例（第89図4）は少ない。

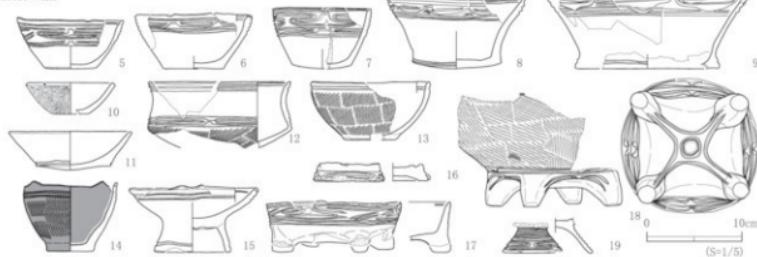
文様には工字文、沈線文がみられる。工字文、沈線文は棒状またはヘラ状工具で線を描いた後、ミガキを施す。沈線内をさらに連続刺突する例もある。縄文は斜行縄文である。原体の撚りは単節のLRとRLがほとんどで、前者が多い。原体の回転方向は横と斜めがほとんどで、施文幅と回転方向を同じくするものが多い。

文様と縄文の施文範囲について、前述した（註）口縁部や体上部が文様帶でそれより下部は縄文、

〔浅鉢 I類〕

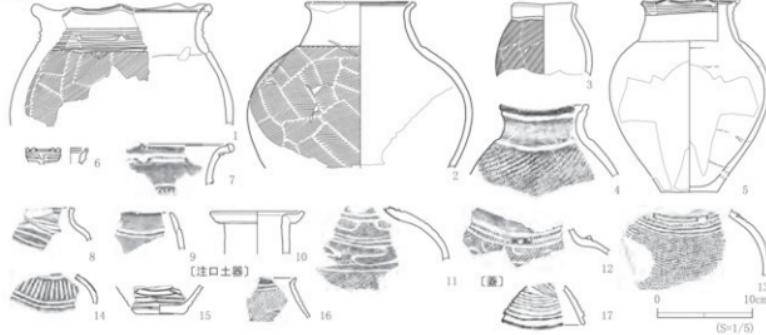


〔浅鉢 II類〕



第89図 浅鉢の種類（晩期後葉～末葉）

〔壺〕



第90図 壺・注口・蓋の種類（晩期後葉～末葉）

のほか、(iv) 口縁部や体上部が文様帶でそれより下部は無文、(v) 器面全体が文様帶、となる例がある。

## II類 口縁部が直立または外反するもの（第89図5～17）

I類と比較して小型品が多い。器形は底部から口縁部まで緩やかに外反する例（第89図5～11・15～17）、丸みをもつ体上部から屈曲し口縁部が直立・外反する例（第89図12～14）がある。底部は平底であるが、緩やかに丸味を帯びる例もみられる（第89図7・8・11）。その底に台（第89図15）・四脚（第89図17）が付く例もみられるほか、他と比較して器高が低い「皿」状となる例もある（第89図16）。口縁部のほとんどは平縁で山形突起がわずかにある。山形突起は1単位=1山と1単位=2山がみられる。

文様には工字文、横と斜めの沈線文がみられる。工字文、沈線文は棒状またはヘラ状工具で線を描いた後、ミガキを施す。縄文は斜行縄文である。原体の撚りは単節のLRとRLがほとんどで、前者が多い。無節がわずかにある。原体の回転方向は横と斜めがほとんどで、施文幅と回転方向を同じくするものが多い。

文様と縄文の施文範囲について、前述した(i) 器面全体が縄文、(ii) 口縁部が無文でそれより下部は縄文、(iii) 口縁部や体上部が文様帶でそれより下部は縄文、(iv) 口縁部や体上部が文様帶でそれより下部は無文、のほか、(vi) 無文もみられる。(iii)・(iv) が多く(i)・(ii)・(vi) はわずかである。なお第89図14は内面の表面に漆の縮み皺がみられる漆容器である。

一方、分類は不明であるが、台部や底部外面に文様帶がある例もみられる（第89図18・19）。

## 【壺】（第90図1～15）

全体を復元できる個体は1点のみである。器形は底部から頸部まで緩やかに内湾し、頸部から口縁部にかけて緩やかに外反する（第90図5）。他に、口縁部が外反する例（第90図1～4・6～8）、口縁部が内傾する例（第90図9）、直立→外反する例もみられる（第90図10）。これらは体上部が最大径となるようである。底部は平底である。口縁部の形状は平縁・山形突起に大別できる。山形突起は1単位=1山が多く、1単位=2山は少ない。

文様は工字文、縱横斜めの沈線文、雲形文がある。工字文、沈線文は棒状またはヘラ状工具で線を描いた後、ミガキを施す。雲形文は縄文→沈線文→磨り消しという狹義の「磨消縄文」である。縄文は斜行縄文である。原体の撚りは単節のLRとRLがほとんどで、前者が多い。付加条がわずかにある。原体の回転方向は横と斜めがほとんどで、施文幅と回転方向を同じくするものが多い。

文様と縄文の施文範囲について、前述した(iv) 口縁部や体上部が文様帶でそれより下部は縄文、のほか、(ii) 口縁部から頸部が無文でそれより下部は縄文、となる例がみられる。

## 【注口土器】（第90図16）

口縁部がある。形状は平縁に刻みが付く。雲形文がみられる。

## 【蓋】（第90図17）

横や斜めの沈線が施文される。

### c 工字文・変形工字文の種類（第91図）

前述した「工字文」・「変形工字文」には、以下の種類がみられる。

#### i 入組工字文（第91図1）

体部に連続した工字文が隆線で表現される。

#### ii 平行沈線と刺突文（第91図2）

平行沈線を刺突で区切った例で、i・iiiのいずれかを簡略にしたとみられる。隆線表現である。

#### iii 匹字文（第91図3～16）

平行沈線と平行沈線を台形状に彫去した残存部が、漢字の「匹」字状の隆線となる。「匹」字の交点部が瘤状突起となる例や沈線の中を連続刺突する例もみられる。連続した「匹」字が表現される方向には、1.下向き（第91図3～5）、2.上向き（第91図6～8）、3.上下対向（第91図9）、4.上下交互（第91図11・12）がある。なお第91図10はメガネ状となる。上下対向の匹字文が変形したものか。

#### iv 三角形状の匹字文（第91図13～16）

「変形匹字文」とも呼ばれる（鈴木1988）。匹字を作る際の平行沈線を途中で折り返して三角形状にした沈線部と、平行沈線を台形状に彫去した残存部が隆線となり、三角形状の匹字が隆線表現される（主文様）。「匹」字の交点部が瘤状突起となる例がわずかにある。匹字を描いた後に、さらにその外側を横・斜の沈線で三角形状に縁取る例もみられる。この匹字文は連続して描かれる例と、匹字文（主文様）の間に沈線表現の斜線・弧線（副文様）を入れる例がある。また、匹字文の下に下向きの匹字文を配する例もある（第91図15）。

#### v 変形工字文（第91図17）

沈線表現で三角形を繋ぎあわせた文様である。「匹」字の交点部が瘤状突起となる例がみられる。

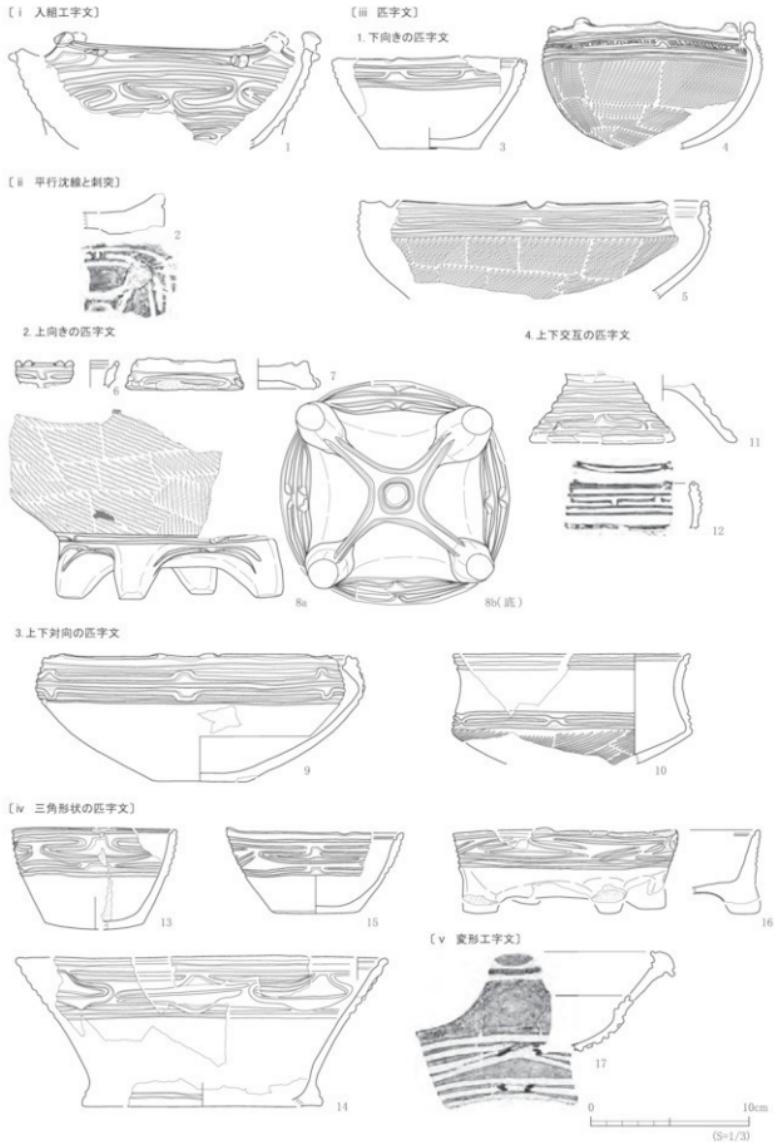
本報告資料では、ほとんどがiiiで、i・ivが少し、ii・vはわずかである。

なお、iは山内清男が大洞諸型式を設定した時のA式、vは大洞A'式にあたる（山内1930）。ii～ivは氏がその後に細分した大洞A1・A2・A'式のいずれかにあたるが（山内編1964）、その具体的な内容と比定については諸説あり、議論されている（藤村1980・飯塚1980・鈴木1987・中村1988・設楽1991など）。

### d E-25区Vib層出土一括廃棄土器の特徴

E-25区西部から拡張部のd層上部で廃棄の原位置を留めると考えられる土器を14個体分検出した（第23図）。出土状況から一括して廃棄された可能性が高い。したがって以下ではこの土器群の編年的な位置付けについて、その特徴を示し分析してみたい（第24～27図）。

Vib層出土一括廃棄土器の器種には深鉢・浅鉢・壺がある。深鉢はI・II類がある。口縁部は平縁・小波状縁・山形突起がある。I類には前者、II類には後者が多い。II類について刻みのある平縁はみられない。底部は平底である。文様について、地文だけのものがほとんどで、口縁部から体上部に文様帯があるものはわずかである。地文は撚紐による縄文で斜行縄文がある。羽状縄文はみられない。原体の撚りは単節LRとRLがある。地文以外の文様は文様帯に沈線や工字文のiiiが表現されるものがある。



第91図 工字文・変形工字文の種類

浅鉢はⅡ類が1点ある。口縁部は山形突起（1単位2山）、底部は平底である。文様は口縁部から体上部に文様帯があり、それより下部は無文となる。文様帯に工字文の畠がみられる。

壺について、口縁部は平縁で、器形は体下部から頸部まで緩やかに内済し、頸部から口縁部にかけて緩やかに直立気味に外反する。体上部が最大径となるようである。地文は撚紐による繩文で斜行繩文がある。原体は付加条である。文様帯はみられない。

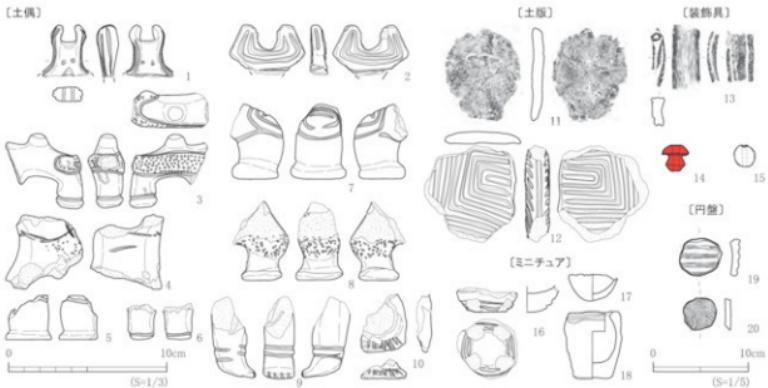
以上の諸特徴を東北地方南半域の繩文時代の土器編年の中で検討すると、これらは「大洞A式」（山内1932）、「晚期5期」（須藤1998）に比定することができ、栗原市山王廻遺跡Vc-lm・n~Va・k層（伊藤・須藤1985・須藤1998）におおむね対応すると考えられる。

## 2) 土製品（第92・93図）

土偶、土版、装飾具、ミニチュア、円盤、ドングリ形土製品がある。ほとんどがE-25区VI層出土である。

### 【土偶】

全体を復元できる個体はないが、晩期後葉から末葉のものは「結髪文土偶」「刺突文土偶」（会田1979）の一部とみられる。頭頂部の突起（第92図1・2）、腕（第92図3）、腰（第92図4）、脚（第92図5~10）がある。またI層出土には第93図1があり、鋸歯文や三叉状文の特徴から後期後葉のも



第92図 土製品の種類（1）（晩期）



第93図 土製品の種類（2）（その他 繩文時代）

のとみられる。

#### 【土版】

全体を復元できる個体はない。第92図11は上部中央やや左に切れ目がある。その形状から手か足を模したものか。第92図12は表裏の「コ」字状の沈線、側面の沈線の特徴から晩期後葉から末葉のものとみられる。米田の分類「第6類」にあたる（米田1995）。

#### 【装飾具】

腕輪と耳飾がある。第92図13の腕輪か耳飾は三叉文の特徴から晩期前葉のものとみられる。第92図14の耳飾は赤漆塗りで中央に貫通孔がある。第92図15は中央に貫通孔がある土玉である。装飾具の部品か。

#### 【ミニチュア】

中期末葉、晩期後葉から末葉の遺物とともに出土した。中期末葉のものは深鉢形（第93図4）と丸底の底部に三脚が付く鉢形（第93図5）がみられる。晩期後葉から末葉のものは深鉢形（第92図18）と浅鉢形（第92図16・17）がある。第92図16は丸底状の底部に四脚が付き、体下部には平行沈線がみられる。

#### 【円盤】

前期初頭から前葉（第93図6）、晩期中葉から後葉（第92図19・20図）の遺物とともに出土した。径2.5~3.5cm、厚さ0.5~1cmほどで、深鉢または浅鉢の口縁部や体部片が再利用されている。

#### 【ドングリ形土製品】

E-25区V層出土である。梢円球形で中央に非貫通孔がある。外面全体にドングリを模したと考えられる文様がみられる（第93図7）。

### （2）石器・石製品

石器・石製品は、平成19年度調査で379点、平成20年度調査で1517点の計1895点が出土した（第2表）。全体の約5割がE-25区VI層から出土したものである。平成20年度調査で多くの資料を得られたため、第223集で掲載した少量の平成19年度調査資料とあわせて、以下で検討する。

#### 1) 石器

##### A 器種

1846点出土した。うちトゥール類が619点、剥片・石核が1227点ある。器種について、剥片石器には石鎚、尖頭器、石槍、石錐、石匙、石箒、打製石斧、楔形石器、板状石器、不定形石器、磨製石器には磨製石斧、環状石斧、礫石器には石皿、磨石、凹石、砥石、敲石がみられる。

##### a. 剥片石器

##### 【石鎚】（第94図1～7）

43点ある。二次加工で尖頭部を作出する。先端は薄く扁平となる。「尖頭器」よりも小型である。長さ約20~40mm、幅約10~20mm、厚さ約3~9mmである。幅が長さより大きくなるものはない。基部の形状によって以下のように分類できる。

第2表 石器・石製品の出土状況（1）

卷之三

第22表 石器・石製品の出土状況(2)

A類 突出するもの（凸基有茎）

14点ある。基部の両側辺に抉りを入れて茎を作る。抉りの深いものと浅いものがある。後者が多い。

B類 直線的であるもの（平基）

11点ある。無茎で平基となる。基部を直線的に調整する。両側辺が直線的であるものと、外湾するものがみられる。前者がほとんどである。

C類 逆「四」形となるもの（凹基）

8点ある。無茎で凹基となる。基部に抉りを入れ、2個の逆刺しを作出する。基部の抉りが浅いものと、基部の抉りが深いものがみられ、前者がやや多い。

D類 半円形であるもの（円基）

3点ある。無茎で円基となる。基部を半円形に調整する。

以上のはかに、未製品と考えられるものが7点ある。両側辺が非対称なもの、一部が極端に厚いも

〔石鋸〕

A類



B類



C類



D類



〔尖頭器〕

8

11

12

13

14

17

18

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔石鋸〕

10

11

12

13

14

17

18

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔石椎〕

9

15

16

17

18

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔石椎〕

15

16

17

18

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔打製石斧〕

13

14

15

16

17

18

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔板状石器〕

18

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔板状石器〕

19

20

21

0

10cm

(S=1/3)

〔不定形石器〕

のがみられる。

【尖頭器】(第94図8)

2点ある。無茎で凹基となる。基部に抉りを入れ、2個の逆刺しを作出する。石鎚より大型で長さが40mmを超えるもの。

【石槍】(第94図9)

2点ある。二次加工で器面全体を加工して尖頭部と基部(茎部)を作出し、断面が凸レンズ状をしているものである。尖頭部が弧状、基部の端部が直線状に加工されている。

【石錐】(第94図10・11)

13点ある。二次加工で尖頭部を作出する。先端は厚い。尖頭部(つまみ部)の数が2つであるものと、尖頭部が1つであるものの2種がみられる。

【石匙】(第94図12~14)

19点ある。両側辺に抉りを入れてつまみ部を作出する。先端部(刃部)の加工は表裏両面と片面のみがある。つまみ部に対して先端部が縦方向に長いもの(縦型)と、つまみ部よりも先端部が横方向に長いもの(横型)の2種がみられる。

【石鎧】(第94図15)

20点ある。一端に長軸(器軸)方向に直交する刃部を作出する。長さ約40~70mm、幅約30~40mm、厚さ約10~20mmで、長軸を中心とした左右対称の形状をしている。

【打製石斧】(第94図16)

1点ある。刃部を含めた全体を打ち欠いて整形している。基部の幅が刃部と比べてやや狭い。

【楔形石器】(第94図17)

24点ある。両極打法で作られたもので、両端に剥離面が認められる。長さ約20~55mm、幅約20~40mm、厚さ約5~20mmである。

【板状石器】(第94図18)

1点ある。粘板岩の堆積面の層を利用し、薄く剥がすように叩いて平坦面を作出する。縁辺部は六角形状に打ち欠いて整形している。縦横約100mmである。

【不定形石器】(第94図19~21)

89点ある。二次加工が施された打製石器の中で、上記の定型的な石器(未製品を含む)に該当しないものを不定形石器とした。大きさは長さ・幅ともに10~70mm、厚さ4~18mmで、形状は扁平なもの、細長いもの、尖頭状の部分を有するもの、一部に抉りを有するものなど多様である。

b. 磨製石斧

【磨製石斧】(第95図1~3)

37点ある。両面を研磨して末端に刃部を形成しているものである。破片が多く全体を復元できる個体はわずかである。形態は、基部がやや尖り厚さと幅が等しくなるものと、基部が尖らず扁平なもののがみられる。

【環状石斧】(第95図4)

1点ある。半分欠損している。中央孔は貫通していない。

c. 破石器

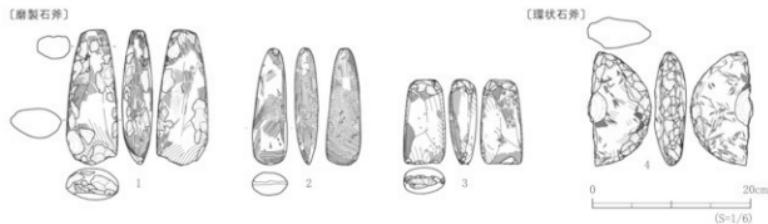
平坦あるいは緩やかに窪む磨面がみられるものを石皿とし、他は使用痕によって器種を大別した。使用痕による器種決定にあたり、1つの石器に複数の使用痕があるものは最も新しい方の使用痕を、その新旧が不明のものはより広範囲の方の使用痕を重視した。ただし、1つの石器が複数の目的で使用されることもあるため、器種の名称は必ずしも限定された用途を示したものではない。

【石皿】(第96図1)

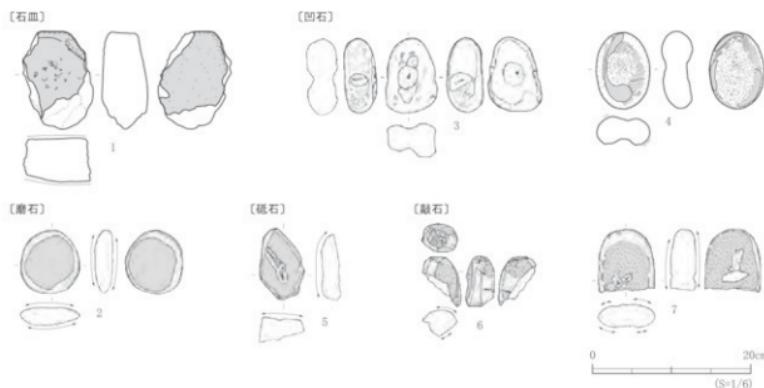
66点ある。平坦あるいは緩やかに窪む磨面がみられるもの。大小さまざまな破片のみで、完形とみられるものは確認できなかった。

【磨石】(第96図2)

263点ある。石皿を除いたもののうち、磨面がみられるもの。円形や梢円形のものがほとんどであるが、薄い板状のものもわずかにある。



第95図 石斧の種類



第96図 破石器の種類

#### 【凹石】（第96図3・4）

21点ある。礫の平面または緩やかな傾斜面に凹みがみられるもの。磨面に凹みがあるものもみられる。凹みの形状と数は、直径10~20mmほどの円形で、深さが3~5mmの凹みが1つあるもの（第96図3）、直径2~3mmの不定形のやや浅い凹みが複数あるもの（第96図4）がみられる。

#### 【砥石】（第96図5）

7点ある。礫の平面または緩やかな傾斜面に溝状の凹みがみられるもの。溝は幅が1~5mm、長さ10~30mmほどである。磨面を再利用したものもみられる。

#### 【敲石】（第96図6・7）

3点ある。敲打痕があるもの。その痕跡が先端部にあるもの（第96図6）、平坦部にあるもの（第96図7）がみられる。

### B 石材

凝灰岩系の岩石、火山岩、深成岩、凝灰岩系以外の堆積岩が大半を占める。その他に変成岩、鉱物、化石などがある（第3表）。詳細をみると、凝灰岩系の岩石には凝灰岩の他に緑色凝灰岩、珪化凝灰岩、珪質凝灰岩がある。火山岩は流紋岩、黒曜石、ディサイト、石英安山岩、安山岩、珪化安山岩、凝灰岩質安山岩、玄武岩質安山岩、玄武岩、緑色岩があり、深成岩には花崗岩、閃綠岩と花崗閃綠岩がある。堆積岩には、泥岩、頁岩、珪質頁岩、黒色頁岩、砂岩、凝灰岩質砂岩、細礫岩、礫岩のほか、頁岩が熱変性作用をうけた粘板岩がある。鉱物では石英と石英が不純物を含んで結晶化した玉髓、鉄石英、碧玉、瑪瑙がある。少数の石材として、変成岩の片岩、緑色片岩、片麻岩、蛇紋岩、ホルンフェルス、化石の琥珀、珪化木のほか、軽石がある。

#### a 石材の産地

遺跡のある大崎地域の丘陵地は、凝灰岩系の岩石や安山岩を中心とする火山岩で主に覆われている。これらは更新世中後期に大量の火山碎屑物を噴出した鳴子・鬼首火山群のものといわれ、奥羽山脈から涌谷町の丘陵地にかけて広く分布する岩石である（宮城県1987）。一方、沖積地は江合川・鳴瀬川水系の河川によって堆積した堆積岩で覆われた地域となっている。したがって凝灰岩系、火成岩、堆積岩系の石材については容易に入手できる石材であったと考えられる。また深成岩については奥羽山系の基盤を構成している岩石である。基盤があるので、おそらく地殻変動で地表面に露出したもののが河川によって侵食され、遺跡付近まで運ばれたものであろう。また凝灰岩や他の堆積岩が、地熱や地圧で変異してできた軽石や片岩、片麻岩、蛇紋岩、ホルンフェルスなどの変成岩も同じ要因で遺跡付近にみられるのであろう。

現在、遺跡周辺に大きな鉱脈がみられない石材には、石英・玉髓・碧玉・瑪瑙・鉄石英がある。したがってこれらは遺跡から遠く離れた産地から搬入されてきた可能性も考えられるが、珪化凝灰岩や珪化安山岩が固まる際に岩石中に大きく結晶化した石英・玉髓・碧玉・瑪瑙・鉄石英などを利用して、剥片石器の石材にしていた可能性も考えられる。

また黒曜石について、遺跡周辺では加美町の湯の倉産のものが知られる（宮城県ほか2008）。他には、生物由来の石材として琥珀と珪化木がある。琥珀の最も近い産地は岩手県の久慈市が知られる。

第3表 石材の種類と出主状況(1)

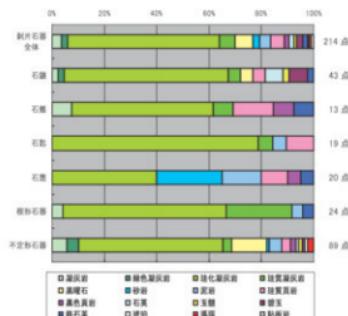
第3表 石材の種類と出土状況(2)

第4表 器種と石材

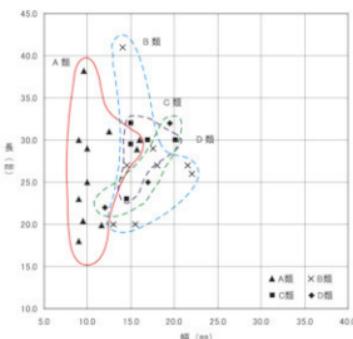
遺跡周辺に大きな鉱脈がみられない石材の産地については、今後、類例が増加した後に、自然科学的分析も含めて再検討したい。

### b 石材の種類

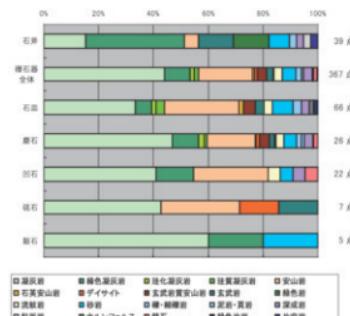
トゥールとして使われた石材をみると、剥片石器は凝灰岩系の石材が約7割を占め最も多く、そのうち珪化凝灰岩が大半を占める（第97図）。また石斧や櫛石器も、凝灰岩系の石材が5割を占めも多い。凝灰岩以外の石材は、剥片石器では黒曜石、泥岩、形質頁岩、黒色頁岩、石英と石英の変異体である玉髓や碧玉、瑪瑙がみられるが、黒曜石、形質頁岩、泥岩とそれぞれ5%ほどを占めるに過ぎず、他はそれ以下である。



第97図 剥片石器の石材（点数比）



第98図 石斧・礫石器の石材（点数比）



第99図 石斧・礫石器の石材（点数比）

区	層位	A類	B類	C類	D類	未製品	総計
A-23	VIIb	1					1
A-28	VIIa					1	1
A-29	VI	2					2
	SX4	1					1
B-10	I-V	1					1
	VIIa	1				1	2
	VIIb					3	3
B-28	VI	1					1
C-14	I-V		1				1
C-15	VI			1			1
E-1	VI			1			1
	VIIb			1			1
	VIId		1	1	1	1	3
E-25	VIIa	5	1	2			8
	VIIb	1					1
	VIId	1					1
E-32	VI				1	1	2
E-36	VIIb			1			1
E-64	VIIb				1		1
	VIIc		1	1			2
F-10	VIIa		1	1			2
F-11	VIIa		2				2
	VIIc			1			1
F-5	VIIa		1				1
F-8	VIIb		2				2
総計		14	11	8	3	7	43

第5表 石鎚の類型と出土状況

一方、石斧や礫石器では、凝灰岩系の石材に次いで火成岩系の石材が多い（第98図）。そのうち礫石器では安山岩がほとんどを占めるが、石斧では玄武岩・緑色岩の割合が高いという特徴がみられる。

次に器種別に石材をみると、剥片石器では先述したように珪化凝灰岩がどの器種でも主体となる（第97図）。ただし、石鎚や不定形石器など点数が多い器種は、石材の種類も多くの傾向がみられ、多様な石材を利用していたことが知られる。また石範は、砂岩・泥岩などの堆積岩系の石材の割合が約4割と高く特筆される。

なお、剥片石器と礫石器の素材剥片と石核は、珪化凝灰岩が約7割を占め、次いで凝灰岩、泥岩、碧玉、砂岩、粘板岩、石英となる（第4表）。その比率はトゥール類の石材の比率とおおむね同じ傾向を示している。

### C 時期

石鎚について、A類は晩期後葉から末葉、B類とC類は前期初頭から前期前葉と中期末葉の土器が主体となる層から出土する傾向がみられる（第5表）。石鎚の長さと幅の関係をみると、このA類は他より幅が狭い傾向がみられる（第99図）。これらは、分類や幅の違いが時期の違いを反映していると考えられる。

なお他の器種については、現段階では時期と器種・分類・石材との明確な相関関係を見出すことはできなかった。

#### 2) 石製品

##### A 器種

48点出土した（第2表）。円盤15点、石棒10点、石刀11点、石錐・勾玉・岩板が各1点、有孔石製品が2点、不明石製品6点である。約5割がE-25区VI層出土で、他の調査区は各1~2点の出土である。時期については、現段階では器種・石材との明確な相関関係を見出すことはできなかった。

##### 【円盤】（第100図1）

15点ある。扁平な礫の縁辺を剥片剥離や敲打によって整形し、円盤状にしたもの。平坦部は自然面のものと研磨による整形のものがある。

##### 【石錐】（第100図2）

破片が1点ある。表裏面を研磨した礫の両端に溝状の刻みを加えたものである。

##### 【石棒】（第100図3）

すべて破片で10点ある。主に縱方向の研磨によって棒状に整形されている。

##### 【石刀】（第100図4）

すべて破片で11点ある。敲打や研磨によって刀剣状に整形されているものである。主に刃部の方向に研磨される。

##### 【勾玉】（第100図5）

1点ある。孔があるが、貫通していないので未製品とみられる。表裏面は側辺に向かって、側面は縱方向に沿って研磨されている。

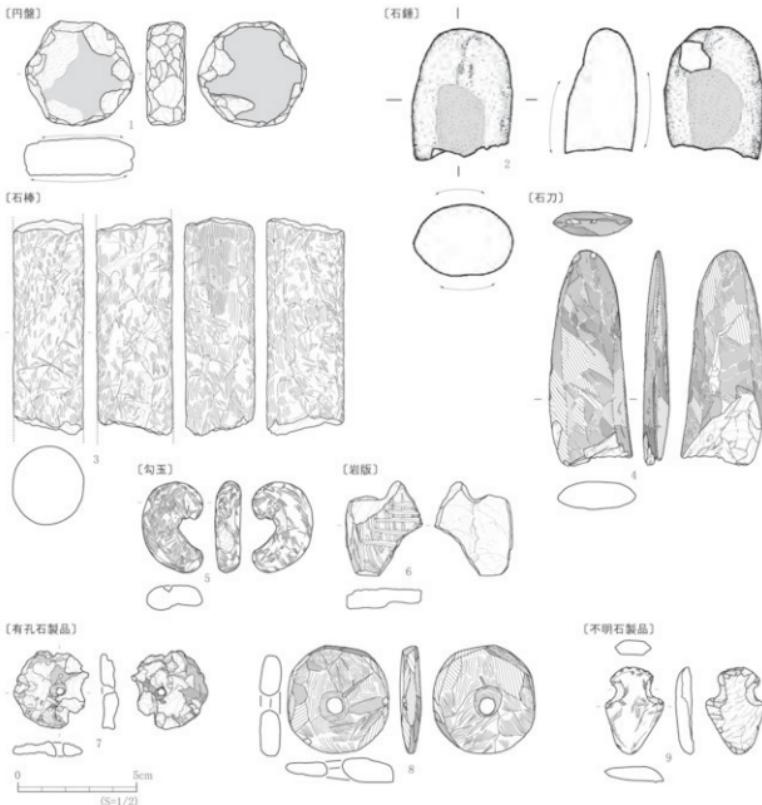
【岩版】(第100図6)

1点ある。コ字状文とみられる文様が刻まれている。

【有孔石製品】(第100図7・8)

2点ある。上記以外で孔のあるものを有孔石製品とした。第100図7は軽石製である。外形は凹凸のある円形である。第100図8は砂岩製である。円形で、表裏面は縦方向の研磨と孔から外周へ向かう研磨で複数の面を作り出し、側面は表裏面に対しほぼ垂直な面を研磨して作出している。

以上のはか不明石製品が6点ある。第100図9は上部につまみ状のものが作出されることから、石匙の未製品の可能性がある。



第100図 石製品の種類

## B 石材

第4表が示すように、凝灰岩系の岩石が主に使われている。これらは石器に使用された石材と同じ傾向を示すことから、その産地は先述した石器と同様であると考えられる。また器種ごとに使用された石材をみると、石刀と石棒では堆積岩系の泥岩や頁岩、粘板岩が多く使用されている。器種によって石材を使い分けていることがうかがえる。

### (3) 木製品

堅櫛・籠胎漆器、不明木製品が計3点ある。すべてE-25区VI層から出土した。

#### 【堅櫛】(第101図1)

上部の一部で、上端が緩やかな弧状となる。櫛歯を通す穴が3箇所分みられる。内外面とも赤漆が塗られている。

#### 【籠胎漆器】(図版39-1)

外面の網目が交差する部分以外に赤漆がみられる。編んだ後に赤漆が塗られたと考えられる。

他に不明木製品がある(図版39-2)。全面に赤漆が付着して皺状となっており、その形状は不明である。

### (4) 骨角牙製品

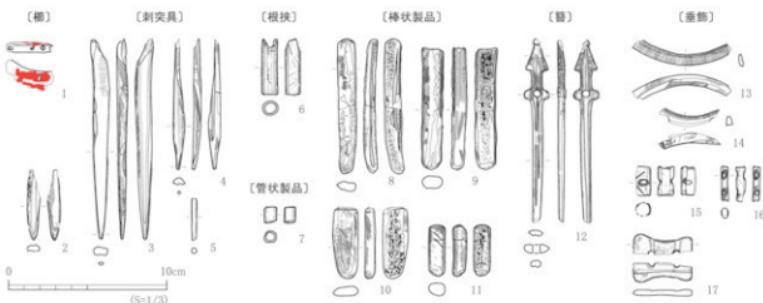
刺突具・根挾・管状製品・棒状製品・簪・垂飾がある。刺突具1点を除いてすべてE-25区VI層から出土した。

#### 【刺突具】(第101図2~5)

4点ある。第101図2~4はニホンジカの中手/中足骨を素材とする。先端を扁平に加工するものと丸く加工するものがあり、ともに研磨で仕上げる。第101図5は鳥類を素材とする。針の可能性もある。

#### 【根挾】(第101図6)

1点ある。鳥類の肢骨を素材とする。先端を山形に加工する。研磨痕は顕著ではない。



第101図 木製品、骨角器の種類

#### 【管状製品】（第101図7）

1点ある。鳥類の肢骨を輪切りにして管状に加工する。切断面を残し研磨で仕上げるが、その痕跡は顕著ではない。

#### 【棒状製品】（第101図8～11）

4点ある。ニホンジカの角を素材とする。大型品と小型品がある。一方の先端が摩滅により丸くなっている。鹿角表面および内部のスポンジ質をそのまま残すものが多い。第101図10は素材を小さく加工する際に、切り折ったとみられる痕跡が上端にみられる。

#### 【笄】（第101図12）

1点ある。ニホンジカの中手/中足を素材とする。先端が山形となるようである。中央やや上寄りの張り出した長方形部分に穿孔が1箇所ある。また、表裏の中央に溝が1条または2条みられる。研磨によって丁寧に仕上げられ、特に上部の表裏面と側面で顕著である。

#### 【垂飾】（第101図13～17）

5点ある。穿孔がないものと1箇所または2箇所あるものに大別できる。穿孔は紐を通して垂飾するための孔とみられる。2点は鳥類の肢骨を輪切りにして管状に加工する。切断面を一部残し、研磨で仕上げる。また第101図17はニホンジカの中手/中足を素材とする。表に溝が縦に2条、裏に溝が横に1条ある。また、猪牙製の犬歯を素材としたものが2点ある。研磨によって丁寧に仕上げる。第101図14はエナメル質部分のみを選択して用いている。

### （5）動植物遺存体

動物遺存体5箱、植物遺存体7箱ある。

#### 1) 動物遺存体

##### A 分析方法

調査の際に取り上げたもの（目視資料）と土壤サンプルを水洗篩して抽出したものがある（ふるい資料）。その水洗には4・2・1mmメッシュを用いた。また、サンプルの一部は土壤のまま保存した。採取された動物遺存体は、縄文時代晩期の遺物を主体とするD-40・41区VIa層と縄文時代晩期後葉から末葉の遺物を主体とするE-25区VI層のものがあるが、D-40・41区VIa層はわずかである（第6～11表）。

貝類は同定できる資料はなかった。魚類・爬虫類・鳥類は残存率が高く、種の特徴をよく示す部位を中心に抽出したが、同定できる資料はわずかであった。また哺乳類は、骨端部など部位の特徴をよく示すものをを中心に抽出した。なお同定に際し、東北歴史博物館所蔵の現生標本・他の遺跡の出土資料、文献の図・写真等を参考とした。

資料のはほとんどが、縄文時代晩期後葉から末葉の遺物を主体とするE-25区VI層から出土したニホンジカ・イノシシである。点数の多少で類や種の出土傾向を把握することができるので、表記は全て点数とした。

##### B 同定結果

a. 貝類

表皮とみられる資料があるが、明確に同定できる資料はなかった。

b. 魚類（第6表、図版53-3）

コイ科 *Cyprinidae*

フナ属 *Carassius sp.*

眼頭骨・椎骨・主鰓蓋骨・臀鰭棘を計84点同定したが、大半が主鰓蓋骨の小破片である。魚類のうち、科以下まで同定できた資料のはほとんどはフナ属である。

部位	部分	ギバチ		コイ科 (種不明)				コイ科 (フナ)		サケ科		サメ・ エイ科		ドジョウ		計
		E25	E25	左右	左右	Vla (mm)	Vla (2mm)	Vld	Vla	Vla (mm)	Vla (2mm)	Vla (mm)	Vla (2mm)	Vla	Vla (mm)	
頭部	下顎頭骨	1	1							1						1
	鰓頭骨	1	1						1	3						3
角舌骨	?	1	1													1
椎骨	尾椎	-	-						6	2					2	10
	尾椎	-	-						3	5					1	12
	第一椎骨	-	-								1					1
	(部位不明)	-	-								9	8	1			18
方骨	L	1	1							1	8					1
	主鰓蓋骨	1	1													9
	次鰓蓋骨	1	1													0
頸輪	?	1	1			1	2		2	65						66
骨盤	?	1	1								1					10
脊椎骨	?	1	1													1
合歛骨	?	1	1													1
	計	2	2	1	1	3	17	16	31	80	1	9	8	1	3	146

第6表 魚類検出状況

部位	部分	ヘビ			計
		左右	部位/部位	E25	
頭骨	?	1	1	1	3
	計	1	1	1	3

第7表 肺虫類検出状況

部位	部分	ガン類			カモ類			小型の 野鳥			計	
		左右	部位/部位	E25	Vla	Md	E25	Vla	Md	E25	Vla	
頭蓋骨	頭蓋骨	L	(完形)									1
	R											1
頭甲骨	L	頭甲骨										2
上胸骨	L	頭甲骨										4
	R	頭甲骨										1
尾骨	L	頭甲骨										2
	R	頭甲骨										1
鰓骨	L	頭甲骨										1
中手骨	L	頭甲骨										1
	計	3	3	3	1	1	1	1	1	1	1	20

第8表 鳥類検出状況

部位	部分	タマキ		キツネ		イヌ		ウサギ		ハクチョウ・ホシ科		ホウズイ・イヌ科		テナガマ		テン		計
		E25	E25	E25	E25	Vla	Vla	Vld	Vla	Vla (mm)	Vla (2mm)	Vla (mm)	Vla (2mm)	Vla	Vla	Vla	Vla	
頭蓋骨	道廊溝	R	1	1	1													2
下顎骨	頸体	R	1	1	1													1
	道廊溝	?																1
	L																	1
	R																	1
椎骨	頭椎	-	(完形)	2														2
	軸椎	-	(完形)	1														1
	仙椎	-	腹側	1														1
	尾椎	-	(完形)	1														1
脛骨	L	玄位	1	1	1													1
	R			1														1
対骨	L	玄位	1	1	1													1
	R			1														1
対骨	R	玄位	1	1	1													1
入腿骨	L	玄位	1	1	1												1	2
脛骨	L	通沙	1	1	1												1	2
	R	通沙	1	1	1												1	1
脛骨	L	玄位	1	1	1												1	1
	R	玄位	1	1	1												1	1
脛骨	L	通沙	1	1	1												1	1
	R	通沙	1	1	1												1	1
中手/中足骨	計	9	4	1	1	1	3	1	5	1	4	1	1	1	1	1	1	32

第9表 哺乳類検出状況 (ニホンジカ・イノシシ以外)

#### 種不明のコイ科

咽頭骨・角舌骨・椎骨・主鰓蓋骨・鰓棘・骨盤骨を計37点同定したが、種を特定するに至らなかつた。なお、第一・二椎骨を除くコイ科の椎骨は、種間で非常によく似ていることからコイ科種不明とせざるをえなかつた。

#### ドジョウ（ドジョウ科）*Misgumus anguillicaudatus*

椎骨を3点同定した。

#### ギバチ（ギギ科）*Pseudobagrus tokiensis*

椎骨・方骨を計4点同定した。

#### サケ科 *Salmonidae*

椎骨および椎骨片を17点同定したが、種を特定するに至らなかつた。

#### サメ・エイ類（板鰭亜綱）*Chondrichthyes spp.*

椎骨を1点同定したが、種を特定するに至らなかつた。

#### c. 爬虫類（第7表）

##### ヘビ亜目 *Serpentes spp.*

椎骨を3点同定したが、種を特定するに至らなかつた。

#### d. 鳥類（第8表、図版53-2）

##### カモ類（ガンカモ科）*Anatidae sp.*

種類が多いため種の同定は行っていない。鳥類のほとんどを占める。頭蓋骨・鳥口骨・肩甲骨・上腕骨・尺骨・中手骨を計16点同定した。

##### ガン類（ガンカモ科）*Anatidae sp.*

上腕骨・尺骨を計3点同定した。大型でヒシクイなどの可能性がある。

##### ウ科 *Phalacrocoracidae sp.*

脛骨を1点同定したが、種を特定するに至らなかつた。

#### e. 哺乳類（第9~11表、図版52・53-1）

##### ニホンジカ *Cervus Nippon*

角・頭蓋骨・下顎骨・椎骨・肩甲骨・上腕骨・桡骨・尺骨・寛骨・大腿骨・膝蓋骨・脛骨・手根骨・距骨・蹠骨・足根骨・中手骨・中足骨・基節骨・中節骨・末節骨を計271点同定した。

切創や打撲痕、焼痕がある資料が認められる。切創は角・上腕骨・尺骨・桡骨・蹠骨・基節骨・中節骨・打撲痕は寛骨・上腕骨・大腿骨・桡骨・尺骨・脛骨・距骨・蹠骨・中手骨・中足骨・基節骨・中節骨・焼痕は椎骨・中手/中足骨・中節骨・距骨にみられる。他にイヌ・ネズミによる喰み痕が上腕骨・大腿骨・蹠骨にある。

齧査定について、下顎骨における歯の萌出、出歯線、歯冠高、後臼歯・切歯の咬耗状況と年齢との関係を明らかにした研究があるが（大泰司1980、小池・大泰司1984）、本資料のほとんどが遊離歯の小破片で齧査定が不確実となる可能性があるため、今回は行わなかつた。なお、頭部骨による齧査定について、成獣が1点みられた。

部位	部分	左右	近位/遠位	D40		D41		E25						計
				Vl	Vla	Vld	Vlb	Vla	Vl	Vla+b	Vla+d	V	不明	
角 (内側)	内座骨+内座+内幹	L						1						1
	角	L				1								1
頭蓋骨 (上部) 頭体	R							1						1
	顎導角	L			6		6			1				11
後頭骨	R			4		10						1	15	
	-					2							2	
下顎骨	R					1							1	
	-					1						1	2	
上顎骨	顎体	L			1		3						3	
	R						3						3	
顎導角	L			2		4					1		5	
	R			1		6							7	
椎骨	軸椎	-									1		1	
	頸椎	-			2		8						10	
胸椎	胸椎	-			1		4						5	
	腰椎	-				7					1		8	
肩甲骨	L	遠位						1						1
	R	遠位						2						2
上腕骨	L	遠位			3		2						5	
	R	遠位			2		5				1	8		
?				1									1	
	y	遠位					1						1	
橈骨	L	遠位			1		2						2	
	R	遠位			1		4						5	
?				2		1	2						3	
	R	遠位					1						3	
尺骨	L	近位			1	1	2						4	
	R	近位					1						1	
?							1						1	
	L	遠位					1						1	
?							3						3	
	R	遠位					1						1	
?							1						2	
	R	遠位					2						2	
?							1						1	
	L	遠位					2						2	
?							3						3	
	R	遠位					2				1		3	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位					1						1	
?							1						1	
	R	遠位												

イノシシ *Sus scrofa*

頭蓋骨・下頬骨・椎骨・肩甲骨・上腕骨・桡骨・尺骨・寛骨・大腿骨・脛骨・手根骨・距骨・踵骨・足根骨・中手骨・中足骨・基節骨・中節骨を計98点同定した。

切創や打撲痕、焼痕がある資料が認められる。切創は上腕骨・大腿骨・尺骨・足根骨、打撃痕は寛骨・上腕骨・中足骨、焼痕は下頬骨・手根骨・中節骨にみられる。他にイヌ・ネズミによる噛み痕が肩甲骨・上腕骨・基節骨にある。

齢査定について、下頬骨における歯の萌出、咬耗状況と年齢との関係を明らかにした研究があるが（林ほか1977、小池・林1977）、本資料のほとんどが遊離歯の小破片で齢査定が不確実となる可能性が

部位	部分	左右	近位／遠位	DRI		E2S						計
				Vla	Vld	Vlb	Vla	M	Vla+d	V	不明	
頭蓋骨	(上顎) 體	L			3		2					3
		R			1		1					2
	道摩歯	L		1	3		2					6
	R				4		1					5
	翼歯合	L					1					1
下頬骨	道摩歯	L			1	2	6			1		10
	R				5		5					10
椎骨	寰椎	-					1		1			2
	胸椎	-				1						1
	腰椎	-					1					1
	骶椎	-					1					1
肩甲骨	L	遠位					1					1
	R	遠位					1					1
上腕骨	L	遠位					1					1
	R	遠位				1	2		1	1		5
桡骨	L	遠位					1					1
	L	近位					1					1
	R	遠位					1		1			2
尺骨	L	遠位					1					1
	L	近位					1					1
	R	遠位					1		1			2
寛骨	L	遠位					1					1
	R	遠位					1					1
	?						1					1
大腿骨	L	遠位					1					1
	R	遠位						2				2
	R	遠位			1	2						3
脛骨	L	遠位					1					1
	R	遠位					1					1
手根骨	C3	L								1		1
	R									1		1
距骨	L						1					1
	R			1	2		1		1	1		6
踵骨	R						5					5
	T4	L					1			1		1
中手骨	L	定位					1					1
	R	近位					1					1
中足骨	?						5					5
	?						3					3
計				4	21	4	58	2	2	5	2	98

第11表 イノシシ検出状況

〔凡例〕

- ・第6～9表 (mm) はふるいの目を示す
- ・第10表 「骨幹」のみ、「>1/2」、「1/2」、近位・遠位が不明のものは「?」で表記。
- ・第11表 「>1/2」と近位・遠位が不明のものは「?」で表記。

あるため、今回は行わなかった。

タヌキ *Nyctereutes procyonoides*

頭蓋骨・下顎骨・椎骨・橈骨・寛骨・脛骨を計9点同定した。

キツネ *Vulpes Vulpes*

頭蓋骨・下顎骨・椎骨・橈骨を計4点同定した。切削が橈骨にみられる。

イヌ *Canis familiaris*

橈骨・大腿骨を計2点同定した。

ノウサギ *Lepus brachyrurus*

大腿骨・踵骨・中手/中足骨を計4点同定した。

ネズミ科 *Muridae sp.*

下顎骨・椎骨・踵骨を計10点同定した。歯の形状からハタネズミ亜科6点、ネズミ亜科1点を確認した。

その他の哺乳類

アナグマ *Meles meles anakuma*

テン *Martes melampus melampus*

イタチ *Mustela itatsi*

各1点同定した。

2) 植物遺存体

樹種・種実の同定と花粉・珪藻分析の詳細は、平成19~22年度調査資料とあわせて報告する予定である。植物は自然木のほか、クルミ・ドングリ・トチなどの種実や種子が出土している（古代の森研究室2010a）。

## 2 遺構・遺物包含層

### (1) VI層出土の遺物の時期・その分布と出土量

第4・103図の遺物の分布と出土量をみると、E区北東部(E-64区)、E区北西部(E-1区)、D区北部とE区南東部(D-40・41・E-25・32・36・37区)、F区南部(F8~11区)に集中し、それ以外の調査区での遺物の出土は非常に少ない傾向がみられる。そしてこれらの場所は、すべて丘陵部・微高地の突端部付近の裾部であるという点が共通する。

時期別にみると、出土量の最も多いのは晩期後葉から末葉で、次いで前期、初頭から前葉、中期末葉の順となる。また前期初頭から前葉の遺物はE区北西部とF区南部、中期末葉の遺物はE区北西部、晩期後葉から末葉の遺物はD区北部とE区南東部に集中しており、以上の時期の遺物は同じ地点で混在しないという傾向がみられる。

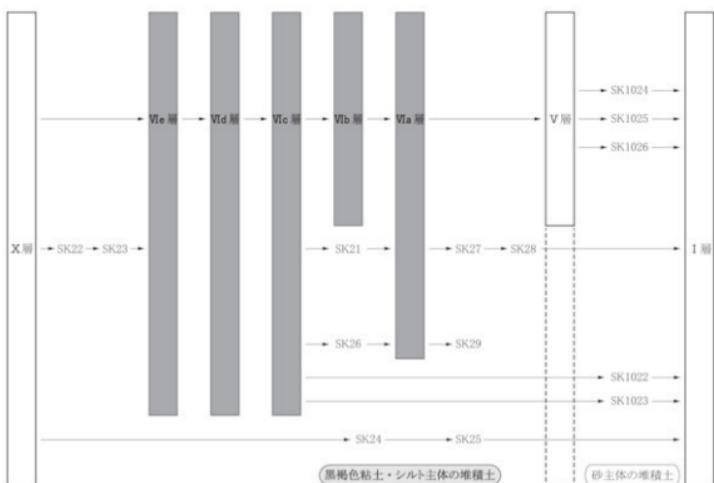
他の時期の遺物は、早期中葉の土器(E-64・F-8・10・11区)、早期後葉の土器(E-64区)、前期末葉の土器(E-8区)、後期後葉から末葉の土器(E-1・25・71・93区)、晩期前葉から中葉の土器(D-41・50・E-25・36・37)がわずかにみられるのみである。

なお土器について、器種の細分が進む晩期後葉から末葉に、特定の器種が特定の調査区に集中する傾向はみられなかった。

## (2) 遺構の時期とその分布

### 1) E-32区のVI層と土坑群

第102図はE-32区の縄文時代晩期の遺構と遺構面との重複関係を整理したものである。VI層と土坑は出土遺物から晩期と考えられる。縄文時代の土坑は堆積土の特徴とVI層との重複関係によって、①Vle層に覆われる土坑 (SK22・23)、Via層またはV層に覆われる②黒褐色粘土主体の堆積土の土坑



第102図 E-32区の遺構と基本層の重複関係

(SK21・24~26)・③黒褐色シルト主体の堆積土の土坑 (SK27~29) とに分けられる。すべて、丘陵に近い緩斜面に形成されている。

### 2) E-25区のSX31集石遺構

#### 【特徴】

晩期の遺物を多く含むE-25区Vld層の上面で検出した遺構である（第42図）。周辺には他の遺構はみられない。石は長軸0.9m、短軸0.6mの楕円形で深さ0.1mほどの間に分布する。掘方はない。その範囲に各石があり重複しないようにして密集していたが、石器と自然礫を区別したり、その大きさや形状ごとに配置したりする跡はみられなかった。また集石の下部及び周囲に、付属施設や関連施設とみられる遺構は検出されなかった。

遺構は70点の自然礫と17点の石器によって構成される（第43図・第12表）。石器には磨石16点と石核1点がある。自然礫・石器の大きさはほとんどが5~10cmほどである。

形状は自然礫・石器ともにほとんどが円形か楕円形で、角形はわずかである。その平坦面は2つ以

上のものが多い。約8割が一部を欠損しているという特徴がみられるが、第43図4の磨石のように接合するものも約1割みられる。被熱痕のあるものはなかった。

石材は自然礫・石器ともほとんどが凝灰岩で、次いで安山岩が多い。この傾向は礫石器の石材とはほぼ同じ傾向を示している。前述したように、これらの石材は遺跡でもよくみられるものなので、おそらく付近から集められたと考えられる。

#### 【性格】

以上の諸特徴から、SX31集石遺構は主に礫石器の石材となる自然礫を集めた場所と考えられる。さらに、後述するような予想される集落の位置から離れていること、遺物の廃棄場所に近接していること、石器や自然礫に欠損品が多いことから、礫石器の石材や未製品をまとめて廃棄した場所であった可能性が高い。

なお、集石遺構は平成21年度調査でさらに2箇所確認している（宮城県教育委員会2009）。今後は以上の例を含めて再検討したい。

石材	安山岩	珪化 安山岩	凝灰岩	珪化 凝灰岩	玄武岩	玄武岩質 安山岩	細繊岩	蛇紋岩	泥岩	緑色岩	緑色 凝灰岩	不明	総計
自然石	15	3	32	2		1	1	1	4	1	8	2	70
石器	8		8		1								17
総計	23	3	40	2	1	1	1	1	4	1	8	2	87

第12表 SX31の自然礫・石器と石材

### 3 遺物包含層・遺構の形成要因

#### （1）廃棄の場の位置

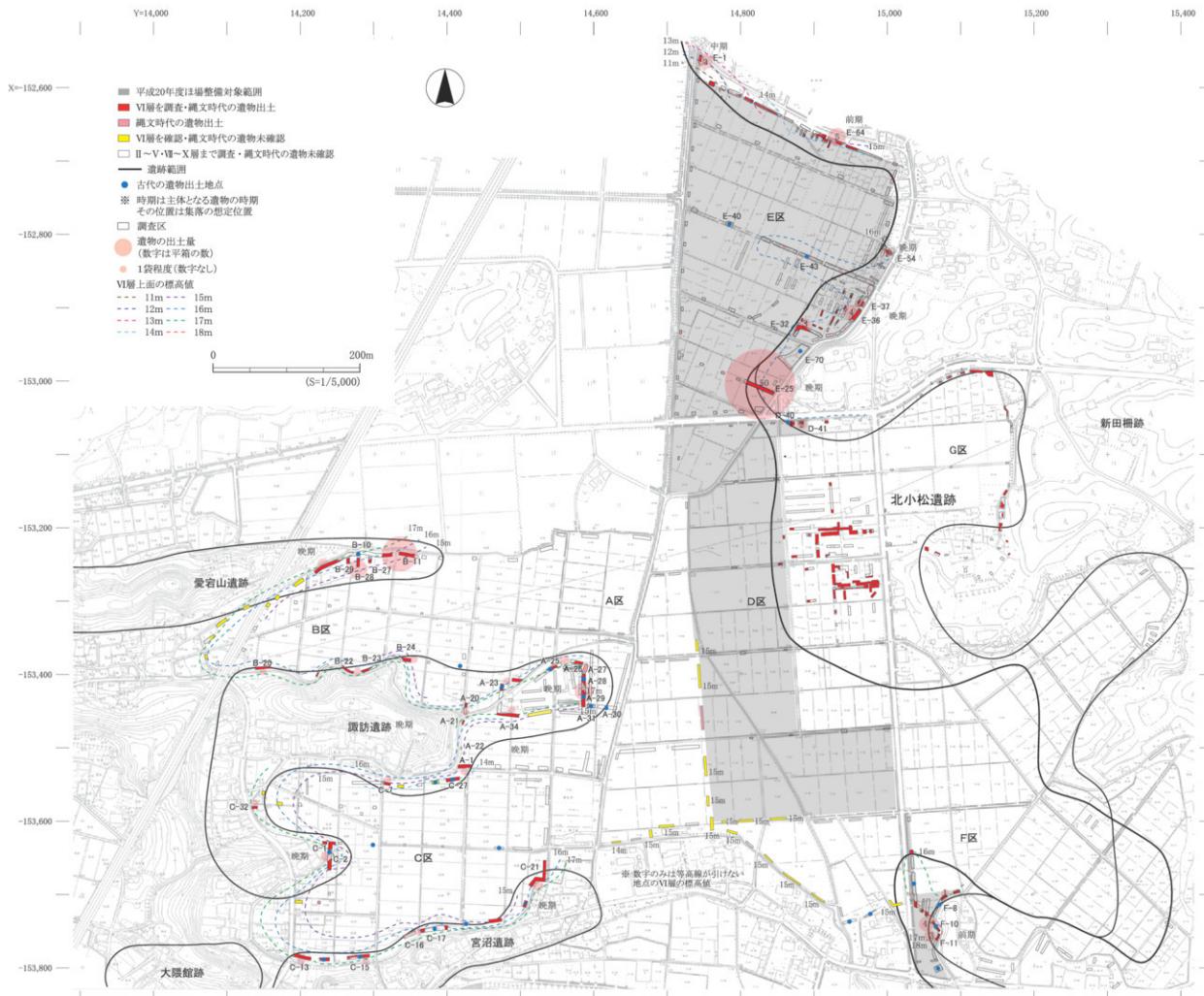
遺物がまとめて捨てられていたE-1区VId層、E-25区Vlb層一括廃棄土器出土地点、SX31、E-32区のSK28はそこが廃棄の場であったことを示している。それ以外のほとんどの遺物は、付近の丘陵や微高地の土砂などとともに流されてきたもので、廃棄された原位置を特定するのは難しい。ただしE-25区VIaとd層では、多くの遺物が丘陵に近い範囲にまとまり、摩耗の少ない大破片が丘陵側に比較的多くみられるので、おそらく丘陵側にあった廃棄の場に近接していた可能性が高い。

一方、上記のような傾向が確認されなかったE-36・37・64区やF-8～11区などでは、摩耗の著しい小破片が散在し、そのまとまりが明確でないので、より廃棄の場までの距離が遠かったと考えられる。

#### （2）集落の立地と周辺の環境

これらの遺物はいろいろな地点のVI層から出土していることから、縄文時代を通じていろいろな場所で人々が活動していたことを反映しているとみられる。特にE-32区のVI層に近接する位置の各遺構面から、晩期の土坑を検出したという状況は、晩期にそこで人々が継続して活動していたことを示していると考えられる。前述したような、低丘陵の裾部に廃棄の場や土坑などの遺構が集中している状況とあわせると、この低丘陵上には集落が営まれていた可能性が高い。

そこで、集落が営まれていた場所を検討すると、E-1区では北東部の丘陵平坦面、E-64区では北部の丘陵平坦面、D-41・E-25・32・36・37区では東部の舌状に張り出す丘陵の平坦面などの可



能性が考えられる。丘陵部の突端部付近に集落が分布する傾向がみられる。

一方、平成19年度調査で明らかとなった集落の位置とあわせて検討すると、そのほとんどは、丘陵部や微高地の突端部付近に集落が分布する傾向がみられる（第103図）。そしてその集落のほとんどは、そこから廃棄された遺物の多くが晩期後葉から末葉であることから、晩期後葉から末葉が最盛期であったと考えられる。また時期別にみると、前期初頭から前葉の集落はE区北東部（E-64区）とF区南部（F 8～11区）、中期末葉はE区北西部（E-1区）だけであったが、晩期後葉から末葉の集落は、前期初頭から前葉・中期末葉の集落の地点と重複せず、その地点を除いた他の各地点に広範囲に広がるようになる。集落の数や規模、立地などは時期によって多少異なっていたと考えられる。

また集落の最盛期である晩期後葉から末葉には、クリの純林が広範囲にみられるほか（A-28・B-28・E-25区中央部）、トチノキ林（E-25区西部）もあったとの指摘がある（古代の森研究会2009b・2010a・2010b）。さらに、その周囲は主に湿地や沼沢地などの湿った環境であった（A-1・28・B-28・E-25区VIa・b層）が、水深2m以上の湖沼（B-10区東部）、河川の影響が僅かにある水域（E-25区VId層）もあったと考えられている（古代の森研究会2008a・2009a・2009b）。

## 第2節 弥生時代以降

### 1 遺物

弥生時代の青木畳式の高坏、奈良・平安時代の土師器・須恵器・瓦、中世から近世の石鉢などが整理用平箱で1箱出土した。遺物のほとんどは奈良・平安時代の土師器・須恵器で、その分布はF区南部に集中し、D区北部からE区南東部はわずかである（第4・103図）。

### 2 基本層・遺構

基本層の堆積物や形成時期は、平成19年度の調査成果と同様である（宮城県教育委員会2010）。Ⅴ層は洪水由来の水成堆積物で弥生時代前期、Ⅳ層は沼地の堆積物でそれ以降から10世紀前葉、Ⅲ層は灰白色火山灰（To-a）で10世紀前葉頃、Ⅱ層は沼地の堆積物で10世紀前葉以降である。

遺構は、弥生時代前期以降の土坑をE-32・91区、中世以降の井戸をF-7区で検出した。

### 3 遺物の分布と遺構の形成要因

少量の遺物の分布は、縄文時代ほど活発ではないものの、これらの丘陵や微高地での人々の活動を反映しているとみられる。とりわけ新田柵跡の中心部に近いF区南部に、奈良・平安時代の遺物が多いという状況は、それとの密接な関連が考えられる。

なお弥生時代前期以降には、縄文時代晩期後葉から末葉にみられたクリを主体とする落葉広葉樹林は衰退し、かわってコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林、その後にクマシデ属・アサダ属とコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が形成され、その周囲は沼や湿地（A-28・E-25区V層下部）、沼沢などの水域のある環境（E-25区V層上部）となっていたようである（古代の森研究会2008a・2009a・2009b）。

## 第VI章　まとめ

### 【縄文時代】

1. 低丘陵や微高地などの現地形の出入りは、晩期の地形の出入りをおおよそ反映したものである。周辺の環境は、低丘陵や微高地にはクリの純林が広範囲にみられ、その周辺で現在の沖積地の下にあたる場所には湿地や沼沢地、湖沼が広がっていたと考えられる。
2. 湖沼や湿地の縁辺で、低丘陵の斜面の裾部から、集石遺構1基、土坑9基を検出したほか、低湿性の遺物包含層を多くの地点で検出した。さらに遺物包含層は沼地へ広がることが判明した。
3. 遺構は晩期の土坑と集石遺構がある。ともに丘陵に近い緩斜面に形成されている。
4. 遺物包含層（VI層）や遺構出土の遺物には、深鉢・浅鉢・壺などの土器類、土偶・土版などの土製品、石鏡・石錐・磨石などの石器類、石棒・石刀などの石製品類、櫛・籠胎漆器などの木製品類、脊・垂飾などの骨角牙製品、ニホンジカ・イノシシなどの動物遺存体、自然木・種子や種実などの植物遺存体がある。
5. 微高地や丘陵側にあつた遺物の廃棄場所や、その場所に近接していると考えられる地点もみられる。それ以外の遺物の多くは廃棄の場の原位置を保ったものではない。
6. 丘陵部・微高地の突端部は遺物量が多い。遺物は前期初頭から前期前葉、中期末葉、晩期後葉から末葉のものに大別でき、晩期後葉から末葉の遺物が大半を占める。
7. 遺構の検出状況や遺物の出土状況の検討から、集落はいずれも丘陵部・微高地の突端部の平坦面に分布すると考えられる。その位置はE-1区では北東部の丘陵平坦面、E-64区では北部の丘陵平坦面、D-41・E-25・32・36・37区では舌状に張り出す東部の丘陵平坦面である。
8. 集落は、晩期後葉から末葉が最盛期であったと考えられる。時期別にみると前期初頭から前葉の集落はE区北東部（E-64区）とF区南部（F-8～11区）、中期末葉はE区北西部（E-1区）だけであったが、晩期後葉から末葉の集落は、前期初頭から前葉・中期末葉の集落の地点と重複しない他の各地点に広範囲に広がるようになる。集落の数や規模、立地などは時期によって多少異なっていたと考えられる。

### 【弥生時代以降】

1. 低丘陵や微高地などの現地形の出入りは、縄文時代晩期と同様に、地形の出入りをおおよそ反映したものであり、現在の沖積地の下には、弥生時代前期に起きた大洪水のあとに、再び沼や湿地が広がっていたと考えられる。
2. この低丘陵や微高地にはクリを主体とする落葉広葉樹林は衰退し、かわってコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林、続いてクマシテ属・アサダ属とコナラ亜属を主とする落葉広葉樹林が形成された。
3. 遺構は弥生時代前期以降の土坑が12基、中世以降の井戸が1基を検出した。
4. 遺物は弥生時代の高坏、奈良・平安時代の土師器・須恵器・平瓦、中世から近世の石鉢などが少量出土したのみである。
5. 奈良・平安時代の遺物の分布は新田柵跡の中心部に近いF区南部に多い。

## 引用文献

- 会田容弘 1979 「東北地方における縄文時代終末期以降の土偶の変遷と分布」『山形考古』3巻2号
- 相原淳一 2009 「東北地方における縄文時代中期末葉から後期後葉に関する土器編年－宮城県石巻市山居遺跡の調査成果から－」
- 磯崎正彦 1964 「晩期縄文式土器」「日本原始美術」1 講談社
- 伊東信雄 1957 「古代史 縄文式文化の変遷」「宮城県史」1
- 伊東信雄・須藤隆 1985 「山王圓道路調査図録」宮城県一迫町教育委員会
- 大崎市教育委員会 2007 「新田柵跡10」「国指定史跡 名生船官衙道路26 新田柵跡10」宮城県大崎市文化財調査報告書第1集
- 大泰司紀之 1980 「遺跡出土ニホンシカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節検定法」「考古学と自然科学」13
- 大船渡市教育委員会 2007 「長谷堂貝塚群」平成17年度緊急発掘調査報告書
- 興野義一 1959 「江合川流域の石器時代文化」「仙台郷土研究」19-3
- 小池裕子・大泰司紀之 1984 「遺跡出土ニホンシカの齧構成からみた狩猟圧の時代変化」「古文化財の自然科学的研究」
- 国土庁 「5万分の1地層表層図 古川 鳴子・桑来山 関山峰 涌谷」
- 古代の森研究会 2008a 「北小松遺跡周辺の縄文時代晚期から平安時代の植生史の堆積環境」(未発表:後日報告)
- 古代の森研究会 2009a 「北小松遺跡より出土した大型植物化石」(未発表:後日報告)
- 古代の森研究会 2009b 「北小松遺跡E-25区の縄文時代晚期の植生と堆積環境」(未発表:後日報告)
- 古代の森研究会 2010a 「北小松遺跡の縄文時代の植物化石」(未発表:後日報告)
- 古代の森研究会 2010b 「北小松遺跡の縄文時代の植物化石」(未発表:後日報告)
- 設楽博己 1991 「最古の豪棺再葬墓－根古屋遺跡の再検討－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第36集
- 鈴木正博 1987 「続大洞A 2式考」「古代」84 早稲田大学
- 須藤 隆 1998 「東日本における弥生文化の受容」「東北日本先史時代文化変化・社会変動の研究」纂集堂
- 高橋 埋 1986 「中沢貝塚及び北小松遺跡出土人骨」「中沢貝塚-第3次調査概報-」東北大文学部考古学研究会
- 田尻町教育委員会 1998 「新田柵跡」田尻町文化財調査報告書第3集
- 田尻町教育委員会 2000 「新田柵跡2」田尻町文化財調査報告書第4集
- 田尻町教育委員会 2003 「新田柵跡Ⅲ」田尻町文化財調査報告書第9集
- 東北歴史資料館 1983 「里浜貝塚II」東北歴史資料館資料集7
- 中村五郎 1988 「大洞A'式とその周辺」「弥生文化の曙光」未収社
- 藤村東男 1980 「大洞諸型式設定に関する二、三の覚書」「考古風土記」5
- 松島町教育委員会 2008 「西の浜貝塚」松島町文化財調査報告書第1集
- 宮城県 1980 「土地分類基本調査 古川 5万分の1」
- 宮城県 1987 「土地分類基本調査 涌谷 5万分の1」
- 宮城県 1993 「土地分類基本調査 鳴子・桑来山 5万分の1」
- 宮城県 1994 「土地分類基本調査 関山峰 5万分の1」
- 宮城県教育委員会 1967 「新産業都市指定区域 埋蔵文化財緊急発掘調査等報告書-西の浜貝塚-」宮城県文化財調査報告書第13集
- 宮城県教育委員会 1980 「宮沢遺跡」「東北自動車道遺跡調査報告書III」宮城県文化財調査報告書第69集
- 宮城県教育委員会 1988 「大梁川遺跡・小梁川遺跡(石器編)七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告書IV」宮城県文化財調査報告書第214集
- 宮城県教育委員会 2005 「北小松遺跡」「壇の越遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第202集
- 宮城県教育委員会ほか 2006 「細谷B遺跡」「桃生城跡・細谷B遺跡-三陸縱貫自動車道建設関連遺跡調査報告書V-」宮城県文化財調査報告書第205集

- 宮城県教育委員会ほか 2007 「山居遺跡（縄文時代編）」「山居遺跡（縄文時代編）」ほか－三陸縱貫自動車道建設関連  
遺跡調査報告書Ⅸ－』宮城県文化財調査報告書第214集
- 宮城県加美町教育委員会ほか 2008 「壇の越遺跡XⅢ－は場整備事業に伴う平成17年度発掘調査報告書（45A区 縄  
文時代石器編）－』 加美町文化財調査報告書 第12集
- 宮城県教育委員会 2009 「大崎市 北小松遺跡」「平成21年度 宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨」宮城県考古学会
- 宮城県教育委員会 2010 「北小松遺跡ほか－田尻西部地区は場整備事業に係る平成19年度発掘調査報告書－」宮城県  
文化財調査報告書第223集
- 森 幸彦 2008 「大木9・10式土器」「絶覧縄文土器」アム・プロモーション
- 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」「考古学」1-3
- 山内清男 1937 「縄文土器の細別と大別」「先史考古学」1-1
- 米田耕之助 1995 「土版」「縄文文化の研究9 縄文人の精神文化」雄山閣

## 参考文献

- 阿部昭彦 1986 「大木2b式における「S字状述鎖沈文」の原体復元」「山形考古」4-1
- 大坂 拓 2009 「大洞A2式土器の再検討－山形県天童市砂子田遺跡・山形市北柳1遺跡出土土器群の編年的位置  
－」「考古学集刊」第5号
- 岡村道雄 2002 「日本の歴史01 縄文の生活誌」（改訂版）講談社
- 加藤晋平ほか 1995 「縄文化の研究－7 道具と技術－」 雄山閣
- 興野義一 1967 「大木式土器理解のために」（I）「考古学ジャーナル」13
- 興野義一 1968 「大木式土器理解のために」（II）「考古学ジャーナル」16
- 興野義一 1968 「大木式土器理解のために」（III）「考古学ジャーナル」18
- 興野義一 1970 「宮城県大寺遺跡出土の早期縄文土器」「古代文化」22-11
- 興野義一 1996 「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」「画龍天晴 山内清男先生没後25年記念論集」  
山内先生没後25年記念論集刊行会
- 古代の森研究会 2008b 「北小松遺跡より産出した木材及び種実」（未発表：後日報告）
- 後藤勝彦 1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚1」「仙台湾周辺の考古学的研究」宮城教育大学歴史研究会
- 小林達雄編 2008 「絶覧 縄文土器」アム・プロモーション
- 仙台市教育委員会ほか 1980 「三神峯遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第25集
- 田部井功 1993 「大洞A2式に関する覚書」「古代」95 早稲田大学
- 「土偶とその情報」研究会 1996 「東北・北海道の土偶II－亀ヶ岡文化の土偶－」土偶シンポジウム5 宮城大会
- 高瀬克範 2000 「東北地方における弥生土器の形成過程」「国立歴史民俗博物館研究報告」第83集
- 日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会 2001 「亀ヶ岡文化－集落とその実体－ 晩期遺構集成」I・II
- 東根市教育委員会・小林遺跡調査団 1975 「小林遺跡」
- 宮城県教育委員会 1990 「摺萩遺跡」宮城県文化財調査報告書第132集
- 宮城県教育委員会 2010 「鍛冶沢遺跡ほか」宮城県文化財調査報告書第222集
- 山形県埋蔵文化財センター 2003 「砂子田遺跡 第2・3次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書  
第113集
- 山内清男 1932 「日本遠古之文化」 ドルメン第一巻
- 山内清男 1961 「日本先史土器の縄文」
- 利府町教育委員会ほか 1987 「菅谷六田遺跡」利府町文化財調査報告書第3集

調査区	道路記号	調査	免水面積(m <sup>2</sup> )	調査面	目視被覆深度と標高(m)	土層堆積状況	目録遺物出土状況	遺構	遺物	備考		
D-36	事業	6.8	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.30m(標高136.6m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-37	事業	7.8	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.30m(標高145.7m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-38	事業	9.3	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.10m(標高144.6m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-39	UO	事業	10.5	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.30m(標高150.0m)まで見付は確認できず。		なし	なし			
D-40	UO	確認	327	V層	185	1層下でV層を確認。目視は深さ1.50m(標高151.0m)まで見付は確認できず。地盤に沿って厚約0.2mほどの黒褐色粘土が分布してあり、表面が風化する。a-b層とV層が繋がっていた場所はみら a層は黒褐色粘土、b層はスクリミーを多く含む 黒褐色粘土層である。		なし	土器上部・ 土器製品・石器・ 土器脚			
D-41	UO	確認	287	V層	154.40	1層下でV・B・E層を確認。目視は深さ1.75m(標高151.0m)まで見付は確認できず。地盤に沿って厚約0.20mほどの黒褐色粘土が分布してあり、表面が風化する。a-b層とV層が繋がっていた場所はみら a層は黒褐色粘土、b層はスクリミーを多く含む 黒褐色粘土層である。		なし	土器上部・ 土器製品・石器・ 石器製品・ 動物遺存体			
D-42	事業	10.5	V層	確認できず	1層下でV層を確認。目視は深さ1.425m(標高142.5m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-43	UO	事業	13.1	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.10m(標高149.1m)まで見付は確認できず。		なし	なし			
D-44	確認	13.7	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.00m(標高152.2m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-45	UO	確認	15.4	V層	135	1層下でV・B・E層を確認。目視は深さ1.35m(標高160.0m)まで見付は確認できず。 16.00		なし	土器上部・石器			
D-46	事業	30.2	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.65m(標高147.1m)まで見付は確認できず。			なし	石器	遺物はV層出土		
D-47	事業	8.7	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.30m(標高147.6m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-48	確認	8.1	V層	確認できず	1層下でV・V層を確認。深さ2.50m(標高148.8m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-49	確認	7.7	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.40m(標高146.8m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-50	UO	確認	8.1	V層	129	1層下でV層を確認。見付は深さ1.30m(標高159.0m)で横断。厚さ2.0mほどの スクリミーを多く含む黒褐色粘土が水平に自然堆積する。 15.94		なし	土器上部・ 石器製品			
D-51	確認	35.6	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ2.40m(標高131.4m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
D-52	確認	17.0	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ3.35m(標高138.1m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-1	UO	確認	64.0	V層	0.88-2.30	1層下でⅢ-V層を確認。見付は深さ0.88-2.10m(標高13.38-12.75m)で横断。北から南へ向かって傾斜した地盤の多くは小町町で発見されたものと同様の厚さ0.2-0.3mほどの黒褐色粘土とスクリミーが自然堆積する。a-d層に繋がるか、c層は底部に泥灰岩存在する。 a層は黒褐色粘土、b層は黑色粘土と瓦礫、c層は黒褐色粘土とスクリミーを多く含む黒褐色粘土が水平に自然堆積する。 d層は黒褐色土壁上である。		なし	土器上部・ 土器製品・石器			
E-2	確認	147	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。見付は深さ1.02m(標高10.12m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-3 東	確認	145	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.75m(標高9.83m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-3 西	確認	145	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.80m(標高9.78m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-4	確認	163	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.94m(標高9.62m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-5	確認	151	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.08m(標高9.42m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-6	確認	148	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.80m(標高9.84m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-7	確認	162	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.95m(標高9.62m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-8	確認	161	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.33m(標高9.41m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-9	確認	128	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ1.24m(標高10.07m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-10	確認	131	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ2.70m(標高11.96m)まで見付は確認できず。			なし	なし			
E-11	確認	142	V層	確認できず	1層下でⅢ-V層を確認。深さ2.90m(標高12.44m)まで見付は確認できず。			なし	なし			

### 附表 調査状況一覧 (1)

調査区	遺跡記号	調査	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	調査面	柱埋め込み深度と 標高値 (m)	土層堆積状況	日別遺物出土状況	遺構	遺物	備考
E-12		確認	14.0	V層		1層下でV層を確認。深さ2.96m(標高12.58m)まで見附は確認できず。		なし	縄文土器	遺物は1層出土
E-13	東	事前	42.3	V層		1層下でV層を確認。深さ3.00m(標高12.57m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-13	西	確認				1層下でV層を確認。深さ2.96m(標高12.66m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-14		確認	13.0	V層		1層下でV層を確認。深さ3.25m(標高12.47m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-15		確認	13.7	V層		1層下でV層を確認。深さ3.08m(標高12.88m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-16		確認	13.1	V層		1層下でV層を確認。深さ2.64m(標高13.29m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-17		確認	19.5	V層		1層下でV層を確認。深さ2.96m(標高13.22m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-18		確認	17.0	V層		1層下でV層を確認。深さ1.80m(標高14.96m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-19		確認	12.1	V層		1層下でV層を確認。深さ2.10m(標高14.67m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-20		確認	25.5	V層		1層下でV層を確認。深さ2.10m(標高14.68m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-21	UO	確認	66.7	V層		1層下でV層を確認。深さ2.80m(標高14.28m)まで見附は確認できず。		なし	縄文土器	
E-22	事前	14.9	V層			1層下でV層を確認。深さ2.60m(標高13.66m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-23	事前	15.0	V層			1層下でV層を確認。深さ2.40m(標高14.11m)まで見附は確認できず。		なし	縄文土器	遺物は1層出土
E-24	事前	13.3	V層			1層下でV層を確認。深さ2.70m(標高14.03m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-25	UO	事前	208.9	V・VI層	0.56~1.50 15.37~16.33	1層下で～2層・瓦屋根を確認。VI層は0.56~0.60m(標高15.37m)で、VI層下で柱頭部が見付かり、その中で柱頭部の横幅や柱に斜めに付く地山に沿って、厚さ約1.06mの黒色粘土や砂質の自然堆积物である。VI層は瓦屋根であることが、a層は東部、b層は北東部にみ残存する。a層はスカラッタ多く含む黒色粘土で、VI層は小層を多く含む黒色粘土で、b層は瓦屋根である。VI層はスカラッタをや多く含む黒色粘土層である。	a・d層の遺物の多くは中・小鏡類が手斧や石刀などと組合して出土しており、集中していた場所はほとんどみられなかった。一方、b層は大規模な比較的多くの柱頭部が見付かっており、柱頭部に数箇所で石製品(範形器)、骨器(骨針)、骨筒(骨筒)、動物遺存体(鱈)など遺物が出土した。	縄文土器・佐佐 上器・土師器・ 石製品・石器・ 石製品・木製 品(範形器)・ 骨器(骨針)・ 骨筒(骨筒)・ 動物遺存体	縄文瓦器から玉 器の遺物を主井 とする遺物混合的 層。佐佐土器は V層、土師器は I層出土	
E-26		確認	14.7	V層		1層下でV層を確認。深さ3.00m(標高11.89m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-27		確認	32.3	V層		1層下でV層を確認。深さ3.30m(標高11.66m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-28		確認	11.7	V層		1層下でV層を確認。深さ3.05m(標高12.88m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-29		確認	33.8	V層		1層下でV層・X層を確認。深さ2.35m(標高13.43m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-30		確認	25.5	V層		1層下でV層を確認。深さ2.25m(標高13.93m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-31		確認	11.7	V層		1層下でV層・X層を確認。深さ1.00m(標高14.93m)まで見附は確認できず。		なし	なし	
E-32	UO	確認	200.4	V・VI・ X層	0.62~0.89 15.98~16.25	1層下でV層を確認。VI層は中央部で標高3.062~0.89m(標高15.98~16.25m)で傾き、南北から北へと緩やかに傾斜する地山に沿って厚さ約0.3~0.5mの黒色粘土が地山プロックで覆われ、VI層は南北から北へと傾いていた。VI層は瓦屋根であることが、a層は中央部にみ残存する。a層はスカラッタ多く含む黒色粘土層、b層は地山プロックをわざかに含む黒色粘土層、c層は地山プロックで覆われて瓦屋根である。	小破片が数点数箇らばついていたのみ。 SK21~SK22・ SK1021~1025	縄文土器・ 上器・土師器・ 石製品	縄文の遺物を主 体とする遺物混 合層	
E-33	UO	確認	35.7	X層	残存せず	1層下の約2.05m(標高16.55m)でX層を発掘。X層は残存せず。		なし	縄文土器	遺物は1層出土
E-34	UO	確認	24.2	X層	残存せず	1層下の約2.02m(標高16.62m)でX層を発掘。X層は残存せず。		なし	なし	
E-35	UO	確認	54.9	X層	残存せず	1層下の約2.02m(標高16.61m)でX層を発掘。X層は残存せず。		なし	縄文土器・石器	遺物は1層出土
E-36	UO	確認	111.0	V・X層	0.25~0.67 16.13~16.55	1層下でV層・X層を確認。VI層は深さ0.25~0.67m(標高16.13~16.55m)で発掘。VI層から東西へと緩やかに傾斜する地山に沿って厚さ約0.3~0.5mの黒色粘土が地山プロックで覆われ、VI層は南北から北へと傾いていた。VI層は瓦屋根であることが、a層は中央部にみ残存する。a層はスカラッタ多く含む黒色粘土層、b層は地山プロックをわざかに含む黒色粘土層である。	a層から比較的多く出土し、c層には遺物が出土しなかった。a・b層ともに中央部や北側に多く出土する。c層は南北から北へと傾いていた。c層は瓦屋根であることが、a層は中央部にみ残存する。a層はスカラッタ多く含む黒色粘土層、b層は地山プロックをわざかに含む黒色粘土層である。	縄文土器・ 上器・土師器・ 石製品	縄文の遺物を主 体とする遺物混 合層	

附表 調査状況一覧 (2)

調査区	遺跡記号	調査	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	調査面	日層検出深度と 標高値 (m)	土層堆積状況	日層出土物上状況	遺構	遺物	備考
E-37	UO	確認	75.1	Ⅳ・Ⅴ・ X層	0.38~0.76 16.31~16.65	1層下でⅣ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ0.38~0.76m（標高約16.31~16.55m）で検出。北から南へと傾斜や少しに傾斜する地山に沿って厚さ0.1~0.3mの黒色粘土が自然堆積する。西西へとさらになくなっていくところ。a・bの2層に区分できるが、a層は土色が暗めで、b層は土色がやややややく含む黒色粘土層。Ⅴ層は東山プロックを多く含む黒色粘土層である。	小破片が数点数らばっていたのみ。	なし	縄文土器・石器	
E-38	UO	確認	88.6	X層	残存せず	1層下の深さ0.25m（標高16.09m）でX層を検出。Ⅳ層は残存せず。		なし	縄文土器・土鍬	遺物は亂出土
E-39	事前	44.2	V層	確認できず		1層下でⅣ~V層を確認。深さ4.75m（標高9.18m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-40	事前	54.9	V層	確認できず		1層下でⅣ~V層を確認。深さ3.70m（標高10.06m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-41	事前	60.6	X層	確認できず		1層下でⅣ~V層・X層を確認。深さ2.20m（標高11.82m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-42 東	事前	145.1	X層	確認できず		西側のⅠ層下でⅣ層。東側のⅠ層下でX層を確認。深さ0.45m（標高12.63m）で検出。Ⅳ層は残存せず。深さ0.95m（標高12.18m）までⅣ層は残存せず。		なし	縄文土器	遺物はⅠ層出土
E-42 西	事前	135.2	X層	確認できず		1層下の深さ0.55m（標高14.96m）でX層を検出。Ⅳ層は残存せず。		なし	縄文土器・ 鉛皿	遺物はⅠ層出土
E-44	UO	事前	230.7	X層	確認できず	1層下の深さ0.55m（標高15.81m）でX層を検出。Ⅳ層は残存せず。		なし	縄文土器	遺物はⅠ層出土
E-45	UO	事前	130.2	X層	確認できず	1層下の深さ0.55m（標高16.53m）でX層を検出。Ⅳ層は残存せず。		なし	縄文土器・石器	遺物はⅠ層・亂 出土
E-46	確認	26.9	V層	確認できず		1層下でⅢ~V層を確認。深さ3.45m（標高10.18m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-47	確認	21.0	V層	確認できず		1層下でⅢ~V層を確認。深さ3.10m（標高10.81m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-48	確認	146	V層	確認できず		1層下でⅢ~V層を確認。深さ3.40m（標高10.72m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-49	確認	32.9	V層	確認できず		1層下でⅢ~V層を確認。深さ3.85m（標高11.37m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-50	確認	12.0	Ⅱ層	確認できず		1層下でⅢ~V層を確認。深さ3.05m（標高13.43m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	
E-51	事前・ 確認	48.3	Ⅲ層	確認できず		1層下でⅢ~V層を確認。深さ3.00m（標高12.45m）までⅣ層は確認できず。		なし	なし	西部のみ事前調 査
E-52	確認	23.8	Ⅲ層	確認できず		1層下でⅢ~V~X層を確認。深さ2.50m（標高14.10m）でⅣ層を検出。Ⅳ層は残存せず。		なし	なし	
E-53	UO	確認	26.8	X層	確認せず	1層下でⅢ~V~X層を確認。深さ2.24m（標高14.14m）までⅣ層は残存せず。		なし	縄文土器	遺物はⅤ層出土
E-54	UO	確認	102.8	Ⅲ層	0.85~1.42 15.55~16.55	1層下でⅢ~Ⅳ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ0.85~1.42m（標高15.55~16.00m）で検出。北から南へと傾斜や緩に傾斜する地山に沿って厚さ0.1~0.2mの黒色粘土層が自然堆積する。a・bの2層に分けてくる。a層は黒色砂利層、b層は黒色粘土層である。	小破片が数点数らばっていたのみ。	ビット	縄文土器・ 石器・石製品	
E-55	UO	事前	42.7	Ⅲ層	2.50 10.08	1層下でⅢ~Ⅳ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ2.50m（標高10.08m）で検出。北東から南西へと傾斜や緩に傾斜する地山に沿って厚さ0.1mのオーバル形砂利層がはば平均に自然堆積する。	小破片が数点数らばっていたのみ。	なし	縄文土器	
E-56	UO	事前	33.8	Ⅲ層	1.70 11.85	1層下でⅢ~Ⅳ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ1.70m（標高11.85m）で検出。北東から南西へと傾斜や緩に傾斜する地山に沿って厚さ0.1mのオーバル形砂利層がはば平均に自然堆積する。	小破片が数点数らばっていたのみ。	なし	縄文土器	
E-57・ 58	UO	事前	102.8	Ⅲ層	1.30 12.54	1層下でⅢ~Ⅳ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ1.30m（標高12.54m）で検出。北東から南西へと傾斜や緩に傾斜する地山に沿って厚さ0.1~0.2mの黒色粘土層がはば平均に自然堆積する。	小破片が数点数らばっていたのみ。	なし	縄文土器	
E-59	UO	事前	54.1	Ⅲ層	1.14 12.84	1層下でⅢ~Ⅳ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ1.14m（標高12.84m）で検出。北東から南西へと傾斜や緩に傾斜する地山に沿って厚さ0.1~0.2mの黒色粘土層がはば平均に自然堆積する。	小破片が数点数らばっていたのみ。	なし	縄文土器・石器	
E-60	UO	事前	145.0	Ⅲ層	0.51 13.69	1層下でⅢ~Ⅳ~Ⅴ・X層を確認。Ⅳ層は深さ0.51m（標高13.69m）で検出。北東から南西へと傾斜や緩に傾斜する地山に沿って厚さ0.1~0.2mの黒色粘土層がはば平均に自然堆積する。	半径の新しい小破片が数点数らばっていたのみ。	なし	縄文土器・石器	表面削去の遺物 混合層
E-61	UO	事前	38.9	X層	確認せず	1層下の深さ5.05m（標高13.69m）でX層を検出。Ⅳ層は残存せず。		なし	なし	

附表 調査状況一覧 (3)

調査区	遺跡記号	調査	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	調査面	剖面検出深度と 標高値	土層堆積状況	日別進出上状況	遺構	遺物	備考
E-62	UO	季前	50.4	X層	残存せず	I層下でY・X層を確認。X層は深20.40m (標高13.10m) で検出。Y層は残存せず。		なし	調文土器	遺物はⅢ層出土
E-63	UO	季前	83.5	II層	0.25~1.08 14.75~15.59	I層下でY・Z・Y-I・Z・X層を確認。厚さ2.02m (標高14.21~15.59m) のY層は、II層は北から東へと傾きやくに傾斜する地盤に沿って厚さ2.02mの黒色粘土層が自然堆積する。Y層は黒色粘土質シルト層、Z層は褐灰色粘土質シルト層、Y-I層は褐色粘土質シルト層である。	牟氏の新しい小礫片が数点数多く見つかったのみ。	なし	調文土器・石器	
E-64	UO	季前	95.8	II層	0.44~1.70 14.24~15.34	I層下でY・Z・Y-I・Z・X層を確認。Y層は深2.04~1.70m (標高14.21~15.34m) のY層は、II層は北から東へと傾きやくに傾斜する地盤に沿って厚さ2.02mの黒色粘土層が自然堆積する。Y層は黒色粘土質シルト層、Z層は褐灰色粘土質シルト層、Y-I層は褐色粘土質シルト層である。	a層からはほとんど遺物が出土しなかった。 b・c層から比較的多くの出土した。ともに東部から中央部にかけての層では、多くが砂利の塊のまま出土したものが多く見つかった。その他の層片はほとんど復合しなかった。	なし	調文土器・石器	前期御源から後期の遺物を主とする遺物混合層 標本第1開拓
E-65	UO	季前	55.2	II層	1.61~2.25 13.81~14.34	I層下でY・Z・Y-I・Z・X層を確認。II層は深2.15~1.61m (標高13.81~14.34m) で検出。Y層は北から東へと傾きやくに傾斜する地盤に沿って厚さ2.02mの黒色粘土層が自然堆積する。a・b・c層に灘分できる。a層は黒色シルト質粘土層、b層は黒色粘土層である。	牟氏の新しい小礫片が数点数多く見つかったのみ。	なし	調文土器・石器	前期御源の遺物 混合層
E-66 東	UO	季前	103.4	II層	確認できず	I層下でY・Z・Y-I・Z・X層を確認。深さ3.05m (標高13.59m) まで見出は確認できず。		なし		
E-66 西	UO	季前	103.4	II層	確認できず	I層下でY・Z・Y-I・Z・X層を確認。深さ2.80m (標高13.68m) まで見出は確認できず。		なし		
E-67	UO	季前	21.4	V層	確認できず	I層下でY・V層を確認。深さ3.00m (標高13.27m) まで見出は確認できず。		なし	調文土器	遺物はV層出土
E-68 北	UO	季前	37.5	V層	残存せず	I層下でY・V層を確認。さらにその下、深さ1.80m (標高13.80m) でZ・X層を確認。Y層は残存せず。		なし		
E-68 南	UO	季前	39.2	V層	残存せず	I層下でV・X層を確認。深さ3.00m (標高13.36m) まで見出は確認できず。		なし		
E-69	UO	季前	39.2	V層	残存せず	I層下でY・V層を確認。深さ2.85m (標高13.65m) でZ・X層を確認。Y層は残存せず。		なし		
E-70 北	UO	確認	57.3	X層	残存せず	I層下の深さ0.03m (標高17.34m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし	調文土器・ 石器・ 切妻器	遺物はI・Y・ 土器
E-70 南	UO	確認	18.2	II層	1.25 13.51	I層下の深さ0.03m (標高17.34m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし	調文土器	
E-71	UO	確認	29.2	II層	0.65 14.06	I層下でY・V層を確認。Y層は深さ1.25m (標高17.34m) で検出。厚さ6.0cmの黒色粘土層が自然堆積する。地へとさらにはくくなっているところもある。	調査はY層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし		
E-72	UO	確認	13.5	II層	0.45 14.35	I層下でY・Z・X層を確認。Y層は深さ0.45m (標高17.43m) で検出。厚さ5.0cmの黒色粘土層が自然堆積する。地へとさらにはくくなっているところもある。	調査はY層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし		
E-73	UO	確認	15.7	II層	0.55 14.25	I層下でY・Z・X層を確認。Y層は深さ0.55m (標高17.42m) で検出。厚さ5.0cmの黒色粘土層が自然堆積する。地へとさらにはくくなっているところもある。	調査はY層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	石器	
E-74	UO	確認	21.8	II層	0.86 13.94	I層下でY・Z・X層を確認。Y層は深さ0.86m (標高13.94m) で検出。厚さ5.0cmの黒色粘土層が自然堆積する。地へとさらにはくくなっているところもある。	調査はY層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし		
E-75	UO	確認	15.5	II層	0.80 14.36	I層下でY・Z・X層を確認。Y層は深さ0.80m (標高14.36m) で検出。厚さ5.0cmの黒色粘土層が自然堆積する。地へとさらにはくくなっているところもある。	調査はY層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし		
E-76	UO	確認	12.7	V層	残存せず	I層下でY・X層を確認。深さ1.05m (標高14.21m) までY層は残存せず。		なし		
E-77	UO	確認	24.3	X層	残存せず	I層下の深さ0.25m (標高16.46m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし	調文土器	遺物は複数出土
E-78	UO	確認	22.9	X層	残存せず	I層下の深さ0.25m (標高16.57m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし	調文土器・石器	遺物は複数出土
E-79	UO	確認	25.4	X層	残存せず	I層下の深さ0.25m (標高16.41m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし		
E-80	UO	確認	12.4	X層	残存せず	I層下の深さ0.25m (標高16.30m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし		
E-81	UO	確認	12.0	X層	残存せず	I層下の深さ0.25m (標高16.21m) でX層を検出。Y層は残存せず。		なし		
E-82	UO	確認						なし		

附表 調査状況一覧 (4)

調査区	遺跡記号	調査	発掘面積 (sqm)	調査面	V層地盤と 既存地盤 (m)	上層堆積状況	V層遺物出土状況	遺構	遺物	備考
E-83	UO	確認	24.1	V・Ⅳ・ X層	0.60	1層下でV層・X層を確認。V層は深さ0.60m (標高16.15m) で検出。厚さ約0.6mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・石器	縄文の遺物混合層か
					16.15					
E-84	UO	確認	12.1	V層	0.30	1層下でV層を確認。V層は深さ0.30m (標高16.31m) で検出。厚さ約0.3mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器	縄文の遺物混合層か
					16.31					
E-85	UO	確認	12.6	V層	0.16	1層下でV層を確認。V層は深さ0.16m (標高16.24m) で検出。厚さ約0.16mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・石器	縄文の遺物混合層か
					16.24					
E-86	UO	確認	11.6	V層	0.60	1層下でV・Ⅳ層を確認。V層は深さ0.60m (標高16.00m) で検出。厚さ約0.6mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・石器	縄文の遺物混合層か
					15.99					
E-87	UO	確認	9.1	V層	0.50	1層下でV・Ⅳ層を確認。V層は深さ0.50m (標高15.50m) で検出。厚さ約0.5mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。a・b層は黒色粘土、b層は黒色スクロブである。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器	縄文の遺物混合層か
					16.02					
E-88	UO	確認	17.3	V層	0.30	1層下でV・Ⅳ・X層を確認。V層は深さ0.30m (標高15.70m) で検出。厚さ約0.3mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・石器	遺物は複屈出土
					16.48					
E-89	UO	確認	26.6	V層	0.63	1層下でV・Ⅳ・X層を確認。V層は深さ0.63m (標高15.37m) で検出。厚さ約0.63mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・ 土製品・石器・ 石製品	縄文の遺物混合層か。 土製品、 石器、石製品は V層出土
					16.07					
E-90	UO	確認	16.0	V層	0.30	1層下でV層を確認。V層は深さ0.30m (標高16.13m) で検出。厚さ約0.3mの黒色粘土が自然堆積する。西へとさらに深くなっていくとみられる。a・b層は黒色粘土、b層は黒色スクロブである。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・石器	遺物はV層・ V層出土
					16.13					
E-91	UO	確認	13.1	V層	確認できず	1層下でV層を確認。V層は深さ0.60m (標高16.00m) までV層は確認できず。		SK1036~ 1043	縄文土器	遺物はV層・ SK1036・ V層出土
E-92	UO	確認	10.5	X層	残存せず	1層下の深さ0.35m (標高16.28m) でX層を確認。V層は残存せず。		なし	縄文土器	遺物はV層出土
E-93	UO	確認	9.6	V層	0.25	1層下でV・X層を確認。V層は深さ0.25m (標高16.20m) で検出。西へとさらに深くなっていくとみられる。厚さ約0.25mの灰白色砂利が自然堆積する。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・ 土製品・石器	遺物はV層・ V層出土
					16.20					
E-94	UO	確認	9.2	V層	0.10~0.05	1層下でV・X層を確認。V層は深さ0.10~0.05m (標高16.08m~16.36m) で検出。厚さ約0.1~0.05m以上の黒色粘土・黄灰色砂利が自然堆積する。a・b層はV層以上に繋ぎでできる。西へとさらに深くなっていくとみられる。	調査はV層検出とボーリング調査の確認のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・ 土製品・石器・ 中世陶器	遺物はV層・ V層出土
					16.08~16.36					
E-95	UO	確認	7.5	V層	0.35	1層下でV・X層を確認。V層はボーリング調査によって、深さ約0.35m (標高15.97m) で検出。厚さ約0.35mの黒色粘土で確認。厚さ約0.2m以上の黒色粘土・黄灰色砂利が自然堆積する。a・b層はV層以上に繋ぎができる。	調査はボーリング調査のみで、詳細は不明	なし	縄文土器・ 土製品・石器	遺物はV層・ V層出土
					15.97					
F-1	UO	事前	74.2	X層	残存せず	1層下でV・X層を確認。V層は深さ0.45m (標高17.07m) で検出。V層は残存せず。		なし	土器皿・ 灰窓器・瓦	遺物は複屈出土
F-2	UO	事前	20.1	V層	確認できず	1層下でV層を確認。深さ約2.30m (標高13.94m) までV層は確認できず。		なし		
F-3	UO	事前	27.3	V層	0.21~1.65	1層下でV・X層を確認。V層は深さ0.21~1.65m (標高13.95~17.35m) で検出。南西から北東へと傾斜する地山に沿って厚さ約0.1~0.2mの黒色粘土が自然堆積する。北東へとさらに深くなっていくとみられる。	小破片が数点散らばっていたのみ。	なし	縄文土器・石器	縄文の遺物混合層か
					15.95~17.35					
F-4 北	UO	事前	58.3	V・Ⅳ層	0.12	1層下でV・X・X層を確認。V層は北東側の深さ約1.20m (標高17.35m) でわずかに検出できるのみ。南西から北東へと傾斜する地山に沿って厚さ約0.1~0.2mの黒色粘土が自然堆積する。北東へとさらに深くなっていくとみられる。		なし	なし	
					17.35					
F-4 南					1層下でV・X層を確認。V・X層は深さ0.60m (標高16.88m) で検出。V層は残存せず。					

附表 調査状況一覧 (5)

調査区	遺跡記号	調査	発掘面積 (m <sup>2</sup> )	調査面	日層検出深度と 標高値 (m)	土層堆積状況	日層遺物出土状況	遺構	遺物	備考
F-5	UO	事前・ 確認	197.4	日層	0.69～1.36	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は表面にのみ残存し、深さ0.95～1.16m(標高16.0～17.92m)で検出。北から南へと傾きながら層厚する地層に沿って厚くなる厚さ0.61mの黒褐色粘土が自然堆積する。a～bの2層に繋ぎできる。Ⅳ層は黒褐色粘土層、b層は黒褐色シルト質粘土層である。南へとさらに厚くなっている。	半乳の美しい小破片が数点数枚ばっっていたのみ。	なし	縄文土器・ 石器・石製品・ 土器・瓦・ 陶器・瓦・ 中空陶器	切土部のみ事前 調査、前段階調 査から前段階 の遺物は含めず。 瓦は複数、中空 陶器は1層出土。
					16.88～17.92					
F-6	UO	事前・ 確認	385	日層	0.85～0.98	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は表面にのみ残存し、深さ0.95～1.08m(標高17.23～17.65m)で検出。北から南へと傾きながら層厚する地層に沿って厚くなる厚さ0.61mの黒褐色粘土が自然堆積する。a～bの2層に繋ぎできる。Ⅳ層は黒褐色シルト質粘土層である。南へとさらに厚くなっている。	半乳の美しい小破片が数点数枚ばっていたのみ。	なし	縄文土器・石器	切土部のみ事前 調査、前段階調 査から前段階 の遺物は含めず。 瓦は複数、中空 陶器は1層出土。
					17.23～17.85					
F-7	UO	事前・ 確認	81.9	日層	0.78～0.84	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は表面にのみ残存し、深さ0.95～1.08m(標高17.23～18.08m)で検出。北から南へと傾きながら層厚する地層に沿って厚くなる厚さ0.61mの黒褐色粘土が自然堆積する。南へとさらに厚くなっている。	半乳の美しい小破片が数点数枚ばっていたのみ。	SE1032	縄文土器・ 石器・石製品	切土部のみ事前 調査、井戸は中 世以降
					17.23～18.08					
F-8 北	UO	事前・ 確認	75.5	日層	0.24～1.96	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は表面にのみ残存し、深さ0.95～1.08m(標高17.23～18.08m)で検出。北から南へと傾きながら層厚する地層に沿って厚くなる厚さ0.61mの黒褐色粘土層、b層は黒褐色シルト層である。北へとさらに厚くなっている。	b層から比較的多く出土し、北東部でa～c層の遺物が混在する傾向であった。ただしⅢ・Ⅳ層の遺物のはほとんどが、a～bの2層に繋ぎできる。a～b層の遺物のはほとんどが、b層で出土する。c層は黒褐色シルト層である。北へとさらに厚くなっている。	なし	縄文土器・ 石器・瓦	切土部のみ事前 調査、前段階調 査から前段階 の遺物は含めず。 瓦は複数出土。
					16.67～18.43					
F-8 南				X層	残存せず	I層下の深さ0.75m(標高18.30m)でX層を検出。Ⅲ層は残存せず。		なし	縄文土器	
F-9	UO	確認	28.0	日層	1.02～1.94	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は深さ1.02m(標高16.60～17.60m)で検出。南へと傾いて厚くなる厚さ0.61～0.80m(標高17.00～18.00m)で検出。北へと傾いて厚くなる厚さ0.61～0.80m(標高17.00～18.00m)で検出。a～bの2層に繋ぎできる。a～b層は黒褐色シルト層、b層は黒褐色シルト質粘土層である。北へとさらに厚くなっている。	半乳の美しい小破片が数点数枚ばっていたのみ。	なし	縄文土器・石器	前段階調査の遺物 を主体とする遺 物は含めず。
					16.66～17.60					
F-10	UO	確認	41.1	日層	0.55～0.98	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は表面にのみ残存し、深さ0.95～1.08m(標高17.23～18.08m)で検出。北から南へと傾いて厚くなる厚さ0.61～0.80m(標高17.23～18.08m)で検出。a～bの2層に繋ぎできる。a～b層は黒褐色シルト層、b層は黒褐色シルト質粘土層である。北へと傾いて厚くなる厚さ0.61～0.80m(標高17.23～18.08m)で検出。a～bの2層に繋ぎできる。a～b層は黒褐色シルト層、b層は黒褐色シルト質粘土層である。	a～b層から比較的多くの出土し、南東部でa～c層の遺物が混在する傾向であった。ただしⅢ・Ⅳ層の遺物のはほとんどが、b層で出土する。c層は黒褐色シルト層である。a～b層の遺物のはほとんどが、b層で出土する。c層は黒褐色シルト層である。a～b層の遺物のはほとんどが、b層で出土する。c層は黒褐色シルト層である。	なし	縄文土器・ 石器・石製品・ 土器・瓦・ 陶器・瓦・ 中空陶器	前段階調査の遺物 を主体とする遺 物は含めず。
					17.34～17.26					
F-11	UO	確認	52.5	日層	0.15～0.88	I層下でⅢ～Ⅳ層を確認。Ⅲ層は表面にのみ残存し、深さ0.95～1.08m(標高17.23～18.08m)で検出。北から南へと傾いて厚くなる厚さ0.61～0.80m(標高17.23～18.08m)で検出。a～bの2層に繋ぎできる。a～b層は黒褐色シルト層、b層は黒褐色シルト質粘土層である。北へと傾いて厚くなる厚さ0.61～0.80m(標高17.23～18.08m)で検出。a～bの2層に繋ぎできる。a～b層は黒褐色シルト層、b層は黒褐色シルト質粘土層である。	a～b層から比較的多くの出土し、北東部でa～c層の遺物が混在する傾向であった。ただしⅢ・Ⅳ層の遺物のはほとんどが、b層で出土する。c層は黒褐色シルト層である。	なし	縄文土器・ 石器・石製品	前段階調査の遺物 を主体とする遺 物は含めず。
					17.28～18.00					
F-12 北	UO	確認	49.1	X層	残存せず	I層下の深さ0.22m(標高17.89m)でX層を検出。Ⅲ層は残存せず。		なし	なし	
F-12 南						II層下の深さ0.26m(標高17.50m)でX層を検出。Ⅲ層は残存せず。				
F-13	UO	確認	18.9	X層	残存せず	II層下の深さ0.06m(標高17.53m)でX層を検出。Ⅲ層は残存せず。		なし	なし	
F-14	UO	確認	10.0	X層	残存せず	II層下の深さ0.35m(標高17.45m)でX層を検出。Ⅲ層は残存せず。		なし	なし	

附表 調査状況一覧 (6)

# 附 章

## 附章1 愛宕山・諏訪遺跡出土土器の漆分析

藤根久（パレオ・ラボ）

### 1.はじめに

愛宕山・諏訪遺跡から平成19年に出土した塗り土器および漆質が内面に付着した土器について、実体顕微鏡を用いた観察と赤外分光分析を行った。

### 2. 試料と方法

分析試料は、愛宕山・諏訪遺跡から出土した縄文土器3試料である（表1）。

予め、各試料の塗布または付着状況について実体顕微鏡を用いて観察した後、表面部分において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光株式会社/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

表1 分析を行った縄文土器塗布部および付着物とその特徴

試料No	遺跡	区	層	器種	時期	残存状況	測定位置	特徴	登録	図	写真
1a	諏訪	A	1	Mb・c 壺（直腹）	縄文時代（大割A）	肩部～全体	外部外側、黒色部	光沢のある黒色（下位層）	R088	7-6	28-8
1b							外部外側、赤色部	光沢のある赤色（上位層）			
2	愛宕山	B10	8d	浅鉢（内面付着）	縄文時代	全体部～底部	淡茶褐色	光沢有、縮み皺有	R099	31-8	24-1
3	愛宕山	B10	8d	浅鉢（内面付着）	縄文時代	全体部～底部（定期）	黒色	光沢有、縮み皺有	R140	30-5	23-8

\*登録・図・写真は官文書第223集の番号

### 3. 結果および考察

塗布物および付着物の光学顕微鏡観察および赤外分光分析の結果について述べる。

#### 試料No 1（外面塗布部）

塗布部は、光沢のある黒色部と赤色部からなり、黒色部の上に赤色物を塗布してある。赤外分光分析では、いずれも漆の成分であるウルシオール（生漆の吸収ピークNo 6～8）が確認されたことから、漆と同定される。なお、赤色物のスペクトルにおいて生漆の吸収ピークNo 9に相当する大きな吸収が見られるが、漆の劣化に伴うゴム質である。この赤色部の顔料は蛍光X線分析によりベンガラであったことから（赤色顔料分析を参照）、鉄分の酸化に伴う劣化と推定される。

#### 試料No 2（内面付着物）

内面付着物は、光沢のある淡茶褐色からなり縮み皺が明瞭に認められた。赤外分光分析では、漆の成分であるウルシオール（生漆の吸収ピークNo 6～8）が確認されたことから、漆と同定される。

#### 試料No 3（内面付着物）

内面付着物は、光沢のある黒色からなり縮み皺が明瞭

表2 生漆の赤外吸収位置とその強度

吸収No	生漆	
	位置	ウルシ成分
1	2925.48	28.5337
2	2854.13	36.2174
3	1710.55	42.0346
4	1633.41	48.8327
5	1454.06	47.1946
6	1351.86	50.8030 ウルシオール
7	1270.86	46.3336 ウルシオール
8	1218.79	47.5362 ウルシオール
9	1087.66	53.8428
10	727.03	75.3890

に認められた。赤外分光分析では、漆の成分であるウルシオール（生漆の吸収ピークNo.6～8）が確認されたことから、漆と同定される。

試料No.1の黒色と赤色の2色漆塗り土器は、黒漆を塗布した後ベンガラ成分を混ぜた赤漆を塗布している。一方、試料No.2およびNo.3の土器内面付着漆は、いずれも表面部分に縮み皺が明瞭に認められたことから、漆容器として利用されていたことが推定される。

#### 4. おわりに

塗布物および付着物の光学顕微鏡観察および赤外分光分析を行った結果、試料No.1の黒色と赤色の2色漆塗り土器であり、黒漆を塗布した後ベンガラ成分を混ぜた赤漆を塗布している。

一方、試料No.2およびNo.3の土器内面付着漆は、いずれも表面部分に縮み皺が明瞭に認められたことから、漆容器として利用されていたことが推定された。

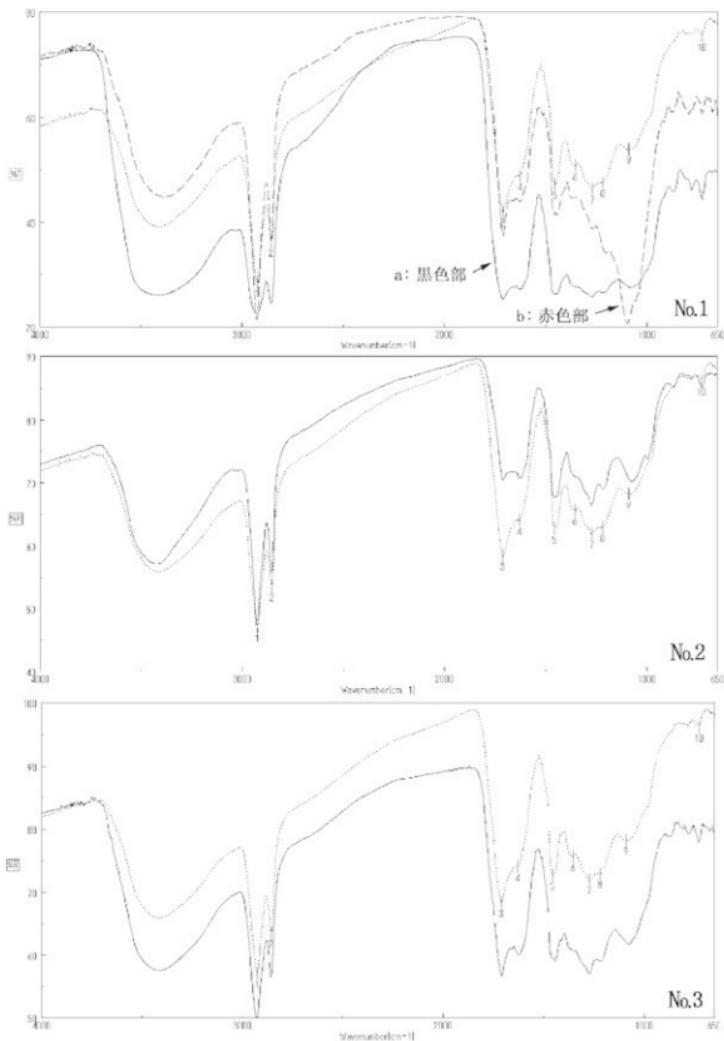
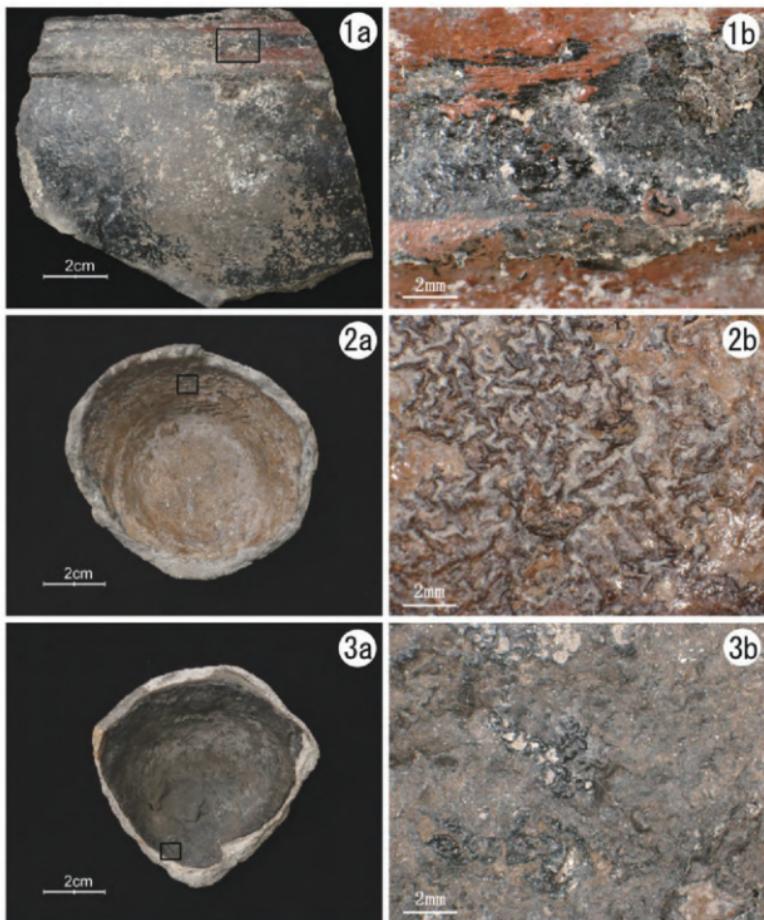


図1 塗布部(No.1)または付着物(No.2・3)の赤外分光スペクトル図  
(縦軸は透過率、横軸が波数を示す)

実線または破線：試料、点線：生漆(No.は主な吸収位置)

No.は試料番号に対応する



図版1 土器塗布部および付着物と測定位置 (bはaの□部の拡大)

1. 縄文土器壺外側塗布部 (No.1, a: 赤色物, b: 黒色物)
2. 縄文土器浅鉢内面付着物 (No.2)
3. 縄文土器浅鉢内面付着物 (No.3)

## 附章2 愛宕山・諏訪・宮沼遺跡出土赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展（パレオ・ラボ）

### 1.はじめに

大崎市に所在する愛宕山・諏訪・宮沼遺跡より平成19年に出土した土器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

### 2. 試料と方法

分析対象資料は、愛宕山・諏訪・宮沼遺跡から出土した土器12点に付着する赤色顔料で、時期は繩文時代晚期である（表1、図版1）。実体顕微鏡下で、資料の赤色部分をセロハンテープに極少量採取して分析試料とした。

表1 分析対象資料

No.	遺跡	区	層	種類	型式名	器種	残存状況	採取位置	登録	図	写真
1	諏訪	A29	Vlb	繩文土器	大洞A	浅鉢	口縁部	体部外面	R20	19-5	30-3
2	諏訪	A20	Vlc	繩文土器	大洞A	浅鉢	ほぼ完形	口縁	R152	11-4	22-1-2
3	諏訪	A20	Vlc	繩文土器	大洞A	壺か	口縁部	口縁	R155	—	28-14
4	諏訪	A26	Vta	繩文土器	大洞A	浅鉢	口縁部～体部	体部内面	R161	56-1	29-13
5	諏訪	A1	Vlb・c	繩文土器	大洞A	壺	肩部～体部	体部外面	R188	7-6	28-8
6	愛宕山	B28	Vla	繩文土器	壺か	体部	体部外面	R245	—	—	—
7	愛宕山	B10東	Vla	繩文土器	大洞A	浅鉢	口縁部～体部	口縁	R293	32-7	31-6
8	愛宕山	B10東	Vlb	繩文土器	壺	体部	体部内面	R398	—	—	—
11	愛宕山	B11	Vla	繩文土器	大洞A	浅鉢	口縁部～体上部	体部外面	R471	42-3	32-6
12	愛宕山	B11	Vlb	繩文土器	壺	体上部	体部内面	R519	—	—	—
13	愛宕山	B11	Vlb	繩文土器	浅鉢	頸部～体下部	体部外面	R589	—	—	—
14	宮沼	C21東	Vlb	繩文土器	浅鉢	口縁部～体上部	体部外面	R696	—	—	—

\*登録・図・写真是宮文報第223集の番号

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が100μmまたは10μm、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）で、試料室の大きさは350×400×40mmである。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.72～1.00mA（自動設定による）、ビーム径100μm、測定時間500s、パルス処理時間P4（分解能を重視した設定）に設定した。定量分析は標準試料を用いないFP（ファンダメンタル・パラメータ）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

また、採取した試料は顕微鏡下での観察も行い、赤色顔料の粒子形状を確認した。

### 3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1～2に示す。

いずれの試料からもケイ素(Si)、鉄(Fe)などを中心に、アルミニウム(Al)、リン(P)、硫黄(S)、

カリウム (K)、カルシウム (Ca)、チタン (Ti)、マンガン (Mn) などが検出された。

また、顕微鏡観察により得られた画像を図版2に示す。No7、No12、No13から、赤色パイプ状の粒子が観察された。

#### 4. 考察

この時期に使用されていた赤色顔料としては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は、硫化水銀 ( $HgS$ ) で鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄 ( $Fe_2O_3$ 、鉱物名は赤鉄鉱) を指すが、広義には鉄 (III) の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬 2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約  $1\ \mu m$  のパイプ状の粒子形状からなるものが多く報告されている。これは鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田 1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬 1998）。

いずれの試料もケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が多く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたると考えられる。また、光学顕微鏡下で観察したところ、No7、No12、No13からはパイプ状の粒子が検出されたことから、鉄バクテリアを起源とする、いわゆるパイプ状ベンガラが利用されていたといえる。なお、No5は赤外分光分析により漆の使用が確認されている（別稿漆分析の試料No1参照）。

#### 5. おわりに

愛宕山・諏訪・宮沼遺跡より出土した土器12点に付着する赤色顔料について分析した結果、鉄が多く検出され、鉄 (III) による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。No7、No12、No13からはパイプ状ベンガラが検出された。

#### 引用文献

- 成瀬正和 (1998) 縄文時代の赤色顔料 I -赤彩土器- 考古学ジャーナルNo438 10-14 ニューサイエンス社.  
成瀬正和 (2004) 正倉院宝物に用いられた無機顔料 正倉院紀要 13-61 宮内庁正倉院事務所.  
岡田文男 (1997) パイプ状ベンガラ粒子の復元 日本国文化財科学会第14回大会研究発表要旨集 38-39.

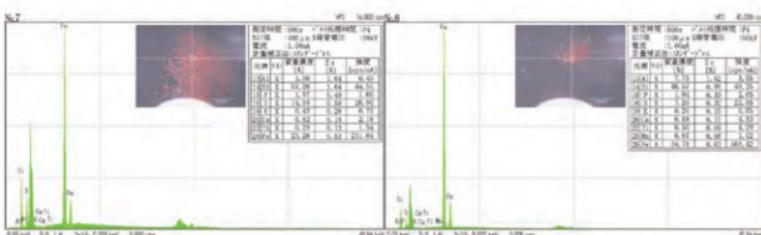
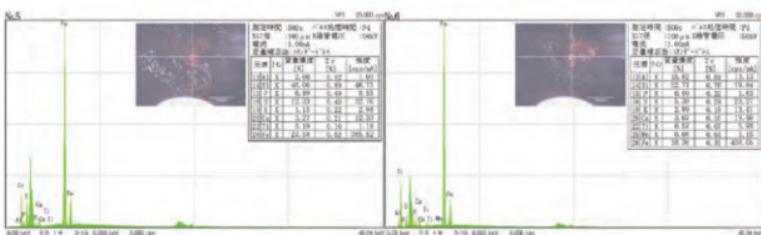
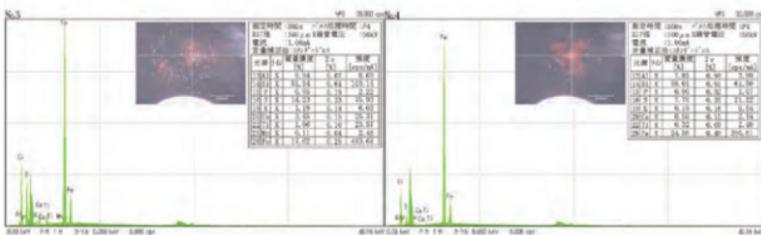
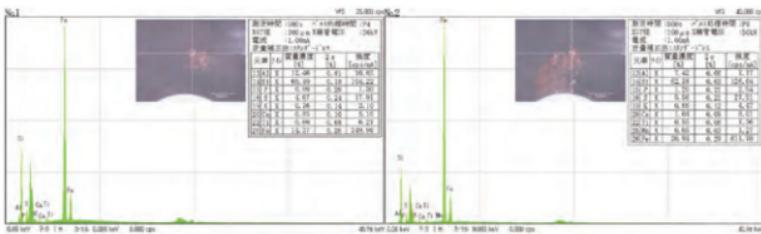


図1 赤色顔料の蛍光X線分析結果(1)

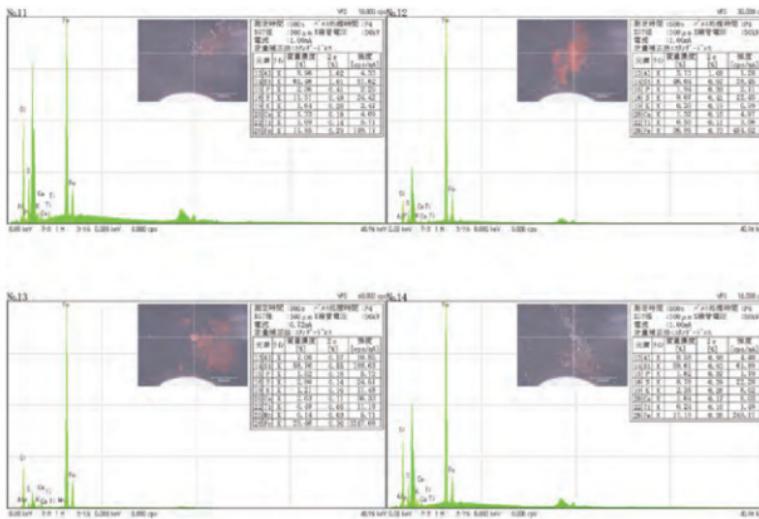
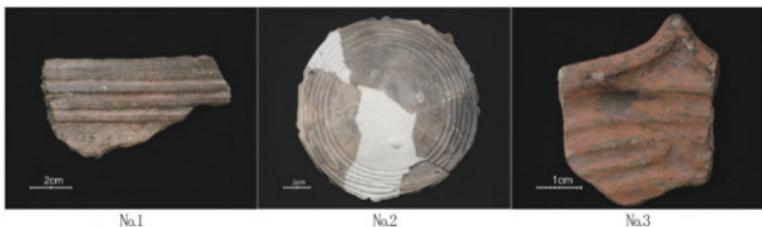


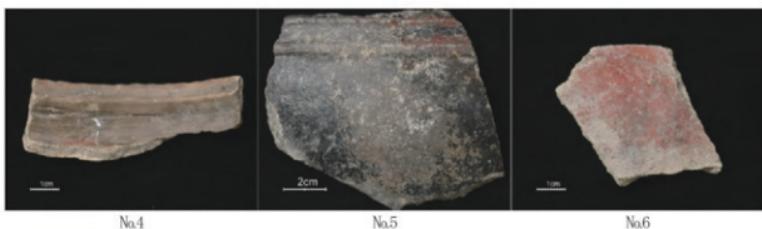
図2 赤色顔料の蛍光X線分析結果(2)



No.1

No.2

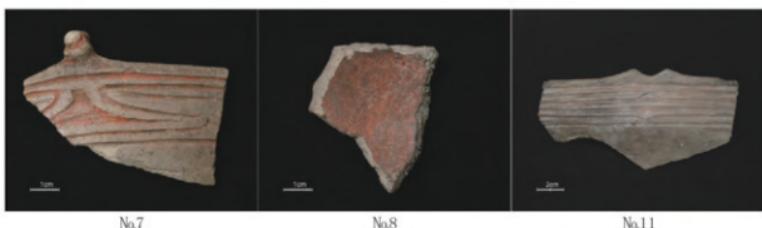
No.3



No.4

No.5

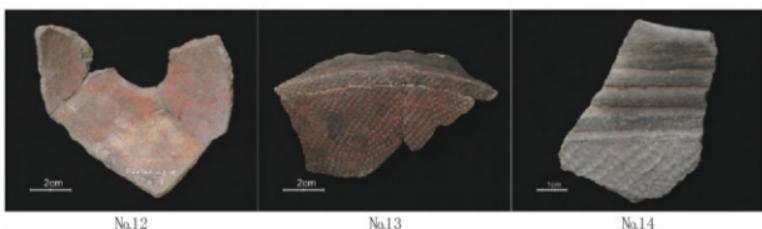
No.6



No.7

No.8

No.11

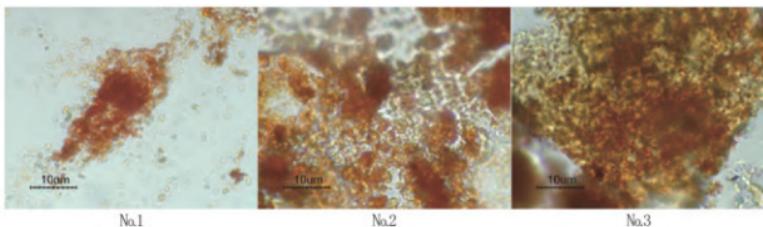


No.12

No.13

No.14

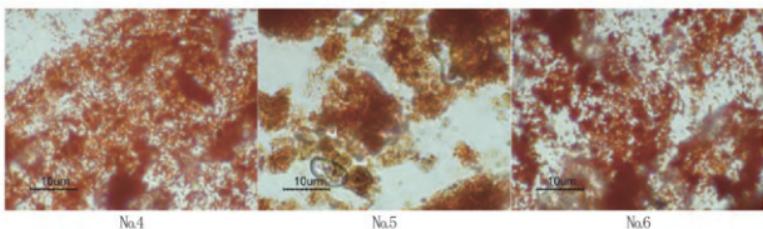
図版 1 分析対象資料



No.1

No.2

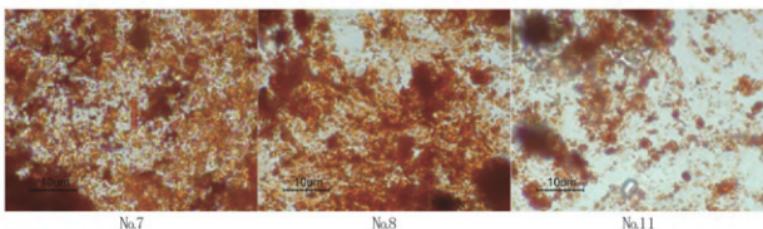
No.3



No.4

No.5

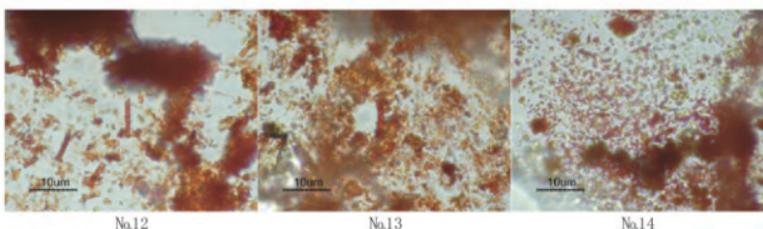
No.6



No.7

No.8

No.11



No.12

No.13

No.14

図版2 赤色顔料の光学顕微鏡写真

### 附章3 北小松遺跡出土赤色顔料の蛍光X線分析

竹原弘展（バレオ・ラボ）

#### 1. はじめに

大崎市に所在する北小松遺跡より平成20年に出土した土器に付着する赤色顔料について蛍光X線分析を行い、組成を検討した。

#### 2. 試料と方法

分析対象資料は、北小松遺跡から出土した土器6点に付着する赤色顔料で、時期はNo.5が弥生時代前期、その他5点は縄文時代晩期である（表1、図版1）。実体顕微鏡下で、資料の赤色部分をセロハンテープに極少量採取して分析試料とした。

分析装置はエネルギー分散型蛍光X線分析装置である（株）堀場製作所製分析顕微鏡XGT-5000Type IIを使用した。装置の仕様は、X線管が最大50kV・1mAのロジウムターゲット、X線ビーム径が $100\mu\text{m}$ または $10\mu\text{m}$ 、検出器は高純度Si検出器（Xerophy）である。検出可能元素はナトリウム～ウランであるが、ナトリウム、マグネシウムといった軽元素は蛍光X線分析装置の性質上、検出感度が悪いため、試料中に少量含む程度ではピークを検出し難く、検出できてもその定量値はかなり誤差が大きい。

本分析での測定条件は、50kV、0.44～1.00mA（自動設定による）、ビーム径 $100\mu\text{m}$ 、測定時間500s、パルス処理時間P4に設定した。定量分析は標準試料を用いないFP（ファンダメンタル・パラメータ）法による半定量分析を装置付属ソフトで行った。そのため、定量値の誤差は大きい。

また、採取した試料は生物顕微鏡下での観察も行い、赤色顔料の粒子形状を確認した。

#### 3. 結果

分析により得られたスペクトルおよびFP法による半定量分析結果を図1に示す。

いずれの試料からもケイ素(Si)、鉄(Fe)などを中心に、アルミニウム(Al)、リン(P)、硫黄(S)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)などが検出された。また、No.6からは水銀(Hg)も検出された。

また、顕微鏡観察により得られた画像を図版2に示す。No.5から、赤色パイプ状の粒子が観察された。

#### 4. 考察

この時期に使用されていた赤色顔料としては、朱（水銀朱）とベンガラが挙げられる。水銀朱は硫化水銀(HgS)で、鉱物としては辰砂と呼ばれ、産出地はある程度限定される。ベンガラは狭義には三酸化二鉄( $\text{Fe}_2\text{O}_3$ 、鉱物名は赤鉄鉱)を指すが、広義には鉄(Ⅲ)の発色に伴う赤色顔料全般を指し（成瀬 2004）、広範な地域で採取可能である。また、ベンガラは直径約 $1\mu\text{m}$ のパイプ状の粒子

形状からなるものも多く報告されている。このパイプ状の粒子形状は鉄バクテリアを起源とすることが判明しており（岡田 1997）、含水水酸化鉄を焼いて得た赤鉄鉱がこのような形状を示す（成瀬 1998）。

No 1～No 5 の試料はケイ素など土中成分に由来すると考えられる元素は検出されたものの、水銀は検出されなかった。鉄が多く検出されていることから、赤い発色は鉄によるものであると推定できる。すなわち、顔料としてはベンガラにあたると考えられる。また、生物顕微鏡下で観察したところ、No 5 からはパイプ状の粒子が検出されたことから、鉄バクテリアを起源とする、いわゆるパイプ状ベンガラが利用されていたといえる。No 6 は他試料と同様に鉄が高く検出されたが、同時に水銀も少量検出されていることから、ベンガラに水銀朱が少量混ざっているものと判断される。

## 5. おわりに

北小松遺跡より出土した土器 6 点に付着する赤色顔料について分析した結果、鉄が多く検出され、鉄（Ⅲ）による発色と推定された。顔料としてはベンガラにあたる。No 5 からはパイプ状ベンガラが検出された。また、No 6 には水銀朱が少量混ざっているとみられる。

## 引用文献

成瀬正和（1998）縄文時代の赤色顔料 I - 赤彩土器 - 考古学ジャーナル No438 10-14 ニューサイエンス社.

成瀬正和（2004）正倉院宝物に用いられた無機顔料 正倉院紀要 13-61 宮内庁正倉院事務所.

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元 日本国文化財科学会第14回大会研究発表要旨集 38-39.

表1 分析を行った縄文土器塗布部および付着物とその特徴

分析 No	道跡	地区 道跡名	基本別・ 特征・ 道跡名	種類	型式名	器種	残存状況	口縁・底部・台・ 脚文様（単位）	地文	顔料付着 位置	登録	図	写真
1	北小松	E25中央	Wd層	縄文土器	大鉢口小	壺	全体部	二文文	不明	外面	308	16-24	21-23
2	北小松	E25中央	Wd層	縄文土器	大鉢口1か	浅鉢	口縁部-全体上部	云形文	不明	内外面	R107	16-3	21-9
3	北小松	E25北端	Wd層	縄文土器	大鉢A	浅鉢	口縁部-底部	二字7字2段(背前腹)	なし	外面	R140	27-5	26-4
4	北小松	E25西	Wd層	縄文土器		壺	全体	不明	不明	外面	R132	—	29-22
5	北小松	E25東段	V層	弦生土器小	青木細か	高环	脚部	波状の沈没文	不明	外面	R343	86-2	51-3
6	北小松	E32	SK21 堆積上	縄文土器	大鉢BCか	壺	口縁部-全体下部	手ぬ状文か	なし	口縁部外面	R354	—	40-10

\*登録・図・写真は宮文復第250集の番号

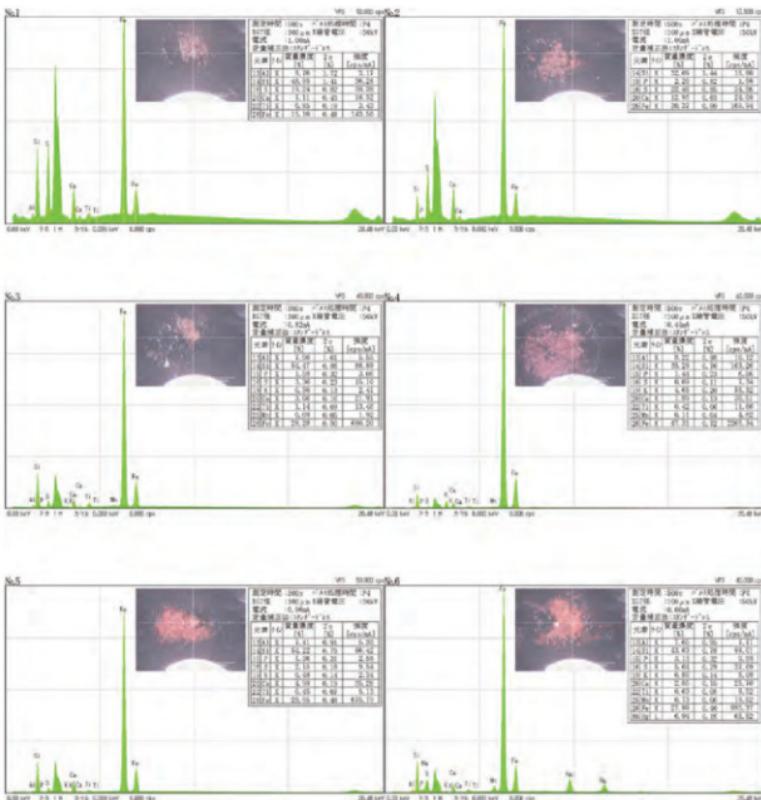
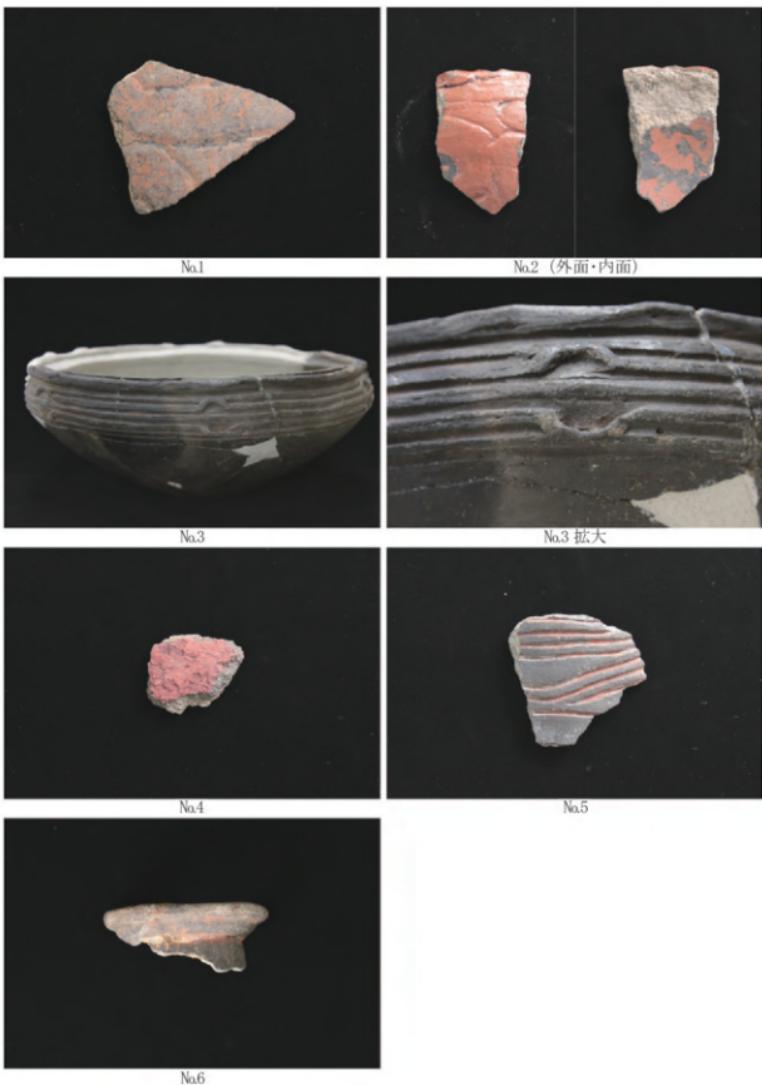
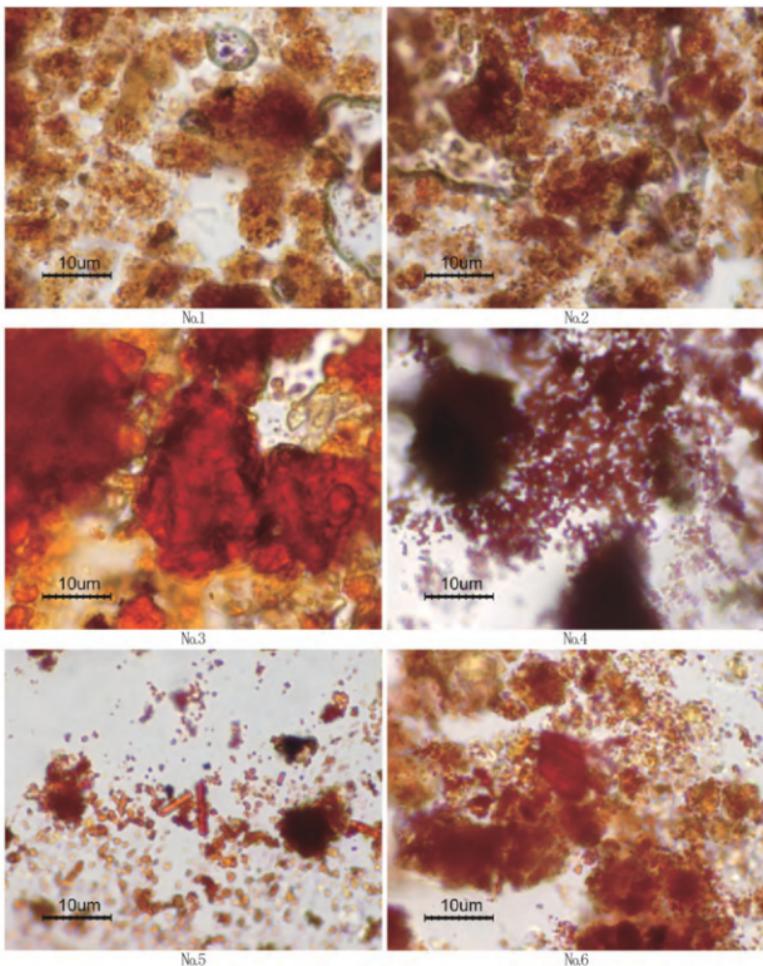


図1 赤色顔料の蛍光X線分析結果



図版 1 分析対象資料



図版2 生物顕微鏡写真

## 附章4 放射性炭素年代測定結果報告書（AMS測定）愛宕山・諏訪・宮沼遺跡 (株) 加速器分析研究所

### （1）遺跡の位置

愛宕山・諏訪・宮沼遺跡は、宮城県大崎市田尻諏訪岬ほかに所在する。

### （2）測定対象試料

測定対象試料は、平成19年にA-1区Vlb・c層から出土した土器外面付着炭化物（1：IAAA-72452）、A-28区Vlb層から出土した土器外面付着炭化物（2：IAAA-72453）、B-10区東Vla層から出土した土器内面付着炭化物（4：IAAA-72454）、B-11区Vlb層から出土した土器内面付着炭化物2点（5：IAAA-72455、6：IAAA-72456）、C-2区南Vla層から出土した土器外面付着炭化物（12：IAAA-72457）、C-7区Vlb層から出土した土器内面付着炭化物（14：IAAA-72458）、C-21区西VI層から出土した土器内面付着炭化物（15：IAAA-72459）、A-29区SK3埋土1層上面から出土した炭化物（16：IAAA-72460）、A-25区IV層から出土した炭化物（17：IAAA-72461）、合計10点である。

### （3）化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。  
最初の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001～1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80°C）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80°C）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90°Cで乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空中で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO<sub>2</sub>）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

### （4）測定方法

測定機器は、3 MVタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシユ

ウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ の測定も同時に行う。

### (5) 算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2)  $^{14}\text{C}$ 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 $^{14}\text{C}$ 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。
- 3) 付記した誤差は、複数回の測定値について $\chi^2$ 検定が行われ、測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値、みなせない場合には標準誤差から求めた値が用いられる。
- 4)  $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定されるが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰ : パーミル)で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_S - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_S - ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / ^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 $^{14}\text{A}_S$  : 試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度 : ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )<sub>S</sub>または( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )<sub>E</sub>

$^{14}\text{A}_R$  : 標準現代炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度 : ( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )<sub>R</sub>または( $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ )<sub>E</sub>

- $\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の $^{13}\text{C}$ 濃度 ( $^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ )を測定し、PDB(白亜紀のペレムナイト類の化石)の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に(加速器)と注記する。
- 5)  $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰)であるとしたときの $^{14}\text{C}$ 濃度 ( $^{14}\text{A}_N$ )に換算した上で計算した値である。(1)式の $^{14}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000))^2 \quad (^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C} / 1000)) \quad (^{14}\text{A}_S \text{として } ^{14}\text{C}/^{13}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\%)$$

- 貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

- 6) pMC(percent Modern Carbon)は、現代炭素に対する試料炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度の割合を示す表記であり、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \quad (\%)$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C} / 10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、 $^{14}\text{C}$ 年代が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

7)  $^{14}\text{C}$ 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

8) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の $^{14}\text{C}$ 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の $^{14}\text{C}$ 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、 $^{14}\text{C}$ 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差 ( $1\sigma = 68.2\%$ ) あるいは2標準偏差 ( $2\sigma = 95.4\%$ ) で表示される。历年較正プログラムに入力される値は、下一位を四捨五入しない $^{14}\text{C}$ 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv3.10較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

## (6) 測定結果

$^{14}\text{C}$ 年代は、A-1区Vlb・c層から出土した土器外面付着炭化物 (1 : IAAA-72452) が $2430 \pm 30\text{yrBP}$ 、A-28区Vlb層から出土した土器外面付着炭化物 (2 : IAAA-72453) が $2350 \pm 30\text{yrBP}$ 、B-10区東Vla層から出土した土器内面付着炭化物 (4 : IAAA-72454) が $2320 \pm 30\text{yrBP}$ 、B-11区Vlb層から出土した土器内面付着炭化物 2点が $2340 \pm 30\text{yrBP}$  (5 : IAAA-72455) と $2420 \pm 40\text{yrBP}$  (6 : IAAA-72456)、C-2区南Vla層から出土した土器外面付着炭化物 (12 : IAAA-72457) が $2720 \pm 40\text{yrBP}$ 、C-7区Vlb層から出土した土器内面付着炭化物 (14 : IAAA-72458) が $2500 \pm 30\text{yrBP}$ 、C-21区西VI層から出土した土器内面付着炭化物 (15 : IAAA-72459) が $2490 \pm 30\text{yrBP}$ 、A-29区SK3埋土1層上面から出土した炭化物 (16 : IAAA-72460) が $2490 \pm 20\text{yrBP}$ 、A-25区IV層から出土した炭化物 (17 : IAAA-72461) が $2130 \pm 30\text{yrBP}$ である。

历年較正年代 ( $1\sigma$ ) は、1が $720 \sim 690\text{BC}$  (8.6%)・ $540 \sim 410\text{BC}$  (59.6%)、2が $485 \sim 465\text{BC}$  (6.5%)・ $415 \sim 385\text{BC}$  (61.7%)、4が $405 \sim 380\text{BC}$  (68.2%)、5が $410 \sim 385\text{BC}$  (68.2%)、6が $530 \sim 400\text{BC}$  (68.2%)、12が $900 \sim 825\text{BC}$  (68.2%)、14が $770 \sim 730\text{BC}$  (12.0%)・ $690 \sim 660\text{BC}$  (7.7%)・ $650 \sim 540\text{BC}$  (48.6%)、15が $760 \sim 730\text{BC}$  (12.3%)・ $690 \sim 660\text{BC}$  (7.7%)・ $650 \sim 540\text{BC}$  (48.2%)、16が $760 \sim 730\text{BC}$  (11.2%)・ $690 \sim 680\text{BC}$  (2.8%)・ $670 \sim 660\text{BC}$  (3.2%)・ $650 \sim 540\text{BC}$  (51.1%)、17が $200 \sim 105\text{BC}$  (68.2%) である。縄文時代晩期後半を主体とする年代である。

試料の炭素含有率は60%以上であり、化学処理および測定内容にも問題が無いことから、妥当な年代と考えられる。

## 参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of  $^{14}\text{C}$  data, Radiocarbon 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, Radiocarbon 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, Radiocarbon 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, Radiocarbon 43(2A), 381-389
- Reimer P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, Radiocarbon 46, 1029-1058

表1 放射炭素年代

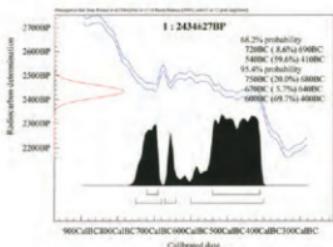
測定番号	遺跡	出土 地点	No.	試料形態	Libby Age (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (測定器)	$\Delta^{14}\text{C}$ (‰)	pMC (%)	登録	国	写真
IAAA-72452	諏訪	A-1区 Vlb・c層	1	土器付着炭化物	2430±30	-22.48±0.67	-261.4±2.5	73.86±0.25	R181	7-2	28-6
IAAA-72453	諏訪	A-28区 Vlb層	2	土器付着炭化物	2350±30	-22.89±0.77	-253.7±2.7	74.63±0.27	R463	16-1	29-14
IAAA-72454	愛宕山	B-10区東 Vla層	4	土器付着炭化物	2320±30	-22.6±0.71	-251±2.7	74.9±0.27	R459	30-8	24-5
IAAA-72455	愛宕山	B-11区 Vlb層	5	土器付着炭化物	2340±30	-21.22±0.71	-252.8±2.6	74.72±0.26	R517	39-4	25-2
IAAA-72456	愛宕山	B-11区 Vlb層	6	土器付着炭化物	2420±30	-19.69±0.79	-260.1±2.6	73.99±0.26	R591	39-5	25-4
IAAA-72457	諏訪	C-2区南 Vla層	12	土器付着炭化物	2720±30	-20.5±0.97	-287.3±3.1	71.27±0.31	R667	53-1	34-1
IAAA-72458	諏訪	C-7区 Vlb層	14	土器付着炭化物	2500±30	-22.14±0.48	-267.2±2.7	73.28±0.27	R691	56-3	34-10
IAAA-72459	宮沼	C-21区西 Vl層	15	土器付着炭化物	2490±30	-24.5±0.81	-266.8±2.6	73.32±0.26	R704	55-5	34-14
IAAA-72460	諏訪	A-29区 SK3 埋1層上	16	炭化物	2490±20	-26.66±0.83	-266.8±2.2	73.32±0.22	—	—	—
IAAA-72461	諏訪	A-25区 IV層	17	炭化物	2130±	-23.29±0.82	-233±2.7	76.7±0.27	—	—	—

表2 捕正なし年代と曆年較正年代

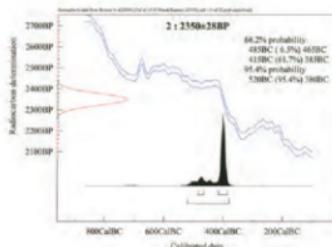
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ の補正無し (参考)			曆年較正用 (yrBP)	1σ曆年代範囲	2σ曆年代範囲	登録	国	写真
	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	pMC (%)	Age (yrBP)						
IAAA-72452	-257.6±2.3	74.24±0.23	2390±30	2434±27	720-690BC (8.6%) 540-410BC (59.6%)	750-680BC (20.0%) 670-640BC (5.7%) 600-400BC (69.7%)	R181	7-2	28-6
IAAA-72453	-250.5±2.4	74.95±0.24	2320±30	2350±28	485-465BC (6.5%) 415-385BC (61.7%)	520-380BC (95.4%)	R463	16-1	29-14
IAAA-72454	-247.3±2.5	75.27±0.25	2280±30	2321±28	405-380BC (68.2%)	420-350BC (91.3%) 290-230BC (4.1%)	R459	30-8	24-5
IAAA-72455	-247.0±2.4	75.30±0.24	2280±30	2341±28	410-385BC (68.2%)	510-370BC (95.4%)	R517	39-4	25-2
IAAA-72456	-252.0±2.3	74.80±0.23	2330±30	2419±27	530-400BC (68.2%)	750-680BC (13.8%) 670-640BC (3.1%) 560-400BC (78.5%)	R591	39-5	25-4
IAAA-72457	-280.7±2.8	71.93±0.28	2650±30	2720±35	900-825BC (68.2%)	930-800BC (95.4%)	R667	53-1	34-1
IAAA-72458	-262.9±2.6	73.71±0.26	2450±30	2497±29	690-660BC (7.7%) 650-540BC (48.6%)	770-730BC (120%) 690-660BC (7.7%) 650-540BC (48.6%)	R691	56-3	34-10
IAAA-72459	-266.0±2.3	73.40±0.23	2480±30	2492±28	690-660BC (7.7%) 650-540BC (48.2%)	760-730BC (123%) 690-660BC (7.7%) 650-540BC (48.2%)	R704	55-5	34-14
IAAA-72460	-269.3±1.8	73.07±0.18	2520±20	2493±24	690-660BC (2.8%) 670-660BC (3.2%) 650-540BC (51.1%)	770-520BC (95.4%)	—	—	—
IAAA-72461	-230.3±2.4	76.97±0.24	2100±30	2130±28	200-105BC (68.2%)	350-310BC (92%) 210-50BC (86.2%)	—	—	—

\*表1・2の登録・国・写真は官文報第223集の番号

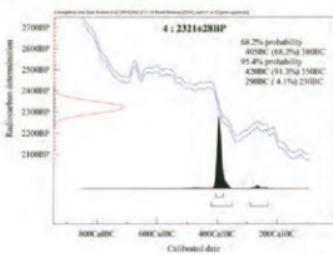
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



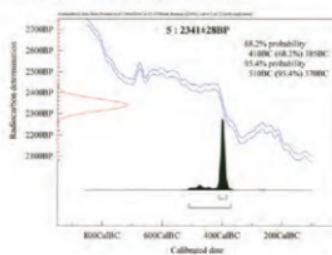
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



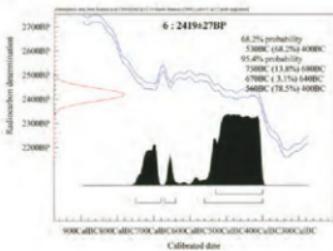
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



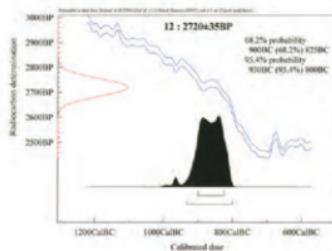
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



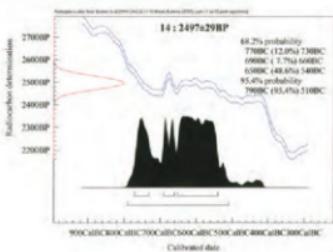
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



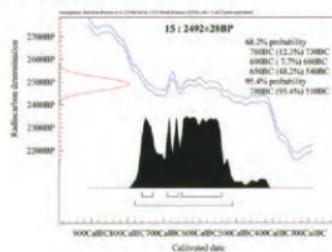
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



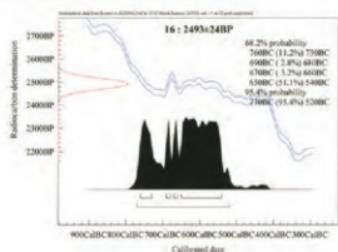
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



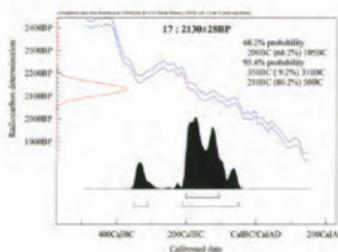
【参考值：历年校正 Radiocarbon determination】



【参考値：樹年校正 Radiocarbon determination】



【参考値：樹年校正 Radiocarbon determination】



## 附章5 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤茂・尾崎大真・丹生越子・廣田正史・山形秀樹・小林絢一

Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・竹原弘展

### 1. はじめに

大崎市に位置する北小松遺跡、愛宕山遺跡より平成19・20年に検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

### 2. 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は、いずれも土器編年による年代観で縄文時代晩期に位置づけられるもので、PLD-16501～PLD-16508は北小松遺跡、PLD-16509は愛宕山遺跡の出土試料である。PLD-16501（R68）は壺（大洞Bか）の外面に塗られた漆である。PLD-16502（R-107）は浅鉢（大洞C1か）の内外面に塗られた漆である。PLD-16503（R112）は深鉢（大洞A）の内面に付着する炭化物である。PLD-16504（R140）は浅鉢（大洞A）の外面に付着する炭化物である。PLD-16505（R142）は浅鉢（漆容器、大洞Aか）の内部に入っていた漆である。PLD-16506（R157）は深鉢（大洞A）の口縁部外面に付着する炭化物である。PLD-16507（R234）は深鉢（大洞A）の内面に付着する炭化物である。PLD-16508（R146）は深鉢の外面に付着する炭化物である。PLD-16509（R452）は浅鉢の外面に付着する炭化物である。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 15SDH）を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代、曆年代を算出した。

### 3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（δ<sup>13</sup>C）、同位体分別効果の補正を行って曆年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代、<sup>14</sup>C年代を曆年代に較正した年代範囲を、図1に曆年較正結果をそれぞれ示す。曆年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後曆年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて曆年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代（yrBP）の算出には、<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した<sup>14</sup>C年代誤差（±1σ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、曆年較正の詳細は以下のとおりである。

曆年較正とは、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、及び半減期の違い（<sup>14</sup>Cの半減期5730±

表1 測定試料及び処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-16501	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25中央 層位：V1d層 登録：R68 図：16-24 写真：21-23 その他：壺 体上部 三叉文 大洞Bか	試料の種類：漆 部位：胸部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16502	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25東段 層位：V1d層 登録：R107 図：16-3 写真：21-9 その他：浅鉢 口縁部～体上部 雲形文 大洞Cか	試料の種類：漆 部位：胸部内外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16503	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25東段 層位：V1d層 登録：R112 図：15-7 写真：20-10 その他：深鉢 口縁部～体上部 工字文 (隆線表現)・連続刺突文 LR繩文 大洞A	試料の種類：土器付着 炭化物 部位：胸部内面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16504	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25拡張 層位：V1d層① 登録：R140 図：27-5 写真：26-4 その他：浅鉢 口縁部～底部 工字文 (隆線表現) 7單位2段 大洞A	試料の種類：土器付着 炭化物 部位：胸部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16505	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25拡張 層位：V1b層 登録：R142 図：29-17 写真：28-1 その他：浅鉢 (漆容器) 口縁部～底部 平行沈線 LR繩文 大洞Aか	試料の種類：漆 部位：内容物 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16506	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25西 層位：V1a+b層 登録：R157 図：29-2 写真：27-3 その他：深鉢 口縁部～底部 工字文 (隆線表現) LR繩文 大洞A	試料の種類：土器付着 炭化物 部位：口縁部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16507	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25東 層位：V1a層 登録：R234 図：33-17 写真：34-20 その他：深鉢 口縁部～体上部 工字文 (隆線表現)・連続刺突文 LR繩文 大洞A	試料の種類：土器付着 炭化物 部位：胸部内面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16508	遺跡名：北小松遺跡 調査区：E25西 層位：V1b層③ 登録：R146 図：24-1 写真：23-14 その他：深鉢 口縁部～底部	試料の種類：土器付着 炭化物 部位：胸部外面 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)
PLD-16509	遺跡名：愛宕山遺跡 調査区：B-10東 遺構：SK10 層位：3層 登録：R452 図：36-5 写真：35-4 その他：浅鉢 口縁部～底部	試料の種類：土器付着 炭化物 部位：胸部外面 状態：dry	超音波洗浄 コラーゲン抽出 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N, 水酸化ナトリウム:0.1N, 塩酸:1.2N)

※登録・図・写真について、PLD-16501～16508は宮文根第226集、PLD-16509は宮文根第223集の番号

表2 放射性炭素年代測定及び曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を曆年代に較正した年代範囲	
				$1\sigma$ 曆年代範囲	$2\sigma$ 曆年代範囲
PLD-16501	-28.09 $\pm 0.27$	2927 $\pm 24$	2925 $\pm 25$	1193BC(32.2%) 1142BC 1133BC(15.4%) 1110BC 1103BC(15.7%) 1075BC 1065BC( 4.9%) 1056BC	1257BC( 4.3%) 1236BC 1215BC(91.1%) 1041BC
PLD-16502	-29.50 $\pm 0.24$	2842 $\pm 22$	2840 $\pm 20$	1026BC(54.0%) 974BC 957BC(14.2%) 940BC	1081BC( 1.9%) 1065BC 1056BC(93.5%) 920BC
PLD-16503	-24.16 $\pm 0.20$	2441 $\pm 21$	2440 $\pm 20$	727BC(17.3%) 694BC 657BC( 1.2%) 655BC 542BC(29.7%) 485BC 463BC( 6.9%) 449BC 443BC(13.1%) 417BC	749BC(23.3%) 687BC 666BC( 6.3%) 644BC 591BC( 1.7%) 578BC 566BC(64.2%) 408BC
PLD-16504	-25.33 $\pm 0.22$	2545 $\pm 21$	2545 $\pm 20$	792BC(50.5%) 757BC 684BC(17.7%) 669BC	796BC(55.5%) 748BC 689BC(20.5%) 666BC 643BC(16.4%) 590BC 579BC( 3.0%) 562BC
PLD-16505	-28.23 $\pm 0.22$	2445 $\pm 21$	2445 $\pm 20$	731BC(20.4%) 692BC 661BC( 4.3%) 651BC 544BC(27.9%) 486BC 462BC( 5.1%) 450BC 441BC(10.5%) 417BC	750BC(25.5%) 687BC 666BC( 7.4%) 642BC 592BC(62.5%) 409BC
PLD-16506	-24.93 $\pm 0.24$	2483 $\pm 21$	2485 $\pm 20$	753BC(11.8%) 731BC 691BC( 2.7%) 686BC 668BC( 3.9%) 660BC 651BC(20.9%) 611BC 597BC(28.9%) 544BC	766BC(95.4%) 517BC
PLD-16507	-28.02 $\pm 0.25$	2520 $\pm 22$	2520 $\pm 20$	774BC(18.2%) 749BC 687BC(16.2%) 666BC 642BC(31.1%) 592BC 576BC( 2.6%) 571BC	789BC(26.1%) 733BC 691BC(18.5%) 661BC 650BC(50.8%) 545BC
PLD-16508	-25.31 $\pm 0.14$	2497 $\pm 18$	2495 $\pm 20$	759BC( 7.6%) 746BC 688BC( 2.3%) 684BC 669BC( 2.3%) 665BC 647BC(56.0%) 552BC	770BC(18.6%) 719BC 695BC(76.8%) 540BC
PLD-16509	-25.02 $\pm 0.19$	2523 $\pm 17$	2525 $\pm 15$	776BC(22.6%) 751BC 687BC(19.6%) 667BC 638BC(10.4%) 620BC 615BC(15.6%) 594BC	786BC(27.9%) 745BC 690BC(21.9%) 664BC 646BC(45.6%) 551BC

<sup>14</sup>C年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線データ：Intcal09）を使用した。なお、 $1\sigma$ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に $2\sigma$ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

#### 4. 考察

図2に試料の暦年代範囲の分布図を示す。以下 $2\sigma$ 暦年代範囲を基に述べる。

PLD-16501は、1257-1236 cal BC (4.3%) および1215-1041 cal BC (91.1%) の値を示した。PLD-16502は、1081-1065 cal BC (1.9%) および1056-920 cal BC (93.5%) の値を示した。PLD-16503は、749-687 cal BC (23.3%)、666-644 cal BC (6.3%)、591-578 cal BC (1.7%)、566-408 cal BC (64.2%) の値を示した。PLD-16504は、796-748 cal BC (55.5%)、689-666 cal BC (20.5%)、643-590 cal BC (16.4%)、579-562 cal BC (3.0%) の値を示した。PLD-16505は、750-687 cal BC (25.5%)、666-642 cal BC (7.4%)、592-409 cal BC (62.5%) の値を示した。PLD-16506は、766-517 cal BC (95.4%) の値を示した。PLD-16507は、789-733 cal BC (26.1%)、691-661 cal BC (18.5%)、650-545 cal BC (50.8%) の値を示した。PLD-16508は、770-719 cal BC (18.6%) および695-540 cal BC (76.8%) の値を示した。PLD-16509は、786-745 cal BC (27.9%)、690-664 cal BC (21.9%)、646-551 cal BC (45.6%) の値を示した。

PLD-16501～16507の7点については、藤沼・閔根（2008）や小林（2008）に示されている大洞諸型式の年代測定結果と大きな矛盾はなかった。PLD-16508、16509の2点は、PLD-16503～16507に近い値であった。なお、<sup>14</sup>C年代の2400 yr BP前後は較正曲線が平坦なため、暦年較正した年代値の範囲が広くなる。

#### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野捷一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし－縄文時代研究の編年体系－」 257-269 同成社.
- 藤沼邦彦・閔根達人 (2008) 亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）. 小林達雄編「総覧縄文土器」 682-693 アム・プロモーション.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」 3-20 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51 1111-1150.

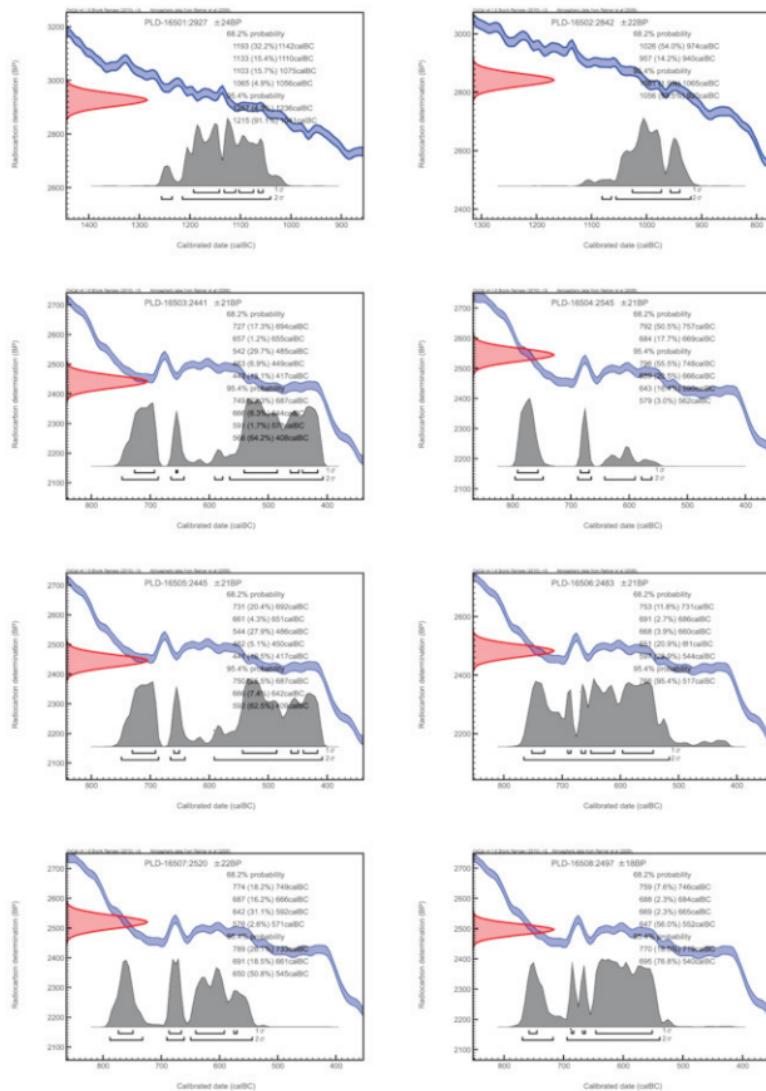


図1-1 历年校正結果(1)

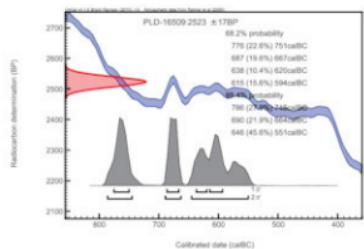


図1-2 历年較正結果（2）

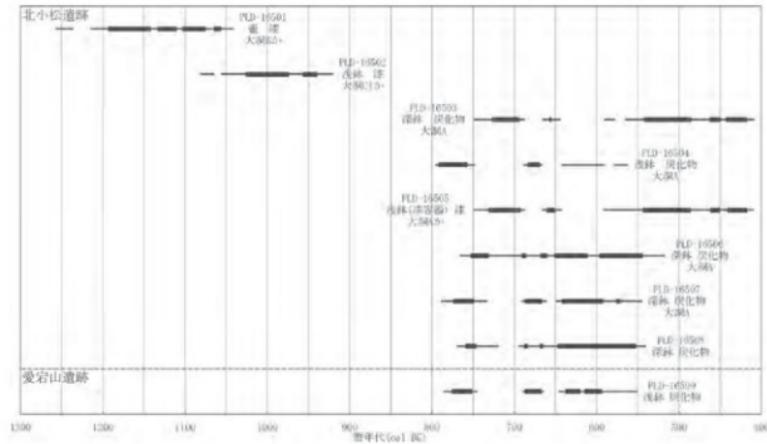


図2 历年代の分布（太線：1σ、細線：2σ）

# 写 真 図 版



図版 1 北小松遺跡ほかの位置（縮尺：1/8,000）



E区（南西から）



F区（南西から）

図版2 調査区域の遠景



1. D-40区全景（西から）



2. D-40区VI層遺物出土状況（西から）



3. D-41区全景（南西から）



4. D-41区VIb層遺物出土状況（西から）



5. D-50区全景（南西から）

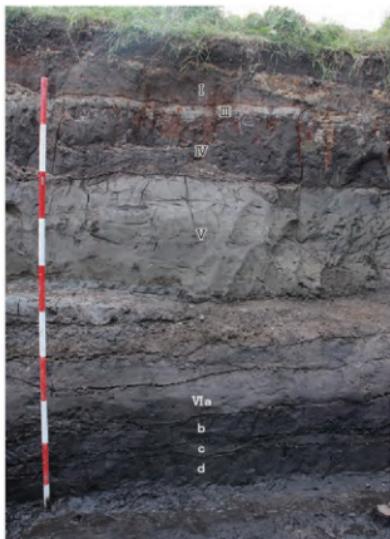


6. D-50区VI層遺物出土状況（南西から）

図版3 D-40・41・50区



1. VI層遺物出土状況（南から）



2. 西壁（東から）



3. VIa層の土器①（東から）



4. VIa層の土器②（東から）

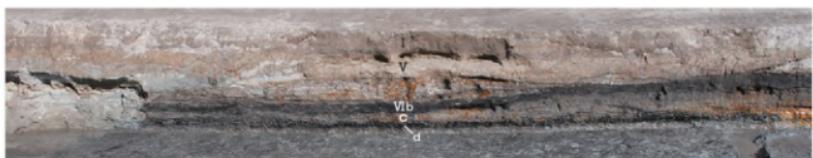
図版4 E-1区



1. VId層遺物出土状況（東から）



2. 拡張部VId層遺物出土状況（南西から）



3. 拡張部北壁（南から）



4. 拡張部VId層遺物出土状況詳細（北から）



5. 東段部VId層遺物出土状況（南西から）

#### 図版5 E-25区VId層



1. 西部SX31（北から）



2. 西部VId層SX31断面（南から）



3. 拡張部Vlc層検出状況（西から）



4. Vlb層遺物出土状況・VId層検出状況（東から）



5. 西部Vlb層の木の根（北から）



6. 西部Vlb層の土器②（西から）

図版6 E-25区SX31、VId・c・b層



1. 拡張部Vlb層遺物出土状況（西から）



2. 拡張部Vlb層の木の根（北東から）



3. 拡張部Vlb層の土器 ③ ⑧ ⑨（南から）



4. 拡張部Vlb層の土器 ⑩（北東から）



5. 拡張部Vlb層の土器 ⑪（南から）

図版7 E-25区Vlb層



1. VIa層遺物出土状況（東から）



2. 北壁（南から）



3. 東部VIa層の土器（北から）



4. 東部VIa層の鹿角（北西から）

図版8 E-25区VIa層



1. 全景（西から）



2. V・VI層断面（南西から）



3. VI<sub>d</sub>層遺物出土状況詳細（南西から）



4. SK27～29断面（北西から）



5. SK22・23断面（西から）



1. VIIa層遺物出土状況（北から）



2. VIIb層遺物出土状況（北から）



3. 中央部ベルト南壁（南から）



4. 中央部ベルト北壁（北から）



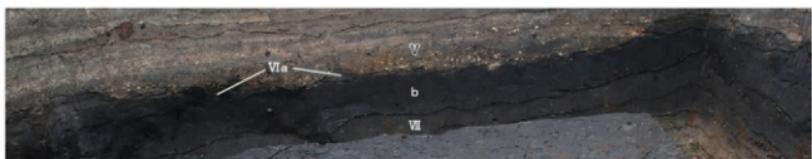
5. 中央部VIIa層遺物出土状況詳細（南から）



1. VIb層遺物出土状況（東から）



2. VIc層遺物出土状況（東から）



3. 西壁（東から）



4. VIb層遺物出土状況（南から）



5. VIc層遺物出土状況（南東から）



1. E-37区全景（北東から）



2. E-37区南部VI層遺物出土状況（東から）



3. E-54区全景（西から）



4. E-84区全景（北東から）



5. E-91区全景（南西から）



6. E-91区SK1036断面（南から）

図版12 E-37・54・84・91区



1. VIb層遺物出土状況（北東から）



2. 北壁（南から）



3. VIb層遺物出土状況（北から）



4. VIb層遺物出土状況詳細（南から）



1. F-10区VI層遺物出土状況（東から）



2. F-11区VI層遺物出土状況（北から）



3. F-11区北壁（南から）



4. F-10区北部VIa層遺物出土状況（西から）



5. F-11区南部VIa層遺物出土状況（西から）

図版14 F-10・11区



1. F-1区全景（南西から）



2. F-3区全景（北東から）



3. F-5区全景（南から）



4. F-5区西壁（北東から）



5. F-7区SE1032断面（北から）



6. F-9区VI層遺物出土状況（北西から）

図版15 F-1・3・5・7・9区



図版16 北小松遺跡出土の縄文土器、石器・石製品、骨角牙製品



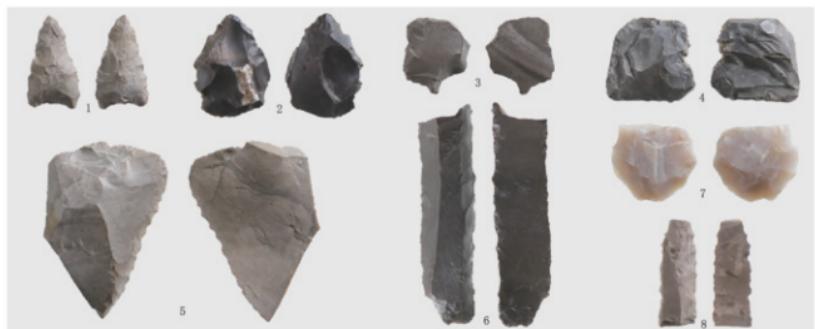
1. D-41区出土土器、石器・石製品



2. E-1区V1d層出土土器 (1)  
圖版17 D-41区出土土器、石器・石製品、E-1区V1d層出土土器 (1)



図版18 E-1区 VId・b・a層出土土器 (2)・土製品



2. E-25区VId層出土土器 (1)  
圆版19 E-1区VId·b層出土石器、E-25区VId層出土土器 (1)



図版20 E-25区 VId層出土土器 (2)・土製品 (1)



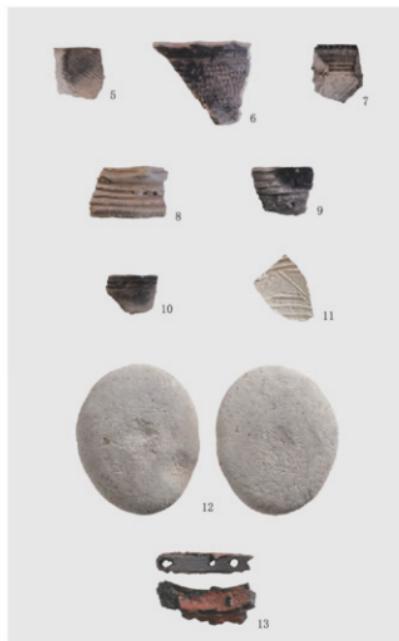
図版21 E-25区 VI d層出土土器 (3)・土製品 (2)、石器・石製品 (1)



図版22 E-25区 Vi d層出土石器・石製品 (2)



1. E-25区VIa层出土骨角器・素材



2. E-25区VIc层出土土器・石器・木製品



3. E-25区Vib层出土一括庾棄土器（1）

図版23 E-25区VIa层出土骨角器・素材、VIc层出土土器・石器・木製品、Vib层出土一括庾棄土器（1）

15





图版24 E-25区Vib层出土一括磨窠土器 (2)



1



2



3



4

图版25 E-25区V1b层出土一括磨塞土器 (3)



1



2



3



4



5

1. E-25区Vlb層出土一括燒棄土器 (4)



6



7

2. E-25区Vlb層出土土器 (1)  
図版26 E-25区Vlb層出土一括燒棄土器 (4)、Vlb層出土土器 (1)



1



2



3



4



5



6



7

図版27 E-25区VIb層出土土器 (2)



図版28 E-25区Vib層出土土器 (3)



图版29 E-25区Vib层出土土器（4）・土製品、石器・石製品（1）



1. E-25区Vib層出土石器・石製品(2)、骨角器



2. E-25区Vib層出土土器(1)  
図版30 E-25区Vib層出土石器・石製品(2)・骨角器、Vla層出土土器(1)



1



2



3



4



5

図版31 E-25区VIa層出土土器 (2)



1



2



3



4



5



6



7-a



7-b

図版32 E-25区VIa層出土土器 (3)



1



2



3



4-a



5



4-b



6



7

図版33 E-25区V1a層出土土器 (4)



図版34 E-25区Vta層出土土器 (5)



図版35 E-25区Vla層出土土器 (6)・土製品 (1)



図版36 E-25区 Via層出土土製品 (2)



図版37 E-25区 Via層出土土製品 (3)、石器 (1)



图版38 E-25区 V1a层出土石器 (2) · 石制品



1. E-25区Via層出土木製品、骨角牙製品



2. E-25区西SX31層出土石器  
图版39 E-25区Via層出土木製品·骨角牙製品、E-25区西部SX31出土石器



1. E-32区VI層出土土器、石器



2. E-32区SK21・25・28出土土器、石器

図版40 E-32区VI層出土土器・石器、SK21・25・28出土土器・石器



1. E-36 · 37区 VIb層出土土器、石器



2. E-36 · 37区 VIa層出土土器、土製品 (1)、石器、VIb層出土土器、土製品 (1) · 石器、石製品  
図版41 E-36 · 37区 VIb層出土土器、石器、VIa層出土土器、土製品 (1) · 石器、石製品



1. E-36・37区Vla層出土土製品（2）



2. E-64区Vlc層出土土器・土製品・石器



3. E-64区Vlb層出土土器（1）

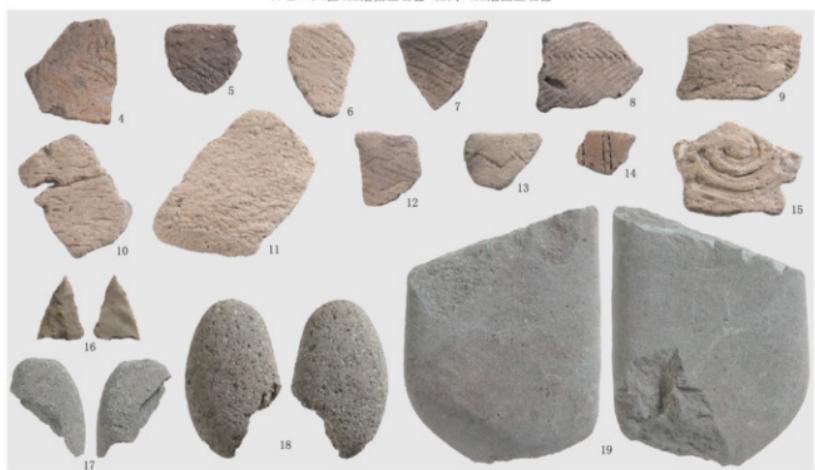
図版42 E-36・37区Vla層出土土製品（2）、E-64区Vlc層出土土器・土製品・石器、Vlb層出土土器（1）



図版43 E-64区 Vib層出土土器 (2)、石器 (1)



1. E-64区Vlb层出土石器 (2)、Via层出土石器



2. F-8区Vlb层出土土器、石器



3. F-8区Via层出土土器、石器

图版44 E-64区Vlb层出土石器 (2)、Via层出土石器、F-8区Vlb层出土土器·石器、Via层出土土器·石器



1. F-9区VI层出土土器、石器



2. F-10VId层出土土器、石器、石制品  
图版45 F-9区VI层出土土器、石器、F-10区VId层出土土器、石器、石制品



1. F-10区Vlc层出土土器、石器



2. F-10区Vlb层出土土器、石器

图版46 F-10区Vlc层出土土器、石器、Vlb层出土土器、石器



1. F-10区V1a层出土器、石器



2. F-11区V1d层出土器、石器

图版47 F-10区V1a层出土器、石器、F-11区V1d层出土器、石器



1. F-11区VIc層出土土製品、石器



2. F-11区Vib層出土土器、石器・石製品



3. F-11区VIa層出土土器、土製品、石器

图版48 F-11区VIc層出土土製品、石器、Vib層出土土器、石器・石製品、VIa層出土土器、土製品、石器



1. その他の区のVI層出土土器、石器・石製品



2. I ~ V層出土の縄文時代の土器・土製品 (1)

図版49 その他の区のVI層出土土器・石器・石製品、I~V層出土の縄文時代の土器・土製品 (1)

耕土: 22  
カクヅン: 17・25  
I層: 16・20・21・23・26~30  
V層: 18・19・24・31



図版50 I～V層出土の縄文時代の土製品(2)、石器・石製品、骨角器



1. F-7区SE1032出土石製品



2. I ~ V層出土の弥生時代以降の土器、瓦  
図版51 F-7区SE1032出土石製品、I ~ V層出土の弥生時代以降の土器・瓦



1. ニホンジカ



2. イノシシ  
図版52 ニホンジカ、イノシシ



1. 哺乳類 (ニホンジカ・イノシシ以外)



2. 鳥類



3. 魚類  
図版53 哺乳類 (ニホンジカ・イノシシ以外)、鳥類、魚類

## 報告書抄録

ふりがな	きたこまついせきほか						
書名	北小松遺跡ほか						
副書名	田尻西部地区ほ場整備事業に係る平成20年度発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書						
シリーズ番号	第226集						
編著者名	生田和宏(編)・伊藤啓之						
編集機関	宮城県教育委員会						
所在地	〒980-8423 宮城県仙台市青葉区本町三丁目8-1 TEL 022-211-3682						
発行年月日	西暦 2011年5月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積 調査原因	
きたこまついせき 北小松遺跡	大崎市田尻小松字 北小松ほか	42153	38005	38° 37' 00"	141° 00' 30"	20080509 ～ 20081210	5,472m <sup>2</sup> ほ場整備 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北小松遺跡	散布地(泥炭層)	縄文時代前期・中期・晚期、奈良・平安時代	集石造構・土坑、遺物包含層	縄文土器・土製品、石器・石製品、木製品、骨角牙製品、動植物遺存体	縄文時代の晩期後葉から末葉の遺物包含層から多量の土器・石器が出土。		
要約	<p>北小松遺跡周辺の地形は、複雑に開折された低丘陵とそれに囲まれる沖積地から構成される。この沖積地には縄文時代には沼地が広がっており、その縁辺、特に低丘陵突端の斜面から裾部をあたる場所で、縄文時代晩期の集石造構1基、土坑9基、ビット数基のほか、低湿性の遺物包含層を多くの地点で検出した。遺物は土器・土製品、石器・石製品、木製品、骨角牙製品、動植物遺存体などが出土した。その時期は縄文時代前期初頭から前葉、中期末葉、晩期後葉から末葉に大別できるが、大半は縄文時代晩期後葉から末葉のものである。遺物の多くは、低丘陵や微高地に想定される集落から、土砂などとともに流入してきたとみられるが、廃棄場所やそれに近接していたと考えられるものもある。過去の調査結果とあわせると、この北小松遺跡をはじめとする田尻西部地区に広がる縄文時代の集落は、前期初頭から前期前葉、中期末葉、後期中葉、後葉、晩期前葉・中葉までは小規模な集落が点在するのみであったが、晩期後葉から末葉になると集落の規模や数が急激に増大し、その分布も広範囲となるなど段階盛期を迎えるようになる。そして弥生時代前に発生した大洪水の後は、集落の規模や数は急激に減少し、再び小規模な集落が点在するようになる。</p> <p>これらの成果は縄文時代の集落内の場の性格、個々の集落の構成や機能、集落間の諸関係、集落群の広がり、そしてそれらの変遷などを、具体的かつ総合的に分析する際の重要な事例として注目される。また前期初頭から前葉と晩期後葉から末葉の遺跡は、宮城県内では本格的な調査例が少なく、層位的な変遷が分析できる比較資料もあまり思えていなかった。今回の調査は宮城県における縄文時代の土器編年等を考える上でも重要な成果といえる。</p>						

---

---

宮城県文化財調査報告書第226集

## 北小松遺跡

－平成20年度発掘調査報告書－

平成23年5月25日印刷

平成23年5月31日発行

発行 宮城県教育委員会  
仙台市青葉区本町三丁目8番1号

---